か-16-43

ソードアート・オンライン17
アリシゼーション・アウェイクニング

川原礫

電撃文庫

ソードアート・オンライン17

アリシゼーション・アウェイクニング

――≪光の巫女≫アリス。闇の軍勢すべてを犠牲にしてでも、我が手中に収める。

≪最終負荷実験≫二日目。整合騎士による命がけの奮闘により劣勢になったダークテリトリー軍は、卑劣な手段で反抗を開始する。アンダーワールドを外部から観測していた米軍傭兵・クリッターが、現実世界の人間たちを最終決戦に投入したのだ。その≪本格派VRMMOゲームのベータテスター≫は、五万人を超えた。

闇の軍勢の増援に、絶体絶命となる人界軍。アスナ一人では到底太刀打ちできなかった。そこに、アンダーワールドで言い伝えられてきた創世の神々が舞い降りる。白く輝く太陽神ソルスと、優しく

SAO COMIC

好評発売中!!

※すべて、原作／川原 礫　キャラクターデザイン／abec

原作リアルシリーズコミカライズ　電撃Gコミック（毎月30日発売）にて連載中！
■電撃コミックスNEXT「SAO プログレッシブ」①～④（作画　比村貴石）
原作1巻コミカライズ！
■電撃コミックス　SAO アインクラッド」①②（作画　中村貯子）
原作3巻コミカライズ！
■電撃コミックス　SAO フェアリィ・ダンス」①～③（作画　黒月 翼）
原作5巻コミカライズ！　ウェブサイト「コミックウォーカー」にて連載中！
■電撃コミックスNEXT「SAO ファントム バレット」①②（作画　山田孝太郎）
原作7巻コミカライズ！　電撃文庫MAGAZINE（電撃電撃月10日発売）にて連載中！
■電撃コミックスNEXT　SAO マザーズ・ロザリオ」①②（作画　黒月 翼）
原作9巻コミカライズ！
■電撃コミックスNEXT「SAO キャリバー」（作画　木谷椎）
スピンオフコミカライズ！　電撃文庫MAGAZINE（電撃電撃月10日発売）にて連載中！
■電撃コミックスNEXT　SAO カーズ・オブス」①②（作画　鎌鼬 翼）
四コマパロディ！　電撃文庫MAGAZINE（電撃電撃月10日発売）にて連載中！
■電撃コミックスEX「そーどあーと☆おんらいん」①②（作画　黒十字星）

9784048658836

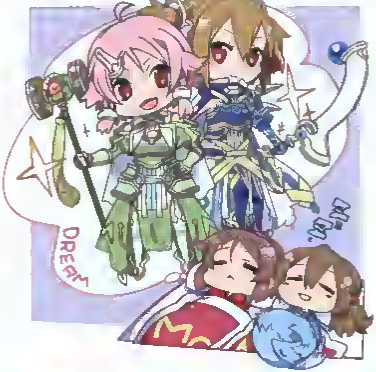
ISBN978-4-04-865883-6
C0193 ¥610E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

1920193006100

定価: 本体610円
※消費税が別に加算されます



劇場版「ソードアート・オンライン」STORY

2022年、天才プログラマー・茅場晶彦が開発した
世界初のフルダイブ専用デバイス《ナーヴギア》。
その革新的マシンはVR(仮想現実)世界に無限の可能性をもたらした。
それから4年……
《ナーヴギア》の後継VRマシン《アミュスフィア》に対抗するように、
一つの次世代ウェアラブル・マルチデバイスが発売された。《オーグマー》。
フルダイブ機能を排除した代わりに、
AR(現実拡張)機能を最大限に広げた最先端マシン。
《オーグマー》は覚醒状態で使用することが出来る安全性と利便性から
瞬く間にユーザーへ広がっていった。
そのキラーコンテンツは、《オーディナル・スケール(OS)》と呼ばれる
《オーグマー》専用ARMMO RPGだった。
アスナたちもプレイするそのゲームに、キリトも参戦しようとするが……

乞うご期待!

キャラクターデザイン原案イラスト abec

川原 礫（かわはら れき）

上の自画像、最初の頃は某WOW、次に某DiaOloっぽいイラストを使ってましたがこの巻から某FallOut風に変えてみました。決してそれで遊びまくっているわけじゃないですよ！　ちょっとだけデス。

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1～19
ソードアート・オンライン1～17
ソードアート・オンライン プログレッシブ1～4
絶対ナル孤独者（アイソレータ）1～3

イラスト：abec

あべし？

SAO GAME

※すべて発売　配信はバンダイナムコエンターテインメント

PS4/PS Vita

■ SAO ―ホロウ・リアリゼーション―」2016年秋発売予定!!
完全新作でお届けする最新作の舞台は、アインクラッド創世前の新たな仮想空間《ソードアート オリシン》。

PS4

■ ソードアート・オンライン ゲームディレクターズ・エディション」発売中!
PS4版「―ロスト・ソング―」と「Re:―ホロウ・フラグメント―」が楽しめる!

好評配信中!

■App Store　Google Play
「ソードアート・オンライン コード・レジスタ」
■Mobage（スマートフォン）
「ソードアート・オンライン プログレス・リンク」
■GREE（フィーチャーフォン/スマートフォン）
「ソードアート・オンライン エンワールド」

★ゲーム公式ポータル「βeater's cafe（ビーターズカフェ）」。
最新情報はここから！　http://sao-game.jp/

か-16-43

ソードアート・オンライン17
アリシゼーション・アウェイクニング

川原礫

電撃文庫

ソードアート・オンライン17

アリシゼーション・アウェイクニング

――≪光の巫女≫アリス。闇の軍勢すべてを犠牲にしてでも、我が手中に収める。

≪最終負荷実験≫二日目。整合騎士による命がけの奮闘により劣勢になったダークテリトリー軍は、卑劣な手段で反抗を開始する。アンダーワールドを外部から観測していた米軍傭兵・クリッターが、現実世界の人間たちを最終決戦に投入したのだ。その≪本格派VRMMOゲームのベータテスター≫は、五万人を超えた。

闇の軍勢の増援に、絶体絶命となる人界軍。アスナ一人では到底太刀打ちできなかった。そこに、アンダーワールドで言い伝えられてきた創世の神々が舞い降りる。白く輝く太陽神ソルスと、優しく暖かい地母神テラリア。その二柱は、シノンとリーファの姿をしており……。

9784048658836

ISBN978-4-04-865883-6
C0193 ¥610E

ASCII MEDIA WORKS
アスキー・メディアワークス

KADOKAWA 発行●株式会社KADOKAWA

1920193006100

定価: 本体610円
※消費税が別に加算されます

川原 礫（かわはら れき）

上の自画像、最初の頃は某WOW、次に某Dia〇loっぽいイラストを使ってましたがこの巻から某Fall〇ut風に変えてみました。決してそれで遊びまくっているわけじゃないですよ！　ちょっとだけデス。

【電撃文庫作品】

アクセル・ワールド1～19
ソードアート・オンライン1～17
ソードアート・オンライン プログレッシブ1～4
絶対ナル孤独者（アイソレータ）1～3

イラスト：abec

あべし？

ソードアート・オンライン17
アリシゼーション・アウェイクニング

川原 礫

電撃文庫
3087

DENGEKI BUNKO

SWORD ART ONLINE
017
REKI KAWAHARA
abec
tea-pee
SWORD ART ONLINE
Alicization awakening

「お待たせ、アスナ」
シノン
スーパーアカウント02《太陽神ソルス》を使用し
アンダーワールドにログインした
《狙撃手(スナイパー)》の少女

「あの……こんにちは。それともおはよう、かな」
リーファ§ キリトの血が繋がっていない妹。
スーパーアカウント03《地神テラリア》を使用し
アンダーワールドにログインした。

「……飽きたな。もう消えろ」
ベクタ
〈光の巫女〉アリスを狙う暗黒神にして、
〈ダークテリトリー軍〉の最高司令官。

「剣技のほうは、大したことねぇようだな……皇帝陛下」
ベルクーリ§
《時穿剣》の使い手。
《人界軍》の要（かなめ）である
整合騎士の騎士長

「サトライザー……なぜここに」
「……君とは確か、
ガンゲイル・オンラインの大会で戦ったね。
まさか、こんなところで会えるとは」
サトライザー§
スーパーアカウント04《暗黒神ベクタ》で
アンダーワールドにログインしたガブリエル・ミラーの
《ガンゲイル・オンライン》でのアバター姿。

「っ……あぁあっ……!!」
「匂う……匂うわぁ……
なんて甘い、天命の香り……」
ディー・アイ・エル8
《ダークテリトリー軍》暗黒術師ギルドの総長。
整合騎士アリスの広範囲攻撃によって
消滅したはずだったが

《アンダーワールド大戦》戦況

《最終負荷実験》二日目

「これは、ゲームであっても
遊びではない」

―『ソードアート・オンライン』プログラマー・茅場晶彦

SWORD ART ONLINE
ALICIZATION AWAKENING

REKI KAWAHARA

abec

bee-pee

第二十章　それぞれの戦い　西暦二〇二六年七月七日／人界暦三八〇年十一月七日

1

午前五時。

ＶＲＭＭＯＲＰＧ《アルヴヘイム・オンライン》のワールドマップ中央に位置する中立都市アルン、そのさらに中心にそびえる世界樹根元の巨大ドームに、三千人を超えるプレイヤーが集結していた。

かつてドーム天蓋の門を守護していた有翼騎士モンスターはすでに撤去され、この場所は、妖精九種族間の会議や交渉、あるいはイベントスペースとして用いられるようになっている。

時ならぬ大規模会議に招集された三千人に向き合うのは、わずか四人のプレイヤー。

土妖精族の巨漢エギル、火妖精族の侍クライン、猫妖精族の獣使いシリカ、鍛冶妖精族の鍛冶屋リズベット――異世界《アンダーワールド》にダイブしたまま目覚めない、《黒の剣士》キリトの仲間たちだ。

クラインやリズベット、シリカたちが全フレンドにメッセージを飛ばした午前四時二十分の時点で、ＡＬＯにログインしていた領主クラスのプレイヤーはほんの三人だけだった。しかし

彼らやその部下の役職つきプレイヤーに頼み込み、リアル側で連絡してもらうという禁じ手までも繰り出した結果、わずか四十分でこれだけの数のプレイヤーを呼び集めることができた。

半球形の広大な空間に、立ったり浮遊したりしているプレイヤーたちの三割近くは、新規に作成したばかりのキャラクターを使用している。だがＶＲＭＭＯ初心者というわけではない。彼らは皆、他のザ・シード規格タイトルに於けるベテランプレイヤーであり、ＡＬＯにアカウントを持つ友人知人の求めに応じてダイブしてきたのだ。

つまり、世界樹ドームに集う三千人は、日本人ＶＲＭＭＯプレイヤーの精鋭中の精鋭であり、トップダウン型ＡＩ《ユイ》が一縷の望みをかけた、アンダーワールド人界守備軍を救い得る唯一の戦力だということになる。

しんと静まり返ったドームの中に、レプラコーンの鍛冶屋リズベットの、魔法で増幅された声が切々と響き渡り続ける。

「――これは、決して嘘でも冗談でもないわ！　日本のとある研究機関が、国の支援を受けて造ったザ・シード規格の仮想世界《アンダーワールド》に、もうすぐ何千人っていう数のアメリカ人プレイヤーたちがそれと知らずにダイブして、その世界の住民を皆殺しにしようとしているのよ！」

リズベットは、ナショナリズムを煽るような自分の言葉に忸怩としたものを覚えながらも、いまはそれすらも利用しなければいけないのだと己を奮い立たせ、叫び続けた。

「アンダーワールドに暮らしているのは、ただのNPCじゃないわ！　あたしたちがプレイしている、たくさんのVRMMO世界のデータを元に生み出された、本物の人工知能なのよ！　アンダーワールド人たちは、あたしたちと同じ感情、同じ魂を持っているの！　お願いです、彼らを守るために、みんなの力を貸して！　みんながいま使っているキャラクターデータを、アンダーワールドに《コンバート》してください！」

五分間の演説を終えたリズベットは、祈るような気持ちでプレイヤーたちを見回した。

ドームに集った妖精たちの顔には、一様に途惑いの色が浮かんでいる。それはそうだろう、予備知識なしでいきなり説明されて、すぐに理解できるような話ではない。リズベット自身、ユイから聞かされたアンダーワールドの仕組みや、そこの住人である《人工フラクトライト》たちについては、いまだ曖昧な部分も多いのだ。

怪訝な表情でざわめくプレイヤーたちの中から、一本の腕がしなやかに伸びた。

進み出たのは、長身を緑色の着流しに包んだシルフ族の領主、サクヤだった。

「リズベット。君や、君の友人たちが単なる悪ふざけでこんなことをするとは思えないし、何よりあのキリトがもう十日近くもログインしていないのは、確かにただごとではないだろう。しかし……」

いつも滑らかに落ち着いているサクヤの声が、困惑を含んで揺れた。

「……正直、にわかに信じがたい。人間と同じ魂を持つAI、それを奪おうとするアメリカ軍

……どちらも現実味がなさすぎる話だ。……いや、事実確認は、君の言うアンダーワールドにログインしてみればできるのだろうが……先ほど君は、ダイブするにあたって幾つかの問題点があるとも言ったな？　まずその問題とやらを説明してくれないか？」

――ついに、この瞬間がきた。

リズベットは大きく息を吸い、いっとき瞼を閉じた。

正念場だ。ここでしくじれば、誰も救援には来てくれないだろう。

ぱちりと両眼を開け、目の前のサクヤと、他の領主たち、そして無数のＡＬＯプレイヤーを見渡しながら、リズベットはしっかりした声で告げた。

「ええ。――アンダーワールドは、普通のＶＲＭＭＯゲームとして運用されているわけじゃないの。だから、ダイブには幾つかの問題が発生するわ。まず第一に、アンダーワールドには、操作可能なＵＩが存在しない。つまり、自発的なログアウトができないの」

ドームのざわめきが一気に大きくなる。

自発的ログアウト不能。それはかつて存在したデスゲーム、《ソードアート・オンライン》を否応なく思い起こさせるフレーズだ。現在、ＡＬＯを含む全てのザ・シード規格ゲームは、ＵＩ操作と音声コマンドの双方でログアウトできるようになっている。

「ログアウトの方法は、内部で《死亡》することだけ。でも、ここで第二の問題が発生するの。アンダーワールドには……ペイン・アブソーバが設定されていない。ＨＰがゼロになるほどの

ダメージを受けると、かなり強烈な痛みを感じるはずです」

リズベットの言葉を聞いたプレイヤーたちが、ひときわ大きくどよめいた。

痛覚遮断もまた、現行ＶＲＭＭＯの必須機能だ。それが存在しない仮想世界では、剣で切られたり炎で焼かれたりすると、ほとんど現実世界と同じ強さの苦痛を味わうことになる。場合によっては、生身の皮膚が一時的に発赤することさえあるのだ。

しかし、ダイブに伴う問題はこれだけではない。

ざわめきが少し収まるのを待ってから、リズベットはついに第三の、そして最大の代償を口にした。

「――もう一つ。アンダーワールドは、現在、開発者たちにもオペレーションできない状態にあるの。つまり……コンバートしたみんなのキャラクターデータを、元のゲームに再コンバートできるかどうかは保証できない……。ことによると、キャラクターロストという結果になる可能性もあるんです」

一瞬の沈黙に続き――。

凄まじいボリュームの怒号が、広大なドーム空間に溢れた。

フロアの中央に並ぶリズベット、クライン、シリカ、エギルの四人と、小さなピクシーに姿を変えてクラインの肩に乗るユイは、全方位から大波となって押し寄せてくる無数の声を全身で受け止め、無言で立ち続けた。

この反応は、予想されたとおりのものだった。

三千人のトッププレイヤーたちは、そのキャラクターを育て上げるために、尋常ならぬ時間と努力をつぎ込んでいる。ＡＬＯで言えば、一時間必死になってモンスターを倒しまくってもスキル熟練度がわずか一上がるかどうかという、湖の水をバケツで汲み出すような作業を日々積み重ねているのだ。

そんなふうに精魂傾けて鍛えてきたキャラクターを失うかもしれないと言われて、平静でいられるはずもない。

「ふ……ふざけんなよ!!」

集団から飛び出してきた一人のプレイヤーが、リズベットに人差し指をつきつけて叫んだ。

深紅の全身鎧を着込み、背中にバトルアックスを背負ったサラマンダー。領主モーティマー、将軍ユージーンに次ぐ地位にある指揮官格だったはずだ。

ヘルメットのバイザーを押し上げ、怒りに燃える両眼を露わにしたサラマンダーは、背後の大集団が押し黙るほどのボリュームで更なる言葉を放った。

「こんな時間に人を集めまくって、わけのわかんねえサーバーにダイブさせようってだけでもどうかしてんのに、そのうえキャラロスするだぁ!?　消えたらお前らが補償できんのかよ!?　それとも種族ごと弱体化させようっつう罠か!?」

「……ッ！」

血相を変えて叫び返そうとするクラインを左手で押し留め、リズベットは可能な限り落ち着いた声で答えた。

「ごめんなさい、補償はできないわ。あなたたちの育て上げたキャラクターが、お金に換えられるものじゃないことはよく解ってる。だからお願いしているの。私たちを助けて、って……いま、アンダーワールドで必死になってアメリカからの攻撃を防いでる、私たちの仲間を助けてくださいって」

叫ばずとも、リズベットの声はドームの隅々にまで響き渡った。サラマンダーは一瞬息を詰めたようだったが、すぐにそれを怒気に変えて吐き出した。

「あんたが言う仲間っつうのは、SAO生還者とか言われて、自分たちはVRMMOプレイヤーの中でも特別なんだ、みてえな顔をしてる連中のことだろうが！　解ってんだよ、お前ら元SAO組が、心の中じゃ他のプレイヤーを見下してることくらい!!」

今度は、リズベットが言葉を失う番だった。

サラマンダーが指摘したような心理を、リズベットはこれまで一度も自覚したことはなかった。だが、言われてみれば、そのような感覚が絶対に存在しないとは断言できない気もした。プレイヤーホームを地上の都市ではなく天空の新生アインクラッドに構え、ほとんど地面に降りることもなく、昔なじみのプレイヤーとばかり交流してきたのは事実なのだ。

リズベットの動揺を見抜いたか、サラマンダーは更に容赦ない言葉を重ねた。

「侵略だとか、人工知能だとか、魂だとか知るかよ！　ＶＲＭＭＯにリアルの話持ち込んで、勝手なこと言ってんじゃねえ！　そういうのは、お前らだけでやりゃいいだろうが！　リアルでもお偉い生還者様だけでよ!!」

その糾弾に呼応して、そうだ、引っ込め、という罵声が集団から幾つも投げ掛けられた。

――だめだった。

あたしの言葉じゃ、ぜんぜん届かなかった。

リズベットは、涙ぐみそうになるのを懸命に堪えながら、交流のあるＡＬＯ生え抜きの実力者――シルフの領主サクヤや、サラマンダーの将軍ユージーン、ケットシーの領主アリシャ・ルーたちの顔をすがるような気持ちで見やった。

しかし、視線が合っても、彼らは言葉を発しようとしなかった。

強い光を宿した瞳で、ただじっとリズベットを見詰めている。まるで、おまえの決意と覚悟を見せてみろ、と言うかのように。

リズベットは、大きく息を吸い、もう一度瞼を閉じた。そして、遥かな異世界で必死に闘い続けているはずのアスナや、傷ついたキリト、そして一足先にアンダーワールドへ飛び込んでいったリーファやシノンのことを思った。

――あたしの実力じゃ、たとえコンバートしても、とてもアスナたちみたいには戦えない。でも、あたしにできることだってきっとある。いまこの瞬間、この場所が、あたしの戦場なん

だ。

勢いよく両眼を見開き、涙の雫を振り払って、リズベットは再び話し始めた。

「……ええ、これは現実の話よ。そしてあなたの言うとおり、ＳＡＯ出身者は、リアルとバーチャルを混同しがちなのかもしれない。でも、決して、あたしたちは自分が英雄だなんて思ってない」

右隣で涙を浮かべて立ち尽くすシリカの手を握り、続ける。

「あたしとこの子は、あなたの言う生還者だけが集められた学校に通ってるわ。もとの学校は中退扱いになってたから、選択の余地はなかった。――帰還者学校の生徒は、月に一度、必ずカウンセリングを受けなきゃいけないの。アミュスフィアで脳波をモニタリングされながら、現実感がなくなることはないかとか、他の人を傷つけたくなったりしないかとか、嫌な質問をいっぱいされる。飲みたくもない薬を飲まされてる子だって、何人もいるんだ。あたしたちはみんな、政府にとっては監視対象の犯罪者予備軍なの」

いつしか怒声の波は収まり、張り詰めた静寂がドームを満たしていた。眼前のサラマンダーさえも、意表を突かれたように両眼を見開いている。

自分の言葉がどこに行き着くのか、リズベットにも解らなかった。ただ溢れてくる感情を、意思を、一生懸命言葉に変え続けた。

「でも、ほんとは、そういう扱いをされてるのは帰還者学校の生徒だけじゃない。ＶＲＭＭＯ

プレイヤーはみんな、多かれ少なかれそんな目で見られてる。社会に寄与しないお荷物だとか、税金も年金も払わない現実逃避者だとか……徴兵制を復活させて、強制的に社会に奉仕させるべきだなんて議論まであるわ」

ドームに張り詰めた緊張感が、急激に高まっていく。針で一突きすれば、先ほどの何倍もの怒りが爆発するに違いない。

しかし、リズベットは、左手を胸に押し当てて尚も叫んだ。

「だけど、あたしは知ってる！　あたしは信じてる！　現実はここにあるって!!」

胸から離した手で、世界樹のドームを――その向こうのアルヴヘイム全土を指し示す。

「この世界と、ここに繋がってる沢山の仮想世界は、絶対に虚構の逃げ場所なんかじゃない！　あたしにとっては、本当の生活と、本当の友達と、本当の出会いや別れや笑顔や涙がある現実なの！　みんなもそうでしょう!?　この世界がもうひとつの現実だって信じてるから頑張れるんでしょう!?　なのに、これはただのゲームだって……所詮はバーチャルの偽物なんだって切り捨てたら、じゃあ、あたしたちの本当はどこにあるの……!!」

ついに、リズベットの眼からも涙が溢れた。それを拭いもせず、リズベットは最後の言葉を絞り出した。

「……みんなで育てた沢山の世界が、この世界樹みたいに寄り集まって、芽吹いて、ようやく咲かせたアンダーワールドっていう花を、あたしは守りたい！　お願い……力を貸してくださ

い……!!」

ドームの天蓋に向けて、リズベットは両手を差し伸べた。

涙で滲む視界に、幾千の妖精の羽から零れる燐光が、きらきらと瞬いた。

＊＊＊

銀色の光が、きらきらと瞬きながら暁の空に大きな弧を描く。

一秒後、乾いた音とともに太いロープが真ん中から切断され、黒い蛇のように宙をうねった。それにしがみついていた数十人の敵兵たちが、口々に悲鳴を上げながら底無しの峡谷へ落下していく。ロープを切った神器《雙翼刃》は、急角度でターンして、主である整合騎士レンリ・シンセシス・トゥエニセブンの手に戻る。

ダークテリトリー軍が峡谷を渡るために張った十本のロープのうち、速くも五本を切断してのけたレンリだが、その顔に誇らしさや達成感は微塵もない。むしろ、無慈悲な命令を受けて捨て身で谷を横断してくる敵兵たちの、文字通りの命綱を断つことに痛苦を感じているようだ。

それは、レンリの傍らで白馬の手綱を握るアスナも同じだった。

アスナとレンリ、整合騎士アリス・シンセシス・サーティ、整合騎士シェータ・シンセシス・トゥエルブ、そして騎士長ベルクーリ・シンセシス・ワンの五人が馬で駆けつけた時にはもう

数百人の敵兵が峡谷を渡り終えていて、彼らは残りのロープを守るべく果敢に攻撃してきた。ほとんどの敵は先を行くベルクーリ、シェータ、アリスの三騎士が斬り伏せたが、数名は側面からレンリを狙ってきて、彼を守るためにアスナもレイピアを振るわざるを得なかった。

仮想世界《アンダーワールド》はザ・シード・プログラムを基盤としていて、ＳＡＯ時代に身につけたソードスキルや乗馬技術をそのまま使うことができる。

そのうえ、スーパーアカウント《創世神ステイシア》を用いているアスナの各パラメータはほぼ上限値、しかも装備しているレイピア《ラディアント・ライト》は整合騎士たちの神器を上回るスペックが与えられていて、基本技《リニアー》でさえ敵黒騎士の分厚い鎧や拳闘士の逞しい肉体を一撃で容易く貫いた。

しかし、敵兵士の傷口から迸る鮮血と怨嗟に満ちた悲鳴、そして失われる命は、全てが本物なのだ。

アンダーワールドに生きる人々は、人界人も暗黒界人も、アスナのそれと本質的にはまったく等しい魂――フラクトライトを持っている。相手は本物の人間なのに、いかにもゲーム的なステータスと武器スペックの加護によってただの一撃で殺せてしまうという事実は、アスナの心に耐えがたい痛みと違和感をもたらした。

しかも、悲壮な決意を秘めた表情で次々に飛びかかってくる黒騎士や拳闘士たちは、決して己の意志でそうしているわけではない。

彼ら人工フラクトライトたちは、上位者の命令には絶対に抗えないという性質を持っている。アスナと同じく、スーパーアカウント《暗黒神ベクタ》を用いてログインしている現実世界人に命じられ、無駄死にと知りつつ攻撃してきているのだ。見方を変えれば、彼らもまた、現実世界でのテクノロジー争奪戦に巻き込まれた被害者なのである。

しかしアスナは、全精神力を振り絞ってその考えを意識から排除した。

いまはベクタが追い求める《光の巫女》ことアリスを――そして後方の野営地にいるキリトの身を守ることを、何よりも優先しなくてはならない。

敵将ベクタの指揮下にあるダークテリトリー軍の戦力は、この拳闘士団と暗黒騎士団を残すのみと聞いた。無謀な峡谷横断作戦を逆利用して敵兵力を損耗させれば、ベクタが打てる手も尽きてくるはずだ。

「――よし、六本目にいくぞ!!」

騎士長ベルクーリの力強い声が、アスナの想念を中断させた。即座に応答するアリス、シェータ、レンリに少し遅れて、アスナも「はい!」と叫び返す。

馬首を巡らせて西に移動しようとした時、後方で角笛の音が高らかに響き渡った。

振り向くと、約一キロ離れた丘を、整然と隊列を組んだ人界守備軍四部隊の衛士たちが駆け下りてくる光景が見えた。騎士たちに遅れることわずか十五分で武装と編成を終え、野営地から出撃してきたのだ。

「ったく……大人しくしてない奴らだ」

ベルクーリは渋い顔で衛士たちを見やったが、すでに峡谷を渡り終えた敵兵の数は五百ほどにも達しているので、このタイミングでの援軍はありがたい。衛士たちが敵兵を牽制してくれれば、残り五本のロープを切るのにそう苦労はするまい。

――この戦いは、どうやらこっちの勝ちね、ベクタさん。

アスナが胸中で呟いた、その言葉が消えないうちに。

奇妙な現象を、両の瞳がとらえた。

血の色の朝焼けに染まる空から、不思議なものが降りてくる。

空よりもひときわ紅く輝く線。一本ではない。数十……数百。

いや、数千か。

無数の線はそれぞれ、微細なドットの連なりからなっているようだ。懸命に眼を凝らすと、ドットの一つ一つが、数字やアルファベットであることが解る。

正体不明の文字列の集団は、峡谷のこちら側、戦場から東に一、二キロほど離れた場所に音もなく降り注いだ。

いつしか、アスナのみならず他の整合騎士たちや、ダークテリトリーの暗黒騎士や拳闘士たちさえも、足を止めてその奇妙な現象に見入っていた。

乾いた地面に突き刺さった最初の赤線が、不定形の塊となって蠢き――。

それが人の姿を取るまで、ほんの数秒しかかからなかった。

＊＊＊

拳闘士団長イスカーンは、身のうちに滾る憤怒を、一瞬にせよ忘れた。

――あれは、何だ。

峡谷の対岸では、どうにか綱を渡り終えた五百人の暗黒界兵が、五人の整合騎士に果敢に攻め掛かろうとしている。

しかし、突然彼らの動きが止まり、呆気に取られた様子で戦場の外に眼を向けた。

引き寄せられるように顔を動かしたイスカーンが見たのは、彼らから東に二キロルほど離れた場所に降り注ぐ、深紅の雨だった。

天から、奇妙な震動音を放ちつつ、無数の赤い線が伸びてくる。

それらは、地面に接すると同時に膨れ上がり、たちまち人間の姿へと変化した。

出現したのは、暗赤色の鎧に身を固め、長剣や戦斧、長槍で武装した兵士たちだった。

色はともかく、鎧の形状は暗黒騎士団のそれとよく似ている。皇帝ベクタが、神の力で援軍を送り込んだのか、と最初は思った。

しかし直後、言いしれない違和感がイスカーンを襲った。

赤い兵士たちの、規律や統制とは無縁な立ち姿は、いまは亡き暗黒将軍シャスターに鍛えられた騎士団の一員だとはとても思えない。大きな身振りで近くの兵士と話をしたり、地面に座り込んだり、命令もないのに武器を抜いて振り回したりしている。

そして何よりも、彼らの数。

奇妙な雨がようやく止んだ時、大地に出現した兵士たちの集団は、にわかに信じがたい規模にまで膨らんでいた。ざっと目算しただけでも一万は軽く超え、二万……ことによると三万人にも達するだろう。暗黒騎士団にそれほどの予備兵力があったのなら、十侯会議などとっくに形骸化し、シャスターが暗黒界の実質的支配者となっていたはずだ。

それに、峡谷のこちら側で綱渡りの順番を待っている暗黒騎士たちのあいだからも、驚きの声が上がっている。彼らも知らないのだ。あの軍団が何なのか。

だとすればやはり、あの赤い兵士たちは、皇帝にして闇の神であるベクタが地の底かどこかから秘術によって召喚した、本物の《闇の軍勢》なのだろう。

そう認識した直後、イスカーンの驚きは、深い憤りへと変化した。

あんな大軍を召喚できるのなら――。

なぜ、もっと早く実行しなかったのか。これでは、無謀な横断作戦で命を散らした拳闘士と暗黒騎士たちは、敵を陣地から引っ張り出すための囮だったかのようではないか。

いや――もしかしたら、それが真実なのか。

皇帝は、自らの軍団に倒させる敵をおびき寄せるだけのために、あんな、まるで殺してくれと言わんがばかりの横断作戦を命じたのか。

……違う。

今回の作戦だけではない。《東の大門》への攻撃が始まったその時から、暗黒界軍の被害は大きすぎた。ゴブリン隊、ジャイアント隊、オーガ隊、そしてオーク隊と暗黒術師ギルド隊をほぼ全滅させておきながら、皇帝は彼らの死を悼むどころか、表情ひとつ変えさえしなかったのだ。

つまり、皇帝ベクタにとっては、五万もの暗黒界軍全てが最初からただの捨石だったということだ。

若き拳闘士団長イスカーンはこれまで、肉体の鍛錬と技の向上、そして率いる部族の発展にしか興味のない若者だった。

いまこの瞬間、彼は初めて、自らが属する暗黒界と人界を含むアンダーワールド全体を俯瞰する視点を得た。その見地は、彼の中に、解決不可能な矛盾を生み出した。

皇帝ベクタは絶対的な強者である。強者には従わねばならない。

しかし。

しかし――。

「ぐっ……！」

右眼にかつてないほどの激痛が生じ、イスカーンは顔の右側を掌で覆いながら呻いた。
よろめき、膝を突いた拳闘士団長の視線の先で、三万にも及ぶ深紅の軍勢が聞き覚えのない言葉を口々に発しながら走り始めた。
彼らの行く手では、峡谷南側の丘を降りてきた約一千の人界守備軍の兵士たちが、整合騎士と合流して迎撃態勢を取りつつある。
そして両者の中間では、五百の拳闘士と暗黒騎士たちが、どう動けばいいのか解らない様子で立ち尽くす。
いかに皇帝ベクタの策が無慈悲極まるものであろうとも、しかしこれで、少なくともあの五百人の命は救われたことになるのか。
イスカーンは、右眼を強く押さえながら、意識の片隅でそう思った。
しかし彼は、この期に及んでもなお、ベクタの冷酷さを見誤っていた。
皇帝が召喚した三万の軍勢は、人界軍ではなく、わずか五百の暗黒界軍に真っ先に襲いかかったのだ。
無数の剣が、斧が、槍が、赤い朝陽を浴びてぎらぎらと輝き――。
血に飢えた叫び声とともに、味方であるはずの拳闘士や暗黒騎士たち目掛けて振り下ろされた。

＊＊＊

「な……何なんだ、あの連中は⁉」

騎士長ベルクーリの驚声に、アスナは何と答えていいのか解らなかった。

突如戦場の東側に降下……いやダイブしてきた三万もの兵士たちは、皇帝ベクタの呼び出した軍勢であることは明らかだ。

しかし、いったいどこから、これほどの数の戦力を引っ張りだしてきたのか。

モンスター扱いのNPC兵士を生成、投入したのだろうか。しかし、オーシャン・タートルのメインコントロール・ルームにあるコンソールはロックされ、管理者権限による直接操作は不可能だ。せいぜい、アスナのように座標を指定して自らダイブするくらいしかできることはないはずだが、ベクタ側が使用可能な《ソウル・トランスレーター》はたったの二機。

アスナを襲った一瞬の混乱を――。

数百メートル先まで迫った、赤い兵士たちの叫び声が氷解させた。

「Charge ahead‼」

「Give 'em hell‼」

――英語！

彼らは現実世界の人間、しかも発音からしてアメリカ人を主とする集団だ。しかし、どうしてそんなことが。ここは、秘匿されたクローズドなＶＲワールドであるはず。

いや。

いや――。

アンダーワールドは、ＳＴＬ経由でダイブする者にとっては、《ニーモニック・ビジュアル形式》という現実世界以上のリアリティを持つ真の異世界となる。しかし、その開発には汎用ＶＲＭＭＯパッケージであるザ・シードが用いられているのだ。つまり、アミュスフィアさえあれば世界へのダイブそのものは可能であり……そしてオーシャン・タートルには、大容量の衛星回線が備えられている。

ならば、突貫でクライアント・プログラムを作成し、現実世界にばら撒くだけで。

何万人、何十万人にも及ぶ軍勢をアンダーワールドに呼び込むことが可能となる。

愕然とするアスナの推測を裏付けたのは、赤い兵士たちの行動だった。彼らは、本来は友軍であるはずの暗黒界の騎士、拳闘士たちに真っ先に襲いかかり、躊躇いなく剣や斧を振り下ろしたのだ。

「な、何を……!?」

「お前たち、味方じゃないのか……!?」

騎士たちは驚愕の声を漏らしながら攻撃を防ごうとするが、余りにも数が違いすぎる。更に、

赤い兵士たちの武器や鎧は、暗黒界軍のそれよりもスペックが上らしく、掲げられた剣や盾を次々とへし折り、打ち砕いていく。両軍の衝突部では、たちまち悲鳴と鮮血が迸り始める。

「Dude, that's awesome!!」

（超グロいぜ）

「Pretty gore!!」

興奮したように叫ぶ現実世界人たちは、この戦いの真実など何も知らされずに——恐らくは新しいＶＲＭＭＯタイトルのオープンベータテストだとでも信じ込まされてダイブしてきたのだろう。

あのアメリカ人プレイヤーたちに、アンダーワールド人への敵意があるわけではない。彼らは、目の前の暗黒界人たちを、単なるターゲットＮＰＣだと信じているのだろうから。恐らく、時間をかけてアンダーワールドと人工フラクトライトに関する真実を説明すれば、ログアウトしてくれる者が大半なのではないか。

しかし、いまはその時間がない。アスナが戦場に乗り込んで英語で説得しようとしても、ＮＰＣが設定どおりの台詞を叫んでいると思われるのが関の山だろう。仮に、ターゲットを倒して稼いだポイントに応じて正式サービス開始後にレアアイテムが配布されるとでも説明されれば、間違いなく日本人プレイヤーだって同じことをする。

もはや、言葉での説得は不可能。

アメリカ人たちが殺そうとしているのはＮＰＣではなく、本物の魂を持つ人工フラクトライ

トなのだ。暗黒界軍を皆殺しにしたら、次は人界軍囮部隊に襲いかかってくるだろう。ならば、この場でたった一人かりそめの命を持つ自分が戦わなくては。

そう決意したアスナは、右手の細剣を振り上げると、素早くコマンドを唱えた。

「システム・コール！　クリエイト・フィールド・オブジェクト!!」

レイピアに、七色のオーロラが宿る。

昨夜と同じように、底なしの峡谷を作るわけにはいかない。人界軍の退路まで断たれてしまう。

代わりに、槍のように鋭い巨岩をイメージしながら、アスナは剣を鋭く振り下ろした。

ラ――――、という荘重なサウンドエフェクトが響き渡る。虹色の光が切っ先から迸り、アメリカ人と暗黒界人たちの衝突点の少し先に突き刺さる。

突如、地面が震動し、灰色の岩が頭をもたげた。それはたちまち三十メートル近くも伸び上がり、その場所にいた赤い兵士たちを高々と跳ね飛ばした。

続けて、更に四つの岩山が出現し、一気にせり上がった。大地が揺れ、数百の単位で紅い鎧が空に舞った。罵り声を甲高く喚き散らしながら、ある者は岩に磨り潰され、ある者は地面に激突して、大量の血と肉片をばら撒く。

アスナには、彼らが自分の死をどのように知覚したのかを推測する余裕はなかった。

いきなり灼熱の激痛が頭の芯を貫き、馬の背に倒れ込んでしまったからだ。

視界に銀色の火花が飛び散り、息もできずに喘ぐ。昨夜、地面に峡谷を作った時よりも遥かに強い痛みだ。膨大な地形データが流れていく過程で、魂……フラクトライトが損耗していく生々しい感覚。

——でも、ここで倒れるわけにはいかない。

これで、キリトくんと同じ傷を負うなら本望。アスナはそう念じながら、奥歯を食い縛り、鞍上で体を起こした。

戦場の東側から押し寄せるアメリカ人プレイヤーたちの勢いは、多少鈍ったようだ。しかし、五つ並ぶ岩山の幅はせいぜい五百メートル。数万ものプレイヤーたちはすぐに両サイドを迂回してくるだろう。

もう一度、南側に岩山の壁を作り、その内側から人界軍を脱出させる。

荒い呼吸を繰り返しながら、再び高く剣を掲げたアスナの右腕を——。

金色の輝く籠手が、しっかりと押さえた。

「……アリス……!?」

掠れ声で、黄金の騎士の名を叫ぶ。

美貌に確たる決意を浮かべた整合騎士アリスは、素早くかぶりを振ると言った。

「無理をしないで、アスナ。あとは私たち整合騎士に任せなさい」

「で……でも、あの赤い兵士たちは、リアルワールドの……私の世界からやってきた敵なの

「……！」

「……だとしても。ただ闇雲に血を求め、剣を振り回すような連中ならば、何万いようと恐れるに足りません」

「そうだとも。オレたちにも、少しは出番を分けてくれよ」

アリスの言葉を引き取り、騎士長ベルクーリが太く笑った。

この状況でも余裕を失わない騎士たちの胆力は見事だが、彼らの表情には、これまで以上の覚悟が漲っていることをアスナは察した。

赤い津波となって押し寄せる敵の数は、人界軍の三十倍。もう、気迫でどうにかなる段階ではない。

しかし、騎士長は磨き込まれた長剣を高々と掲げると、強靱な声を響かせた。

「よおぉし!!　全軍、密集陣形!!　一点突破でずらかるぞ!!」

＊＊＊

「オ……オ、オ……」

イスカーンの口から漏れたのは、人の言葉ではなかった。

「オ……オオオォォォォォ――――!!」

ありったけの力で握り締めた両の拳から、ぽたぽたと鮮血が垂れた。しかしその痛みを自覚することもなく、若い闘士は獣の如き咆哮を放ち続けた。傍らに控える副官ダンパも、イスカーンの苦悩を分かち合おうとするかのように、深く深く俯いている。

死んでいく。死んでいく。

命令を与えられず、戦うことすらもできない一族の闘士たちが、滅茶苦茶に振り下ろされる刃の下に次々と斃れていく。

なのに、残る五本の大縄を渡る兵士たちは、動きを止めることはない。対岸に渡れ、という皇帝の命令はいまも生きているからだ。絶対者に命ぜられるまま懸命に綱を渡り、しかしその直後、赤い軍勢に取り囲まれ、無残に切り刻まれる。

なぜ皇帝ベクタは、拳闘士と暗黒騎士に横断作戦の中止を、そして赤い兵士たちに暗黒界軍への攻撃禁止を命じてくれないのか。

これでは、部族の闘士たちは囮ですらない。

召喚された軍勢に捧げられる生贄ではないか。

「こ……皇帝に……」

上申せねば。作戦を停止してくれるよう要請しなくては。

怒りと絶望、そして右眼に宿る激痛に苛まれながらも、イスカーンは最後方の地竜戦車に向かおうと足を一歩動かした。長の意図を察したらしいダンパが、歪めた顔を上げ、何かを言お

うとした。
その瞬間。
上空を、さっと巨大な影が横切った。イスカーンとダンパは、反射的に空を振り仰いだ。
――飛竜。
そして竜の背中に乗るのは、豪奢な毛皮のマントをまとい、長い金色の髪をなびかせる、皇帝ベクタその人。
「あ……ああ……!!」
イスカーンが無意識のうちに発した叫び声が聞こえたか、飛竜の鞍上から、皇帝がちらりと地面を見下ろした。
その瞳に、一切の感情はなかった。無為に死んでいく暗黒界軍の兵たちに、ひとかけらの憐憫も、それどころか興味すらも抱いていない、氷のような一瞥だった。
皇帝ベクタは、イスカーンから視線を外すと、そのまま峡谷の向こう側へと竜を飛翔させた。
あれが、神。あれこそが、支配者。
しかし、支配者ならば。何人たりとも及ばない力を持つ絶対の強者ならば。
それに応じた責務だって、あるはずではないか。
統べる軍を、治める民を導き、いっそうの繁栄をもたらす。それが支配者の務めであるはずだ。何千何万の命をただ使い捨てにして、そのことに一切の感情を動かさない者に、皇帝を

……右眼が……支配者を名乗る……右眼が痛い……資格など……!!

「うっ……お……おおおあああああ!!」

イスカーンは、高々と右拳を突き上げた。

そして、その指先を鉤づめのように曲げ。

思考を妨げる激痛の源である、己が右眼に思い切り突き立てた。

「お……長よ!! 何を!?」

駆け寄ろうとするダンパを左手で押しのけ、短い絶叫とともに、若き闘士は右の眼球を一気に引き抜いた。白い球体は、拳の中でなおも赤い光を放ち続けたが、ぐしゃりと粉砕されると同時に光も消えた。

この時点でイスカーンは、アリスやユージオのように、右眼の封印すなわち《コード871》の自発的解除にまで到ったわけではなかった。

ゆえに彼は、皇帝に対する直接的叛意を形成することはできず、現状与えられた命令である、「峡谷横断作戦の継続」及び「自身は綱を渡ってはいけない」という二つの指示は破棄できなかった。

しかし、若き拳闘士は、ほとんど反逆に等しいレベルで皇帝の命令を回避する手段を強引に捻り出した。

イスカーンはゆっくり振り向き、唖然とした顔で見下ろすダンパに、低い声で語りかけた。
「皇帝は、あの赤い兵士どもに関しちゃ、オレたちに何も命令してねえ。そうだな？」
「は……それは、そのとおりですが」
「なら、オレたちがあいつらをブチ殺すぶんには、皇帝にゃ関係ないってことだ」
「……チャンピオン……」
絶句するダンパを左眼でぎろりと凝視し、イスカーンは命じた。
「いいか……谷に橋がかかったら、全軍で突撃してこい。何がなんでも、向こう岸の仲間を助けるんだ」
「は……!?　橋なぞ、ど、どうやって……」
「知れたことだ。できる奴に頼むんだよ」
静かに言い放ち、イスカーンは峡谷に向き直った。
突如、逞しい両脚を、赤々とした炎が包み込んだ。
黒く燻る足跡を残しながら、拳闘士は谷に向かって猛然と走り出した。
――綱を渡っちゃいけねえなら……てめぇで飛びゃあいいんだろうが!!
胸中でそう絶叫し、イスカーンは幅百メルの奈落の直前で、思い切り地面を蹴った。
跳躍は、拳闘士の重要な鍛錬の一つである。

修行は砂地での安全な幅跳びに始まり、やがては並べた刃や煮えたぎる油を飛び越すことで己の跳躍力に対する確固たる自信、すなわち《心意》を形成する。

一流の闘士なら、最終的に二十メルにも達する跳躍力を手に入れる。それは、術式による飛行が禁じられたこの世界に於いては、生身での跳躍距離の上限でもある。

しかしいま、イスカーンが身を投じたのは、限界距離の五倍にも達する幅の、底なしの峡谷だった。

宙に火炎の尾を引きながら、拳闘士はひたすらに前だけを睨み、両足で空気を蹴った。

十メル。二十メル。体はまだ上昇していく。

三十メル。三十五メル。谷から吹き上がる強風に乗り、見えない翼に後押しされるように、さらに高みに駆け上る。

四十メル。

もう少し——あとほんの一息昇れれば……そこから先は惰性で向こう岸まで届く。

しかし。

谷の真ん中の、ほんの少し手前にまで達した時、無情にも風が止んだ。

がくり、と体が勢いを失う。跳躍の軌道が頂点に達し、下向きの曲線へと移行する。

——五メル、足りねえ。

「うお……おおお!!」

イスカーンは叫び、何かを掴もうとするかのように右手をまっすぐ伸ばした。しかし手がかりも、足がかりもあるはずはなく、足下の暗闇から這い登る冷気だけが体を撫でた。

その刹那――。

「チャンピオオオオ――――ン!!」

轟くような雄叫びが、イスカーンの耳朶を打った。

ちらりと後方を見ると、副官ダンパが、己の頭の何倍も大きい巨岩を右腕で掴み、投擲体勢に入ったところだった。

長年付き合った忠実な部下の意図を、長はすぐに察した。しかし、あれほどの大岩を五十メル以上も投げるなど、人族にできることではない……。

ごわっ、とダンパの右腕が膨らんだ。全身の力がそこだけに集中したかのように、筋肉が盛り上がり、血管が浮き上がる。

「オオオオ!!」

巨漢が吼え、数歩の助走に続いて、右腕を振り抜いた。

まるで投石器のように、空気を震動させて岩の塊が射出され――直後、ダンパの右腕が、鮮血と肉片を振り撒いて爆裂した。

どさりと前のめりに倒れる副官の姿を左眼に焼きつけ、イスカーンは歯を食い縛って、一直線に飛来する岩のみに意識を集中させた。

「……ラアアアッ!!」

気合とともに、左の足裏で思い切り岩を蹴り飛ばす。

バガァァン!! と岩が四散し、その反動でイスカーンの体は弾かれたように再度加速した。

対岸で戦う剣士たちの姿が、もう目の前にあった。

＊＊＊

「Damn!!」

短い罵り声を上げてばったりと倒れるアメリカ人プレイヤーから細剣を引き抜き、アスナは馬上で荒く息をついた。

暗黒界人を相手にする時のような、命を奪うことへの心理的重圧はない。かつての《閃光》、あるいは《バーサクヒーラー》の二つ名の由来となった高速の連続剣技によって倒した赤い兵士の数はすでに十を超えている。

しかし、いかんせん、敵が多すぎる。

アスナだけでなく、人界軍の衛士たち、ことに四人の整合騎士の戦い振りはまさしく鬼神の如しだ。密集陣を組む衛士たちの先頭に立ち、なんとか南に血路を切り開くべく、屍の山を築いている。

だが、アスナが作った岩山を迂回してあとからあとから押し寄せる兵士たちを押し戻すことまではできず、足を止めて闘ぎ合うのが精一杯の状況だ。

いずれ、彼らも気付くだろう。斬り倒した敵のむくろが、数十秒後には跡形もなく消滅し、その場に血の一滴すらも残らないことに。自分たちが、命を持たない幻の軍隊を相手にしていることに。

「うわっ……だめだ……うわあああ――!!」

突然背後から響いた絶叫に、アスナはハッと振り向いた。

衛士たちの戦列の一部が破られ、赤い兵士たちがなだれ込むのが見えた。

スラングを口々に喚きながら手当たり次第に衛士たちに襲いかかり、取り囲んでは切り刻む。血が、肉片が飛び散り、悲鳴が断末魔の絶叫に変わる。

あまりにもリアルな死に様がいっそうの欲望を掻き立てたかのように、赤い兵士たちは次の獲物へと群がっていく。

「やめて……やめて……!!」

アスナは叫んだ。

いまは、少数の犠牲者は無視して、ひたすら南へと突き進む時だ。理性ではそう解っていたのに、体が勝手に動いて馬から飛び降りた。

「やめてえええええ!!」

喉も裂けよとばかりに叫びながら、押し寄せる赤い奔流の先端へと単身斬り込む。

アメリカ人プレイヤーたちに悪意はない。ただ襲撃者たちに利用されているだけ――という認識も、荒波のように沸き立つ感情に吹き飛ばされてしまう。

ズカカカッ!!

右手が閃き、《ラディアント・ライト》が立て続けに赤いヘルメットのバイザーを貫いた。頭部にクリティカルヒットを負った四人が、剣を取り落とし、呻き声を上げながら倒れ込む。

その反応を見れば、アミュスフィアを利用してダイブしている彼らが、ペイン・アブソーバ機能で保護されていないことは明らかだ。すでにそうと察していたアスナは、これまではなるべく一撃で心臓を破壊し、即座にログアウトさせるようにしていたのだが、そんな理性もいつしか失せていた。

最高優先度のレイピアを縦横に振るい、鎧の上から突き、切り裂き、時には敵の剣ごと断ち割る。

アメリカ人たちが見ているのは、あくまでポリゴンの体であり、ダメージエフェクトの血液だ。しかしSTLでダイブしているアスナにとっては彼らもまた生身の人間であり、飛び散る返り血は生暖かく、噎せ返るほどに鉄臭かった。

いつしか地面に溜まっていたその血溜まりに、ずるりと右足が滑った。

体勢を立て直せず、倒れ込んだアスナの眼前に、大柄な戦士が立ちはだかった。

「Take this!!」

猛然と振り下ろされるバトルアックスの刃から逃れようと、アスナは右に転がった。だが完全には回避できず、左腕を分厚い刃が捉えた。

がつっ。

鈍い音とともに、左腕が肘の下から切断され、宙に舞った。

「っ……あ……ッ!!」

凄まじい激痛に、ちかちかと視界がホワイトアウトした。呼吸が止まり、全身が強張る。滝のように鮮血を振り撒く左腕を抱え込み、アスナは喘いだ。抑えようもなく溢れた涙の向こうに、自分を取り囲み、武器を振り上げる四、五人の影だけが見えた。

突然――。

バトルアックスを持つ大男の頭部が、爆発したかのように飛散した。

鈍い打撃音が立て続けに響く。アスナに止めを刺そうとしていた歩兵たちの体が次々に粉砕され、視界外に消える。

「へっ……ヤワい連中だ」

激痛に耐えながら、どうにか体を起こしたアスナが見たのは、精悍な容貌と炎のような赤毛、浅黒い肌を持つ逞しい若者だった。

――ダークテリトリー人！

一瞬痛みを忘れ、アスナは息を吸い込んだ。肌の色、革のベルトを巻いただけの上半身、間違いなくつい先ほどまで剣を交えていた暗黒界の拳闘士だ。

しかし、なぜ皇帝ベクタの支配下にあるはずの者が、同じくベクタに召喚された赤い兵士を攻撃したのか。まるで、アスナを助けようとするかのように。

見下ろす拳闘士の眼は、片方しかなかった。右眼はまるで抉り取られたかのように惨い傷痕を晒し、赤黒い血が一筋、頬で乾いている。

若者は、再び押し寄せようとするアメリカ人たちを隻眼でぎろりと睨むと、右拳を高々と掲げた。

骨張った拳を、赤々とした炎が包んだ。

「ウ……ラアアアッ!!」

裂帛の気合とともに、拳が地面へと叩き込まれる。

ぐわっ、と炎の壁にも似た衝撃波が半円形に発生し、前方の兵士たちはひとたまりもなく吹き飛ばされた。

――なんて威力!

アスナは瞠目した。いま戦ったら、負ける……。

しかし拳闘士は無言で腕を伸ばし、アスナの鎧を摑んだ。強引に立たせると、左眼で間近から凝視してくる。

「……取引だ」

若々しい、それでいて深い苦悩の滲む声で発せられた言葉の意味を、アスナは咄嗟に理解できなかった。

「と……りひき？」

「そうだ。あの岩山や、でけえ地割れを作ったのはお前だな？　……いいか、後ろの地割れに、狭くていいからしっかりした橋を架けろ。そうすりゃ、四千の拳闘士が、この赤い兵士どもを一人残らずブッ潰すまでお前らと共闘してやる」

共闘――ダークテリトリー軍が!?

そんなことが起こり得るのだろうか。暗黒界人は、いやこの世界の人間は、右眼の封印――コード８７１のせいで上位者の命令には逆らえないはずだ。

そう考えながら、アスナは再び拳闘士の右眼の傷痕に視線を向けた。

この傷は、右眼の封印を自力で解除した痕跡なのか？　彼もまた、アリスと同じく限界突破フラクトライトへと進化したのだろうか？

しかしアリスは昨夜、コード８７１に抗い続けると、『右眼そのものが、あとかたもなく吹き飛びます』と言っていた。いっぽう拳闘士の傷痕は、右眼が内部から破裂したというよりも、手で無理やり抉り出したように見える。この青年の言葉をどう考えれば――どう判断すればいいのか。

逡巡するアスナの耳に、この極限状況でも静かに落ち着き払った声が届いた。

「その人、たぶんウソはつかない」

驚くほど細く、よくしなる漆黒の剣で、赤い兵士の首を無造作に落としながらそう発言したのは、灰色の整合騎士シェータ・シンセシス・トゥエルブだった。

シェータに眼を向けた拳闘士が、にやりと不敵な――それでいてどこか照れたような笑みをかすかに滲ませ、「おう」と応えた。

その瞬間、アスナは決断を下した。

――信じよう。

恐らく、ステイシア・アカウントの地形操作能力が使えるのはこれが最後の一回だ。ならばその力を、単なる破壊ではなく何かを生み出すために使うのも悪くはないだろう。

「……解りました。峡谷に橋を架けます」

切断された左腕から右手を離すと、アスナは真珠色のレイピアを空に向けて高々とかざした。

ラ――――。

荘重な天使の和声が響き渡り、七色のオーロラが荒野に降り注いだ。

それは一直線に北へと突き進み、峡谷の対岸にまで達した。地響きが轟き、大地が震えた。

突如、崖の両側から岩の柱が突き出した。それらは水平に伸び、峡谷の中央で結合すると、太く、しっかりとした橋へと変化した。

「うううううっ、らあああああっ!!」

地形変化に伴う地響きを、数倍の音量で掻き消したのは、四千人の拳闘士たちが放つ雄叫びだった。

隻腕の巨漢を先頭に、屈強な闘士たちが我先に橋へと疾駆し始める。

神の力を行使する代償として襲ってきた、灼熱の槍で脳を貫かれるような頭痛に一瞬気を失いそうになりながら、アスナはレイピアを握り直した。

人界守備軍の先頭に立ち、血路を切り拓いているはずのアリスの姿はもう見えない。いまは彼女が無事でいることを……そして拳闘士たちが赤毛の若者の言葉どおり守備軍と共闘してくれることを信じて、闘い続けるしかない。

――キリトくん、いま、行くからね。

愛する人に心の中で呼びかけると、わずかながら痛みが遠のいた。

＊＊＊

約一分前。

整合騎士アリスは、あとからあとから湧いてくる赤い兵士たちを、もう何人斬り倒したのか解らなくなっていた。

――こいつら……異常だ。

軍隊としての統制などまったくなく、耳慣れない言葉を喚き散らしながら、味方の骸を足蹴にして次々に飛びかかってくる。まるで、仲間のみならず、自分の生死さえもどうでもいいと思っているかのようだ。

これが、リアルワールドの人間たちなのだとしたら。

確かに、アスナの言うとおり、向こう側も決して神の国などではないのだろう。

果てしなく続く殺戮と、尽きることなく出現する敵の数に、さしものアリスもいつしか意識を鈍らせていた。

――もう嫌だ。こんなのは戦いではない。

早くこの戦列を切り崩して、包囲から抜け出したい。

「どけ……どけえええッ!!」

鋭く叫び、金木犀の剣を横一文字に振り抜く。

敵の頭が、腕が、立て続けに飛ぶ。

「システム・コール!!」

即座に神聖術の起句を唱え、十個の熱素を生成する。続く術式でそれらを細長く融合させ、左手に炎の槍を作り出す。

「ディスチャージ!!」

ドゴオオッ!!

デュソルバートの熾焔弓には及ばないが、灼熱の火線がまっすぐに敵軍を貫き、十人近くも吹き飛ばして囲みに穴を穿った。

その向こうに――。

見えた。黒い大地と、盛り上がった丘。

あの丘まで一気に走って、この血みどろの戦場から発散される膨大な空間神聖力を全部使った《反射凝集光線》術式で、赤い歩兵どもを一気に焼き払ってやる。

「どけえええっ!!」

喉から気合を迸らせながら、アリスは地を蹴った。

「……嬢ちゃん!!」

背後で、騎士長ベルクーリの鋭い声が響いた。

だが、それに続いた「先走るな」のひと言は、アリスの耳には届かなかった。

――抜ける。もう少しで突破できる。

前方に現れた最後の一人を、足を止めないまま一撃で斬り伏せ、アリスはついに無限とも思えた敵の包囲を破って無人の荒野へと抜け出した。

酷使した愛剣を鞘に収め、血の匂いのしない新鮮な空気を胸いっぱいに吸い込みながら、全力で疾駆する。

不意に、周りが暗くなった。

朝日が翳ったのか、と一瞬思った。

直後、背後から凄まじい衝撃がアリスの背中を叩いた。急降下してきた飛竜の足に後ろから掴まれたのだ、と気付いた時にはもう両の爪先が地面から離れていた。

咄嗟に金木犀の剣を掲げ、アリスは武装完全支配術を発動させようとした。

しかし式句を唱えるより早く、視界がすうっと暗くなり、凍えるような冷気が全身を包んだ。飛竜の騎手が暗黒術を――いや、違う。アリスの意識そのものが、底無しの穴のような暗闇の中に吸い込まれていく。

これは敵の心意だ。騎士長ベルクーリの磨き抜かれた鋼のように強靱な心意とも、最高司祭アドミニストレータの万物を焼き尽くす雷撃のように苛烈な心意ともまったく違う、あらゆるものを呑み込み、捕らえる、虚無の心意……。

その思考を最後に、アリスの意識は途切れた。

＊＊＊

皇帝ベクタことガブリエル・ミラーにとっても、この局面はギャンブルだった。

しかし彼は確信していた。戦場にダイブさせた数万のアメリカ人プレイヤーに人界守備軍を

包囲攻撃させれば、《光の巫女》アリスは必ずもう一度あの大規模レーザー攻撃を行うべく、単身あるいは少人数で守備軍から離れると。

暗黒騎士団に用意させた黒い飛竜の背にまたがり、戦場の遥か高空でホバリングしながら、ガブリエルはひたすら待ち続けた。アンダーワールドにダイブしてから、最も長く感じた時間だった。

しかしついに、グンタイアリの群れのような包囲から小さな黄金の光が抜け出し、南の丘陵地帯目掛けて移動し始めた。

「アリス……、アリシア」

ガブリエルは、彼にしては珍しく、心の底からの笑みを浮かべて囁いた。

手綱を鳴らし、飛竜に降下を命じる。

ガブリエルの、虚無的でありながら圧倒的な強度を持つイマジネーションすなわち心意は、すでに誇り高い飛竜のＡＩをも完全に侵食し、意のままに操っていた。竜は翼を畳んで矢のように急降下すると、右の鉤爪で地面を駆ける黄金の騎士の背中を鷲掴みにした。

広げた翼を大きく鳴らし、飛竜は再び高空へと駆け上る。

ガブリエルは、自分が生み出した凄惨極まる戦場に、一瞬たりとも意識を向けることはなかった。彼にはもう、ダークテリトリー軍が、人界守備軍が、そして召喚した現実世界人たちがどうなろうとどうでもよかったのだ。

あとはただひたすら、現在位置から最短距離に存在するシステムコンソール、《ワールドエンド・オールター》を目指して南へ飛翔する。そこからアリスの魂を現実世界へとイジェクトし、自分もログアウトする。

ちらりと視線を下向けると、竜の足に捕獲されたまま気を失っているアリスの、風になびく金髪が見えた。

早く触りたい。その体を、魂を、心ゆくまで味わいたい。

システムコンソールまでは長い道行きだ。飛竜ユニットの移動力でも数日はかかるだろう。その時間を利用して、アリスがアンダーワールドでの肉体を備えているあいだに愉しむのもまた一興。

ガブリエルは、背筋を甘美な衝動が這い登るのを感じ、もう一度唇を吊り上げた。

＊＊＊

よもや――。

たった一人の少女を奪うという目的のために、五万のダークテリトリー軍と、新たに召喚した三万の歩兵たちを、丸ごと使い捨てにするとは。

整合騎士団の長にして最長命の人界人であるベルクーリ・シンセシス・ワンは、皇帝ベクタ

の虚ろな心意を知覚したその瞬間から、敵の作戦に最大限の警戒を払ってきたつもりだった。しかしその実、ベクタの狙いがまるで見えていなかったことを、まんまとアリスを拉致されてようやく思い知らされる結果となった。

数十メル離れた場所で、黒い飛竜のかぎ爪がアリスを捕らえた瞬間、ベルクーリはいったい何十年ぶりなのか自分でも分からない行動に出ていた。

腹の底から、本気の怒声を放ったのだ。

「貴様ッ、オレの弟子に何しやがるッ!!」

びりっと空気が震え、周囲に白い電光すら弾けた。

しかしアリスを捕獲した皇帝ベクタは、振り向こうともせずに、一直線に南の空へと上昇していく。

愛刀《時穿剣》を強く握り、ベルクーリは飛竜を追って走ろうとしたが、アリスが術式で敵の戦列に開けた穴はすでに塞がり、深紅の歩兵たちが奇怪な罵声を吐きながらわらわらと押し寄せてくる。

「そこを……」

どけっ、とベルクーリが叫ぶより早く、頭上を跋い白銀の光が駆け抜けた。

きりきりきり、と高く澄んだ音を響かせながら飛翔する二枚の投刃。整合騎士レンリの神器《雙翼刃》だ。

背後で、少年騎士の鋭い声が聞こえた。
「リリース・リコレクション!!」
一瞬の閃光を放ち、投刃たちが空中で融合する。十字の翼へと変化した刃は、超高速で回転しながら自由自在な軌道を描いて飛翔し、行く手の敵兵たちをなぎ倒す。
「騎士長、行ってください!!」
レンリの叫びに、ベルクーリは背中を向けたまま応じた。
「すまん！　後は頼む！」
すっと腰を落とし、右足で思い切り地面を蹴る。
瞬間、東方風の着物をまとった騎士長の姿は、青い突風へと変化した。敵の大群に再び開いた間隙を一気に突破したベルクーリの疾駆は、ダークテリトリーの拳闘士が長時間の武舞踏で実現する走行速度を遥か上回っていた。
アリスを攫った皇帝ベクタの竜は、すでに高空に滲む小さな黒点でしかなくなっている。
疾走しながら、ベルクーリは左手を口許にあてがい、高い音を鳴らした。
数秒後、前方の丘から、銀色の飛竜が飛び立った。ベルクーリの騎竜、星咬。
口笛に応えた竜は、しかし一頭だけではなかった。アリスの騎竜である雨縁、そして東の大門で命を落とした騎士エルドリエの騎竜、滝剄も後ろに続いている。
「お前ら……」

ベルクーリは、後ろの二頭に出そうとした待機命令を、ぐっと呑み込んだ。
低空を滑るように接近してきた星咬が、くるりと向きを変え、ベルクーリに向けて脚を突き出す。
その鉤爪に左手をかけ、騎士長は一気に竜の背中へと自分を放り上げた。鞍にまたがるや、右手の剣を鋭く振り下ろす。
「行けっ!!」
叫ぶと、星咬と、雨縁、滝刳は同時に翼を打ち鳴らし、紫に染まる暁の空へと駆け上った。くさび形に隊列を組んで飛翔する三頭の、遥か前方を行く黒い飛竜の脚のあたりで、黄金の光が一瞬ちかっと瞬いた。

＊＊＊

アスナが生み出した石橋を一気呵成に突進してきた四千の拳闘士たちは、辛くも生き残っていた二百人ほどの仲間と合流すると、人界軍のすぐ横を駆け抜け、まるで巨大な破城槌の如く敵軍のど真ん中に激突した。
十人ひと組が横一列に密接し、完璧に同期した動きで右拳を引き、構える。
「「「ウッ、ラァッ!!」」」

完璧に重なった掛け声とともに放たれた十本の突きが、赤い兵士たちの剣をへし折り、鎧を叩き割った。悲鳴と血煙を撒き散らし、二十人以上の敵が後方へと吹っ飛ぶ。

闘気の全てを込めた突きを放ち終わった十人が、すっと横に広がって隙間を空けると、そのあいだから真後ろの十人が飛び出てきてガチッと横列を組む。

「ウララッ!!」

今度は前蹴りが、これも見事にシンクロした動作で撃ち出された。再び大量の敵が、砲撃でもされたかのように四散した。

「……すごい」

左腕の傷口に、昨夜コマンドを暗記したばかりの治癒術を施しながら、アスナは思わず呟いていた。隣で水を飲むシェータの横顔にも、うっすらとだが感心しているような気配が滲む。

拳闘士たちのローテーションは、かつてソードアート・オンラインのボス戦で攻略組が行っていた《スイッチ》と似ているが、ずっと洗練されている。十人が十列で百人の集団が幾つも、まるで工事用重機のように敵を蹂躙していくさまは見ていて空恐ろしいほどだ。

「感心してるだけじゃ困るぜ。このまま南に抜けたとして、そのあとはどうするんだ？　あんだけの数の敵、いくらオレたちでもこの場で殲滅すんのはちと難しいぜ」

アスナの隣で腕組みをして立つ赤毛の長が、厳しい表情で言った。

確かに、前への突進力だけなら無敵と思える拳闘士隊だが、数倍の歩兵に側面から突っ込ま

れて崩される集団も出始めている。何せ、召喚されたアメリカ人プレイヤーたちの数は、いまだ二万を軽く超えるのだ。

「……敵陣を破って南へ抜けたら、そのまま一気に前進して敵から距離を取ってください。わたしがもう一度、地割れを作って敵を隔離します」

アスナは掠れ声でそう答えた。

できるだろうか。さっき、小さな橋を作っただけでも気絶しそうになったのだ。もう一度、地平線まで届くほどの大規模な地形操作を行ったら、今度こそ強制ログアウトされてしまうか、下手をすると、生身の脳に物理的なダメージを負うことも……。

一瞬の迷いを、アスナは強く唇を噛んで断ち切った。やるしかないのだ。アメリカ人プレイヤーの召喚が、皇帝ベクタの最後の策だろう。ならば、それを潰せれば、たとえここでアスナが離脱したとしても、もうアリスに手は出せないはずだ。

戦場の北端に留まっているアスナとシェータのもとに、一人の衛士が南から駆けつけてきたのはその時だった。

「伝令!!　伝令――!!」

移動中に傷を負ったらしく、顔の半分を血に染めた衛士が、アスナの前に膝を突くと掠れ声で叫んだ。

「整合騎士レンリ様より伝令であります!!　整合騎士アリス様が、敵総大将の駆る飛竜に拉致

されました！　飛竜はそのまま南に飛び去った模様……!!」

「な……」

アスナは言葉を失った。

そんな――まさか、この状況は、人界軍からアリス一人を誘い出すための……!!

「皇帝……が、飛び去った、だと」

奇妙にひび割れた声で応じたのは、アスナでもシェータでもなく拳闘士の長だった。左だけ残った赤い眼に、異様な光を浮かべて続く言葉を絞り出す。

「それで、さっき飛竜に……。ただの見物じゃなかったのか……。おい、女!!」

若者は、アスナを爛々と輝く隻眼で凝視し、急き込むように詰問した。

「アリスってのは、《光の巫女》だよな!?　皇帝はなんでそいつをこうも欲しがるんだ!?　光の巫女が皇帝の手に落ちたら、いったい何が起きるってんだよ!?」

「この世界が……滅びます」

アスナは、短く答えた。拳闘士の左眼が、愕然と見開かれる。

「暗黒神ベクタが、光の巫女アリスを手に入れて《果ての祭壇》に到った時……この世界は、人界も、ダークテリトリーも、そこに住む人々を含めて全て無に還るのです」

自分の言葉が、どうしようもなくロールプレイングゲームのシナリオじみていることを、アスナは頭の片隅で意識した。

しかし、これはまったくの事実なのだ。アリスを手に入れた皇帝ベクタ、すなわち現実世界のオーシャン・タートル強襲チームは、アンダーワールド全住民のフラクトライトを格納するライトキューブ・クラスターを丸ごと破壊するであろうことは疑いようもない。

——ああ、どうすれば。ステイシア・アカウントにも飛行能力は付与されていない。飛竜に乗っている皇帝ベクタを、どうやって追いかければいいの……。

アスナの内心の苦悩に答えたのは、隣に立つ灰色の騎士シェータだった。空になった水袋をベルトに戻すと、涼しげな容貌の女騎士は言った。

「飛竜も、永遠には飛べない。連続飛行は、半日が限界」

すると、シェータをちらりと見てからすぐに顔の向きを戻した拳闘士の長が、ばしっと掌に拳を打ち付けて叫んだ。

「なら、あんたらが気合で追っかけるっきゃねえな!!」

「追っかける、って……あなた……」

アスナは呆然と敵将の若々しい顔を見た。

「あなたは、ダークテリトリー軍の人なんでしょう？　なんで、そこまで……」

すると敵将は、ふんと鼻を鳴らし、吐き捨てるように言った。

「皇帝ベクタは、俺たち暗黒界十候の前で、確かに言ったんだ。自分の望みは光の巫女だけだ、そいつさえ手に入ればあとはどうでも知ったこっちゃねえ、ってな。巫女をかっ攫った時点で、

皇帝の目的は達せられた……つまり、俺らの任務も一切合財終わったわけだ。あとは、俺らが何をどうしようと……たとえ皇帝から巫女を奪い返そうとする人界軍に協力しようがこっちの自由、そうだろうが!!」

なんという、牽強付会な。

アスナは唖然と拳闘士の顔を見た。しかしそこにあったのは、威勢のいい言葉とはほど遠い、悲壮な決意の色だった。

左眼でまっすぐにアスナを見て、拳闘士は言った。

「……俺は……俺たちは、皇帝に直接は逆らえねえ。あの力は圧倒的だ……。もしかすると俺よりも強かった暗黒将軍シャスターを、指一本動かさずに殺したからな。もし皇帝に、改めてあんたらと戦うよう命じられたら、従うしかねえ。――だから、俺たち拳闘士団は、ここで赤い兵隊どもを防ぐ。あんたらと人界軍は、皇帝を追っかけてくれ。そんで……皇帝を……野郎を……」

突然言葉を切り、若者は、まるで存在しない右眼が痛んだかのように顔を歪めた。

「野郎に、教えてやってくれ。俺たちは、てめぇの人形じゃねえってな」

ちょうどその時、一際高らかな拳闘士たちの喊声が、戦場の南から響いた。部隊の先頭が、ついに赤の歩兵軍の囲みを破り、荒野へと抜け出たのだ。

「よぉし……」

若い長は、ずだん！　と右足を踏み鳴らし、凄まじい声量で命じた。
「てめえら、その突破口を保持しろ!!」
アスナに視線を戻し、すかさず言う。
「あんたたちは早く脱出しろ!!　そう長くは持たねえ!!」
大きく息を吸い、アスナは頷いた。
――この人も、人間だ。
たとえ人工フラクトライトといえども、強靱で誇り高い魂を持つ人間に他ならない。一族が渡っているロープを無慈悲に切断し、百人以上を斬り殺したわたしたちに、叩き付けたい恨みと憎しみだってあるだろうに。
「……ありがとう」
どうにかそれだけを口にし、アスナは身を翻した。
背中に、整合騎士シェータの声が掛けられた。
「私も、ここに残る」
何となくそれを予測していたアスナは、振り向くと灰色の女騎士に向かって小さく微笑みかけた。
「解りました。しんがりをお願いします」

＊＊＊

一族の闘士たちが東西に構えて保持する突破口を、栗色の髪の不思議な女騎士と、七百ほどに減った人界軍が走り抜けていくのを、イスカーンは無言で見送った。

土煙から視線を外し、隣に立つ灰色の整合騎士を見やる。

「……いいのかよ、女」

「名前、もう言った」

じろりと睨まれ、肩をすくめて言い直す。

「いいのか、シェータ。生きて戻れるかどうかわかんねえぞ」

真新しい鎧をかしゃりと鳴らし、細身の騎士は肩をすくめた。

「あなたを斬るのは私。あんな奴らにはあげない」

「へっ、言ってろ」

今度こそ、イスカーンは朗らかに笑った。

犬死にしていく仲間を助けたい。それだけを願っていたはずの自分が、赤い軍隊から人界軍を守るために部族全体の命運を賭けようとしているのはどうにも不思議だったが、しかし、胸中には爽やかな風が吹いていた。

――まあ、悪くねえさ。こんな死にざまも。

世界を丸ごと守るためなら、里のオヤジも、弟や妹たちも、解ってくれるだろう。

「よぉおし!!　手前ら、気合入れろよ!!」

即座に、ウラアー!!　という雄叫びが返った。

「円陣を組め!!　全周防御!!　寄ってくるアホウ共を、片っ端からぶちのめしてやれ!!」

「滾りますな、チャンピオン」

音もなく背後の定位置に戻っていたダンパが、血まみれの左拳をごきごきと鳴らした。

＊＊＊

南の丘を越え、補給隊の待つ森へと撤退しながら、アスナは少年騎士レンリから、騎士長ベルクーリが三匹の飛竜とともに皇帝ベクタを追跡していることを知らされた。

「……追いつけると思いますか？」

アスナの問いに、レンリは幼さの残る顔に厳しい表情を浮かべて答えた。

「正直、微妙なところです。原則的には、飛竜は同じ速度で飛び、同じ時間に休息しなくてはならないわけですから……。ただ、皇帝ベクタの竜は、アリス様を運んでいることで、天命の消耗は多少なりとも増えるはずです。逆に騎士長閣下は、三匹の竜を順番に乗り換えて疲労を

≪アンダーワールド大戦≫戦況

≪最終貨荷実験≫二日目

抑えることが可能ですから、徐々にですが距離は詰まるかと……」

となると、あとはベクタが果ての祭壇に到着する前に、騎士長が追いついてくれることを祈るのみだ。

しかし、首尾よく皇帝を捕捉したとして――。

騎士長ベルクーリは、暗黒神ベクタに単独で勝てるのだろうか？

襲撃者までもがスーパーアカウントでログインしてくることを予想できなかったアスナは、ベクタに付与された能力を説明されていない。しかし、ステイシアの地形操作と同等の力をベクタも持っているとしたら――たとえ一騎当千の整合騎士の長といえども、一対一での戦いは厳しいものになるのではないだろうか。

そこまで考えた時、レンリがきっぱりとした口調で言った。

「もし追いつければ、騎士長閣下はかならずアリス様を取り戻します。あの方は、世界最強の剣士なのですから」

「……ええ、そうですね」

アスナも、ぐっと強く頷いた。

いまとなっては、信じるだけだ。アンダーワールド人の意志の強さを、先刻目の当たりにしたばかりではないか。

「ならば、私たちも全隊で南に進みましょう。幸い、この先はひたすら平坦な土地が広がって

いるようです。ベルクーリさんには追いつけないでしょうが、何かの助けになれるかもしれません」

「解りました、アスナ様。至急出発の準備をさせます！」

レンリは走る速度を上げ、一足先に森の中へと消えた。

その背中を見送りながら、アスナは自分に言い聞かせた。

キリトと、彼が守ろうとしたアリス、そして人界人たちを絶対に守り抜かなくてはならない。たとえ何度傷つけられようと——どれほどの痛みを与えられようとも。

＊＊＊

その頃——。

現実世界の太平洋上に浮かぶ海洋研究用自走メガフロート、オーシャン・タートルのメインコントロール・ルームでは、襲撃チームの電子戦担当隊員であるクリッターが、アメリカ人プレイヤーの第二陣二万人を、新たにアンダーワールドへとダイブさせようとしていた。

しかしその座標は、ガブリエル・ミラーの現在位置を追う形で、第一陣の投入地点よりも南に十キロメートルほど変更されていた。

2

「……ッ!!」

鋭い呼吸音とともに、ヴァサゴ・カザルスはがばっと身を起こした。

後ろで束ねた巻き毛を振り乱しながら、周囲を素早く確認する。

鈍く光る金属の壁。滑り止めの樹脂加工が施された床。薄闇にぼんやりと浮かぶ無数のモニタやインジケータ。

そして、眼前の椅子に座る、ひょろりと痩せた坊主頭の男をまじまじと眺めてから、ヴァサゴはようやくここがオーシャン・タートルのメインコントロール・ルームなのだと認識した。

坊主頭の男――クリッターは、ふんと鼻息を漏らしてから甲高い声で言った。

「あらら、目え醒ましやがったか。脳細胞がコゲてると思ったけどなぁ」

「……Shut the fuck up」

呟き声で応じながら、自分の体を見下ろす。壁際に敷かれた薄いマットレスの上に寝かされ、腹にはおざなりにジャケットが掛けてある。

いったい何がどうしたんだったか、と強く頭を振ると、脳の芯がずきんと痛んだ。再び罵り声を上げ、部屋の反対側で車座になってカードに興じている数人の隊員に声を掛ける。

「おい、誰かアスピリン持ってないか」
すると、髭面の突入隊員ブリッグが無言でポケットを探り、小さなプラスチック瓶を放ってきた。片手で受け取り、キャップを捻って錠剤をざらっと口に流し込み、噛み砕く。
舌が痺れるほどの苦味に、ようやく記憶が幾らか鮮明化した。
「そうか……オレは、底無しの穴に落っこちて……」
独りごちていると、クリッターがにやにや笑いながら問いかけてきた。
「いったい向こうで、どんな死にザマしたんだぁ？　八時間もぶっ倒れやがってよー」
「は……八時間!?」
驚愕し、ヴァサゴは頭痛も忘れて跳ね起きた。
左手首のGショックを睨むと、日本標準時で午前六時三分。日本のイージス艦《ながと》から武装した自衛隊員がオーシャン・タートルに乗り込んでくるタイムリミットまで、約十二時間しか残されていない。
いや、それよりも――。
八時間も失神していたのなら、時間加速されているアンダーワールドでは何ヶ月もの年月が過ぎ去ったはずだ。人界対暗黒界の戦争は……そして《アリス》捕獲ミッションはどうなったのか。
だが、クリッターはヴァサゴの驚きを見透かしたかのように、ちっちっと舌を鳴らした。

「眼ン玉ひん剝いてんじゃねーよ。安心しな、お前が中でおっ死んだ時点で、時間加速は等倍まで下がってっからよー」

「と……等倍だと？」

ならば、向こうの状況は大して変化していないのか。いやしかし、それはそれで大問題だろう。

「おい、解ってんのか四ツ目野郎。あと十二時間で、ＪＳＤＦの海兵隊が突っ込んでくるんだぞ！」

坊主頭をがくがく揺らすヴァサゴの手を煩わしそうに振り払い、クリッターは答えた。

「ったりめーだろうがぁ。こりゃ全部、ミラー隊長の指示だっつうの」

続いて説明された《作戦》は、百戦錬磨のＶＲＭＭＯプレイヤーであるヴァサゴさえも驚かせるものだった。

襲撃チームを指揮するガブリエル・ミラーは、ダークテリトリー東部の帝城オブシディアにあるシステム・コンソールから遠く離れる前に、現実世界のクリッターに秘かな指示を残していたのだ。

法規制を無視した新規ハードコアＶＲＭＭＯ――もちろんアンダーワールドのことだ――のベータテスト告知サイトを作成し、接続用クライアント・プログラムを用意しておけ。そして、七月七日の午前零時を目安に加速倍率を等倍まで低下させ、並行して全米でベータテスターの

募集を開始しろ、と。

「……ロックされちまったこのコンソールじゃ、隊長とあんたの座標、それにユニットの大まかな分布しか解らねー。だからこの作戦は、人界側の抵抗が予想より激しかった場合の保険だったんだがよー」

クリッターは細長い指をキーボードに躍らせ、正面のモニタにアンダーワールドの全体地図を表示させた。

角が丸まった逆三角形をした世界地図の、東の端から二本の赤いラインが伸び始め、西へと移動していく。

「これがあんたと隊長の移動ログだー。いいか、てめーは、エンパイア東側のゲートあたりをウロチョロして、ここで死にやがったわけだ」

赤いラインの片方が、《東の大門》から南へ少し下ったあたりで×印になって途切れた。

「けど隊長はいま、あんたの死亡地点を越えて、さらに南下してる。しかもダークテリトリーの全軍を北に置き去りにして、単独でだ。これがどういうことかっつうと……」

「《アリス》を追っかけてるか、もしくは既に捕まえてるかのどっちかだな」

ヴァサゴが唸り声を出すと。クリッターも頷き、説明を続ける。

「もともとの作戦じゃ、残り時間が八時間にまで減るか、あるいはヒューマン・エンパイア軍が全滅したとこで、もう一度加速倍率を一千倍まで戻すっつーことになってた。それでも内部

じゃ一年にもなるからな。加速を戻した時点で、ダイブさせたUSプレイヤーどもは同期ズレで全員ログアウトされちまうけど、戦争さえ勝ってりゃこっちのモンだー」

「なら、いますぐ倍率を戻したらどうなんだ？　もう、人界守備軍はほとんど残ってねえんだろうが」

「それが、そう単純じゃねー。いいか、ここを見ろー」

クリッターはキーを叩き、マップの一部を拡大させた。

人界と暗黒界を隔てる東の大門、そこから南へ数キロメートル下ったところに、平地と丘、森林が縦に並んでいる。森は、人界軍が潜伏していた……つまりヴァサゴが死んだ場所だ。

しかしいつの間にか、森と平地のあいだには、東西に五十キロメートル以上も延びる巨大な峡谷が出現していた。その谷の周辺に、もやもやと蠢く極小ドットの集合体が、赤、白、黒に色分けされて表示されている。

「この赤で表示されてんのが、アンダーワールドにぶっこんだUSプレイヤーの集団だ。ずいぶん減ったけど、まだ二万は残ってる。んで、赤に半包囲されてる黒いのがダークテリトリー軍だ。四千人くれーかな」

「お……おいおい、どう見ても赤が黒を襲ってるじゃねーか」

「偽ベータテスト告知じゃ、超リアルなNPCを殺し放題としか書いてねーからな。USからダイブしてる連中は、人界軍も暗黒界軍も区別できねーよ。……けど、なんでだか、黒の減り

が予想より遅ぇ。皇帝に絶対忠実な暗黒界軍が、皇帝に召喚されたっつうことになってるＵＳプレイヤーに抵抗するわきゃねーんだけどよー」

「どうせ、ねちねちいたぶって殺すのに夢中になってんじゃねえのか」

「まー、この黒四千はそのうち全滅するとしてだ。問題は、ここにちょこっとだけ、白い集団がいるだろーが」

クリッターがカーソルを動かす。確かに、南へ直進する皇帝ベクタことミラー隊長を追うように、ささやかな白ドットの集団が移動している。

「こりゃ、人界軍だ。マップ上じゃちっちぇーけど、これでも七百はいる。こいつらが隊長に追いつくと面倒だからな、なんとか阻止しなきゃなんねー」

「阻止っつっても……どうするんだ？」

ヴァサゴの問いに直接答えず、クリッターはひひっと短く笑うと更にキーを操作した。

マップ上に、新規のウインドウが開く。そこには、黒一色を背景に、巨大な赤い雲がもやもやと蠢動している。

「こいつらは、第一次接続に乗り遅れて、第二次接続を待ってるＵＳプレイヤーどもだ。二万に達したら、これをこの人界軍の座標にブチこむ。戦力比一対二十八だ、一瞬で殲滅するぜ？それから加速を一千倍に戻しても、隊長がアリスを捕まえて、最南端のシステム・コンソールに到着する猶予はたっぷり残るはずだー」

「……そう上手くいきゃいいけどな」

ヴァサゴは顎を擦りながら反駁した。

「お前が思ってる以上に、人界軍はしぶといぜ。とくにあの整合騎士って連中はイカレてる、ダークテリトリー軍の先陣を根こそぎブチ殺したからな。さもなきゃ、俺があんなプザマにやられる……わけが……」

そこまで口にした時。

ヴァサゴはようやく、自分が何者に、どのようにして殺されたかを思い出した。

鋭く息を詰め、両眼を見開く。脳裏に、遥かな夜空から自分を見下ろす女神めいた姿がまざまざと甦る。我知らず、英語ではなく日本語で口走る。

「――《閃光》……!! そうだ……間違いねぇ、ありゃ絶対にあの女だ……!!」

「はぁ？　何言ってんだー？」

怪訝そうなクリッターの坊主頭をがしっと摑み、ヴァサゴは英語に戻してまくし立てた。

「おいギーク野郎、てめぇの作戦と同じことを、第二コントロールに籠城してるラースの奴らもやってるぞ!! 人界軍に、日本人のＶＲＭＭＯプレイヤーが交じってたんだよ!!」

「なにいー？」

胡散臭そうな顔のクリッターには構わず、ヴァサゴは獰猛な笑みを片頬に刻んだ。

「《閃光》アスナがいるってことは、もしかしたら、アイツもダイブしてるんじゃねえのか。

……マジかよ、こうしちゃいらんねえ……。おい、俺ももう一度あっちに戻るぞ！　二万の援軍と同時に、その白集団の座標に降ろせ!!」

「戻るっつったって、もうテメーが無駄にした黒騎士アカウントは残ってねーぞ。援軍と同じ兵士アカでいいんなら幾らでもあるけどよ」

「アカウントならあるぜ……とっておきのヤツが」

ククッと喉の奥で笑い、ヴァサゴはコンソールに落ちていたエナジーバーの包み紙を拾い上げると、クリッターの胸ポケットから抜き取ったペンを手早く動かした。

「いいか、そのIDとパスで日本の《ザ・シード連結体》の総合ポータルにログインしたら、セーブされてるキャラをアンダーワールドにコンバートしろ。それを使ってダイブする」

そういい残し、ヴァサゴはSTL室に続くドアへと数歩走りかけた。

しかし、そこでぴたりと足が止まった。

再び振り向いたヴァサゴの口許には、名うての電子犯罪者であるクリッターでさえぞっとせずにはいられない、冷酷で残忍な笑みが浮かんでいた。まるで、つい数秒前までの野卑で陽気で騒々しい傭兵の顔が、単なるペルソナの一枚でしかなかったかのように。

ヴァサゴは、猫のように無音の足取りでコンソールまで引き返すと、クリッターの耳に追加の指示を短く囁きかけた。数秒後、今度こそヴァサゴを呑み込んだSTL室のドアを呆然と眺めるハッカーの手には、小さな紙片だけが残された。

紙には、三文字のアルファベットと八桁の数字が記されていた。S、A、Oと続くその文字列が持つ意味を、クリッターが知ることはなかった。

＊＊＊

出発の準備をする衛士たちのあいだを駆け抜けて補給隊の馬車に駆け込んだアスナが見たのは、横倒しになった銀色の車椅子と、左手を弱々しく動かす黒衣の青年、そして覆いかぶさる二人の少女たちだった。

足音にさっと顔を上げたロニエが、アスナを視認するや、涙に濡れる頬を歪めて叫んだ。

「あ……アスナ様！　キリト先輩が……何度も、何度も外に出ようとして……」

アスナは唇を噛みながら頷き、床に跪くと、キリトの左手を、無事な右手でぎゅっと握った。

「ええ……。アリスさんが……敵の皇帝に拉致されてしまったの。キリトくんは、それを感じたんだと思う」

「えっ……アリス様が!?」

叫んだのはティーゼだった。白い頬が、いっそう青ざめる。

一瞬の静寂を破ったのは、キリトの弱々しい掠れ声だった。

「あ……ぁ……」

左手が動き、アスナの傷ついた左腕に触れようとする。
「キリトくん……わたしを、心配してくれたの……？」
思わずそう呟いたとき、アスナの負傷に気付いたロニエが、悲鳴に似た声を発した。
「あ、アスナ様！　腕が……!!」
「大丈夫。この傷は、わたしにとっては仮のものだから……」
呟き、アスナは肘から先が失われた左腕をそっと持ち上げた。
アンダーワールドを形作る《ニーモニック・ビジュアル》テクノロジーに関しては、ラースの比嘉タケルにざっとしたレクチャーを受けている。あらゆるオブジェクトはＡＬＯと同じザ・シード・プログラムによって生成されているのだが、ＳＴＬを使ってダイブしているアスナやキリト、そしてティーゼたち人工フラクトライトにとっては、この世界の万物はメイン・ビジュアライザーからロードされる《共有記憶》なのだ。イマジネーションによって具現化する、もうひとつの現実。
スーパーアカウント・スティシアに付与された天命つまりヒットポイントは膨大なものだ。設定可能な数字のほとんど上限なので、通常武器による攻撃なら、百の剣に貫かれても天命がゼロにはなるまい。
しかし、赤い兵士が振り下ろした巨大なバトルアックスに左腕を直撃された時、アスナは心の底から恐怖した。これほど大きな斧を受けたら腕が斬り落とされてしまう、と自ら想像し、

イマジネーションがそれを現実に変えた。

キリトの右腕も同じことだ。数値的な天命はすでに回復しているのに、腕は復元されない。それは、キリトが自分自身を罰し続けているせいなのだ。

アスナは自分の右手を、包帯が巻かれた左腕の切断面にかざした。

意識を集中し、自分に強く言い聞かせる。

もう、わたしは二度と怯えたりしない。キリトくんを、そしてこの世界を守り抜くまで、誰にも……何にも負けない。

ぼっ、と傷口に白い光が宿った。温かい輝きは音もなく前に伸び、失われた左腕を復元していく。

奇跡を見るように眼を丸くする二人の少女たちに微笑みかけ、アスナは元通りになった左手でそっとキリトの頭を抱くと、愛する人に囁いた。

「ね、わたしは大丈夫。アリスさんだって、きっと救い出してみせる。だから……その時は、キリトくんももう、自分を責めるのはやめて……」

言葉が届いたかどうかは判らなかったが、痩せた体の強張りが少しずつ抜けていくのが感じられた。アスナは一度強くキリトを抱き締めてから、さっと顔を上げた。

「わたしたちは、これから敵皇帝を追うわ。いま、ベルクーリさんが飛竜で追跡してくれているから、きっとどこかで追いつけるはず。それまで、キリトくんをお願いね……ロニエさん、

ティーゼさん」
「は……はいっ！」
「お任せください、アスナ様！」
頷く少女たちに微笑みかけ、アスナは涙をこらえながらキリトをロニエに預けると、馬車から飛び降りた。
するとちょうどそこに、昨夜の思い出暴露大会にアスナ、ロニエとともに参加していた長身の女性剣士が走り寄ってきた。銀色の鎧は血と土埃にまみれ、額に包帯を巻いているが、重い怪我ではなさそうだ。
「よかった、無事だったのね、ソルティリーナさん」
アスナが声を掛けると、剣士はさっとアンダーワールド風の敬礼をしながら答えた。
「アスナ様も、ご無事で……。――ただ、先ほど小耳に挟んだのですが、アリス様が敵の総大将に攫われたと……」
「ええ。いまティーゼさんたちにも伝えたんだけど、皇帝ベクタは自分の軍隊を丸ごと放り出して、たった一人でアリスさんを襲ったの。さすがにその行動までは読めなかった……」
「……そんな、ことが……」
愕然と眼を見開くソルティリーナの右肩を、アスナは癒えたばかりの左手で強く摑んだ。
「でも、まだ終わったわけじゃないわ。ベルクーリさんが、飛竜でベクタを追ってる。わたし

たちも、すぐに追いかけるわ」

「了解です」

頷き合い、二人で守備軍囮部隊の本陣へと急ぐ。

整合騎士レンリの指示によって、七百人の衛士たちはすでに移動準備をほとんど終えていた。負傷者の治療を済ませた術師隊と補給隊を中心にして、滑らかに隊列が組まれる。

準備完了を報告するレンリに、アスナは言った。

「いま、部隊に残っている整合騎士はあなただけです、レンリさん。出発の指示は、指揮官であるあなたが」

「は……はい、解りました」

緊張した面持ちながらも頷いた少年騎士は、右手を高く掲げ、よく通る声で叫んだ。

「アリス様は、大門の戦いで、我々を守って下さった！　今度は我々がアリス様のために戦う番だ！　必ず敵の手からアリス様を取り戻し、ともに人界へ帰ろう!!」

おう!!　と力強い叫び声が湧き上がる。レンリは頷き、鋭く右手を振り下ろした。

「――全軍、出発!!」

隊列の先頭を、レンリの飛竜である風縫が走り始める。四百人の前衛部隊が騎馬と徒歩で続き、補給物資を載せた八台の馬車と、三百人の後衛部隊も順に移動を開始する。

ただ一頭、整合騎士シェータの飛竜だけが、どうしてもその場を動こうとしなかった。やむ

なく手綱が解かれると、主の髪に似た灰色の鱗を持つ飛竜は、クルルルッと一声鳴いてから、逆方向である北へ――シェータの残った峡谷南側の戦場目指して飛び去っていった。

馬車列の前で、ソルティリーナと同じ馬の背に揺られながら、アスナは考えた。

戦うべき敵は、皇帝ベクタただ一人。

その正体は、アスナと同じく仮の命を持つ現実世界人だ。ならば、刺し違えてでも必ず倒してみせる。赤い兵士たちの追撃を防ぐために死地に残った騎士シェータと隻眼の拳闘士長、そして四千の拳闘士たちのためにも。

数分後、枯れ木の連なる森が途切れ、前方にすり鉢状の巨大な窪地が姿を現した。まるでクレーターのような地形を貫いて、細い道が南へまっすぐ延びている。

RPGのルールに従えば、道を辿った先には街や遺跡といった何らかの固有ポイントが設定されているはずだ。しかしダークテリトリーの南部には、亜人たちの領土は存在しないらしい。つまり、この道の終わるところに《果ての祭壇》ことワールド・エンド・オールターがあり、そしてその途上のどこかに皇帝ベクタと整合騎士アリスがいる。

皇帝の飛竜はもちろん、それを追うベルクーリの竜もすでに見えない。しかし、七百にまで減ってしまった人界軍の衛士たちは、地響きを立てながら可能な限りのスピードで乾いた道を突き進んでいく。

クレーターの縁を越え、下り坂を駆け降り、すり鉢の底に部隊が差しかかった、その時。
何かが低く震えた。
ぶうぅぅ……ん、という虫の羽音のような震動音。
「……？」
アスナはちらりと視線を上げた。左右を見回し、背後を確かめる。
再び正面に眼を凝らすと、ようやく音の発生源が視認できた。
赤く、細いライン。
ランダムに明滅する小さなフォントの羅列が、空から何百本も地面へと伸びてくる。
「……うそ……」
唇がわななき、か細い声がこぼれた。
――嘘よ。やめて。もうこれ以上は。
しかし。
ザアアアッ!!
という驟雨にも似た轟音が、一気に炸裂した。赤いラインは左右へと広がりながら、無数に降り注ぐ。クレーターの縁に沿って高密度のスクリーンを作り、部隊を完全に閉じ込める。
もう怯えないと誓ったばかりなのに、アスナの両脚からすうっと力が抜けた。
ラインの溜まった地点に次々と出現したのは、あの凶暴な深紅の軍団――現実世界から呼び

込まれたＶＲＭＭＯプレイヤーたちにほかならなかった。

「ぜ……全軍、止まるな!!　突撃!!　突撃――!!」

先頭で、整合騎士レンリが指示を発した。動揺しかけた人界軍のそこかしこから「うおおっ！」とときの声が上がり、移動速度が増す。部隊は、クレーターの斜面をまっすぐに駆け上がっていく。

しかし、まるでその動きを先読みしていたかのように、新手の赤い軍隊はクレーターの南側に最も多く配置されていた。道を塞ぐ兵士たちだけでも、千……いや二千はいるだろう。ログアウトの危険を冒してもう一度ステイシアの地形操作を使うべきか。しかし、うかつに手を出せば、人界軍の進行をも妨げてしまう。

アスナの一瞬の躊躇いを、飛竜の雄叫びが貫いた。

隊列の先頭で、騎士レンリが駆る風縫が、口の両側から炎をちらつかせながら一気に突進していく。

「いけない……レンリ様は、捨て身で突破口を……」

アスナの隣で悲痛な声を漏らしたソルティリーナの言葉が聞こえたかのように、竜の背中でレンリがちらりとこちらを振り向いた。

――あとは頼みます。

少年の唇が、そう動いた。

前を向いた騎士は、腰から一対の美しいブーメランを外すと、両手で構えた。
それが投擲される、寸前。
クレーターの真上で、突然に空の色が変わった。
血のような赤に染まるダークテリトリーの空が十字に引き裂かれ、その奥に紺碧の青空が広がるのをアスナは見た。
クレーターの縁に密集し、いまにも突進しようとしていた無数の赤い兵士も、突進を続ける人界兵たちも、先頭を走る騎士レンリさえ、同時に天を振り仰いだ。
まるで宇宙まで続くかのような、無限の蒼穹。
その彼方から、白く輝く星が降ってくる。
いや、あれは人だ。空と同じ濃紺の鎧と、雲のように白いスカート。激しく揺れる短い髪は水色。白く光っているのは、左手に握られた巨大な長弓だ。顔は、逆光になっていてよく見えない。
――誰……？　あなたは、誰なの？
アスナの、無音の問いに答えるかのように。
空から降下してくる何者かは、身の丈に迫るほどの長弓を天に向けて構えた。
右手が、これも朧に光る弦を引き絞る。
ひときわ強烈な閃光。弓と弦のあいだに、純白に煌めく光の矢が出現したのだ。

人界軍も、赤い歩兵たちも、いつしか足を止めていた。誰もが言葉を失った静寂の中、隣で再びソルティリーナが囁いた。

「……ソルスさま……？」

まるで、その呼びかけに応えるかのように。

眩い光の矢が、空に向けて垂直に発射された。

それは瞬時に分裂し、あらゆる方向へと広がり。

鋭角な弧を描いてターンすると、白熱するレーザー光線と化して地上へと降り注いだ。

衛士長ソルティリーナ・セルルトの言葉は、半分だけ正しかった。

クレーターの上空に出現、いやログインした現実世界人が用いているのは、スーパーアカウント02《太陽神ソルス》。

付与された固有能力は、《広範囲殲滅攻撃》である。

＊＊＊

シノン／朝田詩乃は、自分が生み出した圧倒的な破壊現象を戦慄とともに見下ろしながら、比嘉という名の技術者との通話を脳裏に甦らせていた。

「ええっと、シノンさん、スーパーアカウントは確かに強力だけど、決して万能じゃないんス。どうしてもアンダーワールドの中で大規模なオペレーションを実行しなくちゃならなくなった場合に、世界の住民たちにギリギリ受け入れられるであろう形で、それを行うために用意されたものなんス」

「えーと……それってつまり、ＧＭじゃなくて、ものすごく強いＰＣでしかないってことですか？」

謎のベンチャー企業ラースの六本木支部で、最初期のフルダイブ実験機の如く巨大なＳＴＬマシンに横たわった詩乃は、スピーカーから流れてくる比嘉の声にそう問い返した。聞こえたのは、パチンという恐らく指を鳴らす音だった。

「イエス、まさに然りッスよ。だから、君に使ってもらう《ソルス》アカウントも、アンダーワールドに設定されたリソースの大原則からは逸脱できない。弓による攻撃を行うには、どうしても空間リソースの消費が必要なんス。自動リチャージ能力もありますから、日中であればエネルギーの枯渇は有り得ないはずッスが、連射は不可能と考えてください」

比嘉の言葉どおり、シノンが左手で握る純白の長弓は、大規模攻撃の直後から輝きを薄れさせている。両端から再び発光エフェクトが戻りつつあるが、再度の全力攻撃が可能となるまではあと二、三分はかかるだろう。

――連射不可？　ふん、上等じゃない。

全自動（オートマチック）より、単発の武器のほうがしっくりくるってものだわ。

胸中でそう囁き、シノンは爆炎が収まりつつある地上の様子を確認した。

差し渡し一キロはあるクレーターの縁では、黒焦げになった死体が次々と光になって消滅していく。一回の全力攻撃で、五千以上の敵兵を排除できたようだ。あれが本物のアンダーワールド人ではなく、シノンと同じように現実世界からログインしているアメリカ人だというのは正直さいわいなことだ。無料のベータテストだと信じ込まされ、接続した瞬間に焼き殺されたプレイヤーたちは、いまごろ向こう側で怒り心頭だろうが。

クレーターの中央では、赤い軍勢に比べるとあまりにも小規模な部隊が、再び前進を始めている。敵はまだたっぷり一万以上も残っているが、そのうち半数近くは次の射撃、というより爆撃を恐れて上空のシノンを見たまま動かないので、なんとか囲みは突破できそうだ。

シノンは両眼を細め、《人界》の隊列を凝視した。

すぐに、隊列の真ん中あたりで白い馬にまたがり、まっすぐこちらを見上げている栗色の髪の少女に気付く。

思わず笑みを零れさせながら、シノンはソルス・アカウントに付与されたもうひとつの固有能力、《無制限飛行》を制御しようとした。比嘉に「イメージ力で飛ぶんス」と言われた時にはそんな無茶なと思ったが、やってみればＡＬＯの随意飛行と大差ない。少女のすぐ後ろの馬車目指して、一直線に舞い降りる。

群青色のブーツのつま先がカンバス地の幌を踏むと同時に、右手を持ち上げて呼びかけた。

「お待たせ、アスナ」

すると、真珠色のアーマードレスをまとう少女の瞳に、珠のような涙が盛り上がった。走る馬の背で器用に立ち上がり、馬車の屋根に飛び乗ると、

「――――詩乃のん……!!」

絞り出すような声を聲かせながら両手を広げる。

思い切り抱き締められたシノンは、親友の華奢な背中をそっと叩き、囁いた。

「頑張ったね。もう大丈夫……あとは私に任せといて」

自分よりほんの少し背の高いアスナに抱かれたまま、ようやく二割ほどリチャージされた左手の弓を前方に向け、右手で軽く弦を引く。

ソルス・アカウントに付与されたGM装備、長弓《アニヒレート・レイ》は、弦を引く強さで攻撃の威力を、弓の角度で攻撃範囲を設定する。十センチほど引いたところで手を止めると、先刻よりはずっと細い光の矢が出現。シノンはその先端を、部隊の先頭を走る大きな竜の行く手を遮る敵集団に照準した。

ビシュッ、とささやかな発射音。

右に二十度ほど傾けた弓から放たれた光線は、分裂しながら直径十メートルの範囲に着弾し、TOWミサイル顔負けの爆発を引き起こした。赤い鎧が高々と吹き飛ばされ、空中で消滅する。

生まれた間隙に、すかさず竜が突入。踏みとどまっていた十数人の兵士たちも、竜の頭に薙ぎ払われ、鉤爪に蹴散らされて、ひとたまりもなく倒れる。

ここでようやく残る敵兵たちがレーザー攻撃のショックから立ち直り、倒すべき獲物が逃げ去ろうとしていることに気付いたようだった。口々に罵り声を喚き立てながら、クレーターの斜面を赤い津波と化して兵士たちが駆け下りてくる。

シノンは、弓を腕にひっかけるとアスナの両肩に手を置き、そっと体を離した。

「アスナ。ここから五キロくらい南に行ったところに、遺跡みたいな廃墟が見えたわ。道はその真ん中を貫いてて、左右にはでっかい石像が幾つも並んでる。あそこでなら、包囲されずに敵を迎え撃てると思う。なんとかそこで、こいつらを撃退しよう」

流石にアスナも歴戦の剣士だけあって、シノンの言葉を聞くと即座に表情が引き締まった。ぐいと涙を拭い、口を開く。

「わかったわ、詩乃のん……シノン。いくらアメリカのＶＲＭＭＯ人口が多くても、これ以上の数は、すぐには用意できないはず。あの一万何千かを撃退すれば、敵に打てる手はもうない……と思うわ」

「解った、任せておいて。……で、それはそうと……」

人界軍の最後尾がどうにか敵の包囲を抜けたことを確認してから、シノンは小声で親友に訊ねた。

「……その、キリトは、この部隊にいるの？」

これには、アスナも微かな苦笑を漏らした。

「いまさらそんな、水臭い訊き方しなくてもいいわよ。キリトくんは、ココ」

持ち上げられた右手の人差し指が、二人の足許を指し示す。馬車の中、という意味だろう。

「え、そうなの。じゃあ……ちょっと、挨拶してくるね」

ごほんと咳払いしてから、シノンは大型馬車を覆う幌の後ろ端まで移動し、少しばかり飛行能力を使って体を内部に滑り込ませた。

アスナが降りてくるまで待って、積んである木箱の奥へと向かう。

まず視界に入ったのは、学校の制服を思わせる衣装の上から防具を身につけた二人の少女たちだった。揃って両眼を丸く見開き、小さな声を漏らす。

「そ……ソルス様……？」

シノンはちらりと自分の派手な格好を見下ろしてから、肩をすくめて挨拶した。

「こんにちは、はじめまして。ソルスっぽいけど、中身は違うの。私の名前はシノン」

どうにか笑顔を浮かべつつ名乗ると、二人はぱちくりと瞬きしたが、すぐに背後のアスナを見て何か得心したようだった。シノンも頷き返し、続ける。

「そう、私もアスナと同じ、リアルワールド人よ。そして、キリトの……友達」

「そう……なんですか」

赤い髪の少女は驚き顔のままだったが、焦げ茶色の髪の少女は何やら微妙な表情になると、小声で「女のひとばっかり……」と呟いた。

まだまだこんなもんじゃないわよ、とこっそり苦笑しながら、シノンは左右に分かれた少女たちのあいだを抜け、馬車の奥へと進んだ。

そこには、素朴な車椅子に腰掛け、片方だけの腕で二本の長剣を抱いた、黒衣の若者の姿があった。

キリトの状態は、比嘉タケルから説明されてはいた。しかしこうして傷ついた姿を見ると、胸がいっぱいになり、両眼には涙が滲んだ。

「……あ……」

虚ろな瞳はシノンを直視することはなかったが、少しだけ開かれた口からかすかな声が零れた。かつての強敵にして戦友、そして命の恩人の前に、シノンはそっと膝を突いた。

車椅子の背もたれと肘掛けにもたれかかる剣士の体は、触れるのが躊躇われるほど痩せ細っていた。シノンは長弓を馬車の床に置くと両手を差し伸べ、細い肩を優しく抱き寄せた。

キリトの魂——フラクトライトは、その核とも言える《主体》、すなわちセルフ・イメージが深く損なわれてしまったらしい。回復の手段はいまのところ見つかっていない、と比嘉は沈んだ声で言っていた。

しかしシノンは、ぎゅっと両眼をつぶって頬に涙の粒を転がしながら、そんなの簡単なこと

だわ、と胸の奥で呟いた。

キリトと過ごした時間の記憶、そしてキリトへの強い気持ちならば、何人もの人がたくさん、たくさん、抱えきれないほど持っている。それを少しずつ集めて、キリトの心に戻してあげればいい。

――ほら、感じるでしょ……私のなかの君を。皮肉屋で、悪戯好きで、頑固で、ナイーブで……そして誰よりも強くて優しい、君自身を。

後ろで見守っているアスナのことさえ一瞬忘れて、シノンは顔の向きを変えると、キリトの頬にしっかりと唇を触れさせた。

この時――。

朝田詩乃は、自分の感傷めいた思考が、桐ケ谷和人の魂を回復させ得る唯一の方法に、紙一重のところまで肉薄していることを知らなかった。

もし詩乃に、アンダーワールドとフラクトライトの構造について充分な知識があれば、解答に辿り着くことは可能だったかもしれない。しかし、詩乃がダイブ直前に受けたレクチャーは、世界の現状とソルス・アカウントの使用方法に留まっていたのだ。

ゆえに彼女は、唇を触れさせた時に和人が小さく体を震わせ、伝わる体温がわずかながら上昇したように感じた理由を追究しようとはしなかった。

すぐにキリトから体を離したシノンは、立ち上がると背後の三人を見た。
「だいじょうぶ、キリトはすぐに元気になるわよ。みんなが、本当にこの人を必要とした時に、ね」
アスナと二人の少女たちは、涙ぐんだままこくりと頷いた。
「じゃあ……私、一足さきに南の遺跡まで飛んで、地形を確認してくる。あなたたち、キリトのこと、よろしくね」
そう声をかけ、馬車の後ろに向かいかけたシノンの肩を――。
突然アスナが、がしっと強く掴んだ。
その瞳にとてつもなく切迫した光が浮かんでいるのを見て、シノンは思わず息を呑んだ。
「あ……アスナ、どう……」
キリトにキスしたことを問い詰められるのか、と一瞬思ったが、もちろんそんなこともなく――。
「ね、ねえシノン、いま『飛ぶ』って言った!?　あなた……飛べるの!?」
急き込むような問いに、途惑いながら頷く。
「う……うん。ソルス・アカウントの固有能力らしいわ。制限時間とかもないって聞いたけど……」

「なら、助けてほしいのはわたしたちじゃないわ！　アリスを……皇帝に攫われたアリスさんを追いかけて!!」

続けてアスナが説明した状況は、シノンの想像以上に切迫したものだった。

全ての鍵となる整合騎士アリスが、現実世界から同じくスーパーアカウントを使ってダイブしてきた皇帝ベクタに拉致され、遥か南を竜に乗って飛行中であること。いまベクタを追っているのは、騎士長ベルクーリという剣士だけであること。

「スーパーアカウント相手じゃ、いかに騎士長さんでも一人じゃ荷が重いわ。もし皇帝が果ての祭壇に到着する前にアリスさんを救出できなければ、この世界は丸ごと破壊されてしまう。シノン、お願い、ベルクーリさんを助けて！」

どうにか事情を呑み込み、騎士長ベルクーリの外見を頭に叩き込んだシノンは、馬車から直接離陸すると一気に高度を取った。

土煙を立てて南下する人界軍七百。

北から怒濤の勢いで追いかけてくる赤い軍勢は、その二十倍はいるだろう。

――アリスを取り戻したら、すぐ駆けつけるから、それまで頑張って……アスナ。

内心で親友に呼びかけると、シノンはくるりと南を向き、イマジネーションを振り絞って加速した。白い尾を引く流星となり、赤い空を引き裂いて飛ぶ。

眼下にどこまでも広がる黒ずんだ荒野を俯瞰しながら、シノンはふと考えた。

そういえば――。

同時にログインしたはずのリーファは、どこに行ってしまったのだろう？

3

整合騎士レンリが率いる人界軍、追いすがるアメリカ人プレイヤー。

彼らの遥か北では、アスナが生成した峡谷の南岸で、イスカーンと拳闘士団、そして整合騎士シェータが、いまだ一万以上も残る赤い軍勢を相手に苦しい戦いを続けている。

その戦場から、さらに北方。

激戦の痕跡が生々しく残る東の大門を望む荒野に、一人の亜人がたたずんでいた。

ずんぐりした体を包む鋼鉄の鎧。風になびく革マント。丸い頭の両脇に薄く広い耳が垂れ、扁平な鼻がまっすぐ前に突き出ている。

オークの族長、リルピリンである。

生き残ったわずか三千の兵たちを後方に待機させ、単身、東の大門がよく見える場所まで歩いてきたのだ。一人の護衛もつけなかったのは、地面を這い回る自分の姿を見せたくなかったからだ。

何時間も砂利をかき分け続け、リルピリンはようやく求めるものを見つけ出した。素朴な彫刻を施した、銀のイヤリング。

そっと拾い上げ、掌に載せたそれは、皇帝の命令によって暗黒術の人柱となったオーク族の

姫騎士レンジュの耳にいつも輝いていたものだ。

彼女の遺品はそれだけだった。荒野には、姫とともに死んだ三千のオーク兵の骸どころか、鎧の欠片さえも残っていなかった。暗黒術師のおぞましい邪術が、オークたちの肉体どころか装備までをも暗黒力に変換し、余さず喰らい尽くしてしまったのだ。

その残酷極まる術式を行使した女術師ディー・アイ・エルも、それを命じた皇帝ベクタも、もうこの地にはいない。

暗黒術師ギルドの総長ディーは、反撃に出た《光の巫女》の恐ろしくも美しい広範囲攻撃に巻き込まれて死に、皇帝は巫女を追って南に飛び去ってしまった。リルピリンへの待機命令を解除することもなく。

残る三千のオーク兵だけでは、とても東の大門を守る人界軍と整合騎士に勝つことはできない。暗黒界五族の悲願である、人界征服の夢は潰えたのだ。

――だとすれば。

いったい、なんのために。

なぜ、リルピリンの幼馴染であるレンジュと、生贄にされた三千人、そして大門での初戦に出陣した二千人のオーク兵は死ななければならなかったのか。彼らの死が、暗黒界に何をもたらしたというのか。

答えは、無だ。一切、何ひとつ。

ただ人族より醜いという理由だけで、五千もの同族が空しく死んだ。

リルピリンは、小さなイヤリングを両手で胸に抱き、がくりと地面に膝を落とした。怒り、やるせなさ、そして圧倒的な哀しみが胸に突き上げ、それらが涙と嗚咽に変わろうとした――その寸前。

背後で、どすんと軽い音がした。

慌てて立ち上がり、振り向いたオーク族の長が見たのは、地面に尻餅をついて顔をしかめた若い人族の女だった。鮮やかな金色の髪、抜けるように白い肌、若草色の装束と煌びやかな鎧……暗黒界人ではない。間違いなく、人界人。

リルピリンが真っ先に感じたのは、唐突な出現に対する驚きでも、人族への怒りでもなく、自分を見ないでくれという羞恥にも似た感情だった。

なぜなら、眼前の娘は、あまりにも美しすぎた。

初めて間近に見る白イウムの若い女は、背が高く骨太で浅黒い肌を持つ暗黒界人の女とはまるで違う種族だと思えた。手足は触れただけで折れてしまいそうなほど華奢で、髪は弱々しい日光の下でも眩しく輝き、きょとんとした表情でまっすぐ見上げてくる大きな瞳は、磨き抜かれた翠玉のようだ。

リルピリンは、この小さくてひ弱な生き物を、震えるほどに美しいと思ってしまう自分の感覚を呪った。

同時に、娘の瞳に、嫌悪の色が満ちるのを恐れた。

「み……見るなッ!!　おでを見るなああッ!!」

喚きながら左拳で自分の顔を覆い、右手で剣の柄を握る。

悲鳴を聞かされる前に、首を刎ねてしまえ。

衝動のままに剣を抜こうとした瞬間、左手に握り込んだままのイヤリングがちくりと掌を刺した気がした。あたかもレンジュに引き留められたかのような感覚に打たれ、動きを止めたリルピリンの耳に、思いがけない声――言葉が届いた。

「あの……こんにちは。それともおはよう、かな」

身軽な動作で立ち上がり、裾の広がった短かめのズボンをぱたぱた叩きながら、娘はにこりと笑った。

顔を隠す拳の陰から、唖然と小さな娘を見下ろし、リルピリンは何度も瞬きを繰り返した。

娘の瞳には、嫌悪も、侮蔑も、それどころか恐怖すらも浮かんでいないように見える。白イウムの子供にとっては、ダークテリトリーのオークは人食いの悪鬼でしかないはずなのに。

「な……なぜ」

口から漏れ出たその言葉は、暗黒界十候の一人にはまるで似つかわしくない、途方にくれたような響きを帯びていた。

「なぜ、逃げない。なぜ悲鳴を上げない。人族のくせに、なぜ」

すると、今度は娘が驚いたような、困ったような表情を作った。
「なぜ、って……だって」
そして、まるで大地は平らで空は赤い、とでも言うかの如き何気なさで続けた。
「あなたも人間でしょ？」
その瞬間、なぜか背筋に深い震えが走った。大剣の柄を強く握り締めたまま、喘ぐように亜人の長は言った。
「に……にんげん？　おでが？　何を馬鹿な、見ればわがるだろうが！　おではオークだ！　おまえらイウムが人豚と罵るオークだッ!!」
「でも、人間だよね」
華奢な両腰に手をあて、娘はまるで親が子供に言い含めるような調子で繰り返した。
「だって、こうして話ができてるじゃない。それ以外に何が必要なの？」
「なに……って……」
どう反駁していいのか、リルピリンには解らなかった。緑色の瞳の少女が自信たっぷりに口にした言葉は、これまで人族に対する劣等感と怨嗟に塗れて生きてきたオークの長にはあまりにも異質すぎたのだ。
……話ができれば、人間？
《人》の定義とは、そんな簡単なものなのか？　言葉なら、ゴブリンだって、オーガだって、

ジャイアントだって操る。しかし、それにオークを含めた四種族は、暗黒界が生まれたその時から亜人と呼ばれ、人とは厳然と区別されてきたのだ。

荒い鼻息を漏らして立ち尽くすリルピリンの衝撃と混乱を、少女は「そんなことよりも」とひと言で押しのけ、くるりと周囲を見回した。

「……ここは、どこなの？」

＊＊＊

リーファ／桐ヶ谷直葉は、本来のログイン座標から大きくずれた場所に出現してしまったらしいと推測し、恨みがましく赤い空を見上げた。

割り当てられたＳＴＬ六号機が、ロールアウトしたばかりの、まだビニールカバーも取れていない新品だと聞いた時から嫌な予感はしていた。直葉は、新品の竹刀は決して試合では使わないし、同様に箱から出したての電子機器も信用していない。どういうわけか昔から、初期不良引き当て率が異常高値を維持しているのだ。

ログイン座標は、隣のＳＴＬ試作一号機に入ったシノンと同じく先行しているアスナの現在位置に設定されていたはずなので、周囲に彼女たちの姿がないからにはやはり何らかのトラブルが起きたのだろう。しかし荒涼とした原野はまったくの無人というわけではなく、目の前に

は丸っこい体と豚によく似た顔を持つヒューマノイド――つまり《オーク》が一人だけ立っている。

ダイブ直後だけ有効となるカラーマーカーによれば、眼前のオークは、目下の敵であるアメリカ人ＶＲＭＭＯプレイヤーではない。アンダーワールドに暮らす《人工フラクトライト》、つまりユイが口にしていた真正のボトムアップ型人工知能だ。

アンダーワールド人について説明された時からリーファは、どうしても、何がなんでもそれが必要という状況にならない限り、彼ら相手に剣は抜くまいと決めていた。

当然のことだ。兄であるキリトが守ろうとした人間たちを、殺すなんてできるわけがない。人工フラクトライトは、この世界で死ぬと、その魂は完全に消滅してしまって二度と復活できないのだから。

それにしても――。

目の前に立っているオークのリアルさは、数多あるザ・シード連結体の中でも最高峰のグラフィックを誇るＡＬＯ出身のリーファの目にも驚異的なレベルだった。ピンク色の大きな鼻の動き方や湿り気、巨体を包む金属鎧と革マントの質感、そして何よりも、小ぶりな黒い瞳に浮かぶ表情の豊かさは、その奥に宿る魂が紛れもなく本物だということを如実に示している。

なぜか気後れしたように顔を背けてしまったオークに、とりあえずここがどこなのか訊ねてみたが、答えは返ってこなかった。ならばもっと手前から始めようと考え、リーファは別の質

問を口にした。

＊＊＊

「えーと……あなたのお名前は？」

混乱の極みに突き落とされたオークの長は、白イウムの娘が二度目に発した質問に、反射的に答えてしまった。名前だけは、自分に与えられた全てのものの中で、唯一嫌いではなかったからかもしれない。

「お……おでは、リルピリン」

名乗ってから、すぐに後悔する。ずっと昔、初めて帝城オブシディアを訪れた時、リルピリンの名を聞いた人族の騎士や術師たちが大笑いしたことを思い出したのだ。

しかし娘は、またしてもにこりと無邪気な微笑みを浮かべ、澄んだ声でリルピリンの名前を繰り返した。

「リルピリン……すてきな名前ね。私はリーファ。はじめまして、よろしく」

そして直後、何度目かの驚愕すべき挙にでた。

しなやかな白い右手を、まっすぐ差し出してきたのだ。

握手という挨拶はもちろん知っているし、オーク同士でも日常的に行われる。しかし、これ

までイウムとオークが握手した話など、ただの一度も聞いたことがない。

――いったい何なのだ、この人間は。何かの罠か、それとも術師の仕業か。いつのまにか、幻惑術にでも掛けられてしまったのか。

差し出された小さな手を凝視し、唸ることしかできないリルピリンを娘はたっぷり十秒近くも見詰めていたが、やがて少しだけがっかりしたように手を下ろした。その様子に、なぜか胸の奥がちくりと痛む。

これ以上、この娘と話をしていたら……いや見ているだけでも、頭がどうにかなってしまいそうだった。リルピリンは、もう娘を叩き斬る気にはなれなかったが、それ以外で最も頭を使わずに済む解決法にすがるべく、口を開いた。

「お前……人界軍の衛士、いや騎士だな。なら、お前を捕虜にする。皇帝のどころに連れていぐ！」

年齢は若いが、娘の装備する鎧や左腰に装備された長刀は、どう見ても一介の兵士に与えられるものではない。精緻な細工が放つ煌びやかな輝きは、リルピリンの装備よりもずっと上等なように思える。

リルピリンの大声にも、娘はまるで怯える様子も見せずに何かを考えているようだったが、やがて小さく肩をすくめると訊いてきた。

「皇帝、っていうのは暗黒神ベクタのことよね？」

「そ……そうだ」

「解った。なら、皇帝のとこに連れていって」

頷き、握った両手を揃えてずいっと前に突き出す。再び途惑ってから、それが握手ではなく捕縛を促す動作であることを悟る。

――ほんとうに、まったく何を考えているのか。

リルピリンは、腰帯から飾り紐を一本外すと、少女の両腕を手荒に――しかし少しだけ緩めに縛った。紐の端を握り、ぐいっと引っ張ってから、ようやく皇帝がもう暗黒界軍の本陣にはいないことを思い出す。

だがこれ以上難しいことを考えていると、頭の芯が焼き切れてしまいそうだった。皇帝がいなくても、副官である軽薄な物腰の黒騎士か、商人ギルドの長レンギルあたりが処置を決めてくれるだろう。

ぐるりと身を翻し、やや控えめに紐を引っ張りながら歩き始めた、ほんの数秒後――。

いきなり周囲に、黒い靄のようなものが色濃く立ちこめた。嫌な匂いがつんと鼻を刺す。たちまち視界が失われ、リルピリンは油断なく周囲を見回した。

「あっ……!?」

短い驚きの声は、まちがいなくリーファと名乗った娘のものだった。

さっと振り向いたリルピリンが見たのは、濃密な靄の奥からぬっと突き出した一本の腕が、

リーファの束ねられた髪を摑んで乱暴に引っ張り上げる光景だった。
直後、腕の持ち主が、靄を割って姿を現した。
死んだはずのあの女——暗黒術師ギルド総長ディー・アイ・エルが、冷酷な笑みを紅い唇に浮かべてそこに立っていた。

＊＊＊

なぜ、追いつけない。
整合騎士長ベルクーリは、焦燥と驚きを等しく感じていた。
飛竜三頭による追跡は、もう二時間以上も続いている。
人界守備軍が野営していた森、その南に広がっていた円形の窪地を飛び越え、奇怪な巨像が林立する遺跡を通過して、かつてないほど深くダークテリトリーの南部に分け入りながらも、敵との距離はまるで縮まる様子がない。愛弟子である整合騎士アリスを拉致した皇帝ベクタの飛竜は、相変わらず地平線に浮かぶ極小の黒点のままだ。
皇帝は、一頭きりの飛竜に、自身とアリスの二人を乗せて飛んでいる。
対するベルクーリは、星咬、雨縁、そして滝剖の三頭に順番に騎乗して、飛竜たちの疲労を可能な限り抑えている。理屈では、そろそろ追いついていてもおかしくないはずだ。

いったい、なぜ追いつけないのか。皇帝は、飛竜の天命をも自在に操るというのか。

そんなはずはない。天命の直接操作は、最高司祭アドミニストレータにすら為し得なかった、最大の禁忌ではないか。

いくらなんでも、このまま無限に飛べるというわけではないだろう。ダークテリトリーの最南端にあるという果ての祭壇に辿り着くまでには、最低二度は飛竜を休息させる必要があるはずだ。しかしベルクーリを乗せる竜たちも、同様に休息しなくてはならない。速度が同じなら、永遠に距離は縮まらない。

やむを――得ないか。

地平線の彼方まで届く射程の術式など、ベルクーリにも到底操れない。いまこの状況を打破できる可能性があるとすれば、それは唯一……。

騎士長は、右手でそっと左腰の愛剣を撫でた。

ひんやりと硬く、頼もしい手触り。しかし、剣の天命がまだ完全回復にはほど遠いことは、感覚的に判る。東の大門で使用した大規模な武装完全支配術による消耗が、予想以上に大きかったのだ。

ベルクーリがこれから使おうとしている術は、神器《時穿剣》の最終奥義であるがゆえに、莫大な天命を消費する。

使えるのはたった一度。その一撃を、針の穴を通す以上の精密さで命中させねばならない。

ベルクーリは、騎乗していた滝剄の首筋を軽く叩いてねぎらうと、ひょいと隣の星咬の背に飛び移った。

長年共に戦った相棒に、手綱を持つこともなく意思を伝え、高度を慎重に調整する。

照準するのは、遥か地平線に滲む、砂粒のような黒点。

皇帝本人を狙いたいのはやまやまだが、姿も視認できないこの距離では外す危険が大きすぎる。どうにかその動きが見て取れる、黒い飛竜の片翼に全精神力を集中する。

鞍の上に仁王立ちになったベルクーリの右手が、ゆるりと動いた。

使い込まれた革鞘から、全体が同一の素材で造られている長剣を滑らかに抜き出す。

体の右側に立てて構えられた鋼の刀身が、かすかな光を帯びた。式句なしで、記憶解放術を発動させたのだ。陽炎のように揺らぐ長剣は、飛竜が前進するにつれて、無数の残像を後方に引いていく。

剛毅な口許が短く動き、罪なき飛竜への詫び言を囁く。

直後、薄青い色の瞳をすうっと細め——世界最古の騎士ベルクーリは、裂帛の気合を込めて叫んだ。

「時穿剣——裏斬!!」

ズウッと重々しく、しかし凄まじい速度で剣が振り下ろされた。青い残像が斬撃の軌道に沿って無数に輝き、順に消えた。

彼方の空で、皇帝ベクタの駆る黒い飛竜の左の翼が、付け根から音もなく切断された。

＊＊＊

「匂う……匂うわぁ……なんて甘い、天命の香り……」

人族の娘の髪を掴み、体ごと吊り上げたディー・アイ・エルの唇から、ひび割れた声が零れ落ちた。

どれほど憎んでも憎み足りないはずの暗黒術師の姿を、リルピリンはただ呆然と眺めることしかできなかった。

香油を塗られて艶やかに輝いていた浅黒い肌も、豪奢に波打っていた漆黒の髪も酷い有様だ。全身に、鋭利な刃物で斬られたような傷が縦横無尽に走り、じゅくじゅくと血を滲ませている。ディーが体を動かすたびに、あちこちの傷が口を開き、鮮血を迸らせる。しかし、術師の身にまとわりつく黒い靄がたちまち傷口に集まり、しゅうっと嫌な臭いを放って止血していく。

靄の源は、ディーの腰にぶら下がる小さな革袋だった。見ると、袋の口からは時折、奇怪な虫めいた生物が顔を出して、盛んに黒い靄を吐き出している。天命の減少を抑えるための暗黒術に違いない。

嫌悪感のあまり鼻に皺を寄せるリルピリンをちらりと見て、ディーは再び唇の両端を吊り上

げた。

「素晴らしい獲物を捕まえたわね。いい働きよ、豚。ご褒美に、楽しいものを見せてあげるわ」

嗄れ声でそう言うや否や――。

ディーは、宙吊りにされて苦しげに顔をしかめる娘の襟首に、鉤爪のような右手の指を食い込ませた。

銀色の鎧と、その下の若草色の上着までもが一瞬で引き剝がされ、地面に落ちる。

眩しいほどに白い肌が露わになり、娘はいっそう顔を歪めた。その様子に、ディーは嗜虐的な笑みを浮かべ、しゅうしゅうと嗤った。

「どう、人族の女の体を見るのは初めてでしょう？　豚には目の毒かしらね？　でも、面白いのはこれからよ……!!」

ディーの右手の五指が、突然、骨をなくしたかのようにうねうねと蠢いた。

いつのまにか、それは指ではなく、細長い虫のような姿へと変じていた。先端には細かい歯が丸く並ぶ口が開き、厭らしい蠕動を繰り返している。

「ほぉら……!!」

ディーが叫ぶと同時に、五本の指――いや五匹の長虫は何十倍にも伸び、娘の上半身を巻き取った。動きを封じるや、先端が鎌首をもたげ、肌のあちこちに、頭を突き刺さんがばかりに噛み付いた。

「アァッ……!!」

大量の鮮血が飛び散り、リーファという名の娘は、緑色の瞳を見開いてか細い悲鳴を上げた。長虫を剝ぎ取ろうと手を動かすが、上半身をぐるぐる巻きにされているうえに、手首をリルピリンの飾り紐に拘束されているのでままならない。

五つの傷口からの出血は、一瞬で収まったかのように見えた。しかし実際はそうではなく、ディーの右手に繋がる長虫が血を飲んでいるのだと、リルピリンは察した。

暗黒術師は、喉を反らし、甲高い声で術式を唱えた。

「システム・コール!!　トランスファー・ヒューマンユニット・デュラビリティ……ライト・トゥ・セルフ!!」

ぼっ、と青い輝きが娘の傷口に生まれる。それは血液の流れと同調するように長虫を伝い、ディーの腕に吸い込まれていく。娘の苦悶はいっそう激しくなり、華奢な身体が折れんばかりに仰け反る。

「はぁっ……凄いわ……凄いわぁ!!　なんて濃くて……甘いの!!」

きんきん響く金切り声が、リルピリンの耳を貫いた。

その痛みで我に返ったオークの長は、喘ぐように叫んだ。

「な……何をする!!　その娘は、おでの捕虜だ!!　おでが皇帝のもとへ連れていく!!」

「黙れッ、豚めがッ!!」

血走った両眼を見開いたディーが、狂気に満ちた声で喚いた。

「私が皇帝に作戦指揮の全権を委任されていることを忘れたかッ!!　私の意志は皇帝の意志!!　私の命令は皇帝の命令なのよッッ!!」

ぐっ、とリルピリンは喉を詰まらせた。

その作戦はとうの昔に失敗に終わっているではないか、という反駁が喉元まで込み上げる。しかし、皇帝は新たな命令を一切残さずに、戦場から消えてしまったのだ。ならば、全ての命令はそのまま維持されているというディーの主張を覆すに足る根拠はなにもない。

動けないリルピリンの目の前で、か細い悲鳴を上げ続ける人族の娘の動きが弱々しいものになっていく。いっぽうディーの肌に刻まれた無数の傷は、片端から癒着し、ふさがっていく。

「ぐ……グゥ……」

食い縛った牙のあいだから、潰れた呻き声が漏れた。

いつしかリルピリンの視界では、天命を吸われる娘の姿が、生贄となり息絶えた姫騎士の姿と重なっていた。

娘の瞳から、光が薄れ始める。肌の色はすでに白を通り越して青ざめ、両腕はだらりと力なくぶら下がるのみ。しかし、ディーの右手の長虫は尚も飽き足らぬように蠢き、一滴も残さずに血を吸い取ろうとする。

死ぬ……死んでしまう。

せっかくの捕虜が。

いや、自分を見ても恐れも蔑みもしなかった、初めての人間が。

その時――。

驚愕すべき現象が発生し、リルピリンは両眼を見開いた。

地面が……炭殻のように黒く不毛なダークテリトリーの大地が、吊り上げられた娘の足許で、緑色に輝いている。

ごく限られた地域でしか見られないはずの、柔らかそうな若草がいっせいに芽吹き、色とりどりの小さな花が無数に咲く。清涼な芳しさが漂い、血の色の陽光すら穏やかな乳白色に変化した。

小さな草地から立ち上る濃密な天命が、渦巻きながら娘の体へと吸い込まれていく。

青白かった肌にたちまち血の色が戻り、瞳にも輝きが甦る。

地面の緑色が消え去り、太陽の色が元に戻ると同時に、娘の天命が全回復したことをリルピリンは直感的に悟った。感じるはずのない安堵のような感覚が、胸の奥に満ちた。

しかし、それは即座に打ち破られた。

「なんてこと……湧いてきた……また溢れてきたわぁぁ!!」

すでに、こちらも傷はほとんど全快しているはずのディーが、耳障りな金切り声で喚いた。

娘の髪を摑んでいた左手を離し、そちらの指をも醜悪な長虫へと変容させる。

鈍く湿った音を立て、新たな五本の触手が娘の肌に突き刺さった。

「っ……あああっ……!!」

再び放たれた悲鳴を、ディーの哄笑が掻き消した。

「アハハハハ!! ア――ッハハハハハハ!! 私のよ……!! これは私のよおおお!!」

＊＊＊

――耐えなければ。

現実世界でも、もちろんＡＬＯでも一度も感じたことのない、目のくらみそうな激痛に苛まれながら、リーファはただそれだけを念じた。

スーパーアカウント03、《地神テラリア》に付与された能力はダイブ前に説明されている。《無制限自動回復》。周囲の広範な空間から自動的にエネルギーを吸収し、自分や他の動的・静的オブジェクトの耐久度を回復させるのだ。ただでさえ膨大なヒットポイントの数値にその能力が加われば、ＨＰの減少による死亡はほとんど有り得ないはずだ、と比嘉という技術者は言っていた。

なればこそリーファは、捕虜となる危険を冒しても暗黒神ベクタとの遭遇を優先し、戦いを挑もうと思ったのだし、またアンダーワールド人に対しては絶対に剣を抜くまいと決めもした

のだ。

いまリーファを拘束し、激しい苦痛を与えている女性もリルピリンと同じアンダーワールド人――つまり人工フラクトライトだ。剣で斬れば、彼女の魂は完全に消滅してしまう。どんな理由で傷を負い、回復を欲しているのかを知りもせずに戦うわけにはいかない。

ああ、でも。

上半身の衣服をほとんど剝ぎ取られた羞恥さえも感じる余裕がないくらい、天命を吸い取られる痛みは圧倒的だ。

これは本当に、現実の肉体とは切り離された仮想の感覚なのだろうか。

＊＊＊

「……やめろ」

それが自分の口から発せられた言葉なのだと、リルピリンはすぐには気付かなかった。

しかしすぐに、今度は明らかに口が動き、喉が震動した。

「やめろ！」

針穴のように瞳孔が縮んだディーの眼が、きろり、とリルピリンを睨め付ける。腹の底から湧き上がる寒気に耐え、オークの長は更に言った。

「もう、あんだの天命は完全に回復しだではないか。これ以上そのイウムから吸い取る必要はないはずだ！」

「……なぁに、それ。命令してるのぉ……？」

調子外れの歌のような抑揚をつけて、ディーが囁いた。

そのあいだにも十本の触手は激しく蠢き、娘の肌を締め上げて血を貪り続ける。暗黒術師の傷は完全に塞がり、肌は油を塗ったような光沢を取り戻しているし、黒髪もかつて以上の豊かさで再生している。

それどころか、全身から余剰の天命が青い光の粒となって空中に放散されていくではないか。なのに、ディーは自身よりずっと小柄な娘を邪術で拘束し、虐げるのをやめようとしない。

「言ったでしょ、豚。この捕虜はもう私のよ。私がどれだけ天命を吸おうと、豚の目の前で辱めようと、あるいはこの場でくびり殺そうと、お前には関係ないでしょ？」

くく、くくく、と喉奥からこもった笑いが響く。

「ん……、でも、そうね。見つけたのはお前なんだし、少しくらいは譲歩すべきかしらね？……なら、いまそこで、裸になってみせなさい」

「な……何を言ってる……」

「私ね、初めて見た時から、お前がその大仰な鎧とマントを着てると吐き気がするのよねぇ。豚のくせに、まるで人みたいじゃなぁい？　そこで素っ裸になって、四つん這いでフガフガ鳴

いてみせたら、もしかしたらこの娘を返してあげるかもよ？」

ずきん。

突然、視界の右半分に赤い光がちらついた。同時に、右眼から鉄針を深々と差し込まれるような痛みが頭を貫く。

――豚のくせに。

――人みたい。

ディーの言葉に、リーファという少女の発した言葉が重なる。

――人間でしょ？

――それ以外に、何が必要なの？

この娘を、ディーに殺させてはいけない。いや、殺させたくない。そのためなら……そのためならば。

リルピリンの右手が、革マントの留め金を摑んだ。ぶちっ、と一気に引き千切る。

マントが地面に落ちると、リルピリンは続けて鎧の革帯に手をかけた。

不意に、かすかな声が聞こえた。

「……やめて」

はっと顔を上げると、自分をまっすぐ見ているリーファと眼が合った。

痛みに涙ぐむ翠玉の瞳が、ゆっくり左右に振られた。

「私は……だいじょうぶ、だから。やめて、そんな、こと」

声は最後まで続かなかった。ディーが突然顔を伸ばすと、娘の頬に軽く歯を立てたのだ。

「それ以上つまんないこと言ったら、可愛い顔を食い破るわよ。せっかく面白い見世物なのに。ほら、どうしたの豚。さっさと脱ぎなさいよ。それとも人族の裸に興奮しちゃったのかしら？」

きゃははは、とけたたましい笑いが続く。

リルピリンは、鎧の革帯を握る手を、ぶるぶると震わせた。

右眼の痛みはいっこうに収まる気配もない。しかし、胸中に渦巻く怒りと屈辱に比べれば、何ほどのこともなかった。

「お……おでは……おでは」

突然、両眼から溢れ、頬を伝って滴るものがあった。顔の左に垂れる雫は透明なのに、右のそれは深紅に染まっていた。

右手が、革帯から離れ——左腰の剣へと伸びた。

「おでは、人間だッ!!」

叫ぶと同時にこれまでで最大の激痛が右眼を襲い、眼球がばしゃりと内側から破裂した。

半減した視界の端に、リルピリンはしっかりとディーの姿を捉え続けていた。女術師の嗜虐的な笑い声が途切れ、口がぽかんと開いた。

ディーの無防備な両足めがけて、リルピリンは全力を込めた抜き打ちを放った。

しかし、片目が消滅した直後ゆえに、距離感が狂った。
剣先はディーの右足の脛を掠めるに留まり、リルピリンはそのまま姿勢を崩して、左肩から地面に倒れ込んだ。
見上げた先で、凶悪な形相へと変じたディー・アイ・エルが、唇を歪めて吐き捨てた。
「臭い豚がァ……よくもこの私に傷をッ……！」
娘の体を後方に投げ捨て、両手を高く掲げる。十本の触手がギィンと硬い音を放ち、一瞬で黒く輝く十本の刃へと変容する。
「切り刻んで、藁と混ぜて、イノシシの餌にしてくれるッ!!」
左右に大きく広げられた刃が、振り下ろされるのをオークの長はただ待った。
とっ。
とん。
二つのささやかな音が、ほぼ同時に響いた。ディーの動きがぴたりと止まった。
術師の両腕が肩のすぐ下で体から分離し、鈍い音を立てて地面に転がるさまを、リルピリンは呆然と眺めた。
驚愕の表情を浮かべたのは、ディー当人も同様だった。左右の肩から滝の如く鮮血を振り撒きながら、長身の術師はゆっくりと体の向きを変えた。
白く輝くリーファの姿が、リルピリンの視界に入った。

筋肉らしい筋肉など見て取れない華奢な体つきでは、とても扱えそうにない長大な刀を前に振り下ろしている。両手首は飾り紐に拘束されたままなのに、この娘がディーの両腕を瞬時に切断したのは明らかだ。

ディーが、乾いた声で言った。

「人族が……豚を助けて、人を斬る……？」

信じられぬ、というふうに首を左右に振り続ける暗黒術師をしかと見据えて、リーファが答えた。

「違うわ。人を助けるために、悪を斬るのよ」

滑らかな動作で、長刀が上段に構えられた。

ひゅかっ。

とても届くとは思えない遠間から、娘が斬撃を放った。

なんと——美しい。

両手の指から両足の爪先に至るまで、無駄な力がまったく入っていないのに、空恐ろしいほどの速さ。研ぎ澄まされた極限の技。

再度の、しかし今度は感動の涙にぼやけたリルピリンの視界で、最強の暗黒術師であり十候最大の実力者、ディー・アイ・エルの肢体が脳天から垂直に、音もなく裂けた。

4

最後の力を振り絞りながら片翼のみで軟着陸し、細く一声啼いて息絶えた黒い飛竜を、ガブリエル・ミラーは無感動に見下ろした。

視線を外したときにはもう、記憶と思考から竜の存在は完璧に排除されていた。表情を変えずに、ぐるりと周囲を見渡す。

墜落したのは、円柱状の奇岩が無数に立ち並ぶエリアの、ほぼ中央にそびえる一つの岩の頂上だった。高さが百ヤード（約九十メートル）、直径も三十ヤード（約二十七メートル）はありそうだ。

飛び降りるのは、少々無謀かもしれない。エレメントを生成、操作するこの世界の魔術にも、まだ習熟しているとは言いがたい。足許に、意識を失ったまま横たわっている光の巫女アリスを置いていくわけにも当然いかない。

丈夫なロープとアンカー、カラビナがあれば、現実世界でもこの程度の壁なら容易く懸垂降下してのけるガブリエルだが、いまは無理に岩山から降りる必要はあるまい。なぜなら、ガブリエルを何らかの手段で撃墜したであろう敵が、三匹の飛竜を伴って北から接近中だからだ。敵を処理し、しかるのちに新しい竜のＡＩを支配して、南下を再開すればいい。

視線を真上に動かす。赤い空に張り付く仮想の太陽は、すでにかなりの高さに達している。

クリッターが時間加速を再開するまで、もうあまり時間は残されていないだろう。問題は、戦場に投入したアメリカ人ベータテスターたちが、再加速によってアンダーワールドから弾き出されるまでに人界軍を殲滅できるかどうかだが、テスターの数は五万に及ぶはずだ。たかが千人足らずしか残っていないはずの人界軍に、まともな抵抗はできまい。

不確定要素があるとすれば、やはり圧倒的多数だった暗黒界軍を退けた整合騎士とやらだが、その一人であるアリスはこうして手の内にあるし、恐らく接近中の追跡者もまた騎士だろう。北方の戦場には、残っていたとしても一人か二人。

問題はおおよそクリアされていると判断し、ガブリエルは最後に、横たわる整合騎士アリスを改めて眺めた。

つくづく――美しい。

体の芯でうごめく興奮を抑えられないほどに。

眼を醒ました時のために全ての武装を解除して、しっかり拘束しておくべきかどうかガブリエルは少し迷った。合理的判断としてはそうすべきなのだろうが、しかし敵が迫っている中で、この美しい少女を慌しく作業的に扱うのは躊躇われる。

やはり、時間加速が再開してから、たっぷり時間をかけたい。鎧のバックル一つ外すにも、優美に、厳粛に、象徴的に。

「……もう暫くそのまま眠っているといい、アリス……アリシア」

優しく言葉をかけ、ガブリエルは敵を迎え撃つべく、テーブル状になっている岩山の中央へと歩を進めた。

スーパーアカウント04《暗黒神ベクタ》を使用するガブリエル・ミラーにも、それを発見したクリッターにも知る由もないことだったが、最強クラスの整合騎士であるアリスが、たかが飛竜に蹴られただけで気絶したまま数時間も覚醒しないのは、ベクタに付与された特殊能力ゆえのことだった。

アンダーワールドに設定された四種のスーパーアカウントは、それぞれ世界と住民に対する、神の御業に等しい直接操作を目的として存在する。

フィールド改変を行うステイシア。

動的ユニットを破壊するソルス。

オブジェクト耐久度を回復するテラリア。

そしてベクタは、住民つまり人工フラクトライトを操作の対象とする。

具体的には、住民たちの記憶――つまりフラクトライト中の動的データを改変し、離れた地点に再配置したり、新たな家族を作らせたりするのだ。

行為としては住民を攫う形になるため、他の三神とは異なり、信仰の対象とはなりにくい。

ゆえに最高優先度の装備や最大の天命数値に加えて、《術式の対象にならない》という強力な保護が施されている。アンダーワールドにおとぎ話として伝わる《ベクタの迷子》は、過去に行われた住民操作が元になっているのである。

そして暗黒神ベクタの能力は、ガブリエル・ミラーの特異なイマジネーションすなわち心意と合わさることで、ラースの技術者たちでさえ予想できない相乗効果を生み出した。

術式も使わずに、人の意思を吸い取る。

アリスは、一時的にフラクトライトの活力を奪われ、強制的な昏睡状態に陥ってしまったのだ。

かつて暗黒将軍シャスターの必殺の心意を喰らい尽くしたのもまた、ベクタとガブリエルの力の融合あってのことだった。

そしていま、シャスターの長年の好敵手であった整合騎士長ベルクーリも、同じ結末へと導かれようとしていた。

＊＊＊

ベルクーリは、敵皇帝の飛竜が、すぐには脱出できそうもない高い岩山の上に墜落したのを視認した。

絶技を使用したことによる強い疲労感を、気力で振り払う。

「よぉし……もうひとっ飛び、頼むぞ星咬、雨縁、滝剋!!」

ベルクーリが叫ぶやいなや、三頭は力強く翼を打ち鳴らして加速した。敵が静止していれば、十キロルの距離でも飛竜にとってはほんのひとっ飛びだ。

戦いの前に残されたわずかな時間を、ベルクーリは半ば瞑想めいた思考に費やした。脳裏に、今朝方見た夢が鮮明に蘇る。

――死を予感したことはある？

夢の中でそう言った最高司祭アドミニストレータは、何百年も付き合ったベルクーリにとっても、最後まで謎めいた存在だった。

凍結処理から解放され、アリスに最高司祭の死を知らされたときも、驚愕というほどのものは感じなかった。長いあいだお疲れさん、というような感慨があった程度だ。むしろ、元老長チュデルキンが死んだことのほうに驚いたものだ。

だから、アドミニストレータの最後の戦いと散り様について、ことさらアリスに訊ねようとはしなかった。突然自分の両肩にのしかかってきた人界防衛の任に忙殺されたせいもあるが、あるいは、知りたくなかったのかもしれないという気もする。あの銀髪銀瞳の半神人の欲望と執着、業の深さを。

ベルクーリにとっては、アドミニストレータはいつも物憂げで、飽きっぽくて、気まぐれな

お姫様だった。服従こそすれ、チュデルキンのように本気で崇拝したわけではない。

しかし――。

彼女に仕えること自体は、決して嫌ではなかった。

「そうさ……それだけは、信じてくれよな」

呟き、最古の騎士はぱちりと双眸を見開いた。

岩山のてっぺんに横たわるアリスの黄金の鎧と、その手前に影のようにひっそりと立つ皇帝ベクタの姿がはっきりと見て取れた。

「よし……お前らは、上空で待機！　もし俺がやられたら、北に戻って部隊と合流しろ！」

竜たちに低く指示し、ベルクーリは星咬の背中から、ふわりと体を躍らせた。

＊＊＊

流星の如き白光の軌跡を残して飛び去ったシノンの後を追うように、人界軍七百人は必死の南進を続けた。

後方から地響きを立てて追ってくる赤い軍団は、多少引き離しつつある。しかし衛士たちも馬たちも、このまま走り続けることはできない。

アスナは、キリトとティーゼ、ロニエの乗る馬車の天蓋に立ち、祈るように南を凝視し続け

た。

二十分ほど前進すると、シノンが言い残したとおり、地平線に巨大な神殿めいた遺跡の影が浮かび上がった。

人や亜人を含めて、大きな生物の気配はない。風化した石ばかりが静かに眠っている。

まっすぐ延びる道を挟んで、二棟の平べったい神殿が横たわっている。高さは二十メートルほど、幅は一棟が三百メートル以上もあるだろうか。敵軍の包囲を防ぐ障壁としては充分な規模だ。

二つの神殿のあいだを抜けて、道はそのまま南へ延びている。参道めいた印象を受けるのは、道の両側に奇怪な巨像が幾つも並んでいるからだ。

東洋風の仏像でも、西洋風の神像でもない。強いて言えばどこか南米の遺跡を彷彿とさせる、ずんぐりと四角いシルエット。顔には真ん丸い眼と巨大な口が彫り込まれ、胸の手前で短い手を合わせている。

あれは、アンダーワールドの設計時に、ラースのエンジニアがデザインしたものなのだろうか。それとも、ザ・シード・プログラムが自動生成したのか。

あるいは――かつてこの地に暮らしたダークテリトリーの種族が、岩山から掘り出したものか？　たとえば、死者に捧げる巨大な墓標として……？

不吉な想念を、アスナは短い吐息で押しやった。

部隊の先頭を走る飛竜の背中の騎士レンリに、大声で伝える。
「あの参道の中ほどで、敵を迎え撃ちましょう！」
すぐに、了解です！　という声が返った。
数分後、部隊はその勢いを減じることなく、神殿に挟まれた道に突入した。左右から、四角い巨大神像たちが無言で見下ろしてくる。馬のひづめと衛士のブーツが、土から石畳へと変わった路面に硬い音を響かせる。
ひんやりと冷たい空気を切り裂いて、レンリの凛々しい声が命じた。
「よし、前衛部隊は左右に分かれて停止！　馬車隊と後衛部隊を通せ！」
さっと割れた前衛のあいだを八台の馬車が進み、修道士を主とした後衛もそれに続くと、参道のいちばん奥で停止する。そこに設けられた巨大な門から、乾いた風がひゅうっと吹き抜けてきてアスナの髪を揺らす。
静寂を感じたのは一瞬だった。アメリカ人プレイヤーの大部隊が放つどろどろという地響きが参道にまで届き、左右の神像がぱらぱらと細かい砂を落とす。
アスナは馬車から飛び降りると、幌の内側から顔を覗かせる少女たちと、その傍らに立つ女性剣士に声を掛けた。
「これが、最後の戦いよ。キリトくんのこと、お願いするわね」
「はい！　お任せください、アスナ様！」

「必ずお守りいたします！」

「――命に代えても」

固く握った拳を胸に当てるロニエとティーゼ、ソルティリーナに同じ仕草を返しながら、アスナは短く微笑みかけた。

「大丈夫、絶対にここまで敵は通さないから」

それは、半ば自分に向けた言葉だった。開いた右手を軽く振り、アスナは身を翻した。

前衛部隊の先頭では、レンリがてきぱきと衛士たちを配置していた。

参道の幅はおよそ二十メートル。守るには少し広すぎるが、この人数でも完全ブロックした上で部隊のローテーションを行うのは不可能ではあるまい。

要は、後方に控える修道士たちの支援魔法が続くあいだに、犠牲者を極力抑えつつ一万数千の敵を削り切ることが可能かどうかだ。幸いなのは、赤い歩兵たちに、魔術職の姿がまるで見えないことだ。アンダーワールドの神聖術の複雑なコマンド体系を、短時間でプレイヤーたちに習得させることは不可能と判断してのことだろうが、この状況ではありがたい。

いざとなれば――。

わたし一人で、敵の全軍を斬り伏せる。

アスナは大きく息を吸い、決意とともに体の底に溜めた。

ステイシアの膨大な天命と最高優先度の装備があれば、数値的なダメージの累積によって倒

されることはないだろう。問題は、傷を受けた時の恐るべき痛みに最後まで耐え切れるかどうか。心が痛みに負けてしまえば体も深く傷つき、命はあれども剣を振れないという無様を晒すことになる。

アスナは瞼を閉じ、傷ついたキリトのことを思った。彼が受けた痛みと、背負った悲しみの大きさを思った。

再び歩き出した時、心にはもう一片の恐れもなかった。

この戦争において最後の大規模戦闘となるはずの激突は、高く上り切った太陽の下で開始された。

プロモーション・サイトが約束していたリアルな血と悲鳴を求めて、二十人ほどの重武装したアメリカ人プレイヤーたちが、真っ先に遺跡の参道へと突入していった。

彼らを迎え撃ったのは、しかし、レーティング無視の娯楽を提供するための哀れなNPCではなかった。世界を、そして敬愛する黄金の整合騎士を救わんとする決意を秘めた、真の勇士たちだった。握る剣はとうに傷だらけだが確固たる意志力に満ちて輝き、敵の武器をがっしりと受け止め、鎧を打ち砕いた。

一方的に殲滅されていく赤い鎧のプレイヤーたちを、高みから見下ろすひとつの影があった。

極限まで金属装甲を廃した、ライダースーツのようにぴったりとした黒革の上下。艶やかなレザーの到るところに、艶消し銀の鋲が打たれている。

武器は、左腰にぶら下がる、まるで中華包丁の如き大型ダガーひとつのみ。顔は見えない。レインコートに似た、これも黒革のポンチョを羽織り、フードを目深に下ろしているからだ。ちらりと覗く唇は、極限まで歪んだ笑みを湛えていた。

ヴァサゴ・カザルス。

アンダーワールドに再ログインした彼は、直後に浴びせられたシノンの広範囲レーザー攻撃をなんなく回避し、アメリカ人たちに紛れ込んで人界軍囮部隊を追った。しかし初期の突撃には加わらず、西側の神殿の壁をするすると登ると、戦線を見下ろせる位置にある神像の頭上に立ち、特等席からの見物を決め込んだのだった。

「くくっ、相変わらずキレると容赦ないな、あの女。殺す殺す」

愉しくてたまらないというふうに、肩を揺らしながら呟く。

遥か眼下では、真珠色の鎧をまとい栗色の髪をなびかせる少女剣士――《閃光》アスナが、ヴァサゴの遠い記憶にある姿そのままに、右手のレイピアを目まぐるしく閃かせている。

あの時も、ヴァサゴは同じように、ハイディングしてアスナの戦闘を眺めたものだ。世界が終わる前にかならず仕留めてやる、と内心で固く誓いながら。

彼女の隣で、より凄まじい戦いぶりを見せていた黒衣の剣士ともども。

＊＊＊

騎竜の背中から飛び降りた時、ベルクーリの足下にはまだ二百メル近い空間が残っていた。ただ落ちるだけでは、いかに彼でも岩山に激突する衝撃には耐えられない。

しかし騎士長は、まるで空中に見えない階段でも存在するかのように、螺旋を描きながら空を駆け下りた。

実際には、一歩ごと足の真裏に風素を生成、炸裂させ、その反動で落下速度を殺したのだ。足をも素因の制御端末とする秘術を、彼は何十年も昔に元老長チュデルキンから盗んでいた。遥か眼下の、人造の塔にも似た岩山の上に立つ皇帝ベクタの視界の外へ、外へと跳躍しながら、最古の騎士は愛剣の柄に手を添えた。

――初撃で決める。

整合騎士長ベルクーリが必殺の心意を練るのは、百五十年前に先々代の暗黒将軍を斬って以来のことだった。それほどの長きにわたって、彼に純粋な殺意を呼び起こさせる敵は出現しなかったのだ。

セントラル・カセドラルで単身挑みかかってきたユージオという名の若者との戦闘に於いて、ベルクーリは本気になりこそすれ殺気を漲らせたりはしなかった。いや、それを言うならば、

長年の好敵手である暗黒将軍たちに対してさえ、怒りや憎しみのような負の心意を抱いたことはない。

つまりベルクーリは、その長い生涯で初めて、愛剣の刃に真なる怒りを込めたことになる。

彼は怒っていた。心底激怒していた。アリスを拉致されたことのみに対してではない。

リアルワールドという外世界からやってきたよそ者が、和睦成立の可能性があった暗黒界人たちを戦場に駆り立て、無為に何万もの命を落とさしめた。それは、二百年以上もこの世界を見守り続けてきたベルクーリには、どうしても赦せないことだった。

――皇帝ベクタ、てめぇにどんな事情があるかは知らねえ。

だが、リアルワールド人がみんなてめぇのような悪鬼じゃねえことは、あのアスナという娘を見ればわかる。

つまり、てめぇという人間の本質が、どうしようもなく悪だということだ。

ならば、その報いを。

暗黒将軍シャスターの、整合騎士エルドリエの、そして戦場に散った多くの人間たちの、命の重さを。

この一撃で……とくと知れ!!

「ぜ……あぁッ!!」

高度十メルで最後の一歩を踏み切り、騎士長ベルクーリは、あらんかぎりの意思を込めた斬

撃を皇帝ベクタの無防備な脳天めがけて振り下ろした。
大気が灼け、白く輝いた。刃が生み出す光のあまりの激しさに、世界が色を失った。

それは間違いなく、かつてアンダーワールドで発生した全ての剣技の中で、最大級の威力を内包した一撃だった。メイン・ビジュアライザー内のニーモニック・データ書き換え優先度はシステム制御命令のそれをも上回り、つまりあらゆる数値的ステータスを無効化するに足る、まさしく必殺の一撃だったのだ。
スーパーアカウント04・暗黒神ベクタに設定された、無限に等しい天命数値すらも削り切るほどに。
命中しさえすれば。

天から降り注ぐ致死の流星に気付いた瞬間も、ベクタの表情はまるで動かなかった。
せいぜい見上げることしかできないくらいの、超速の剣技だった。いかなる反応も、対処も不可能なはずの、その刹那。
黒水晶の鎧に包まれたベクタの体が、すうっと横滑りした。
唯一回避可能な方向へ、回避に必要なだけのぎりぎりの距離を。
ベルクーリの剣に触れたのは、宙にたなびいた赤いマントだけだった。縁取りの毛皮も、分

厚い生地も、微細な塵へと分解し――。

ズガァァンッ!!　という雷鳴じみた轟音とともに、硬い岩山の頂上に深い傷痕が刻まれた。巨大な岩山全体が震動し、側面から幾つもの塊が剝がれ落ちていった。

――あれを、躱すかよ。

瞠目しながらも、ベルクーリの体はほんの一瞬たりとも止まらなかった。戦闘のさなかに、予想外の展開で思考が滞るような段階はとうに脱している。

最後にもう一度だけ空気を蹴り、皇帝の側面へと回り込みながら着地。即座に横薙ぎの一撃。全身全霊を込めた大技を空振っておきながら、次の攻撃まで半秒とかかっていない。

その追い打ちすらも、ベクタは避けた。

まるで風に吹かれた煙のように、予備動作もなくふわりと地面を滑る。切っ先は、鎧の表面を掠めて空しく火花を散らすのみ。

しかし。

今度こそ、ベルクーリは勝利を確信した。

上空から放った渾身の初撃は、外れはしたが消えたわけではなかった。愛剣の武装完全支配術、《時穿剣・空斬》――すなわち《未来を斬る》という力を彼は発動させていたのだ。カセドラルでの戦闘でユージオを大いに苦しめた、斬撃の軌道に威力のみが留まり、そこに触れた者を不可視の刃で斬り倒すという絶技。

皇帝ベクタは、知覚不能の斬撃が滞留する空間に、背中から吸い込まれていく。
最初に、豪奢な白金色の髪が、ぱっと散り広がった。
額に嵌まる宝冠が、かすかな金属音とともに砕け散った。
ベクタの両腕が、許しを請うかのように高く高く掲げられた。
黒を纏う長身が縦に裂けるさまを、ベルクーリは強く予感した。
ばん。
乾いた破裂音。
その源は、後ろを見もせずに打ち合わされた、皇帝の両の掌だった。
――素手で《空斬》を挟み止めた、だと。しかも背を向けたまま。
有り得ない。剣を両手で包み込むように受ける奥技は、暗黒界の拳闘士たちには伝えられているが、あれは彼らが鍛え上げた鉄より硬い拳あってこその技だ。それ以前に、空間に留まっていた《空斬》の威力は、たとえ拳闘士の長といえども素手で止められるようなものではなかったはずだ。
その思考は、ほんの刹那のものではあったが、しかしベルクーリの動きはここでついに止まった。
ゆえに、続いて発生した現象を、彼はただ黙視することしかできなかった。
蜃気楼のように空中で揺らめく不可視の斬撃が、皇帝の両手に吸い込まれていく。

同時に、皇帝の青い双眸が、どす黒い闇に染まり始める。
その闇の底には、ちかちかと瞬く無数の――あれは、星……？
違う。
あれらは、魂だ。この男が吸い取ってきた、人々の魂が囚われているのだ。恐らくは暗黒将軍シャスターや、彼の副官の女騎士の魂も、あそこに……。
「……貴様は、人の心意を喰うのか」
そう呟いたベルクーリに、《空斬》の威力を吸収し尽くした両手を無造作に降ろしながら、ベクタは答えた。
「シンイ？　……なるほど、心と意思か」
ひどく寒々しい、生きた人間の気配が完全に抜け落ちた声だった。それを発した薄い唇が、見かけは微笑みに似た形へと動いた。
「お前の心は、オールドヴィンテージのワインのようだ。とろりと濃密で……どっしり重く、長く残る後味。私の趣味ではないが……しかし、メインの露払いに味わうのもよかろう」
青白い右手が動き、腰の長剣の柄を握る。
ぬらりと鞘から抜き出された細身の刀身は、青紫色の燐光に包まれていた。それを気負いなくぶら下げながら、皇帝ベクタはもう一度微笑んだ。
「さあ、もっと飲ませてくれ」

＊＊＊

肉厚の大剣が、アスナの左腕を掠めた。
焼けた金串を押し当てられるような感覚。
――痛いもんか!!
強く念じる。途端、肌に刻まれた傷が、すうっと消えていく。
その時にはもう、右腕が埋るように閃いて、眼前の兵士の右肩から左脇腹へと四連の突き技を叩き込んでいる。男の顔が歪み、派手な罵り声を上げて地面に沈む。
いまのが何人目の敵なのか、すでに数えられなくなっている。
それどころか、古代遺跡での戦端が開かれてもう何分、何十分経ったのかすら定かでない。ひとつだけ確かなのは、参道の入り口から雪崩れ込んでくる赤い歩兵たちは、まだまだ無限に等しいほどの数が残っている、ということだけだ。
――これくらいの持久戦、大したことないわ。旧アインクラッドじゃ、ボス戦が三、四時間続くのも珍しくなかったんだから。
内心でそう嘯いたアスナは、消滅し始めた仲間の骸を踏み越えて飛びかかってきた新たな敵の斧をレイピアで払いのけた。

体勢を崩す敵の心臓に的確な一撃を叩き込みながら、ちらりと左右に視線を走らせる。

参道中央で奮戦するアスナの右側では、整合騎士レンリが両手のブーメランを交互に投射し、死体の山を築いている。その威力と照準の正確さは空恐ろしいほどで、こちらはもうしばらく任せていても大丈夫そうだ。

しかし問題は左サイド。ソルティリーナを中心に隊長格の衛士たちを配置しているが、徐々に戦線が押し込まれているのが解る。

「左翼、交代の間隔を速めて！　治癒術も左を厚くしてください！」

「アスナ様、私はまだまだ行けます！」

最前線で叫び返したソルティリーナが、両手剣用範囲ソードスキル《サイクロン》を発動させた。ライトグリーンの輝きを帯びた長剣が超高速で一回転し、敵兵を三人まとめて吹き飛ばすが、直後リーナもがくりと膝を突いてしまう。昨夜、思い出話大会の合間に雑談で聞いたところでは、貴族出身の剣士たちは一対一の儀礼的な決闘に特化していて、先の見えない長丁場の乱戦には不馴れなのだそうだ。

事実、リーナの剣は流麗にして勇壮だが、この世界に来てまだたった一日のアスナの眼にも正々堂々としすぎているように見える。フェイントや崩し技をほとんど使わずに大技を発動させるので、技前技後の硬直時間に敵兵が闇雲に振り回す武器で小傷を負ってしまうのだ。すでに鎧は傷だらけになり、紫色の衛士服も各所に血が滲んでいる。

「下がって治療して、リーナさん！　仲間を信じて！」

アスナの指示に、リーナは唇を噛んで頷くと、「すぐに戻ります！」という声を残して後退した。戦列に空いた穴を、すぐに代わりの衛士長が埋める。しかし彼の顔にも、疲労が色濃く浮かんでいる。

左翼の疲弊に加えて、アスナには気がかりなことがもう一つあった。

いま戦っている赤い鎧の歩兵たちは、決して単純なアルゴリズムで動く人型モンスターではない。ＭＭＯＲＰＧ発祥国たるアメリカの、百戦錬磨のプレイヤーたちなのである。対人戦に慣れ親しんだ彼らが、そろそろ単純な突撃だけでは埒が明かないと、戦術的な動きを取り始めてもおかしくない。

自分が彼らの立場ならどうするだろう。レイピアを閃かせながら、アスナは考える。

定石としては、後方からの遠隔攻撃だ。だが赤の軍団に魔術師クラスのプレイヤーは見当たらないし、もしいてもアンダーワールドの複雑な術式コマンドをぶっつけ本番で使いこなすのは無理だろう。

となれば弓だが、人界軍にとっては幸いなことに弓兵のアカウントも用意できなかったようだ。あとは手持ちの武器を投げるくらいだが、それは心理的抵抗が大きいだろう。投げた者はもう戦闘に参加できなくなってしまう。

どうやら敵にはこの膠着状況を打開するすべなし、と判断してよさそうか。

ならば、当初の予定どおり、一万数千の敵を削り切るのみ。
アスナが決意を新たにしたのと、ほとんど同時に。
参道の入り口が、さっと黒く翳った。
差し込む朝日が遮られたのだ。横一列に並ぶ巨大な盾と、旗竿のように林立する長大なランスに。
――重槍兵！
「や……槍の突撃が来ます!!　穂先をしっかり見て、初撃を回避してください!!　懐に入れば倒せる敵です!!」
アスナが左右の味方に向けて叫ぶと同時に、ガシャッ！　と金属音が轟き、巨大なランスがいっせいに構えられた。
「「「Assaaaaaaaaaalt!!」」」
横一列に二十人も並んだ重槍兵たちが、野太い雄叫びとともに突進を開始する。
赤い津波にも似た圧力に、衛士たちが浮き足立つ気配がした。お願いみんな、落ち着いて！
と念じながら、アスナは自分めがけて突進してくる敵兵を凝視した。凶悪に黒光りするランスが、一撃必殺の威力を秘めて迫る。
ぎりぎりまで引きつけ――パリィ！
黄色い火花を散らしながら、レイピアが槍の側面を滑っていく。鋭い切っ先はアスナの顔の

すぐ右を通過し、後ろに流れる。

「……はあっ!!」

気合とともに、見上げるように大柄な敵の喉元、鎧の隙間にレイピアを突き入れる。生々しい手応え。ヘルメットの下から鮮血が噴き出す。

響いた悲鳴は、しかし、敵兵のものだけではなかった。

左翼の衛士数名が、ランスを回避しきれずに体を貫かれたのだ。

「ッ……!!」

歯を食い縛り、アスナは持ち場を離れて左へ走った。息絶えた衛士からランスを引き抜こうとしている敵兵の胸を、単発突き《リニアー》で鎧ごと貫く。血に濡れる刃を構え直し、次の敵の両腕を、二連突き《パラレル・スティング》で斬り落とす。

三人目の敵兵が罵声とともに突き出すランスを、垂直ジャンプで回避。槍の上に着地するやそのまま駆け上り、敵の肩に足を掛けると、左手でヘルメットを持ち上げ、露出した首筋にレイピアを深々と埋め込む。

悲鳴も上げられずに沈む敵兵の背中に乗ったまま、アスナは叫んだ。

「負傷者を後方へ!! 最優先で治癒して!!」

改めて周囲を確認すると、二十人の重槍兵は騎士レンリや衛士たちの奮闘もあってどうにか退けられたが、こちらも六人の衛士がランスの直撃を受けたようだった。うち三人は、恐らく

もう助からないだろう。

――この戦法を繰り返されたら、数で圧倒的に劣る人界軍はいずれ戦列を保てなくなる。

その戦慄を、再びの地響きが現実へと変えた。次の重槍兵二十人が、参道の入り口から突進してくる。

アスナは、押し寄せるランスの群れから視線を引き剝がし、本来の持ち場である戦列の中央を見た。

そこでは、まだ幼さの残る顔をした少年衛士が、がくがくと両膝を震わせながら剣を構えていた。

「あっ……！」

鋭く叫び、アスナは右に走った。

左から迫るランスと、立ち尽くす少年衛士のあいだに飛び込む。もうレイピアでのパリィは間に合わない。ぎらつくランスの穂先を、左手で摑み止めようとする。

もしここが通常のＶＲＭＭＯワールドなら、圧倒的な反応速度と筋力ステータスを持つアスナのブロックは成功したはずだ。しかしアンダーワールドには、ＳＡＯやＡＬＯでは無視されるパラメータが無数に存在する。

滑らかな鋼のランスは、返り血で濡れた左手の中でずるりと滑り――。

鈍い衝撃が、全身を揺らした。声も出せないまま、アスナは自分の脇腹を深々と刺し貫いた

巨大な金属を見下ろした。

＊＊＊

最小限の動きによる、最大限に効率的な剣。

騎士長ベルクーリは、これまで見たどんな流派とも異質な皇帝ベクタの剣技を、そのように感じた。

まず、ほとんど足が動かない。こちらの攻撃を避ける時は、ごくわずかに地面を滑るだけ。また、攻撃に際しても予備動作がないに等しい。右手に緩く握られた剣が、突然ぬるりと最短距離を飛んでくる。

つまり、動きの予測が不可能に近い。皇帝の決して素早くも力強くもない攻撃が、百戦錬磨のベルクーリに、実に五回も反撃を許さなかったのだ。

しかし、五回で充分だった。

膨大な戦闘経験から、ベクタの技の呼吸さえもおよそ摑んだベルクーリは、六回目で初の反撃に転じた。

「シッ！」

こちらも最低限の気合を放ちつつ、ベクタの上段斬りの先を取って、同じく上段斬りを繰り

出す。

激しい金属音を、青白い火花が彩った。

二本の剣が空中で交差する。ここからは力勝負だ。さしたる抵抗もなく、敵の剣が沈んでいく。圧力に耐えかねたかのように、長身のベクタが膝を曲げる。

――勝機!!

ベルクーリは、練り上げた心意を愛剣に注ぎ込んだ。使い込まれた鋼の刀身が、銀色の燐光を帯びる。ベクタの黒い長剣をじわじわと押し下げた時穿剣の切っ先が、敵の肩に触れ、鎧の表面に食い込み――。

瞬間、ベクタの剣が怪しく輝いた。

青紫色の燐光が生き物のように蠢き、時穿剣に絡みつく。同時に、力強く漲っていた白銀の輝きが、萎れるように消えていく。

――なんだ、これは。

いや……。

そもそも、オレは、何を……しようと……。

ビシッ、という鋭い音とともに左肩に凍るような冷たさを感じ、ベルクーリはハッと両眼を見開いた。大きく飛び退き、大きく呼吸して、一瞬遠ざかりかけた意識を立て直す。

――いまのは、いったい。

このオレが、戦いの真っ最中に惚けた……だと!?

愕然と自問してから、そんな生易しいものではなかったとかぶりを振る。

まるで、自分がなぜこの場所にいるのか、自分が誰なのかすらも解らなくなったかのような、強制的な空白が意識を侵食したのだ。

「貴様……剣から直接、オレの心意を吸いやがったのか」

低い唸り声でベルクーリは問うた。

答えは、ごく淡い無音の微笑だった。

舌打ちして、左肩を一瞥する。かすり傷と言うにはやや深い。

「フン……楽しませてくれるじゃないか、皇帝陛下。剣を撃ち合えねぇとは、面倒な戦いだぜまったく」

にやりと笑い返しながらベルクーリが嘯くと、ベクタは逆に笑みを消し、呟いた。

「……ふむ。そういえば、試したことはなかったな」

直後、右手の長剣を、無造作に突き出してくる。しかし完全に間合いの外だ。刃が届くはずはない――。

空中で止まった切っ先から、青黒い粘液めいた光がそのまま伸びた。

……まさか、遠間からも。

という思考が閃いたのと、光がベルクーリの胸に触れたのは同時だった。

蠟燭の炎が立ち消えるように、意識がふうっと遠ざかった。
騎士長は、するすると近づいてきた長剣が、左腕の下に忍び込むのを棒立ちのままただ眺めた。
剣は、無造作に跳ね上げられ。
重く湿った音を響かせて、ベルクーリの太い腕が付け根から切り落とされた。

＊＊＊

「く……う……うぅッ!!」
アスナは、喉から溢れ出しかけた悲鳴を、どうにか低い呻き声に押し留めた。痛い、などというものではない。高温のバーナーで腹を焼かれ続けているような、許容量を超える感覚の爆発。
――痛いもんか。
痛いもんか、こんな傷!!
黒光りするランスは、左の脇腹を深々と刺し貫いている。きっと背中からは一メートル以上も飛び出しているだろう。
肩越しにちらりと確認すると、真後ろにいた少年衛士は、切っ先に頬を掠められるだけで済

んだようだ。アスナは、蒼白な顔で自分を見上げる少年に、全精神力を振り絞って微笑みかけた。

――この子の命の重さに比べれば……わたしの、仮想の傷なんて!!

「うぅ……あッ!!」

体を貫くランスを握ったままの左手に、ありったけの力を込める。

バギン！　と耳障りな音を立てて、直径五センチを超える金属が掌の中で砕け散った。手を背中に回し、突き出た槍を摑んで引っ張る。

目の前に火花が散り、電撃めいた痛覚が頭の天辺から爪先まで駆け抜けた。しかしアスナは手を止めず、力任せにランスを引き抜くと、それを地面に放り捨てた。

腹の巨大な傷と、口の両方から凄まじい量の鮮血が迸ったが、体をふらつかせることもなく口許を左手で拭い、アスナは眼前で棒立ちになる敵兵を見上げた。

折れたランスを握ったままの大男は、ヘルメットの奥の眼を、途惑うように何度も瞬かせた。

「Oh, gosh」

同じ言葉がもう一度繰り返され、早口の英語が続く。

「……なんだよ……ぜんぜん楽しくないぜ、こんなゲーム。俺はもうログオフする」

それを聞いたアスナは、右手のレイピアで大男の心臓を正確に貫いた。巨体が地面に崩れ落ち、消滅エフェクトに包まれた。

傷の痛みでは流れなかった涙が、なぜかいまになって両眼に滲んだ。

この戦場を覆う苦しみと憎しみは、本来存在する必要のなかったものだ。

アメリカ人プレイヤーたちと、人界守備軍の衛士たちが殺し合う理由は何もない。出会いの状況さえ異なれば、きっと友達にだってなれたはずの人々なのだ。アスナ自身がそうであったように。

仮想世界は……ＶＲＭＭＯは、こんなことのために生まれてきたんじゃない。

「たっ……たす……け……っ」

日本語の悲鳴が、アスナの想念を停止させた。視線を向けると、地面に倒れた衛士目掛けて、巨大なランスが突き下ろされようとしているところだった。

「う……あああ!!」

激情を雄叫びに変え、アスナは地を蹴った。

右手のレイピアを思い切り前へと突き出す。剣尖から溢れた白光が、全身を覆う。

足が地面から離れ、眩く光る彗星となってアスナは飛翔した。細剣スキル最上位の突進技、《フラッシング・ペネトレイター》。

衛士を殺そうとしていた槍兵が、高々と跳ね上げられた。その向こうにいた敵も、同様の運命を辿った。さらにもう一人。

四人目の体を神像の足許に縫い止めて、ソードスキルが終了した。肩で息をしながら振り向

く。

重槍突撃の第二波でも、人界軍に五人以上の死傷者が出たようだ。しかし、参道入り口ではすでに、第三波の二十人が突撃の用意をしている。

消滅し始めた敵の骸からレイピアを引き抜き、アスナは叫んだ。

「全員、持ち場を死守!! レンリさん、中央に移動してください!!」

アスナの脇腹から流れ続ける鮮血に気付き、顔を強張らせる若い騎士に、安心させるように短く微笑みかけてからアスナは続けた。

「――わたしは、敵陣に一人で斬り込みます。討ち漏らした敵だけ、お願いします」

「あ……アスナ様!?」

喘ぐような声を出すレンリや他の衛士たちに、固く握った左拳を掲げ。

アスナは、一直線に走り出した。

＊＊＊

重心が狂い、よろめいたベルクーリは、地面に転がった己の左腕を踏みつけた。

痛みよりも先に、足から伝わってくる生々しい感覚によって意識が呼び戻された。

「ぐっ……！」

再び大きく跳んで距離を取る。

左肩の傷口から零れた血が、白っぽい岩に深紅の弧を描いた。

――なんてことだ。

剣を向けられただけで、意識が停止させられる……だと。

時穿剣を握ったままの右手の指を二本立て、左肩の傷口にかざしながら、ベルクーリは思考を回転させた。そのあいだにも、無詠唱で発動した治癒術が、青い輝きで出血を止めていく。

しかし、斬り落とされた左腕を再生させられるほどの空間神聖力は、この荒涼とした岩山にはない。

――どう対抗する。

一度見せてしまった武装完全支配技、《時穿剣・空斬》は恐らく通用しない。空中に留まる心意の斬撃を、片端から吸われるだけだ。

残る奥の手は、記憶解放技《裏斬》しかない。しかしあの技を発動するには、困難な問題が二つある。ひとつは、悠長な攻撃動作を敵が黙って見ていてはくれないということ。もうひとつは、狙うべき場所の特定が、この上なく困難だということ……。

ベルクーリは、額から流れてきた汗を、瞬きで振り払った。

そして、不意に気付いた。

――オレは、必死になっている。

いつのまにか、一欠片の余裕もなくなってるじゃねえか。
つまり、いま、この場所こそが死地だ。生死の際だ。
「……へっ」
整合騎士長ベルクーリ・シンセシス・ワンは、絶体絶命の状況を正確に認識してなお、太い笑みを浮かべた。
視線を、ゆるゆると近づいてくる皇帝ベクタから、戦場の片隅に横たわる黄金の騎士アリス・シンセシス・サーティへと動かす。
――嬢ちゃんよ。
オレは、嬢ちゃんが心の奥底で求めていたものを、満足に与えてやれなかったな。親の情、ってヤツを。なんせ、オレは自分の親を、まるで覚えちゃいないもんでな。
でも、これだけは解るぜ。
親は、自分の子を守って死ぬモンだ。
「貴様には……永遠に解らねぇことだろうがな、化け物め!!」
叫び、ベルクーリは地を蹴った。
策も何もなく、ただ己の全てを愛剣に込めて、最古の騎士はまっすぐに走った。

＊＊＊

「が……はっ……」

荒い呼吸とともに吐き出された大量の血液が、足許に飛び散った。

地面に突き立てたレイピアだけを支えに、それでもアスナは立ち続けた。

重槍突撃の第三波、第四波をどうにか全て斬り伏せたものの、全身に受けた傷は十を超えた。パールホワイトに輝いていた上着やスカートは無残に引き千切れ、自分と敵の血によって赤く染まっている。

ランスの直撃を受けて穴だらけになった体が、いまも動くことが信じられない。実際には、理不尽なまでに膨大なヒットポイントが、アスナに力尽きることを許さないのだ。

――この体が倒れるのは、心が折れた時だけ。

なら、わたしは、永遠に立ち続けられる。

全身の感覚はもうないに等しい。灼けるような熱だけが神経を駆け巡り、視界を歪ませる。

アスナは、薄暗い視界に敵の突撃第五波を捉えると、地面からレイピアを引き抜いた。

もう、俊敏な回避動作は取れない。ランスを体で受け止めて、ソードスキルで反撃するしかない。

羽のように軽かったレイピアが、いまはまるで鉛の棒だ。それを両手で構え、上体をかがめて、アスナは敵を待った。

「――GO!!」

地面が震え、二十人の重槍兵が突進を開始する。

どっ、どっ、どどどど……。

たちまち加速する足音に。

甲高い震動音が、どこからともなく混入した。

アスナは、吸い寄せられるように上を向いた。

赤い空から、一本のラインが伸びてくる。それは、微細なデジタル・コードの羅列。

――敵の……援軍……？

「……ああ……」

零れた吐息には、ほんの少しだけ、諦めの色が混じっていた。

しかし――。

ラインの色は、これまで見てきた赤色ではなかった。夜明け前の空のように、深い青に輝いている。

その色がどういう意味を持つのか、もうアスナには推測できなかった。両眼を見開き、ただ結果のみを待った。

ラインは、高さ十メートルほどの空中で凝集し、一瞬の閃光に続いて、人の姿へと変じた。

ぶんっ。

突然空気が唸り、人影が霞むほどの速度で回転した。竜巻のような、猛烈な唸りを響かせて再び降下を開始する。

その真下に立つ二十人の重槍兵たちも、いつしか脚を止めて空を見上げていた。

彼らの真ん中に、群青の竜巻がふわりと舞い降り――。

突如、深紅に染まった。

血だ。竜巻に巻き込まれた歩兵たちが、瞬時にバラバラに分断され、広範囲に鮮血を撒き散らしたのだ。

放射状にばたばたと倒れた槍兵の中央で、竜巻はゆっくりとその回転を停止し、人の姿に戻った。

背中を向けて立つ、やや細身の長身。艶やかな和風の鎧が、逆光を受けて煌く。左手を腰の鞘に添え、右手は恐ろしく長い剣、いや刀をまっすぐ横に振り抜いている。

アスナは、いまの攻撃を、ここではない世界で見たことがあった。

ソードスキル。

カタナ広範囲重攻撃、《旋車》。

ゆっくりと体を起こした人影は、長刀を右肩に担ぎ、ひょいと顔を振り向かせた。

派手な柄のバンダナの下で、無精ヒゲの浮いた顔が、にやりと笑みを浮かべた。
「おう、待たせたな、アスナ」
「ク……ライン……？」
アスナは、自分の掠れ声を最後まで聞くことができなかった。
突然、無数の振動音による高らかな共鳴が世界に満ちたからだ。アメリカ人プレイヤーたちが出現した時とまったく同じサウンドなのに、アスナにはそれが、天使の歌声のように聞こえた。
赤い空から雨のように降ってくるのは、鮮やかなブルーに輝く、幾千ものコードライン。

＊＊＊

斬りかかる。
意識が薄れる。
受傷の痛みで覚醒する。
それを何度繰り返したのか、もう解らなかった。
皇帝ベクタは、まるで戦いを長引かせようとするかのように致命傷を与えてこないが、無数の傷から流れ出た血液、つまり天命の量が、そろそろ限界に達しつつあることをベルクーリは

知覚していた。

だが彼は、二百年を超える時の中で磨き上げた精神力を振り絞り、何も考えず、何も恐れず、脳裏でただ一つのことだけを遂行し続けていた。

数を数えること。

正確には、時間を測ることを。

時刻を察知するという特技を持つベルクーリだが、その超感覚を使って、頭の中でひたすら時を刻み続けたのだ。皇帝の剣に思考を混濁させられている最中ですら、ベルクーリは無意識に数字を積み重ねていた。

――四百八十七。

――四百八十八。

一秒一秒を正確に数えながら、ベルクーリは愚直な攻撃を繰り返した。時には、挑発的な台詞までをも吐きながら。

「……どうやら……剣技のほうは、大したことねぇようだな……皇帝陛下」

――四百九十五。

「こんだけ当てて、倒せねぇようじゃ……二流、いや、三流だな」

――四百九十八。

「そらッ、まだまだ行くぜ!!」

気合とともに、真正面から斬りかかる。
――五百。
皇帝の周囲に広がる、青紫色の光に剣が触れる。
心意を吸われて、ふっと思考が途切れる。
気付くと、地面に片膝を突いていて、左頬に増えた傷から音を立てて血が滴る。
――五百八。
もうすぐだ。もう少しだけ保ってくれ。
ゆらりと立ち上がり、ベルクーリは背後の皇帝に向き直った。
これまでほとんど感情を露わにしなかったベクタの顔に、かすかな嫌悪の色が浮かんでいた。先刻の攻撃でベルクーリが飛散させた血の一滴が、白い頬に当たったからしい。
指先で赤い染みを擦り落とし、ベクタは囁いた。
「……飽きたな」
ベルクーリが作った血溜まりを踏んで、一歩前に出る。
「お前の魂は重い。濃すぎる。舌にこびりつく。そのうえ単調だ。私を殺すことしか考えていない」
平板な声で言葉を連ねながら、皇帝はさらに一歩近づいた。
「もう消えろ」

音もなく持ち上げられた黒い剣が、粘液質の光をまとった。
ベルクーリは表情を変えることなく、わずかに奥歯を噛み締めた。
——もう少しなんだ。あと三十秒。
「へっ……そう、言うなよ。オレは、まだまだ……楽しめる、ぜ」
よろよろと、誰もいない空間に向かって数歩踏み出す。右手の剣を頼りなく持ち上げる。
「どこだ……よ、どこ行きやがった。お、そこか……？」
両眼に虚ろな光を浮かべ、騎士長は剣を振った。
こつん、と剣先で見当外れな場所を叩き、大きくよろめく。
「あれ……こっち、だったか……？」
再び、風切り音すらしない一撃。ずるずると片足を引き摺り、なおも動き続ける。
大量出血により視力を喪失し、思考すらも混濁した——としか思えない姿。
しかしこれは、騎士長一世一代の演技だった。
半ば閉じられた灰青色の瞳は、あるものだけをしっかりと捉えていた。
足跡。
十分間の無為な攻撃により、決して広いとは言えない岩山の頂上には、ベルクーリの血がほぼ満遍なく振り撒かれている。それが皇帝のブーツと、騎士長の革サンダルに踏まれることで、明らかに異なる二種類の靴跡が刻まれているのだ。

言い換えれば、それは、両者の詳細な移動記録でもある。

譫妄状態の演技をしながらベルクーリが探したのは、十分前に左腕を斬られた時の、最も乾いて黒ずんだ皇帝の足跡だった。

無意識下の時間計測は、その直後から開始されている。

つまり皇帝ベクタは十分前、そこに立っていたことになる。そして、そこからどの方向に移動したか、血の足跡が如実に記録している。

――五百八十九。

――五百、九十。

「おっと……見つけた……ぜ……」

ベルクーリは弱々しく呟き、左右にふらつきながら、まったく無人の空間に向けて時穿剣を振りかぶった。

掛け値なしに最後の一撃となるはずだった。

剣と主に残された天命は、双方ともにいままさに尽きようとしていた。

その全てを費やし、ベルクーリは、神器・時穿剣の記憶解放技を発動させようとした。

《時穿剣・裏斬》。

斬撃の威力を空間に保持し、未来を斬る《空斬》とは逆に、裏斬は過去を斬る。

アンダーワールドのメイン・ビジュアライザーでは、あらゆる人間ユニットの移動ログが、六百秒つまり十分間ぶん記録されている。

時穿剣・裏斬はそのログに干渉し、正確に十分前の位置情報を、現在のそれだとシステムに誤認させる。

結果、見た目では単に虚空を斬った刃は、かつてその位置に存在した者の、現在の体に届く。回避不可能、防御不可能の、あらゆる技や努力を裏切る一撃。

ゆえにベルクーリは、裏斬を使うことを長年忌避し続けてきた。ユージオと戦い、青薔薇の剣の記憶解放技に敗れた時すら、使えば勝てたはずなのに使わなかったのだ。元老長チュデルキンに、公理教会への背信行為と取られかねないと解っていながら。

しかし、同等以上に人ならぬ力を操る皇帝ベクタが相手なら、遠慮はいらない。

皇帝ベクタの飛竜を落とした時、ベルクーリは、一直線に同じ速度で飛ぶ敵の動きを利用し、十分前に敵が存在した座標を正確に割り出した。だが、互いに接近しての混戦では、座標特定は飛躍的に困難となる。

もちろん、十分前の一瞬に敵がどこに存在したかを覚えておくことはできる。しかしその方法だと、仮に技の発動を邪魔された場合、また六百秒の数え直しになってしまうのだ。

たとえば、この瞬間のように。

「お前、何か狙っているな」

滑るように接近してきた皇帝ベクタの長剣から、青黒い心意の波動がベルクーリに向けて伸びた。これに触れるわけにはいかず、ベルクーリはやむなくそれまでとは打って変わって俊敏な動作で回避した。《十分前の一秒》は過ぎ去り、永遠に遠ざかった。

――仕損じたか。

記憶解放直前だった時穿剣を構え直しながら、ベルクーリは胸中で呻いた。

これで、掛け値なしに万策尽きた。

秘策の存在を悟られた以上、皇帝はもう二度と大技を発動させるだけの猶予を与えてはくれまい。事実、ベルクーリに向かって、長剣から立て続けに心意の光を伸ばしてくる。

騎士長は、しかし、その攻撃を全力で回避し続けた。

足掻く。

足掻いて足掻いて、無様に倒れる。死ぬ時はそんなふうに死ぬと、ずいぶん昔に決めたのだ。

三回。四回。

五回までも、ベルクーリは皇帝の攻撃を避けた。

しかしそこでついに、青黒い光が体を掠めた。

ふっ、と意識が途切れ――。

再び眼を見開いたベルクーリが見たのは、己の腹に深々と突き立ったベクタの長剣だった。

刃が引き抜かれると、最後の天命が深紅の液体となって噴き出した。
ゆっくりと後ろ向きに倒れる騎士長の双眸に。
遥かな高空から、大気を切り裂いて急降下してくる一頭の飛竜が映った。
――星咬。
おいおい、待機してろって言っただろう。お前がオレの命令に背いたことなんて、いままで一度もなかったじゃねぇか。
大きく開かれた竜のあぎとから、青白い炎が一直線に迸った。
一撃で百の兵士を焼き尽くす威力を秘めた熱線を、皇帝ベクタは、無造作に持ち上げた左手で受けた。
半ば透き通る黒の手甲が、熱線を難なく弾く。四方に飛び散った炎が、大気に無数の軌跡を残す。
皇帝はすかさず右手の剣から青黒い光を放ち、星咬の額を捉えた。暗黒騎士団の飛竜を難なく支配したその技を受けて――しかし、ベルクーリの騎竜は止まらなかった。
その命を白い輝きに変えて両翼から放ちながら、皇帝目掛けて猛然と突っ込んでいく。
ベクタの顔に、厭わしそうな色が浮かんだ。
剣を大きく引き、己を咬み千切らんと迫る星咬の口へと突き込む。闇色の光が荒れ狂い、竜の天命を吸い取りながら、巨体の各所を引き裂く。

星咬が命を投げ出して作った、たった七秒の猶予――。

それを、ベルクーリは無駄にしなかった。

背後で、長い年月を共に過ごしてきた愛竜が絶命する気配をまざまざと感じながら、騎士長は記憶解放状態で青い残像を引く時穿剣を高々と振りかぶった。

《十分前の敵の位置》だけを記憶する方法では、攻撃の機会は十分に一度しか訪れない。

しかし、血染めの移動記録を地面に刻めば、十分前の敵を連続的に追うことができる。

ベルクーリは、先刻狙い損ねた時点から七秒後に皇帝ベクタが存在したことを示す血の足跡目掛けて、渾身の斬撃を放った。

時穿剣・裏斬のもうひとつの特性。

それは、システムそのものに干渉するがゆえに、威力が対象の天命数値へと直接届くことである。心意による防御は不可能なのだ。

ゆえに、あらゆる心意攻撃を無効化、吸収してしまう皇帝ベクタの能力も、この瞬間だけは発動しなかった。

まず、システムに設定されたベクタの膨大な天命がゼロに変化した。

そしてその結果として、皇帝の体が、左肩口から右腰にかけて完全に分断された。

切断面から己の体がずれていくあいだも、皇帝ベクタはまるで表情を動かそうとしなかった。薄青い瞳はただ、硝子玉のように虚ろに宙を眺めていた。

落下した上半身が、地面に接するその寸前。

漆黒の光が心臓のあたりから炸裂し、墓標の如く高々と空へ伸び上がった。

それが収まった時、地面には、皇帝の存在を示すものは何一つ残されていなかった。

数秒遅れて、ベルクーリの右手の中で、天命の尽きた時穿剣がかすかな金属音とともに砕け散った。

＊＊＊

……あったかいな。

もう少し、このままでいたい。

整合騎士アリスは、まどろみから目覚める寸前の浮遊感に意識をたゆたわせながら、淡く微笑んだ。

揺れる日差し。

体を受け止める、大きな膝。

優しく髪を撫でる、無骨な手。

……お父さん。

こんなふうに、膝に乗せてもらうのは何年ぶりだろう。この安心感を……完全に守られて、心配事なんか一つもない、何もかも大丈夫な感じを、長いあいだ忘れていた。

ああ……でも、そろそろ起きなきゃ。

そして、整合騎士アリスは、そっと睫毛を持ち上げた。

見えたのは、瞼を閉じ、微笑みながら俯いている壮年の剣士の顔だった。

逞しい首筋や胸元に走る、幾つもの古傷。その上に、無数の真新しい刀傷が刻まれている。

「……小父様？」

ようやく意識がはっきりしてきたアリスは、短く呟いた。

――そうだ、私、皇帝ベクタの飛竜に捕まったんだ。まったく、何て迂闊だったんだろう。背後も警戒しないで、闇雲に走るなんて。

でも、さすがは小父様だわ。敵の総大将から助け出してくれるなんて。この人さえいれば、何もかも安心。

再び微笑み、上体を起こしたアリスは、騎士長の受けている傷が顔や胸元だけに留まらないことに気付き、息を呑んだ。

左腕は、肩口から斬り落とされている。東域風の戦装束は血で真っ赤だ。そして、はだけた胸の下には、恐ろしいほど深く、惨たらしい傷が。

「お……小父様……!!　ベルクーリ閣下!!」

叫び、アリスは手を伸ばした。

その指先が、騎士長ベルクーリの頬に触れた。

そしてアリスは、偉大なる最古騎士の天命が、すでに尽きていることを悟った。

＊＊＊

……おいおい、そんなに泣くなよ、嬢ちゃん。

いつか、必ず来る時が来ただけじゃねえか、なあ。

己の骸にすがりつき、泣きじゃくる金髪の少女を見下ろしながら、整合騎士長ベルクーリ・シンセシス・ワンはそう言おうとしたが、しかし声は地上までは届かなかった。

……嬢ちゃんなら大丈夫。もう、一人でもやっていけるさ。

なんたって、オレのたった一人の弟子で……オレの娘なんだからよ。

眼下の光景は、どんどん遠ざかっていく。愛しい黄金の少女騎士に最後の微笑みを投げかけ、ベルクーリは視線を遥か北の空に向けた。

その下にいるはずの、もう一人の女性騎士へも思念を飛ばす。

届いたかどうかは解らなかったが、心の中にはただ、無限に続くと思われた日々の果てに、

ついに死すべき時が来たのだという深い感慨だけがあった。

……まあ、悪いくたばり方じゃねえよな。

「そうよ、泣いてくれる人がいっぱいいるんだから、幸せだと思いなさい」

不意に響いた言葉に振り向くと、そこに浮かんでいるのは、しなやかな裸体に長い銀色の髪だけを流したひとりの少女だった。

「……なんだ、アンタやっぱり生きてたのかよ」

ベルクーリが肩をすくめると、銀瞳を瞬かせた最高司祭アドミニストレータは、軽く笑った。

「そんなわけないじゃない。これは、あなたの記憶のなかの私。あなたが魂に保持していた、アドミニストレータの思い出」

「ふうん、何だかよく解んねぇな。でも……オレの記憶のなかのアンタが、そうやって笑ってられてよかったよ」

ベルクーリもにやりと笑い、横を見た。

いつのまにかそこにいた星咬が、長い首を摺り寄せてくる。

銀色に透き通る飛竜の首筋を掻いてやってから、騎士長はひょいっとその背中に飛び乗った。手を伸ばし、最高司祭も自分の前に座らせる。

長い生涯でただ一人仕えた主は、振り向くと首を傾げて問うた。

「お前は、私を恨んでいないの？　お前を無限に続く時間の牢獄に閉じ込め、何度も記憶を奪

った私を？」

ベルクーリは少し考え、答えた。

「うんざりするほど長かったのは確かだが、でもまあ、面白え一生だったさ。うん、そう思うよ」

「……そう」

短く答えるアドミニストレータから眼を離し、ベルクーリは星咬の手綱を握った。

飛竜は透き通る両翼を広げ、無限に広がる空を目指して、ゆっくりと羽ばたいた。

＊＊＊

遥か離れた北の空の下――。

乾いた大地に瓦礫となって積み上がる、かつて東の大門として知られた巨大な遺構の東西では、一万のダークテリトリー軍予備兵力と、四千の人界守備軍本隊が、それぞれの陣を張って睨み合っていた。

ダークテリトリー軍にはもう皇帝ベクタの姿はなく、それゆえに彼らが独自の判断で攻撃してくることなど有り得ないのだが、その事情を知るよしもない人界軍もまた動けず、長い膠着状態が続いている。

乾いた風の音だけが響く大門跡地に、ひとりの女性騎士の姿があった。守備軍本隊を預かる整合騎士、ファナティオ・シンセシス・ツーである。衛士や修道士たちには次の戦闘に備えて休息を取らせているが、自分はとても天幕で眠る気になれず、ひとり東の大門跡まで歩いてきたのだ。

すでに夜の闇は遠ざかり、ソルスの光がダークテリトリー側の空を赤く、人界側の空を青く染めている。

騎士長ベルクーリ率いる守備軍一個部隊が、大門を出てダークテリトリー南部に向かってから早くも半日以上が過ぎ去った。彼らの任務がそう簡単に終わるものではないことは解っているが、待つことしかできない我が身がもどかしい。

せめて、部隊の無事なる帰還を三女神に祈ろうと両手を組み合わせ、瞑目しようとしたその時――。

ファナティオは、はっと眼を見開いた。

耳許に、愛する男の声が響いた気がしたのだ。

――すまねぇな、ファナティオ。どうやらもう、会えそうにない。

――後は頼んだぜ。その子を、幸せにしてやってくれ……。

同じ言葉を、ファナティオは、この場所で別れる直前に騎士長ベルクーリから掛けられた。

銀色の籠手を装備した両手で、そっと下腹を撫でる。

新しい命を授かったのは、三ヶ月前だった。百年以上も頑なにファナティオに触れようとしなかったベルクーリは、あるいはその禁を解いた時から予感していたのかもしれない。

己の死を。

騎士長ベルクーリが、遠い空の下で長い生を終えたことを悟ったファナティオは、ゆっくりと地面に跪き、両手で顔を覆った。

堪えようもなく、嗚咽が漏れた。

ベルクーリが、ファナティオだろうと誰だろうと女性を遠ざける理由は、ずっと昔に聞かされていた。

人界では、公理教会の司祭によって正式に婚姻を認められた男女が契りを結んだ場合のみ、子を授かることができる。しかし整合騎士は司祭の資格も持っているので、大がかりな婚姻の儀式は不要。ただ愛を誓い、しとねを共にするだけで、子を宿すこともある。

だがその子供は、天命凍結処理を受けている両親よりも先に老いて死んでしまうのだ。だからと言って、最高司祭に同じ処理を施してもらうのもまた残酷なことである。

ベルクーリがファナティオの気持ちを受け入れたのは、最高司祭が身罷ったあとのことだ。つまり彼は、見守ると決めたのだ。限りある時を生きる、我が子の姿を。

ならば――。

「……御安心ください、ベルクーリ閣下。この子は、私が立派に育てます。閣下のように雄々

しく、誇り高い人間に」

嗚咽を堪え、ファナティオは決意を言葉にした。

――でも、いまだけは。

いまだけ、喚く私を許してくださいね。

地面に身を投げ出し、騎士長ベルクーリが駆け抜けていった場所の土を握り締めて、ファナティオは声を上げて泣いた。

5

「てめえらに個人的な恨みはねぇが……」

長刀をまっすぐ赤い軍勢に向けたクラインの言葉が、古代遺跡に響き渡った。

「ダチをさんざ痛めつけてくれた借りは返すぜ。三倍返し……いや、千倍返しだこの野郎ども!!」

言い放つや、敵軍にまっすぐ突っ込んでいく。その無謀さに、深傷の痛みも一瞬忘れてアスナは呆れたが、直後クラインのすぐ隣に新たなコードラインが降り注ぎ、人影を作り出した。

現れたのは、大型のバトルアックスをひっさげた、チョコレート色の肌の巨漢だった。

「……エギルさん!!」

掠れた声で、その名を呼ぶ。

かつてSAOの攻略組を戦力面でも補給面でも強力にサポートし続けた《戦う商人》は、アスナを見ると魁偉な容貌にニヤリと笑みを浮かべ、右手の親指を立てた。

すぐに振り向き、クラインを追って猛然と走り始める。

三人目と四人目は、アスナのすぐ目の前に現れた。

あずき色を基調としたコスチュームにブレストプレートを重ね、腰に銀色のメイスを下げた

ショートカットの女の子。続いて、群青色のチュニックとスカートを身につけ、頭の両側で髪を結わえた小柄な女の子。

「――リズ!!　シリカちゃん!!」

ここでついに、アスナの両眼に涙が溢れた。

全身から力が抜け、どうにかその場に踏み留まりながら、アスナは強い絆で結ばれた仲間たちに両手を差し伸べた。

「来て……来てくれたのね……」

「来るわよ、もちろん！」

「当ったり前じゃないですか！」

揃ってにっこりと顔を綻ばせ、リズベットはアスナの右手を、シリカは左手を強く握った。

二人の表情が、泣き笑いに変化する。

「――こんなに無茶して……傷だらけになって……。がんばりすぎだよ、アスナ」

「あとは任せてください。みんな、来てくれましたから」

リズベットとシリカに両側から抱き締められただけで、アスナは全身の傷の痛みが温かく溶け、消えていくのを感じた。

「ありがと……ありがとう……」

とめどなく溢れる涙の向こうで、コードラインの驟雨が、遺跡の入り口付近に降り注ぐのが

見えた。

現れたのは、鮮やかな色彩を身にまとう何百人もの剣士たち。

「あの赤いのが敵だ！」

「前衛、突撃！　押し返せ！」

「後衛はいったん下がって呪文を確認！」

着地するやアンダーワールド語……いや日本語で叫び交わし、剣を、斧を、槍を構えて前方の赤い兵士たちに斬りかかっていく。

その見事な個人技と、統制の取れた集団行動は、彼らがみな熟練のＶＲＭＭＯプレイヤーであることを示していた。

――そうか。

アスナは、ようやく再回転し始めた頭で状況を察した。

アメリカ人プレイヤーが戦場に現れた時点で、アンダーワールドの時間加速は、襲撃者側の操作によって等倍に固定されていたのだ。それはすなわち、日本からでも、アミュスフィアを使ったダイブが可能だということだ。

しかし、援軍が装備した剣や鎧の強い輝きは、彼らが使用しているのがデフォルトの衛士アカウントではないことを示している。

つまり――コンバートしたのだ。

長い時間と多大な努力をつぎ込み、育て上げたキャラクターを、アンダーワールドへと移住させたに違いない。

もう一度、もとのＶＲＭＭＯ世界に戻せるかどうかも定かではないのに。それどころか――アンダーワールドの仕組みを考えれば、死亡した瞬間にキャラクターがデリートされてしまうことだって有り得るのに！

「みんな……ごめん……ごめんね」

アスナは涙声で目の前の親友二人に、そして前線を押し戻していくたくさんの剣士たちに謝った。

「何言ってるのよ、アスナ」

リズベットの答えは、揺るぎない意志に満ちていた。

「あたしたちがＳＡＯやＡＬＯで頑張ってきたのは、きっといまこの場所で、大切なものを守るためだったんだよ」

「うん……そうだね……ありがとう……」

嗚き声で感謝を伝えながら、アスナは深く、深く頷いた。

しかしもう一つだけ解らないことがある。いったい誰が現実世界のリズたちにアンダーワールドの危機を伝え、コンバートによる援軍を要請したのか。オーシャン・タートルのサブコントロール室に籠城中の菊岡や比嘉に、そんな作戦を思いつき実行する余裕があるとはとても思

えない。

「……ねえリズ、シリカちゃん。みんなをここに連れてきてくれたのは、誰なの……？」

アスナが訊ねると、二人はちらりと視線を交わしてから同時に破顔した。

「ちょっとアスナ、そんなの決まってるじゃないの！」

「ユイちゃんですよ！　ユイちゃんがアンダーワールドのことと、ここで生きてる人たちのことを、一生懸命説明してくれたんです！」

その言葉を聞いた途端、胸の奥が強く締め付けられ、両眼から涙がとめどなく溢れた。

ユイ。旧ＳＡＯで生まれたトップダウン型ＡＩであり、アスナとキリトの娘。そう……彼女でしか有り得ない。アスナも、菊岡たちも予想だにしなかった襲撃者たちの計画を察知し、対抗するべく動いてくれたのだ。

「……ありがとう、ユイちゃん」

ありったけの気持ちを込めた言葉を呟き、立ち上がった時には、切断された左腕は完全に再生し、全身の傷もほとんど消え去っていた。

その時、背後から、おずおずとした声が掛けられた。

「あの……アスナ様？　その方たちはいったい……それに、あの騎士たちは……」

唖然とした表情で立っていたのは、整合騎士レンリだった。後ろで、危地を救われた衛士たちも、同じように眼を丸くしている。

アスナは、レンリとリズベットたちに視線を往復させてから、微笑みとともに答えた。
「わたしの、大切な仲間たち。リアルワールドから、助けに来てくれたの」
レンリは数回瞬きすると、リズベットとシリカをじっと見詰め――。
幼さの残る顔に、大きく安堵の表情を浮かべた。
「……そうだったんですか……ほんとによかった……。僕はてっきり、外の世界の人間たちは、アスナ様以外はみんなあの恐ろしい兵士たちなのかと……」
「ちょっとちょっと、そんなわけないじゃん!!」
少し心外そうな、しかし親しみを込めた笑顔とともに、リズベットがレンリの肩を叩いた。
「あたしリズベット。よろしくね、騎士くん」
「あ……は、はい。はじめまして、僕はレンリといいます」
その光景を微笑みながら見ていたアスナは、不意に、確たる予感に打たれた。
自分は、この光景を、一生忘れないだろう。
二つの異なる世界に生まれた人々が出会い、言葉を交わし、関係を築き始めた、この瞬間を。
ここから長く長く続いていくはずの物語に、悲しみで幕を下ろしてしまうわけにはいかない。
大きく息を吸い、アスナは口調を変えてリズベットに訊ねた。
「リズ、コンバートしてくれた人たちの数は？」
「あ……うん。二千を少し超えるくらい、かな。がんばったんだけど……話を聞いてくれた人

たち全員ってわけにはいかなかった……」

唇を噛む親友の背中を、軽く叩く。

「充分すぎるわ。でも……再コンバートの可能性を残すためにも、消耗戦は避けたい。あまり前線を広げないで、ヒールを厚くしよう。リズとシリカちゃんは、二百人くらい後方に下げて、支援部隊を作って」

意識を戦闘に切り替え、アスナはレンリと衛士たちにも口早に指示した。

「皆さんも、不本意でしょうが修道士隊に合流して、治癒術を使ってください。リアルワールドの剣士たちは神聖術に不慣れなので、彼らに術式を教えてやってくださると助かります」

「は……はい、アスナ様！　衛士隊、聞いてのとおりだ！　援軍の騎士たちを支援するぞ！」

レンリが叫ぶと、連戦に疲弊の色濃い衛士たちも、力強い声を返した。

「……それで、アスナさんはどうするんですか？」

そう訊いてくるシリカに、アスナは片目をつぶってみせた。

「もちろん、いちばん前に斬り込むわよ」

もう、負ける気はさらさらしない。

最前線に駆けつけ、そこにＡＬＯで見慣れた面々――シルフ領主サクヤや、ケットシー領主アリシャ、サラマンダー将軍ユージーンたちの姿を見出したアスナは、意を強くしながら彼ら

と深く頷き交わした。

いや、ＡＬＯからのコンバート組だけではない。

正確極まるクロスボウの連射で剣士たちを強力に援護しているのは、シノンと同じガンゲイル・オンラインのプレイヤーたちだろう。

それに、密に固まって嵐のように敵を薙ぎ払っていくのは、あまたのＶＲＭＭＯを渡り歩いてきた最強ギルド、《スリーピング・ナイツ》の面々だ。

アスナを見つけ、にこっと笑みを送ってくる魔術師シウネーに右手で応えながら、もう一度涙が滲みそうになるのを堪える。

彼らは皆、分身たるアバターを喪失する覚悟で助けにきてくれたのだ。ならば、たった一人スーパーアカウントに保護されている自分が最大の危険を冒し、彼らの犠牲を最小に抑えなくてはならない。

アスナは戦場を走り抜けながら援軍たちに次々と指示を飛ばし、広がりすぎた前線を縮小して、遺跡参道の入り口を中心とした半円形へと築き直した。

いかにコンバート組二千人の装備やステータスが強力でも、アメリカ人プレイヤーたちはまだ一万を超える数が残っている。消耗戦になれば、死亡者、つまりデータ喪失の可能性があるプレイヤーが続々と出てきてしまうだろう。

更に、無視できない懸念もある。

《アンダーワールド大戦》戦況

《最終負荷実験》二日目

アンダーワールドで戦う限り決して避けられない、リアルな痛みだ。

痛みを感じた時にはもう死亡、ログアウトする場合がほとんどのアメリカ人たちと違って、負傷、後退、回復を繰り返す日本人たちは、常に苦痛に晒され続ける。それが徐々に心を折っていくのは、アスナが我が身で実感したばかりだ。

――お願い、みんな、がんばって。一万の敵を削り切るまで。

そうすれば、オーシャンタートルを襲撃した者たちが、アンダーワールドに投入できる戦力は今度こそ尽きる。あとは騎士長ベルクーリとシノンが足止めしていてくれるはずの皇帝ベクタに追いつき、アリスを奪還するのみ。

最前線でレイピアを閃かせながら、アスナは精一杯の声で叫び続けた。

「大丈夫……勝てるよ！　みんなら、絶対に勝てる!!」

＊＊＊

日本人ＶＲＭＭＯプレイヤーである広野孝は、いったい僕はなんでこんなところに来ちゃったんだろう、と今更ながらに感じていた。

午前五時に友人からの電話で叩き起こされ、ログインしたＡＬＯでの唐突すぎるコンバート要請に応じたのは、決して何やら必死に演説していたのが可愛い女の子だったからでも、彼女

の主張に共感したからでもない。

正直、なんとなく、という理由が最も大きい。

加えて、国の予算で作られたＶＲＭＭＯというのはどんな世界だろう、という好奇心が少し。高校に入って最初の実力テストが最悪だったせいで、どうせもうすぐアミュスフィア取り上げられるし、という投げ遣りな気持ちが少し。そして――もしかしたらその世界には、いままで遊んできたゲームでは見つけられなかった《何か》が本当にあるのかも、という予感がほんの少し。

二年かけて育て上げたキャラクターをコンバートし、聞いたこともないサーバーにログインしたタカシを待っていたのは、目の前に立ちはだかる赤い鎧の大男と、ネイティブな英語のスラングと、容赦なく振り下ろされるハルバードだった。

悲鳴を喉に詰まらせながら飛び退いたが、ハルバードの先端が左脚の防具に命中し、装甲を割って少しばかりスネに食い込んだ。あんな痛みを感じたのは、小学生の頃に自転車で転び、骨を折った時以来だった。

聞いてねえよ――!!　と内心で絶叫しながら、タカシはハルバードの追撃を懸命に掻い潜り、激レア装備の片手剣で何とか大男を撃退し、脚の傷から流れ出る大量のリアルな血に吐きそうになっていたところを、引っ張られるように支援部隊が控える後方へ連れてこられたのだった。

――もう嫌だ、ログアウトする！

と口走るタカシの治療に当たったのは、薄青い僧侶服を着た、つまりプリーストなのであろう同年輩の女の子だった。

その子を見ていると、なんだか、とても不思議な感じがした。

「すぐに治して差し上げますから、少し我慢していてくださいね、騎士様」

細い声でそう言い、左足の大怪我――タカシの基準では、だが――に小さな両手をかざして呪文を唱える女の子を、彼は一瞬NPCかと思った。

しかし、灰色がかった茶色の瞳に浮かぶ真剣さ、東洋人のようでも西洋人のようでもある可憐な顔立ち、そして傷を癒していく白い光の温かさ。それら全てがタカシに、この子はNPCでも、ロールプレイしている日本人でもなく、この世界で暮らしている本物の人間なのだ、と告げていた。

そんなことがあるのだろうか。日本語を話すのに日本人ではなく、さりとてNPCでもない。ならば、この女の子はいったい何者なのか。

左脚をハルバードで直撃されて激痛を感じた時ではなく、その傷が女の子の魔法で癒されていく時になってようやくタカシは、自分がただのイベントではなく何か巨大な出来事の真っ只中にいるのだということを強く意識した。

「さあ、これでもう大丈夫です、騎士様」

僧侶服の女の子が、ほんの少し誇らしげな表情で両手を離した時、長さ五センチもあった傷

はすっかり塞がり、薄茶色の痕がわずかに残るだけになっていた。痛みももう感じない。

「あ……ありがとう……」

タカシはつっかえながらもどうにかお礼の言葉を口にした。何かもう少し、《騎士様》にふさわしい台詞が言えないものかともどかしく思ったが、顔があっと熱くなるだけで舌はぴくりとも動こうとせず、気付くと彼は、自分でもまったく思いがけない行動に出ていた。両腕を伸ばし、少女の華奢な体を、そっと抱き寄せたのだ。

もしこの世界が通常のＶＲＭＭＯワールドであれば、タカシの行為は《ＮＰＣへの不適切な接触》と見なされ、システムから警告されていただろう。

しかし僧侶服の少女は、タカシの腕の中でぴくりと体を震わせ、驚いたように小さく息を吸い込んだだけだった。数秒後、タカシは、少女の腕がおずおずと自分の背中に回され、控えめではあるが確かな圧力を加えるのを感じた。

「大丈夫ですよ、異国の騎士様」

耳許で、穏やかな囁き声が発せられた。

「修道女見習いの私だって、こうしてささやかですが、自分の務めを果たせているんですから。騎士様は私の何倍も立派に、勇敢に戦っておいでです。どうぞ思い出してください……ご自分が、多くの民を、そして世界を守るために剣を取っているのだということを」

そして少女は、右手で優しくタカシの背中を撫でた。

タカシにとって、女の子と抱き合うという経験は、現実世界と仮想世界を通してこれが初めてだった。しかしたとえ、万が一現実世界で彼女ができるようなことがあったとしても、この瞬間を上回る感動は得られないだろうという予感があった。

夢のような一瞬が過ぎ去り、互いの体が離れると、タカシは意を決して訊ねた。

「あの……き、君の名前を教えてくれませんか」

すると見習い僧侶は、白い頬をほんのりと染めながら頷いた。

「はい……。私はフレニーカと言います。フレニーカ・シェスキ」

「フレニーカ……」

不思議な響きだが、しかし目の前の少女にしっくりと馴染むその名を呟いてから、タカシは珍しく明瞭な声で名乗った。ヴェリオスというキャラクター名ではなく、あまり好きではない本名を。

「……僕の名前はタカシ……広野タカシ。……あの……この戦争が終わったら、また、会えるかな」

フレニーカは眉をわずかに持ち上げてから、その下の両眼を優しく細め、頷いた。

「もちろんですとも、騎士タカシ様。戦が終わり、世界に平和が訪れたら、その時には必ず。ご武運を、三神にお祈りしております」

タカシの左手を、小さな両手でそっと包み込んでから、フレニーカはさっと立ち上がった。

青い僧侶服の裾を翻し、新たな負傷者を治療するために走り去っていくフレニーカの背中を見送りながら、タカシは強く意識した。再び彼女の前に、胸を張って――騎士として立つためには、最後まで勇敢に戦い抜かねばならないのだと。この世界は、もはやゲームではないのだ。タカシの生まれ育った現実世界と同じ質量を持つ、もうひとつの現実なのだ。

たとえ戦いの中でヒットポイント、いや命が尽きてこの世界から放り出される時が来るとしても、最後の一瞬まで前を向き、剣を握り続ける。どれほどの傷を、痛みを与えられようとも。それができなくては、きっと二度とフレニーカとは会えない。

タカシは立ち上がり、おっしゃあ！　と叫んで、クエストではなく使命を果たすために再び最前線目指して走り始めた。

第二十一章　覚醒　西暦二〇二六年七月七日／人界暦三八〇年十一月七日

1

「間に合った……ッスかね……」

酷使しすぎて強張った両腕をぶらぶらさせつつ、比嘉タケルは呟いた。

日本のザ・シード・ネットワークから突然オーシャン・タートルに送られてきた約二千ものアカウントデータを、わずか一時間足らずでアンダーワールドにコンバートしてのけたのだ。両手の指先に、キーボードの感触が張り付いてしまったかのようだ。

「間に合ったわ。必ず」

スポーツドリンクを差し出しながら、神代凛子博士がしっかりした声で答えた。

ボトルを受け取り、握力の失せた右手で苦労してキャップを捻ると、ごくごく飲む。口に流れ込んでくる液体は生ぬるいが、それでも腹に染み渡るようだ。

半分ほども飲み干してからふうっと息をつき、比嘉は力なくかぶりを振った。

「まったく……我ながら、迂闊すぎたッスよ……」

ラース六本木支部に突然現れた、リーファ、シノンと名乗る女子高校生たちから、襲撃者たちが現実世界のアメリカ人ＶＲＭＭＯプレイヤーたちをアンダーワールドにダイブさせようと

していると告げられた時は、たっぷり五秒間も思考停止してしまったものだ。

しかもそれを察したのが、結城明日奈の携帯端末に接続していた既存型のＡＩなのだと言われれば、自分の眼の節穴っぷりを全面的に認めるしかなかった。

菊岡二佐の知り合いだという高校生たちを、六本木のＳＴＬから残りのスーパーアカウントでアンダーワールドにダイブさせ、しかる後に膨大なコンバート作業をこなし、どうにか二千人の援軍を結城明日奈の現在座標に降下させたところである。

総数五万を超えるアメリカ人プレイヤーたちを排除できなければ、《アリス》はほぼ確実に敵側に奪われてしまう。実際、状況を認識した菊岡二佐と中西一尉は、オーシャン・タートルの外壁を人力でよじ登り、衛星アンテナを物理的に破壊することも検討していた。

しかし外壁まで出るには、メインシャフトを上下に分断する耐圧隔壁のロックを、数十分も解除する必要がある。それを襲撃者たちに察知されれば、このサブコントロール室まで制圧されるという最悪の結果を招きかねない。

ゆえに菊岡と比嘉は、全てを託すことにしたのだ。《創世の三女神》としてアンダーワールドに降り立った三人の女子高校生と、アカウント喪失のリスクを承知で援軍に志願してくれた日本のＶＲＭＭＯプレイヤーたちに。

彼らの接続を受け入れた時点で、アリシゼーション計画の機密情報はすでに半ば以上が公になってしまったことになる。

しかしもう、そんなことは大した問題ではない。

襲撃者たち、そして恐らく連中の背後にいるのであろうアメリカ軍産複合体にアリスを奪われ、やがて来る無人兵器の時代を、またしても彼らに完全支配されてしまうことに比べれば。

「そうッスよ……」

比嘉は椅子にぐったりと身を沈ませながら、誰にも聞こえない音量で独りごちた。

「アリスはもう、ただのUAVコントロール用AIなんかじゃない。本物の異世界に生まれた、新しい人類なんだ……。君にはとっくにそれが解っていた。そうッスよね……桐ヶ谷君」

視線を、アンダーワールド南部の状況を表示するメインウインドウから、片隅に表示された桐ヶ谷和人のフラクトライトのモニタ窓に向ける。

ささやかに揺らぐ放射光は、相変わらずその中央に寒々しい虚無を抱え込んだままだ。傷つき、失われてしまった主体……自己イメージ。

そのウインドウを開きっぱなしにしておくのがいたたまれず、比嘉はマウスを操作して、窓を最小化しようとした。

そして左ボタンをクリックする寸前、ぴたりと指を止めた。

「ん……？」

丸メガネを持ち上げ、ウインドウの下に小さく表示された、フラクトライト活性の変動ログに眼を凝らす。

ほんの四十五分前に、それまでほとんど動くことのなかった折れ線グラフが、鋭いピークをたった一つだけ刻んでいる。慌ててマウスを握り直し、ログを左にスライドさせる。すると、十時間ほど遡ったあたりに、さらに大きなピークがもう一つ存在した。

「ちょ……ちょっと、凛子センパイ。これ見てくれますか」

「その呼び方やめてちょうだい」

嫌そうな声とともに、神代博士がメインスクリーンに顔を向けた。

「これは、桐ヶ谷君のフラクトライトモニタでしょ？　……この変動は何なの？」

「彼の、喪失したはずの意識が一瞬だけ活性を示した……ってことなんスけど、そんなこと、あるはずないはずなはずなんス」

「日本語おかしいわよ。――外部から、何か強い刺激があったんじゃないの？」

「と言っても、その刺激を処理する回路が完全に停止してる状態なんスよ。……ええと、この時間は……」

比嘉は、ピーク部分をクリックし、時刻を表示させた。だがそれを確認したところで、その時刻にアンダーワールド内部で何があったのかまでを知るすべはない。

しかし、その時――。

「ちょっと待って」

神代博士が、緊張感の増した声を出した。

「この時間。これ……どっちも、あの子たちがＳＴＬでダイブした頃じゃないの？　最初のピークは明日奈さん、次のピークは六本木に現れたシノンさんとリーファさん……」

「えっ、マジっスか。……うわ、マジっスよ」

比嘉も息を呑んだ。確かに、折れ線グラフに二つの鋭利なピークが刻まれた時間は、まさしく女子高校生たちがアンダーワールドに降り立った直後に他ならない。

「えっ、どういうことなんだ……？　ただ、親しい人間が現れたから強い反応を示した、ってだけなのか？　いや……桐ヶ谷君のダメージは、そんなリリカルな理由で回復する代物じゃないはずだ……何か理由が……フィジカルでロジカルな理由があるはずなんだ……」

メッシュチェアから立ち上がり、比嘉はうろうろとコンソールの前を歩き回った。気配に気付いたのか、少し離れた椅子でさすがにダウン気味の菊岡や、壁際にへたりこむ技術者たちもいぶかしげな視線を向けてくる。

しかしそれに気付きもせず、比嘉は思考をひたすら回転させた。

「自己……主体……自分を自分だと規定するイメージ……その量子パターンのバックアップが、どこかにあった……？　いや、有り得ない……キリト君のフラクトライトは一度もコピーしていないし、仮にコピーしていたところで、そこから自己イメージを切り出して書き込むなんて真似は不可能だ……彼のフラクトライトと接続し得るような、生きた量子パターンが……？　どこだ……どこに……」

「ねえ。……ねえ、比嘉くん」
ヒガくんってば、と何度か名前を呼ばれて、ようやく比嘉は顔を上げた。
「なんッスか」
「前から君が言ってる、主体の喪失、って具体的にどういうことなの？」
「ええと……そりゃつまり……」
数秒かけて思考を切り替えてから、早口に答える。
「《見るものであり知るもの》……心の中の自分っスよ。哲学で言う、客体（オブジェクト）に対する主体（サブジェクト）。感覚を通して受け取る、あらゆる情報を処理するメイン・プロセッサ」
「ふうん……つまり君は、ＳＴＬを使って唯物論と二元論を統合しちゃったわけね。まあそれはいいわ。私が言いたいのは、主体と客体って、そんな簡単（かんたん）に切り分けられるものなのかってことよ」
「……は？」
予想外の言葉に、比嘉は両眼（りょうめ）を何度か瞬（まばた）かせた。
菊岡や技術者たちも口を閉ざし続け、クーリングファンの回転音だけが低く響（ひび）く部屋に、神代博士（しろはかせ）のハスキーな声が流れる。
「認識するもの、主体。認識されるもの、客体。それはあくまで物事の関係を表す哲学的な概念であって、フラクトライトとして可視化された私たち一人ひとりの意識の構造に、そのまま

当てはめることはできないと思うの。人間は社会的動物よ、唯一の個人として存在しているわけじゃないわ。自分の中の他人、他人の中の自分……それらはある程度、ネットワーク的に接続しているところがある。そうは思わない？」

「他人の……なかの……自分……」

言葉にした途端、比嘉はその概念が、自分のもっとも忌避する種類のものであることを自覚した。

人にどう見られるか。人と比べてどうか。

神代凛子にどう見られるか。

茅場晶彦と比べてどうか。

――そうか……。

――僕は、自分の顔すらよく憶えていない。たぶん似顔絵を描けば、似ても似つかない代物になるだろう。それは僕が、自分を――見かけも中身も、どう足掻いても茅場先輩とは比ぶべくもない自分の有様を、ずっと忌避してきたからだ。僕の中の主体なんて、所詮はその程度のものなんだ。

そう、たぶん、周囲の人間の中の《比嘉タケル》を集めて合成すれば、かなりのところまで再現できてしまう程度のものでしかないのだ……。

こりゃ一本取られた、と自嘲混じりの苦笑を浮かべようとした比嘉は――。

ここに至ってようやく、神代凛子の発言の真意を悟った。
「……セルフイメージの、バックアップ」
呟き、がばっと顔を上げた時にはもう、情けない自己嫌悪はどこかに消え去っていた。
「そうか……ある、あるッスよ、桐ヶ谷君の、吹っ飛ばされちまった主体を補完できるデータが！　彼に近しい人たちの、フラクトライトの中に……!!」
叫び、限界の早足で左右に歩き回る。
「でも、それを抽出するにはＳＴＬが必要だ……しかも、一人だけじゃ再現性が薄い。せめて二人、いや三……人……」
大きく息を吸い、止める。
桐ヶ谷和人を最も深く知り、詳細なイメージを魂に保存している人物。それは間違いなく結城明日奈だ。しかも彼女は、まさにいま、和人の隣のＳＴＬに横たわっている。
そして六本木支部のＳＴＬには、やはり和人と近しいはずの女の子が、さらに二人。
比嘉は菊岡二佐に視線を向け、掠れた声で聞いた。
「菊サン。六本木からダイブしてる子たちは、桐ヶ谷君の関係者……なんスよね？」
「……ああ、そうだ」
菊岡も、黒縁メガネのレンズをきらりと輝かせながら頷いた。
「シノン君は、半年前の《デスガン事件》をキリト君と一緒に解決した仲だ。そしてリーファ

君は、キリト君の妹だよ」

一瞬の沈黙に続き、比嘉も丸メガネのレンズを光らせた。

「……来た。来たっスよこれ！　できる……復元できるかもしれないッス、キリト君のセルフイメージを！　彼女たちのフラクトライトに保存されているはずの桐ヶ谷君のイメージを抽出して、喪失領域に繋いでやれば……その生きたデータは、桐ヶ谷君のフラクトライトに馴染み、活性化させ、本来の主体を回復させ得るはずだ……」

体の底から湧いてくる熱気に突き動かされ、比嘉はばしっと両手を打ち合わせた。

そして、一秒後。

その熱が、跡形もなく奪われ、冷えていくのを感じた。

「あっ……ああ……嘘だろ……あああっ……」

「ど、どうしたの、何なのよ比嘉君！」

早口に言い募る凛子に視線を向け、比嘉はうわごとのように呟いた。

「その操作ができるのは……メインコントロール室だけッス……」

再び、重い沈黙が灰のように降り注ぎ、サブコントロール室の床に積もった。

深いため息を漏らしたのは、指揮官である菊岡だった。

「そうだな……当然、そういうことだ……。いや、そうしょげるな、比嘉君。キリト君の治療に光明が見えただけでも良しとしよう。実際のオペレーションは、状況が終了し、オーシャン

タートルから連中を追い出した後からでも……」

「それじゃあ……遅いんスよ……」

俯いたまま、比嘉は菊岡の言葉を遮った。

「護衛艦《ながと》からコマンド部隊が突入してきて、メインシャフト内部で大規模な戦闘になったら、サブ電源も落ちるでしょう。メインコンの設備も破壊されるかもしれない。当然、桐ヶ谷君のSTLはシャットダウンして、彼はアンダーワールドから意識不明のままログアウトする。そしたら……恐らく桐ヶ谷君は、もう二度とSTLに接続できません。いまの状態では、初期ステージを通過できないっスから……。治療はなんとしても、彼と三人の女の子たちがアンダーワールドにダイブしてるあいだに行わなくちゃならないんス」

淡々と言葉を続けながら、比嘉は再び、体の奥底にある種の決意が満ちてくるのを感じていた。

こんな時、自分ならどうするか。

少し前ならば、比嘉の主体はこう答えていただろう。僕に何ができるはずもない。茅場先輩じゃあるまいし、と。

でも、そんなものは本物のセルフイメージじゃない。ただの逃げだ。言い訳だ。

僕が知っている比嘉タケル、STLとアンダーワールドを設計した大天才なら、きっとこう言うはずなんだ。

「……僕、行くッスよ、菊さん」
「行くとは……どこにだ？」
顔をしかめるアロハシャツ姿の指揮官に体ごと向き直り、比嘉は大きく息を吸い込んでから続けた。
「別に、占拠されてるメインコントロールに殴り込もうってわけじゃないッスよ。いいッスか……いま桐ヶ谷君がいる隣の第二ＳＴＬ室と、耐圧隔壁の下のメインコンとは、オーシャン・タートルを貫くメインシャフト船尾側のケーブルダクトで繋がってます。で、ケーブルには、一箇所だけ点検用のコネクタがあったはずッス。第二ＳＴＬ室からダクトに侵入してハシゴを降りて、点検コネクタにラップトップを接続すれば、桐ヶ谷君のＳＴＬを操作することは可能です」
比嘉のアイデアを聞いた菊岡は、一瞬だけ虚を衝かれたように黒縁メガネの奥の両眼を見開いたが、すぐに厳しい表情を取り戻すと反駁した。
「しかし確か点検コネクタは、襲撃者と我々を分断している耐圧隔壁の向こう側だぞ。コネクタにアクセスするためには、現在ケーブルダクトを閉鎖している隔壁のロックを一時的に解除しなくてはならない。ダクトはメインコン横の第一ＳＴＬ室からもアクセスできるし、ロック解除に気付かれたらこっちの作戦を看破されて、下から攻撃される可能性もある」
「そこは、囮作戦でいきましょう」

「オトリ……だと？」

菊岡の眼光がひときわ鋭くなるが、比嘉は素早くかぶりを振った。

「もちろん、貴重な人員を投入しようってわけじゃないッス。隔壁のロックを解除したら、ダクトの反対側にある人間用の階段から下に突入させるんス……あれを」

「なるほど……《イチエモン》だな。幸い、あれはアッパーシャフトの倉庫に保管されている。誰か、ここまで運んできてくれないか」

菊岡の指示で、壁際に座って話を聞いていたスタッフが二人、小走りに部屋から出て行く。いっぽう神代博士は、心配そうな表情で口を開く。

「ちょっと……イチエモンを囮にするって、あれはまだ階段をゆっくり上り下りすることしかできないわよ。敵の注意を引いて、すぐに駆け戻ってくるなんて真似は不可能よ」

イチエモン、正式名称《エレクトロアクティブ・マッスルド・オペレーティブ・マシーン1》は、人工フラクトライト搭載用人型マシンボディの実験機だ。金属の骨格をポリマー筋肉で駆動する、いわゆる人型ロボット。実験機ゆえに見栄えのいい外装など一切取り付けられておらず、メカとワイヤーが剝き出しなので、防弾性能はまったく存在しない。

昨日、比嘉にイチエモンの自律歩行用バランサーの調整を頼まれた凛子は、あれこれ文句を言いながらもけっこう真剣に取り組んでくれたので、《イチエモン囮作戦》には思うところもあるのだろう。もちろん比嘉自身も大いに残念だが、いまは機材の出し惜しみをしている場合

ではない。

「……イチエモンには悪いですけど、頑張って貰うしかないッス。ただ、見た目がアレなんで、敵も爆発を恐れていきなり撃ったりはしないかもしれません」

「……そうね……」

そんな会話を交わしているとスライドドアが開き、大きな台車がごろごろと運び込まれた。体育座りの姿勢で載せられているのは、無骨な頭部に三つのレンズを備えた、いかつい機械人形。

神代博士は複雑そうな表情でイチエモンを眺め、すぐに振り向いた。

「……まあ、確かにこの外見なら大いに目立つし、こっちが何かとんでもないことを企んでいるように思わせられるでしょうけどね……」

「少なくとも、無視はできないはずッス。敵がイチエモンに対応しているあいだに、僕がケーブルダクト下部に侵入、点検コネクタから桐ヶ谷君のSTLを操作します。問題は、こいつが何分時間を稼いでくれるか、ですね……」

比嘉のその言葉を聞いた菊岡が、組んだ足先で下駄を揺らしながら言った。

「いっそ、《ニエモン》も投入できないのか？」

「残念ながら無理ッス」

大きく肩をすくめながら即答する。

「確かに機体の性能はニエモンのほうが上ですが、あいつは完全に人工フラクトライトによる制御を前提としてますから、イチエモンと違って自律バランサーを搭載してないんス。いまの状態じゃ、階段を下り始めた途端に転ぶッスよ」

「そうか……」

頷く指揮官から外した視線を右に向けると、凛子は何やら奇妙な表情で床の一点を見ていたが、すぐに我に返った様子で訊ねてきた。

「でも、比嘉君。隔壁のロック解除はそれでごまかせたとしても、君が発見される危険が完全に消滅するわけじゃないわ。やっぱり、ケーブルダクトには護衛してくれる人を連れていったほうがいいんじゃないの？」

「……いえ、いまとなっては自衛官スタッフは貴重すぎる戦力ッス。それに、あんなクソ狭いダクトを素早く移動できるのはガリチビの僕くらいッスよ。さっと行って、さっと帰ってきますから」

いつもの口調でそう答えたものの、具体的な状況を想像すると、心拍が少しばかり加速した。もしも敵に発見され、ダクトの下側から拳銃で撃たれたら逃げようがない。オーシャン・タートルが襲撃された時も、銃撃の音を聞いただけで、敵戦闘員の姿を目視さえしていないのだ。

――けれど。

僕は……いやラースという組織そのものが、桐ヶ谷君に大きすぎる借りがあるんだ。

比嘉タケルは、その思考を、改めて脳裏に刻みつけた。

記憶をブロックしたとはいえ、現実世界で三日、アンダーワールド内部では十年もの長時間ダイブを彼に強いて、人工フラクトライトたちに重要なトリガーを与えてもらった。限界突破フラクトライトである《アリス》の誕生には、間違いなく和人がその最初から最後まで深く介在している。

さらにその後、治療目的ではあるがリミッターを解除したSTLに接続させ、結果としてフラクトライトに重大なダメージを与えてしまった。しかもそれは、彼がアリスを守ろうとしてアンダーワールドの支配組織と苦しい戦いを繰り広げ、多くの仲間を失ったせいでもあるのだ。ならば、彼を治療できる可能性がある限り、どんなリスクを冒してでもそれに挑戦しなくてはならない。そうでなくては、一生顔向けできない。

比嘉タケルはぐっと両拳を握り締め、菊岡に頷きかけた。

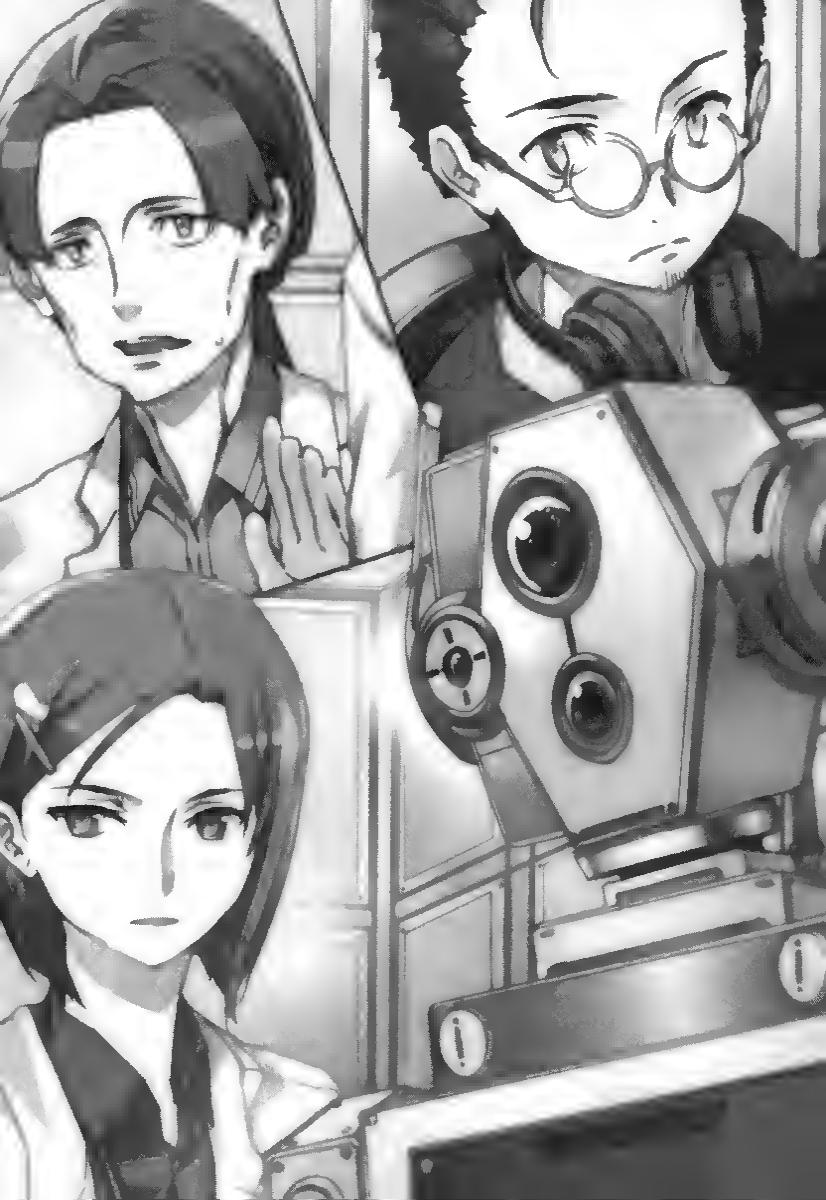
その時だった。

第四の声が、サブコントロール・ルームに響いた。

「あのぉ……私も、比嘉チーフと一緒に行きます……」

全員の視線を集めたのは、いままで壁際のマットレスに座っていた、ラース技術スタッフの一人だった。

比嘉に負けず劣らず小柄だが、長く伸ばした髪を後ろで束ねている。勇気ある申し出をした



わりには少々ぎこちない動作で立ち上がり、言葉を続ける。
「私もこんなにガリガリですし……でも、チーフの弾除けくらいにはなるかな、って……。それに、これまでケーブルまわりの保守してきたの、私ですから……」
聞き取りにくい声で話すその男性スタッフの顔を、比嘉はまじまじと見つめた。
かなり年上、恐らくは三十代半ばだろうか。オーシャン・タートルに何ヶ月も乗っていたにしては肌が白い。確か、大手ゲーム開発会社を辞職してラースに参加した人物だったと記憶している。
戦力的には自衛官とは比較にもならないだろうが、正直、道連れができるのは心強い。比嘉は椅子から立ち上がると、スタッフに深く頭を下げた。
「……ほんとのトコ、点検コネクタの位置をいまいち覚えてないんスよね。ありがたく同行をお願いします、柳井さん」

2

現実世界に帰還したガブリエル・ミラーは、ＳＴＬ二号機の中でゆっくりと瞼を持ち上げた。

正しくは、帰還ではなく予定外の放逐と言うべきだった。ジェルベッドに横たわったまま、ガブリエルはかすかな驚きの味を口中に転がした。

よもやこの自分が、仮想世界での一対一での戦闘で敗れるとは。しかも相手は人間ではなく、ＡＩだったのだ。

あの騎士に敗れた理由がなんなのか、ガブリエルは貴重な数秒間を費やして考えようとした。意志の強さ？　魂の絆？　人と人とを繋ぐ愛の力……？

――馬鹿馬鹿しい。

ガブリエルは、唇の端に仄かな冷笑を浮かべた。現実世界だろうと仮想世界だろうと、眼に見えない力があるとすれば、それはただ一つ――この自分を導く運命の力だけだ。

つまり、敗れたのは必然だ。それが必要だったからだ。運命は、暗黒神ベクタなどという借り物のアバターではなく、ガブリエル自身の姿で戦うことを欲している。正しいやり方で、もう一度あの世界に降り立つことを求めているのだ。

ならば、そうするまでだ。

思考を終え、ガブリエルは音もなくシートから降り立った。

もう一台のSTLに眼を向けると、意外にも副官のヴァサゴ・カザルスがまだダイブを継続している。とっくに死亡し、ログアウト済みかと思っていたのだが、この男もまた何か求めるものを見出したのだろうか。

――まあ、好きにすればいい。

肩をすくめ、ガブリエルは隣接するメインコントロール・ルームへ続くドアを開けた。コンソールに向かっていた坊主頭の隊員が顔を上げ、緊張感のない声を放ってくる。

「おつかれです、隊長。いやー、やられちまいましたねえー」

「状況は」

そっけなく訊ねると、クリッターはやや表情を改めて報告を返した。

「えー、指示されたとおり、アメリカ中から掻き集めたプレイヤー五万人を順次投入しました。すでに半数が損耗していますが、まあ人界軍の殲滅という目的は達せられるでしょう。不確定要素としては、ラース側も同様の手段に出まして……戦場に、日本からの大規模接続が確認されました。数は二千程度なので、大きな問題にはならないと思いますが」

「フム……？」

ガブリエルは片眉を持ち上げ、メインスクリーンを見上げた。

そこにはアンダーワールド南部の地形図が表示されている。《東の大門》から一直線に南へ

と延び、×印で途切れている黒いラインは、暗黒神ベクタことガブリエルの移動ログだろう。世界の南端に存在するシステム・コンソールまではまだ半分も来ていないが、アリスはいまも×印の地点に留まっているはずだ。

そして、黒いラインを追いかけるように、太い白ラインも南下している。これが人界軍だろう。いまは密に固まり、停止しているようだ。

その白い人界軍を、赤で表示されている大軍が押し潰そうとしている。これがアメリカ人のＶＲＭＭＯプレイヤーだとすると、白と赤のあいだに防壁のように広がる青い光が、日本からの接続者二千――というわけか。

「この日本人たちが使用しているのは、人界軍のデフォルト・アカウントなのか？」

「だと思いますがねー。それが何か？」

「いや……」

クリッターが渡してきたミネラルウォーターのペットボトルに口をつけながら考える。

日本のＶＲＭＭＯ中毒者たちが、その半身、いやある意味では現実の自分自身以上の存在であるキャラクターを、アンダーワールドにコンバートするなどということが有り得るだろうか？

いや、まさか。ガブリエルは再度、冷たい笑みを浮かべた。

半月ほど前に参加した、ＶＲＭＭＯ《ガンゲイル・オンライン》日本サーバーのＰｖＰ大会でガブリエルにあっけなく全滅させられた程度の若者たちが、興味本位でアンダーワールドに

接続することはあっても、自分のキャラクターが喪失するリスクを冒すはずはない。

短く回想した大会のラストで、必殺のチョークスリーパーに捕らえられながら最後まで諦めようとしなかった水色の髪の女スナイパーのことがちらりと脳裏を過ぎったが、ガブリエルはすぐに思考の流れを戻した。

「――よし、私はもう一度ダイブする。このアカウントを、アンダーワールドにコンバートしろ」

ちょうどコンソールに転がっていたペンと紙切れでＩＤとパスワードを書いて渡すと、クリッターが奇妙な顔をした。

「おや、隊長もですか」

「も……とは」

「いやー、ヴァサゴの野郎も一度死に戻ったんですがね。なんかやたら嬉しそうな顔で、自前のアカウントをコンバートしてまた潜りましたよ」

「……ほう」

ガブリエルは、クリッターの手許に落ちている紙片に眼を向けた。ヴァサゴのものであろうＩＤの先頭に並ぶ、三つのアルファベットが鮮やかに浮き上がる。

「……なるほど。なるほどな」

くくっ、と珍しく本物の笑いが喉から零れた。いっそう訝しげな顔をするクリッターの肩を

ぼんと叩き、言う。

「気にするな。ああ見えて、あの男にもあるんだろう……しがらみというものが。では、よろしく頼むぞ」

きびすを返して再びＳＴＬ室に向かうあいだも、ガプリエルの唇には歪んだ笑みが張り付いていた。

＊＊＊

同時刻、ヴァサゴ・カザルスもまた、黒いフードの下でにやにやと笑いながら眼下の戦場を眺めていた。

遺跡参道の入り口に立つ神像の頭上からは、アメリカ人プレイヤーと日本人プレイヤーが血みどろの殺し合いを繰り広げるさまが一望できる。

いや、正確に表現するならば、それは一方的な殺戮と呼ぶべきものだろう。

参道入り口を中心に、広い半円を描いて布陣する二千人の日本人たちは、殺到する赤い歩兵集団をほとんど損耗することなく斬り倒していく。装備の性能や連携力の差も大きいが、後方の支援体制の厚さが決定的だ。傷を負ったプレイヤーは即座に参道の奥に築かれた陣地に運び込まれ、回復呪文で傷を癒して、また元気に前線へと駆け戻っていく。

現実世界と同じ痛みの存在するアンダーワールドに於いて、彼らの士気の高さは見上げたものだった。それを言うなら、二千ものプレイヤーが、自らのメインキャラクターをコンバートしてまで参戦したこと自体が大いなる奇跡だ。

ガブリエル・ミラーすらも、有り得ないと否定したこの状況を――。

しかしヴァサゴ・カザルスは、ほぼ正確に予測していた。

アメリカからの接続が可能なら、日本からも人界サイドの援軍が来るであろうこと。そしてそれは、コンバートを利用して行われるだろうということまでも、ヴァサゴは見抜いたのだ。

彼はいま、獅子奮迅の活躍を見せる日本人プレイヤーたちの中に、《閃光》アスナ以外にも何人か覚えのある顔を見出し、心の底から喜んでいた。

もう二度と味わえないだろうと諦めていたあのデスゲームが、形を変えて再び出現したのだから。

いや、もちろん、この世界で死んでも現実世界のプレイヤーたちが本物の命まで奪われるわけではない。

しかしアンダーワールドには、あの浮遊城にはなかったものがあり、あったものがない。

つまり――。

《苦痛》があり。

《犯罪防止コード》がない。

ならば、きっと大いに楽しめるはずだ。あるいは自分の手で直接命を奪う以上の興奮さえも。

「くく、くくく、くっくっくっく」

堪えきれず、ヴァサゴはフードの下でひそやかな笑いを漏らした。

＊＊＊

――間に合わなかった。

シノンは、壮年の剣士の傷だらけの骸と、それに取りすがって泣く黄金の女性騎士を言葉もなく見詰めた。

騎士の傍らでは、二頭の巨大な飛竜が、嘆きを共有するかのように頭を垂れている。

世界の行く末を左右する《光の巫女》アリスと、彼女を攫った暗黒神ベクタ、そして二人を追跡する騎士長ベルクーリに追いつくために、シノンは必死に飛行した。ＡＬＯで猛特訓した随意飛行の技術を発揮し、システムが許す限りの速度で南を目指したのだが、ようやく追いついた時にはもう戦闘は終わってしまっていたのだ。

いや――讃えるべきは、ベルクーリの力だろう。

追いつくはずのないベクタの飛竜に追いつき、斃せるはずのないスーパーアカウントを斃したのだから。

しかし、ここに一つの巨大な不条理がある。

騎士長ベルクーリは死に、その魂は永遠に失われた。なのに同じく死んだはずの暗黒神ベクタの魂は、その限りではないのだ。

シノンは、ようやく泣き止んだものの虚脱したように俯くばかりのアリスに、危機が去ったわけではないことを告げねばならなかったが、言葉が見つからなかった。

貴重な数分間が沈黙のうちに流れ、先に声を発したのは、騎士アリスのほうだった。

頬を涙に濡らしながらも、凄絶なまでのアリスの美しさに息を呑むシノンを、水面のように輝くコバルトブルーの瞳がまっすぐに射た。桜色の唇が小さく動き、白銀の鈴の音を思わせる声が響いた。

「あなたも……リアルワールドから来たのですか」

「ええ……」

シノンは頷き、どうにか口を動かした。

「私はシノン。アスナとキリトの友達。暗黒神ベクタから、あなたとベルクーリさんを助けるために来たんだけど……ごめんなさい、間に合わなかった」

激闘の痕跡が残る岩山に膝を突き、頭を下げるシノンに向かって、アリスはそっとかぶりを振った。

「いえ……。私が愚かだったのです。背後を警戒もせず、赤子のように攫われてしまった私の

咎です。小父様の……偉大なる整合騎士長のお命に、私ごときの命、到底見合うものではないのに」

その声に滲む深い悔恨と自責の響きに、シノンは言葉を失った。アリスは懸命に涙を堪えるような表情で、新たな問いを口にした。

「戦況は、どうなっていますか」

「……アスナと人界軍が、リアルワールドから来た赤い軍勢を何とか防いでる」

「ならば、私も北へ戻ります」

よろめきつつも立ち上がり、片方の飛竜に向かおうとしたアリスを、シノンは呼び止めた。

「それはだめよ、アリスさん。あなたはこのまま南の、《果ての祭壇》に向かって。祭壇にあるコンソール……いえ水晶板に触れれば、リアルワールド側から呼びかけてくるはず」

「なぜです。皇帝ベクタはもう死んだのでしょう」

「……それが……そうではないの」

そしてシノンは、アリスに説明した。リアルワールド人は、アンダーワールドで死んでも、本当の命を失うわけではないこと。皇帝ベクタに宿っていた敵が、いまこの瞬間にも新たな姿を得て再び襲来しかねないことを。

アリスの反応は、これまでどうにか抑え込んできたあらゆる感情が炸裂したかのような、凄まじい怒りだった。

「小父様が……命を捨ててまで刺し違えた敵が、死んでいないと!?　ただいっとき姿を消し、何事もなかったかのように甦ると……そう言うのですか!?」

がしゃりと黄金の鎧を鳴らし、アリスはシノンに詰め寄った。

「そんな……そんな、ふざけた話が許されるものか……!!　では……小父様は何のために……何ゆえに死なねばならなかったのですか!!　一方の命しか懸かっていない立ち合いなど、まるで……まるでただの、茶番ではないですか……」

蒼い瞳から、再びの涙が溢れるのを、シノンはただ見詰めることしかできなかった。

――私には、何を言う資格もない。

GGOやALOでの戦いで、数え切れないほど死んできた私には。そして、この世界では、暗黒神ベクタと同じく死んでも死なない私には――。

しかしシノンは、大きく息を吸い、アリスの双眸をしっかり見据えて言った。

「なら……アリスさん、あなたは、キリトの苦しみも偽物だと言うの？」

瞬間、黄金の騎士が鋭く息を呑む。

「キリトもリアルワールド人よ。この世界で死んでも、本物の命までは失わない。でも、彼が受けた傷は本物。彼が感じた痛みは、傷ついた魂は、本物なのよ」

再び少し間を置き、唇に淡い笑みを浮かべて続ける。

「……私はね、キリトが好き。大好きだわ。アスナだってそう。他にも彼のことが好きな人は

いっぱいいる。その全員が、キリトのことを心配してる。元気になって、って必死に祈ってる。そして、言葉にはできなくても、何でキリトがそこまでしなきゃいけなかったの、って思ってるわ」

アリスの両肩にそっと手を置き、シノンははっきりした声で言った。

「キリトが傷ついたのは、あなたを助けるためなのよ、アリス。そのためだけに、彼はあんなになるまで頑張った。彼のその気持ちまで、あなたは偽物だって言うの……？　いえ、キリトだけじゃないわ。騎士長さんだってそう。あなたを助けるために、こんなに傷だらけになって、命を懸けて機会を作ってくれたのよ。あなたが、敵の手から脱するための貴重な時間を」

答えは、すぐには返らなかった。

アリスは、横たわるベルクーリの骸を、しばし無言で見詰めていた。

再び、瞳から大粒の涙がぽろりと零れ――そして黄金の騎士は強く瞼を瞑り、何かに耐えるように顔を上に向けた。そのまま、掠れた声で問いを発する。

「シノン。私は……私は《果ての祭壇》からリアルワールドに出ても、もう一度この世界に戻ってこられますか？　愛する人たちに、もう一度会えますか……？」

アリスの切実な言葉に、確実な答えを返すための知識はシノンの中にはなかった。確かなのは、アリスが敵の手に落ちれば、アンダーワールドそのものが全て破壊され、消滅してしまうだろうということだけだ。

世界とアリスが守られれば、きっと望みは叶えられる。いまはそう信じるしかない。

だから、シノンはゆっくりと頷いた。

「ええ。あなたが……そしてこのアンダーワールドが、無事でいれば」

「……解りました。ならば、私は南へ向かいましょう。《果ての祭壇》に何が待つのかは知りませんが……それが小父様の、そしてキリトの意志ならば」

アリスはふわりと白いスカートを広げて跪き、横たわるベルクーリの髪を優しく撫でると、額に唇を触れさせた。

立ち上がった時、女性騎士の全身には、見違えるようなオーラが漲っていた。

「雨緑、滝剋。もう少しだけ頑張ってね」

二頭の飛竜にそう言葉を掛けてから、アリスはシノンに視線を向けた。

「あなたは……どうするのですか、シノンさん」

「今度は、私がこの命を使う番だから」

にこりと微笑みかけ、シノンは言葉を続けた。

「暗黒神ベクタは、この場所に復活すると思う。私は、何とか倒せるように……少なくとも充分な時間が稼げるように、頑張ってみる」

アリスは軽く唇を噛み、頭を下げた。

「……お願いします。あなたのお心を、決して無駄にはしません」

南の空へと飛び去っていく二頭の飛竜を見送り、シノンは右肩にかけていた白い長弓を手に戻した。

オーシャン・タートルを襲撃したのは、アメリカ政府機関に支援された民間軍事会社である可能性が高いという。そして、戦闘員の一人がスーパーアカウント04・暗黒神ベクタに宿り、アリスを襲った。

現実世界では、一高校生に過ぎないシノンには到底抗いようもない相手だ。

しかしこの場所でなら。仮想世界での、一対一の戦闘ならば。

誰が来ようと勝ってみせる。

強く自分にそう誓い、シノンはただ、敵が再ダイブしてくるその瞬間を待った。

＊＊＊

振り抜いた右拳から、最後の骨が折れる乾いた音が伝わってきた。

拳闘士団長イスカーンは、胸当ての真ん中を打ち抜かれて大の字に倒れる敵から視線を外し、己の右手を無言で眺めた。

そこにあるのはもう、あらゆる物を打ち砕いてきた鋼鉄の拳骨ではなかった。粉砕された骨

と引き裂かれた肉、そして血が詰まる、ぐずぐずに腫れた皮の袋だった。

左拳は少し前から同じ状態になっている。両脚も血まみれのアザだらけで、蹴ることはおろか走ることすら不可能だろう。

「……見事な闘いぶりでしたよ、チャンピオン」

副官ダンパの掠れた声に、ちらりと後ろを見る。

地面に座り込んだ巨漢は、両腕を完全に喪失してからも頭突きと体当たりのみで戦い続けた証として、顔と体に幾筋もの刀傷を刻まれていた。常に闘志と知恵を湛えて光っていた両眼はおぼろに霞み、ダンパの天命がいままさに尽きかけていることを示していた。

イスカーンは、勇士の魂に敬意を表すべく、砕けた右拳を掲げてから答えた。

「まァ、これなら、あの世で先代に会っても恥ずかしくねえ死に様だろう」

脚を引きずって副官の隣まで移動し、崩れるように座り込む。

二万を超えていた赤い軍勢は、長時間の激戦を経て、三千ほどにまで減っている。しかしその代償として、拳闘士団もわずか三百人程度が残るのみとなっていた。しかも全員が満身創痍、もう満足に陣形も組めず、ひとところに固まってただ押し潰されるのを待っているに過ぎない。

周囲をぐるりと取り巻く三千の敵兵が、一気呵成に最後の突撃を仕掛けてこないのは――。

イスカーンとダンパの視線の先で、鬼神の如き戦闘を続ける、一人の騎士と一頭の飛竜の存在ゆえだった。

＊＊＊

肉体と精神の消耗は、完全に限界を超えていた。

整合騎士シェータ・シンセシス・トゥエルブは、それでも霞む視界に敵の影を知覚すると、鉛のように重い右腕を動かし、黒百合の剣を振りかぶった。

びう、と鈍い風切り音。

極細の刀身が、敵の鎧の肩口に食い込む。反動で、手首から肘にかけて無数の針に刺されるような痛みが弾ける。

「は……あぁぁぁぁッ!!」

《無音》の二つ名にまったく似つかわしくない、ひび割れた気合を喉から絞り出す。剣がどうにか分厚い装甲を割り、その下の体を一直線に切り裂く。

意味の取れない罵声とともに倒れる敵兵から刀身を引き抜き、シェータは荒く息をついた。

これほどまでに疲労困憊した理由は、無限とも思われる敵の数もさることながら、赤い兵士たちの奇妙な手応えゆえだった。

心意が通じにくいのだ。武器も鎧も、シェータの神器と比べれば遥かに優先度が劣る代物のはずなのに、切断に際して不快な抵抗感がある。同じことが、敵の攻撃にも言えた。力任せの

粗雑な斬撃ばかり繰り出してくるくせに、なぜか技の流れを読みにくいのだ。

まるで、影と戦っているようだった。ほんとうにはこの場にいない者たちを、どこか遠くから映し出した影絵の軍隊。

彼らとの戦いは、まるで楽しくなかった。斬るためだけに生きているはずの自分が、この影たちを斬ることに、強い嫌悪しか感じていないことをシェータは自覚した。

――なんでだろう。

――相手が影だろうと生身だろうと、それどころかただの石像だとしても、硬ければ私は満足できたはずなのに。斬ることしか知らない人形、それが私なのに……。

極細の刀身に最大級の優先度を秘めた神器、黒百合の剣。それは切断のためにのみ造られた道具であり、またシェータ自身の似姿でもあった。斬ることを止めれば、存在する意味は完全に失われてしまう。

最高司祭アドミニストレータは、シェータが暗黒界の古戦場から持ち帰った一輪の黒百合を、一振りの剣に組成変換した。それをシェータに下賜しながら、こう言った。

――この剣は、あなたの魂に刻まれた呪いを形にしたものよ。形質遺伝パラメータの揺らぎが生み出した、殺人衝動という名の呪いをね。斬って、斬って、斬り続けなさい。その血塗られた道の果てにのみ、あなたの呪いを解く鍵がある……かもしれないわ。

その時は、最高司祭の言葉の意味は解らなかった。

シェータは、言われた通り、無限に等しい年月にわたってひたすら斬り続けてきた。そしてついに、最高の好敵手に巡り合った。これまで刃を通して触れ合った、全ての人、全ての物より硬い一人の拳闘士に。

もう一度、あの人と戦いたい。戦えば、ようやく何かが解るかもしれないから。

その思いだけに衝き動かされ、シェータは人界軍と別れてこの戦場に残ったのだ。なのに、どうやら赤い髪の闘士との再戦は叶いそうになかった。

一口ぶんだけ残っていた水を喉に流し込み、空になった革袋を捨てながらちらりと後方に眼を向ける。

離れた岩の上に座る、傷だらけの拳闘士の長が見えた。左の瞳になぜか悲しそうな色を浮かべ、じっとシェータを見詰め返してくる。

不意に、ずきん、と胸が疼いた。

――この痛みは、なんだろう。

――私は、あの人を斬りたいはずなのに。何もかも焼き尽くすような戦いをもう一度味わいたい、そしてあの金剛石よりも硬い拳を断ち切りたい、それだけが私の望みだったはずなのに。なのになんで、こんなふうに胸が……締め付けられるんだろう……。

きしっ。

不意に、かすかな音が右手で響いた。

シェータは黒百合の剣を持ち上げ、無言で眺めた。あらゆる光を吸い込むような漆黒の刀身の中央に、蜘蛛の糸よりも細い亀裂がひとすじ走っている。

ああ……

そうか。

シェータは大きく息を吸い込み、そして微笑んだ。

あらゆる疑問が、たったいま氷解した。アドミニストレータの言葉の意味、呪いとは何なのかを、シェータはついに悟った。

どすどすという地響きに視線を戻すと、次の敵兵が、無骨な戦鎚を振り上げて突進してくるところだった。

シェータは滑らかな足捌きで敵の初撃を回避し、右手の剣を赤い鎧の中央に突き入れた。

最後の攻撃は、まったくの無音だった。心臓に滑り込むように、しなやかに敵の命を絶った黒百合の剣が——その中ほどから、最後まで一切の音を発することなく、無数の黒い花弁を散らしながら砕けた。

はらはらと崩れ落ちていく手中の柄を、シェータは名残惜しく口許に近づけて呟いた。

「……長いあいだ、ありがとう」

一瞬、さわやかな花の香りが漂った気がした。

右側では、長年連れ添った騎竜である宵呼が、尾の一撃で敵兵を叩き潰したところだった。

灰色の鱗は、無数の傷から溢れ出た血で赤く染まり、爪や牙もほとんど欠けている。熱線はもう吐き尽くし、動きは見る影もなく緩慢だ。

敵の突撃がいっとき途絶えたのを確認し、シェータは愛竜に歩み寄ると、首筋に右手を這わせた。

「あなたも、ありがとう、宵呼。疲れたね……もう、休もう」

そしてシェータと飛竜は、互いに助け合いながら、拳闘士団の生き残りが固まる低い丘に向かった。

拳闘士の長は座ったまま、いまにも弾けてしまいそうなほど腫れ上がった右手を持ち上げてシェータを迎えた。

「すまねえ……大事な剣、折らしちまったな……」

詫びる言葉に、シェータはかぶりを振って答えた。

「いいの。やっと、解ったから。私がなぜ、あらゆるものを斬り続けてきたのか……」

がくりと地面に膝を突くと、両手を持ち上げ、若い闘士の顔を十本の指でそっと挟む。

「斬りたくないものを見つけるため。守りたいものを見つけるために、私は戦い続けてきた。それは、あなた。だからもう、剣は必要ない」

一瞬、大きく見開かれた拳闘士の左眼に、透明な雫が湧き上がるのをシェータは少し驚きながら見つめた。

若者は、きつく歯を食い縛り、喉を鳴らしながら囁いた。

「ああ……ちきしょう。アンタと、所帯を持ちたかったな。きっと、強ぇガキが生まれたろうにな。先代より、オレよりずっと強い、最強の拳闘士になれる子がよ……」

「だめよ。その子は、騎士にするわ」

二人は短く見つめ合い、同時に微笑んだ。優しい表情の巨漢に見守られながら、シェータとイスカーンは一瞬だけ抱き合い、並んで座った。

三百人の拳闘士と一人の整合騎士、そして一頭の飛竜は、赤い歩兵たちがじりじりと包囲の輪を縮めてくるのを、ただ無言で待った。

＊＊＊

「どうやら大勢は決した……ってヤツかな、こりゃ」

アスナは、同時に後方の陣地へ戻ってきたクラインの言葉に、「そうね」と応じた。

幾らか手傷を負った二人を、魔法職の日本人プレイヤーが、覚えたばかりの神聖術で癒していく。本職のアンダーワールド人修道士の、イマジネーションを利用して効果を増幅する技術までは真似できないものの、ハイレベル・キャラクターのコンバートによる高い術式行使権限ゆえに、治癒力は必要にして充分なものがある。

「助けに来てくれて、本当にありがとう」

女性の術師プレイヤーに礼を言ってから、隣のクラインにも同じ言葉を掛ける。

「あなたもありがとう、クライン。何てお礼を言ったらいいか……」

言葉を詰まらせるアスナを見て、クラインは照れくさそうに鼻の下を擦った。

「おいおい、水臭ぇよ。お前さんとキリトの野郎にゃ、これくらいじゃ返しきれねえほど借りがあるからな。……あいつも、いるんだろ、ここに？」

声をひそめるクラインに、アスナはそっと頷いた。

「ええ。戦闘が終わったら、会ってあげて。クラインがいつもの下らないギャグをかませば、突っ込みたくて目を覚ますかも」

「あーあ、ひでぇなあ」

いつもの陽気そうな表情で破顔しながらも、クラインの眼には深い気遣いが浮かんでいた。彼もすでに知っているのだ。キリトが魂に受けてしまった傷の深さを。

――ああ、でも、本当に。

全てが無事に解決し、敵がアンダーワールドからもオーシャン・タートルからも撃退されて、シノンやリーファやクラインたち元ＳＡＯ攻略組、サクヤやアリシャたちＡＬＯ組……そしてアリスやティーゼ、ロニエ、ソルティリーナたちに囲まれれば、キリトも目覚めずにはいられないかもしれない。

その瞬間を笑顔で迎えるためにも、いまは頑張らなくては。

傷が癒えるや否や、アスナはもう一度術師プレイヤーに礼を言って立ち上がった。

クラインの言うとおり、すでに戦闘の趨勢は決していると言っていい。赤いアメリカ人プレイヤーたちの数は日本人と同程度にまで減少し、戦意を喪失したかのようにやけっぱちな突撃を繰り返すのみだ。

しかし、この古代遺跡での戦闘は、前哨戦に過ぎない。

問題は、皇帝ベクタに拉致された《光の巫女》アリスだ。騎士長ベルクーリ、それにシノンがどうにか足止めしてくれているうちに、皇帝に追いついてアリスを奪回せねばならない。コンバート組から最精鋭のチームを編成し、人界軍の馬を借りて全速力で南下するのだ。

追いつきさえすれば、たとえ敵がスーパーアカウントを使っていようが、日本のトッププレイヤーを結集した選抜チームに敵うはずがない。そう断言できるほど、彼らの力は圧倒的だ。勇猛に戦う剣士たちの剣や盾や鎧が、陽光を反射して七色に輝く様子は、まさしく北欧神話の不死の軍勢のようだ……。

滲みかけた涙を拭い、アスナは視線を前線から最後方へと向けた。

遺跡参道の入り口付近では、補給隊の馬車も奥から引き出され、即席の陣地が築かれている。傷ついた日本人たちが、アンダーワールド人たちに術式で癒されている光景は、これも言葉にできないほど貴く感じられた。

「……大丈夫、何もかもうまくいくわ……きっと」
独りごちた言葉に、隣のクラインが力強い相づちを入れた。
「おうさ。さて、俺らももう一頑張りしてこようぜ！」
「ええ」
頷き、再び最前線へと向き直りかけたアスナは――。
視界の端を掠めた何かに注意を引かれ、ぴたりと動きを止めた。
――何だろう。何か、黒い……暗い、染みみたいな……。
しばし視線を彷徨わせたアスナは、ようやく、それを見つけた。
遺跡参道の両側に立ち並ぶ、巨大な神像。
その右側、一番手前の像の頭上に、誰かが立っている。
逆光のせいでよく見えない。赤いダークテリトリーの空に滲むように揺れる、黒い影。
戦場から逃げ出したアメリカ人だろうか？　それとも、偵察を買って出た日本人？
訝しみながら眼を凝らすと、そのシルエットが不気味に揺れているのは、黒いハーフマントを羽織っているからだと解った。フードを目深に引き下げているので、顔はまったく見えない。
しかし。
「ねえ、クライン。あの人……」
前線に向けて走り出しかけたクラインの袖を引っ張りながら、アスナは左手を伸ばした。

「あそこに立ってる人、なんだか見覚えがある気がしない……？」
「へ……？　ありゃ、あんなとこで見物してやがる。誰だよまったく……見覚えっつったって、あんなカッパ着てりゃあ、顔……なんか……」
クラインの声が、突然途切れた。
アスナが眼を向けると、無精ひげの浮いた顔が、紙のように色を失っている。
「ちょっと、どうしたのよ。思い出したの？　誰だっけ、あの人？」
「いや……まさか。ありえねぇよ、そんな……。亡霊を……見てるのか……？」
「ぼ、亡霊……？　どういうこと？」
「だ……だってよう、あの黒いカッパ、いや革ポンチョは……ラフコフの……」
その単語を聞いた瞬間。
アスナも、頭の芯が氷のように冷えていくのを感じた。
ラフコフ。正式名称、《ラフィン・コフィン》。デスゲームＳＡＯの中期から後期にかけて、浮遊城アインクラッドに恐怖を撒き散らした最強の殺人者ギルドだ。
《赤眼のザザ》や《ジョニー・ブラック》といった有名ＰＫｅｒが多く所属し、無数の一般プレイヤーをその毒牙に掛け……最終的に、攻略組プレイヤーによる合同討伐隊との死闘を経て壊滅した。
その戦いで、ラフィン・コフィンのほぼ全てのメンバーは死亡するか黒鉄宮送りとなったが、

しかしただ一人だけ逃げ延びた者がいたのだ。急襲したアジトになぜか姿がなかったギルドリーダー、直接的、間接的にＳＡＯで最も多くのプレイヤーを殺した男。その名前を――《ＰｏＨ》と言った。

常に黒い革ポンチョを身にまとい、肉切り包丁じみた大型ダガーを装備していた殺人鬼が、二年の時を経て、アンダーワールドの中でアスナとクラインを見下ろしている。

「……嘘、よ」

アスナも、掠れた声で囁くことしかできなかった。

幻だ。亡霊を見ているのだ。

消えて。消えてよ。

しかし、陽炎に揺れる黒いシルエットは、アスナの願いを嘲笑うかのように、ゆるりと右手を持ち上げた。そして、からかうような動きでひょいひょいと左右に振った。

続く光景は――。

これまでで最悪の悪夢に他ならなかった。

黒いポンチョ姿の隣に、滲み出すように新たな人影が現れた。二人、三人。

そして、神像の背中が接する巨大な遺跡宮殿の屋上に、ごそりと赤い集団が出現した。左側の宮殿屋上にも、ぬっと数十人規模の影が湧き出す。

――やめて。もう、やめて。

アスナは懸命に祈った。これ以上の絶望には、心が耐えられそうになかった。なのに。

新たな赤い軍勢の湧出は、尽きることなくいつまでも続いた。千、五千、一万人。ついに三万を超えたところで、アスナは数を把握しようとするのをやめた。

有り得ない。

アメリカ人プレイヤーは、五万もの大人数が苦痛とともにログアウトさせられたばかりなのだ。これほどの大軍勢を、こんな短時間で新たに用意できるはずはない。と言って、日本人のはずもない。日本でアンダーワールドへの偽装誘導が行われたら、クラインたちが真っ先に気付いただろう。

幻だ。あれはみんな、術式で作り出された実体なき影なのだ。

いつしか、アメリカ人プレイヤーとの戦いにほぼ勝利した前線の日本人プレイヤーたちも、手を止めて振り返っていた。広大な戦場に、奇妙な静寂がしんと張り詰めた。

さわさわ。ざわざわ。

宮殿の屋上を埋め尽くす赤い大軍勢が放つさざめきが、不吉な風のようにアスナの耳に届いた。

混ざり合い、溶け合ったそれが何語なのか、咄嗟に判らなかった。懸命に耳を澄ませると、やや大きな声で発せられた幾つかの言葉が、どうにか聞き取れた。

……ピゴパン・イルボニン。
……ウリ・ナラルル・チキラ。
……ガンチュー・レンメン。

英語ではない。日本語でもない。
その時、隣のクラインが、声にならない声で呻いた。
「ああ……やべえ……やべえぞこりゃ……。あの大軍のでどころは、日本でもアメリカでもねえ……」
アスナは、冷たい汗が背中を伝うのを感じながら、続く言葉を聞いた。
「……中国と、韓国だ」

3

ソウル市鍾路区清進洞にあるVR房は、近くの大学が夏休みに入ったばかりだからか、少し混んでいた。

入店手続きを済ませ、ドリンクバーで紙コップにコーラを注ぐと、趙月生は個室のリクライニングシートに体を横たえ、ふうーっと長く息を吐いた。

最近、ため息が増えてきた気がする。理由も自覚できている。今年二十歳、大学二年の月生は、来年になったら休学して二年間の兵役に就かねばならないのだ。

入隊は三十歳までにすればいいので、後回しにしようと思えば幾らでもできるのだが、在学中に兵役を済ませていない学生は就職活動で大きな不利を背負う。周りの学生たちも二年生が終わったら休学、入隊するという者がほとんどだし、両親にもそうしろと言われているため、最早逃げ場はない。

炭酸が抜け気味なコーラを啜り、もういちどため息。

体力のない自分が厳しい訓練に耐えられるのかとか、部隊でいじめを受けるのではないかといった不安も少なからず感じるが、何より憂鬱なのはいまの生活を二年間も奪われることだ。もっともその生活は、現実世界のそれではない。入学直後に友人の誘いで体験して以来、月生

を魅了し続けている仮想世界――そこに二年もダイブできないのは、たぶんどんな訓練よりも辛い。

「……せめて、部隊にこれがあればな……」

呟き、卓上のラックに掛けてあるフルダイブ・インターフェース――《アミュスフィア》を持ち上げる。大勢が利用するVR房の備品ゆえに外装も内装もかなりくたびれているが、それでも月生には天使の輪のように輝いて見える。

日本で三年前――二〇二三年に発売されたこのマシンは、翌年には全世界で販売が開始され、もとよりオンラインゲームが盛んな韓国でも一大ムーブメントを巻き起こした。《PC房》と呼ばれていたネットカフェは次々とアミュスフィア完備の《VR房》に名前を変え、若者たちは日本製やアメリカ製のVRMMO―RPGに夢中になった。

月生が一年半プレイし続けている《シルラ・エンパイア》も、日本で開発された《アスカ・エンパイア》を韓国メーカーがローカライズしたタイトルだ。ただ翻訳するだけに留まらず、街やアバター、クエスト内容を韓国の古代王朝新羅をモデルにモディファイしていて、サービスイン直後から不動の一番人気を保っている。

その一方で、プレイヤーのあいだでは純国産タイトルの登場を望む声が根強く、完全フリーの《ザ・シード》パッケージを利用して新作VRMMOを開発しようとしている企業も少なくない。しかしそのパッケージ自体が日本製であり、日本に構築されている巨大な《ザ・シード

連結体（メクサス）》に接続しないと機能をフルに発揮できないという問題があるのだが、現在日本のＶＲＭＭＯはほとんどが韓国や中国からの接続を遮断している。おかげでなかなか《シルラ》等の輸入タイトルに並ぶクオリティの新作は現れず、韓国人プレイヤーはそこはかとないフラストレーションを溜（た）め続けているのが現状だ。

――入隊するまでに、国産タイトルで遊んでみたいけど無理そうだなあ……。

そんな思考を再びのため息に乗せて排出し、月生はシートの背もたれを深く倒すと、アミュスフィアを頭に乗せた。

「……リンク・スタート！」

これだけは全世界共通のボイスコマンドを口にして、眼（め）を閉じる。

虹色（にじいろ）の放射光をくぐり抜け、ＶＲ房のユーザーＩＤとパスワードを入力して個別ランチャー空間に降り立った月生は、すぐさまシルラ・エンパイアのアイコンを叩（たた）こうとした。

しかしその直前、暗い空間の右側に浮かぶＳＮＳのウインドウが、猛烈な速さでスクロールしていることに気付く。どうやら、フォローしている数百のアカウントが、軒並み同じ記事をリツイートし続けているらしい。

「……なんだ？」

首を捻（ひね）りつつランチャーセットを左に回し、ＳＮＳを正面に持ってくる。記事をタップし、拡大。表示されたツイートを、声に出して読む。

「えーと……韓国、アメリカ、中国の民間有志が共同で立ち上げた完全新作ＶＲＭＭＯのテストサーバーが……日本のプレイヤーにハックされ、テストプレイヤーが攻撃されている……!?なんだそれ!?」

正直、にわかに信じがたい内容だった。しかしツイートの末尾には動画らしきＵＲＬが添えられていて、半信半疑でそれに触れる。

再生ウインドウが開き、その直後――。

『前衛、突撃!!』

という猛々しい叫び声が大ボリュームで響いた。日本のアニメをよく見ている月生には、響きだけでそれが日本語だとすぐに解った。

画面では、銀色の装備に身を固めた日本人らしきプレイヤーたちが、暗めの赤一色で装備を揃えたプレイヤーたちに襲いかかり、次々と斬り伏せていく。光り輝く剣が振り回されるたびに大量の鮮血が飛び散り、英語の罵声、悲鳴が響き渡る。

残酷表現にまったく規制が入っていないので、これがテストサーバーだというのは間違いないだろう。ツイートに書かれていたように、日本人プレイヤーがアメリカ人プレイヤーを一方的に攻撃しているように見える。

三十秒経って動画が終了すると、月生はしばし放心した。

《サーバー攻撃》と言えば普通は負荷をかけてサービスを停止させたりｗｅｂサイトを改竄し

たりすることだが、ＶＲワールドにダイブし、テスターを文字どおり攻撃する……そんな話は初めて聞いた。動画の内容を信じるならば起きているのはまさしくそういうことなのだろうが、しかし、奇妙な違和感がある。

そう……映像では、装備のスペックや能力値で勝るらしい日本人プレイヤーが、アメリカ人テスターをほぼ一方的に駆逐していた。しかし、必死な気配を漂わせていたのは、攻撃されるアメリカ人ではなく攻撃している日本人のほうだ。サーバー攻撃というのは基本的にイタズラであるはずなのに、まるで本物の……命が懸かった戦いをしているかのような……。

その時、ぴぽーんと甲高いチャイム音が鳴り響き、月生はびくっと顔を上げた。

月生がオンラインになったことに気付いた《シルラ》のギルド仲間がボイスチャットを要求してきたのだ。受諾ボタンを押すと新たなウインドウが開き、差し迫った声が月生のキャラクターネームを呼んだ。

「おいムーンフェイズ、例のツイート見たか!?」

「あ……ああ、いま見たけど……」

「ならのんびりしてんなよ、早くクライアントをＤＬしろ！」

「く……クライアント？」

慌てて視線をＳＮＳに戻し、続きのツイートを表示させる。

曰く――日本人の卑劣な攻撃からテストプレイヤーを救うため、韓国のＶＲＭＭＯプレイヤ

―有志を広く募集している。協力してくれる者は接続用クライアント・ソフトをダウンロードし、アミュスフィアにインストールしてほしい。

「……これか……。――ファヌン、お前、これ本当だと思うのか？」

『当たり前だろ、さっきの動画を見なかったのか!?　この話をしてる間にも、同胞が殺されているんだぞ!!』

「見たけど……でも、あの動画……」

月生は先刻抱いた違和感を説明しようとしたが、即座に遮られた。

『いいから、早くインストールしろ！　もうミョンワンもヘリクスもダイブしてるぞ、俺も向こうで待ってるからな！』

ボイスチャットが終了し、ランチャー空間は静寂に包まれる。

腑に落ちないことは多々あるが、ギルド仲間はほとんど参加しているらしいので、このまま無視を決め込んだら後で何を言われるか解らない。ダイブしてみればより多くの情報が手に入るだろうし――それに、よくよく考えてみれば、この騒ぎ全てが新作ゲームのゲリライベントだという可能性もある。だったら乗らなければ損というものだ。

意を決してダウンロードボタンを叩き、クライアントをアミュスフィアにインストールすると、ランチャーセットに新たなアイコンが増えた。赤無地に【ＨＥＬＰ　ＵＳ】という黒文字が並ぶだけのそれを叩くと、月生の意識は新たな世界へと吸い込まれていった。

＊＊＊

クリッターは、中国と韓国からの大量の接続をアンダーワールドに導き終えたいまも、まだ半信半疑だった。

ヴァサゴ・カザルスが再ダイブ直前に指示していったとおり、日本のすぐ北西に位置する二つの国にもアンダーワールド接続用のクライアントをバラ撒いたのだが、その作業中にも何度となく首を傾げた。

――だって、日本人も韓国人も、同じようなものじゃないか。

アメリカには、日本と韓国が地続きではないことを知らない者も大勢いる。両方とも中国の一部だと思っている者も。クリッターはさすがにそこまでではないが、しかし三国は完全なる友好国なのだとは思っていた。ＥＵのゴチャゴチャしている辺りと似たようなものだと。

だから、ヴァサゴが残した指示は、クリッターにはまったく理解不能だったのだ。

新たな偽サイトを作っている時間はなかったので、情報の拡散にはＳＮＳを利用した。最初のツイートは、『米中韓の有志が合同で立ち上げた、民間ＶＲＭＭＯサーバーが日本から攻撃されている!!』という内容。

続くツイートで、『ザ・シード連結体を独占しようとする日本人プレイヤーがサーバーをハ

ックし、強力なキャラクターを好き勝手に生成して、アメリカと中国、韓国のテスターを攻撃している。サーバーにはまだ痛覚遮断機能も倫理保護コードも存在せず、ゆえに同朋たちは大変な苦痛とともに虐殺されている」と説明を加え、アンダーワールド内の戦闘をキャプチャした動画もアップした。

映っているのは、実際には人界の騎士や兵士がアメリカ人プレイヤーを撃退しているところだったのだが、何せアンダーワールド人は日本語を話す。動画のインパクトは絶大だったようで、リツイート数は凄まじい勢いで増加し、クライアント・プログラムがダウンロードされていく速度はアメリカの比ではなかった。

クリッターは、呆気に取られながら思った。

――これじゃまるで、日本と、中国・韓国のＶＲＭＭＯプレイヤーは、仲がよくないみたいじゃないか？

＊＊＊

――ところがどっこい、憎み合っているとさえ言っていいんだな、これが。

かつて殺人ギルド《ラフィン・コフィン》を率いていた当時のキャラクター、《ＰｏＨ》としてアンダーワールドに再ダイブしたヴァサゴ・カザルスは、黒いフードの下でにやりと笑み

を浮かべた。

高々と右手を挙げ、背後の赤いプレイヤーたちに向けて、韓国語で叫ぶ。

「――あの侵入者どもに思い知らせてやれ!!　二度と同朋に手出しする気にならないように、念入りに痛めつけて、切り刻んで殺せ!!」

五万は下回らないであろう大集団は、二つの言語で怒りの咆哮を炸裂させた。彼らの目には、日本人プレイヤーたちが殺していたアメリカ人の集団が、同国人のテストプレイヤーに見えていたはずだ。

ヴァサゴは、哄笑を堪えながら、鋭く右手を振り下ろした。

ざあああああっ！　と雪崩のような音を立てて、深紅の大軍勢は眼下の日本人めがけて飛び降りていった。

――さあ、殺し合え。醜悪に、無様に、滑稽に踊ってくれ。

＊＊＊

「……来た」

シノンは、口の中で呟いた。

赤い空から糸のように伸びてくる、漆黒の破線をついに視認したのだ。

この時点で《アニヒレート・レイ》を最大威力までチャージし、敵の実体化直後に吹き飛ばしてしまいたい。それなら、防御も回避もできないはずだ。

しかし、いますべきことは時間稼ぎである。もし敵が無限に高位アカウントを生成できるなら、即死させても意味がない。

まずは持久戦に持ち込み、敵の対応を見定めるのだ。もし命を惜しむ様子を見せたら、一度しか使えない貴重なアカウントなのだと判断できる。その場合は全力で攻撃し、二度と同じアカウントでログインできないようにすればいい。

しかし、万が一アカウントが量産型だったら、殺してしまうわけにはいかない。限界まで戦闘を長引かせ、アリスが《果ての祭壇》まで移動する時間を稼がなくてはならない。

ゆえにシノンは、弓の弦を引くことなく、空中にホバリングしたまま敵の実体化を待った。

黒いデータラインは、数分前まで騎士長ベルクーリの遺体が横たわっていた場所へと降りていく。

騎士長の遺体は、整合騎士アリスが片方の飛竜の鞍に乗せていった。人界で待っている女性の整合騎士に委ねるつもりだという。

恋敵？　と訊くと、アリスは少し微笑んで答えた。私の恋敵はあなたです、と。

――――まったく。

そうと聞いては、簡単にログアウトしてやる訳にはいかない。キリトが目覚める瞬間までは、

何が何でもこの世界に留まらなくては。

シノンは、改めて決意を胸に刻みながら、岩山を凝視し続けた。

黒い線が、平らな頂上の中心部に接触し、粘液質の水たまりを作っていく。

それは、地獄へ続く底なしの穴のように濃く、深い色をしていた。

ラインが最後まで水たまりに吸い込まれ、そして――。

とぷん。

表面に小さな波紋が立ち、直後、音もなく右手が突き出した。細長い五本の指がうねうねと宙を掻くさまを見て、シノンの背中に悪寒めいた戦慄が走る。

いますぐ焼き払ってしまいたいという衝動を堪え、シノンは敵の実体化を待った。

ずるり。右手に続いて左手も出現し、水たまりの縁を摑む。

湿った水音を立て、男の頭部が出現した。

――意外にも、特徴の薄い顔つきのアバターだ。少なくとも美形という感じではない。頭に張り付くような短い金髪、細い鼻梁と薄い唇、白人系のデザインではあるのだが妙にのっぺりとした印象を受ける。

本当にこれが、暗黒神ベクタのスーパーアカウントを操作していた人間の新たな姿なのだろうか……とシノンが訝しく思っていると。

水たまりから上体だけを出した男の、青いガラス玉のような眼がきょろきょろと動き、上空

のシノンを捉えた。

瞬間、あれ、と思った。

どこかで見たような眼だ。全てを反射するような、それでいて吸い込むような、一切の感情がない瞳。

シノンを視認したその眼が、少しだけ見開かれた。そして唇が、ほんの少しだけ歪んだ笑みを滲ませた。

間違いない。知っている。私はこの眼を……この顔を知っている。それも、つい最近、どこかで――。

シノンが呆然と見下ろす先で、どぶんっ、と粘つく音を響かせて、男が一気に水たまりから抜け出した。

格好もまたどこか奇妙だ。それまでの装備が自動的にコンバートされたのだろうが、華美な金属鎧などまったく身につけていない。上下が揃った濃い灰色の服の上に革のベストを装備し、足許は編み上げのブーツ。まるで、現実世界の兵士が身にまとう戦闘服のようだ。武器は左腰の長剣と、右腰のクロスボウ。

男が完全に抜け出しても、黒い水たまりは消えなかった。驚いたことにそれ自体が地面から剝がれ、生き物のように蠢く。いや、実際に生き物なのだ。剝がれた部分が細長く伸び、翼と化してせわしなく羽ばたく。

鳥とも飛竜ともまったく違う、奇怪な姿。お盆のように丸く平べったい体の前部に、丸い眼球が四つも張り付いている。左右にはコウモリのような翼、そして後ろには蛇のような長い尻尾。

謎の有翼生物は、戦闘服姿の男を乗せたまま翼を羽ばたかせて離陸すると、シノンと同じ高度まで上昇してきた。

正面に三十メートルほど離れた位置にホバリングした生物の背中で、男が再び薄笑いを浮かべた。

何のつもりか、空の両手をまっすぐ前に伸ばす。呪文か何かを使うつもりかとシノンは身構えたが、しかし違った。男は両手を、まるでシノンの首を掴むような形に丸めると、きゅっと締めるジェスチャーをして見せたのだ。

瞬間、シノンはついに思い出した。唇から、乾いた声が漏れた。

「……サトライザー……」

間違いない。あの男は、ほんの二週間前に開催されたガンゲイル・オンラインのＰｖＰ大会、《第四回バレット・オブ・バレッツ》の決勝戦で、シノンを背後からのチョークスリーパーで仕留めてのけたアメリカ人プレイヤーだ。

しかし、なぜここにあの男が。

シノンは弓を構えるのも忘れ、愕然と両眼を見開き続けた。

＊＊＊

ピラミッド形の自走メガフロート、オーシャン・タートルの中央部を、高強度チタン合金製の堅牢なメインシャフトが貫いている。

高さ百メートルもある円筒状のシャフト最下部には、複層の防護壁に守られた主機、加圧水型原子炉が存在する。その上に、占拠されたメインコントロール・ルームと、第一ＳＴＬ室がある。

アンダーワールド、ひいてはアリシゼーション計画の中枢たるライトキューブ・クラスターは、さらにその上部に鎮座している。ここまでが下層シャフトということになる。

シャフトはクラスターの上で、水平に広がる耐圧隔壁によって分断される。上層シャフトと呼ばれる隔壁の上側には、巨大な冷却設備群に続いて、ラーススタッフが退避中のサブコントロール・ルームと、桐ヶ谷和人、結城明日奈が使用中の第二ＳＴＬ室が設置されている。

七月七日午前九時。アッパーシャフトの船首側に設けられた階段を、一体の人型ロボットが自力で下り始めた。ラースが開発した実験機《イチエモン》である。たどたどしい歩みを見守るように、三名の武装した自衛官が続く。

時を同じくして、シャフト船尾側のケーブルダクト内に設置されたハシゴを、二人の小柄な

人間が、こちらもぎこちない動作で降下しようとしていた。

――閉所恐怖症でも、高所恐怖症でも、暗所恐怖症でもなくて本当によかった。

と比嘉タケルは自分を勇気づけようとしたが、この極限状況に恐怖症の有無など関係ないような気もした。

何せ、オレンジ色の非常灯に照らされたダクトは、真下に四十メートルも延びているのだ。汗ばむ手を滑らせるか、震える足を踏み外したら、遥か下でダクトを閉鎖している耐圧隔壁に激突してかなり嬉しくない感覚を味わうはめになる。

こんなことなら、柳井研究員に先に行ってもらえばよかった。それなら少なくとも、真下の縦穴を見下ろし続けずにすんだのに。

――っていうか、弾避けになるとか言っといて、いざとなったら「お先にどうぞ」とはどういうこっちゃねん。

比嘉は少々恨みがましい思いで、数メートル上でハシゴに取り付いている柳井をちらりと見上げた。

しかし、色白の顔をいっそう青くして、必死の形相でステップを握り締めている姿を見れば文句も言えない。この危険な任務に名乗り出ただけでもあっぱれと称賛するべきだし、柳井のベルトに差し込まれた自動拳銃は、多少なりとも心強い。

再び視線を下に戻したのと同時に、左耳のインカムから落ち着いた声が流れ出た。

『どう、比嘉君。問題はない？』

頭上のハッチからダクトに頭を突っ込み、二人を見守っている神代博士の声だ。

比嘉は口許のマイクに、掠れた声で囁きかけた。

「え……ええ、何とか。あと五分くらいで、耐圧隔壁まで下りられると思うッス」

『了解。そちらの準備ができ次第、イチエモン班に突入の指示を出すわ。比嘉君たちが隔壁を開けるのは、敵がイチエモンに気付いて攻撃を開始してからよ』

「ラジャー。うわお、なんかミッション・インポッシブル感が漂ってきたッスね」

『頼むからポッシブルにしてちょうだい。私には、アンダーワールド内部の状況がどう転ぶかも、キリト君の復活如何にかかってる気がしてならないのよ。……すみません柳井さん、その子のこと、よろしくお願いしますね』

後半の言葉を向けられた柳井研究員の、ラジャーです！　という裏返った声を聞きながら比嘉は苦笑した。

――その子って、ねえ。

かぶりを振り、いつのまにか汗の引いた掌で、鋼鉄のステップをぎゅっと握る。

真下を見ると、隔壁はいつの間にかかなり近づいてきていた。

＊＊＊

中国、韓国からダイブしたプレイヤーたちが、モニタ上で巨大な雲となって蠢く様を呆然と眺めていたクリッターは、不意に響いた警報にがばっと跳ね起きた。

「なんだ……!?」

慌ててコンソールを見回すと、右側のサブモニタのひとつに赤いアラートが瞬いているのに気付く。

「おわっ……耐圧隔壁のロックが解除されてるじゃねーか！　だ、誰か通路を見にいってくれ!!」

叫び終わらないうちに、長身の突撃隊員ハンスがアサルトライフルを摑み、脱兎の如く駆け出していく。

「おい、いい手なんだぞ畜生！」

一声ボヤいて、色の揃ったトランプを床に叩きつけてからひげ面のブリッグも後を追う。

まさか、装備の火力で圧倒的に劣るラースが、やぶれかぶれのバンザイアタックを仕掛けてきたのか？　それとも何かの策か……？

クリッターもコンソールから離れ、コントロール・ルームのドアに近づいた。現在エレベー

タは電源が落ちているので、何かが起きるとすれば階段だろう。ハンスとブリッグもそう判断したらしく、カンカンと金属の踏み板を蹴る足音が聞こえてくる。

不意にそれが途切れ、野太い叫び声が響いた。

「Woah!!」

「Are you kidding?!」

直後、ライフルの連射音がそれに続いた。

＊＊＊

ケーブルダクトの壁越しに伝わってくる、かたたた、という乾いた音が自動小銃の発射音であることを比嘉はもう知っていた。

いまごろメインシャフトの反対側では、哀れなイチエモンが全身の筋肉シリンダーやチタン骨格を穴だらけにされているだろう。しかし、バッテリーと制御系は背中側に実装されているため、撃たれてもしばらくは動き続けるはずだ。

『いいわ！　耐圧隔壁のハッチを開けて!!』

インカムから神代博士の声が響くと同時に、比嘉は全身の力を込めて、ダクトを分断している耐圧ハッチのハンドルを回した。ぷしっ、という音とともに油圧ダンパーが動き、分厚い金

風の蓋が持ち上がる。

隔壁の向こう、ロウワーシャフト側のダクトも暗いオレンジ色の非常灯に照らされていた。シャフト反対側の階段室で行われている戦闘の音が、急にボリュームを増す。

ごくりと唾を飲み、比嘉は小型ラップトップPCを入れたバックパックを背負い直してから、ダクトよりさらに狭いハッチをくぐった。再びハシゴに足をかけ、下降を再開する。

――こういう時、アクション映画だと派手に叫ぶんだよな。

「……ゴーゴーゴー!!」

口の中で呟くと、インカムから凛子の訝しそうな声が聞こえた。

『え、何か言った？』

「い、いえ、何でも。……ケーブルの点検用コネクタまであと十メートル……あっ、見えた、あれッス！」

ダクトの壁に配線された何本もの太い光ケーブルを、黒いパネルボックスが呑み込んでいる。あの中にある点検用コネクタにラップトップを繋げば、理論上は第二ＳＴＬ室の三号機と四号機、そして遠く離れた六本木支部にある五号機と六号機を直接オペレーションできるはずだ。

――待ってろよ、桐ヶ谷君。いま、君を目覚めさせてやるからな！

恐怖心も忘れ、懸命にハシゴを下り続ける比嘉のインカムから、再び声が響いた。

『じゃあ、私はサブコンで、キリト君のフラクトライトをモニタしてるわね。比嘉君、頑張れ!!』

神代博士――かつては凛子先輩と呼んでいた人に、まるで学生時代に戻ったかのような励まし方をされて、比嘉は思わず上を仰ぎ見た。

しかし視界に入ったのは、必死の形相でハシゴを降りる柳井の顔だけだった。

やれやれと思いながら、比嘉は近づいてきたパネルボックスに視線を戻した。

＊＊＊

激闘の痕跡が残る岩山の頂上から出現した戦闘服姿の男は、南に視線を向けると、無機質な口調で呟いた。

「……アリスは逃げたか。まあいい、すぐに追いつく……」

そして再びシノンを見据え、薄く笑う。

「……君とは確か、ガンゲイル・オンラインの大会で戦ったね。名前は……《シノン》だったかな？　まさか、こんなところで会えるとは」

暗黒神ベクタ、そしてサトライザーでもある男のどこか非人間的な声を聞きながら、シノンは懸命に両手の震えを抑えようとした。しかし指は強張り、掌には汗が滲んで、無理に動かすとソルスの弓を取り落としてしまいそうだ。

円盤状の有翼生物の背中に乗ったサトライザーは、温度のない笑みを浮かべたまま、流暢な

日本語で続けた。

「これはどういうことかな。日本国内にもＳＴＬは存在するとは聞いていたが……君はラースの関係者なのか？　それとも、こんな場所に来てまで傭兵をやっているのかい？」

シノンは、乾き切った唇をどうにか動かし、掠れ声で問い質した。

「サトライザー……お前こそ、なぜここに」

「必然だからに決まっているじゃないか」

嬉しくてたまらないというように、灰色の戦闘服に包まれた両腕を広げ、サトライザーは言った。

「これは運命さ。私と君を引きつけ合う魂の力なのだ」

口調が少しずつ変容していく。発せられる声の温度までもが低下していく。

「そう……私は君を欲した。だから、こうして巡り合った。これで色々なことが解るだろう。ＳＴＬを介せば、人工フラクトライトからだけでなく、現実世界の人間からでも魂を吸い取れるのかどうか……そして、ＧＧＯの大会では味わえなかった君の魂が、どれほど甘いのかも」

異様なその台詞を聞いた途端、シノンの脳裏に、第四回ＢｏＢの最終盤で眼前の男が発した声が甦った。

――Your soul will be so sweet.

――君の魂はきっと甘いだろう。

いっそう体が冷えていく。全身が強張り、呼吸さえも不規則になる。
「さあ……こっちに来たまえ、シノン。私に全てを委ねるのだ」
サトライザーの青い瞳が、冷たく光った。
ずっ、と重い音を立てて、世界が歪んだ。
空気が、音が、そして光さえも捻じ曲げられながら、サトライザーの眼に吸引されていく。
「な……」
何、これ。
という思考さえもが、強烈な磁力に吸い込まれる。
――いけない。抵抗しないと。戦わないと。
心の片隅でそう叫ぶ声は、しかしどうしようもなく小さかった。
やがて、青い鎧に包まれたシノンの体そのものが、広げられたサトライザーの腕の中へと引き寄せられ始める。
力を失った左手の指先に、辛くも弓の弦を引っ掛けたまま、シノンは音もなく空中をスライドしていく。
数秒後、臓に覆む意識のなかで、シノンは自分の体がサトライザーという名の暗闇にぬるりと包まれるのを感じた。
男の左手が背中に回される。右手の指先が頬を掠め、耳に被さる髪を払う。

露わになった左耳に、サトライザーの薄い唇が近づき、黒く冷たい水を思わせる声が直接頭に忍び込んでくる。

「シノン。君は、《サトライザー》という名前の意味を考えてくれたことはあるかな？」

「……？」

ぐったりと脱力したまま、シノンは首を左右に振った。

「いかにもアメリカ人好みの、《サトリ》をもじった名前のようだろう？　しかしこれは、純然たる英語なのだ。スペリングは《Ｓｕｂｔｉｌｉｚｅｒ》。意味は《研ぐもの》《薄くするもの》《選ぶもの》……そして《盗むもの》」

シノンのすぐ目の前にあるサトライザーの両眼が、ひときわ強く光った。

「私は、君を盗む。君の魂を盗む……」

＊＊＊

趙月生が降り立ったのは、ひび割れ、苔むした石の上だった。

天然石ではなく人工物だ。どうやら、神殿のような超大型の建物の屋上らしい。周りには、先にダイブした韓国人プレイヤーたちが、数千……ことによると一万を超える規模でひしめいている。

アバターの選択プロセスはなかったので、細部や武器に違いはあれど、全員の装備が暗めの赤に統一されている。月生も同じカラーの籠手を装備した自分の両手をしばし眺めてから、視線を前方に移した。

人垣でよく見えないが、神殿前方の平地では、いまも戦闘が継続中のようだ。なのに周囲の韓国人たちが動こうとしないのは、その趨勢がすでに決しているからだろう。日本人プレイヤーらしきカラフルな集団は、月生たちと同じく赤一色の集団をほぼ駆逐し終え、部隊を立て直しているが、しかし快哉のようなものは聞こえない。

やはり、何かがおかしい。しかし何がおかしいのかを、すぐには言語化できない。

少なくとも、ダイブ前に想像したような、新作のプロモーション・イベントではなさそうだ。赤っぽい空と黒い地面ばかりが広がるフィールドはあまりにも殺風景すぎるし、ダイブの前に規約だの注意事項がまったく表示されなかったことも、正規のイベントとしては有り得ない。

しかしだからといって、ツイートの内容をそのまま信じる気にもまだなれない。だいたい、テストサーバーに乗り込んで、テスターをゲーム的な意味で殺すことに何の意味があるのか。一時の苦痛や屈辱を与えることはできても、そんなことでゲーム開発が遅延したり中止になったりするはずもないだろうに。

月生の周囲の韓国人たちも、半数近くは状況に途惑っている様子だった。「どうすりゃいいんだ？」「あいつら本当に日本人なのか？」というような声が、ぽつぽつと聞こえ始める。

――しかし、その時。

「同胞たちよ！」

前方右側から、韓国語の呼びかけが聞こえた。

背伸びしながら視線を向けたが、大勢のプレイヤーに遮られて発言者の姿は見えなかった。ただ人垣の上空に、【LEADER】という赤いマーカーが浮いているのが見えた。その方向から、同じ声が再び響いた。

「呼びかけに応えてくれて、深く感謝している！　――残念ながら、この場所でテストプレイをしていたアルファテスターたちは、すでに日本人の侵入者、いや侵略者によって殺されてしまった！　しかし、奴らは別のテスト場所に移動し、また同じことをしようとしている！」

途端――。

数千人の集団に、明確な怒りが生まれるのを月生は感じた。

韓国人プレイヤーたちに火を点けたのは、侵略というキーワードだろう。少なからぬプレイヤーたちが感じていたはずの迷いや途惑いはみるみる霧散し、代わりに熱を帯びた敵意が場を支配していく。

「……卑劣な日本人め!!」

誰かが叫び、散発的な怒声が続いた。それが収まると、再び《リーダー》がよく通る声で発言した。

「日本人たちはサーバーをハックし、ハイスペックの装備を好きなだけ作り出せる！　いっぽう管理者権限を奪われた我々は、君たち同胞に、そんなデフォルト装備しか用意できない！　だが、君たちの正義と愛国心は、どんな剣や鎧にも負けないはずだ！」

その呼びかけに、ひときわ大きな叫び声が応じた。

「……俺たちの国を守れ!!」

続けて、右側にずっと離れた場所で、韓国語ではない怒声も轟く。

「ガンチュー・レンメン!!」

意味は解らなかったが、それが中国語であることは月生にも解った。どうやら、韓国人と同じくらいの数の中国人プレイヤーも集まってきているようだ。

急激に高まっていくボルテージの中で、月生はまだ違和感を消せなかった。しかし同時に、もうこの場の勢いは誰にも止められないとも直感していた。

人垣の向こうで、《リーダー》が黒手袋を嵌めた右手を高く掲げた。

「――――Go!!」

韓国人にも中国人にも解る命令を受けて、怒りに燃える赤い軍勢は、一匹の巨大な生物のように激しく身震いしながら動き始めた。

＊＊＊

「じ……人界軍！　補給隊！　全速前進――ッ!!」

アスナは、東西の遺跡宮殿の屋上を埋め尽くす赤い大軍が動き出す直前に、声を振り絞ってそう叫んだ。

人界守備軍の補給部隊は、遺跡参道の入り口に展開している。宮殿は、その参道の両側に広がっているのだ。つまり、補給部隊のすぐ頭上に、数万の敵がひしめいていることになる。

「物資は捨てて、馬車と術師はいますぐに走って!!」

さらに指示するが、到底間に合いそうにない。新たに参戦してきた、恐らく中国と韓国からの接続者たちは、いまにも巨大神像の頭を踏み越えて、補給部隊の真ん中へと飛び降りていきそうだ。

アスナは歯を食い縛り、右手のレイピアを高く掲げた。

イメージを剣先に集中させ、鋭く振り下ろす。七色のオーロラが一直線に迸り、参道の両側に立ち並ぶ巨大神像を直撃する。

意識が吹き飛びそうになるほどの激痛が頭を貫いたが、必死にイマジネーションを集中させていると、石の神像たちが地響きを立てて動き始めた。四角い口を開け、短い腕を振り回して、

宮殿の屋上にひしめくプレイヤーたちを攻撃し始める。

最前面にいた赤い兵士たちが慌てて飛び退き、後ろから押し寄せる味方と衝突して、ドミノ倒しのように転倒していく。その隙に、八台の馬車と二百人ほどの修道士隊、補給隊が移動を開始する。

アスナが神像群を操作できたのはほんの三十秒ほどで、それ以上は苦痛に耐えきれず地面に膝を突いてしまったが、人界軍の後方部隊は辛くも死地を脱出し、遺跡北側の広大な荒野への退避に成功した。五百人弱の衛士隊と二千人の日本人プレイヤーが前進、後方部隊を両側から包み込むように布陣して応戦態勢を取る。

しかしこの場所には地形らしい地形が存在せず、数万の敵を相手にすれば絶望的な全周防御を強いられてしまう。数で圧倒的に優るアメリカ人プレイヤーたちを辛くも撃退できたのは、遺跡宮殿の壁を利用して前線を一箇所に限定し、手厚い回復ローテーションを組めたからだ。四万から五万にも迫ろうという中国、韓国人プレイヤーに取り囲まれれば、前線崩壊は時間の問題だ。

「くっ……」

アスナは残されたわずかな気力を振り絞って立ち上がり、もう一度レイピアを掲げた。

――お願い、壁を……みんなを守れる頑丈な壁を、最後に作らせて。

祈りながら、イマジネーションを集中させようとする。

しかし。

強烈なスパークに全身を貫かれるような衝撃に襲われ、アスナは再び地面に倒れ込んでしまった。喉にせり上がってきたものを吐き出すと、それは少量の血だった。

「無理すんな、アスナ！　こっちにも見せ場をくれよ！」

クラインが威勢良く叫び、

「そうだ、ここは俺たちに任せろ」

太い声でエギルも応じた。

アスナの前に立った二人が、カタナと両手斧を構えた、その直後。

一時の混乱から脱した赤い軍勢が、今度こそ宮殿の屋上から飛び降り始める。地面までの高さが二十メートルもあるので、うまく着地できずに四肢にダメージを負い、動けなくなる者も少なからず出ているようだが、続く兵士たちは怪我人をクッション代わりにして無傷で地面に下りてくる。

「トルギョ――――――ック!!」

「トゥ――――ジィ――――!!」

韓国語も中国語も学んだことのないアスナだが、二種類の怒号が、どちらも「突撃」を意味することは直感的に解った。

左右に広がりながら押し寄せてくる深紅の軍勢を、真っ先に迎え撃ったのはクラインとエギ

ルだった。

「ぜいりゃあああああああッ!!」

「お……らあああああああッ!!」

空気が震えるほどの気合に乗せて、カタナと斧の広範囲ソードスキルが放たれる。白と青のライトエフェクトが二重に閃き、何十人もの敵兵が鮮血とともに宙を舞う。

彼らの左右でも、ＡＬＯの領主たちとその腹心や、スリーピングナイツの猛者たちが、全力の戦闘を開始した。

機関銃のように突き抜ける金属音。重く響く単発の爆発音。剣が、斧が、槍が唸り、色とりどりのソードスキルが炸裂するたびに、赤い兵士たちがばたばたと斬り倒されていく。

圧縮された空気が軋み、大軍勢の突進が一瞬止まった。

それは――。

決壊した堤防から押し寄せてくる濁流を、素手で防ごうとするが如き努力でしかなかった。

悲鳴と怒号の渦巻く戦場の空に、かすかに響く甲高い哄笑を、地面にうずくまったままアスナは聞いた。

霞む眼を動かすと、遺跡宮殿の屋上で、黒いポンチョの男が踊るように身を捩っているのが見えた。

＊＊＊

メインシャフトの反対側から断続的に届いてくる銃撃音を聞きながら、比嘉は出せる限りのスピードでハシゴを降りた。

オレンジの光を受けて鈍く光るパネルボックスにやっとのことで辿りつくと、強張った指先で蓋を開ける。

内部には、ごちゃごちゃと光ケーブルがひしめく配線盤が鎮座していて一瞬げんなりするが、それらを掻き分け掻き分けどうにか目的の点検用コネクタを見つけ出す。

いよいよだ。

大きく息を吸い、思考を落ち着けてから、バックパックから接続用ケーブルとラップトップPCを取り出す。ケーブルの片方を点検コネクタに、もう一方をPCに差し込み、祈るような気持ちでSTLオペレーション用プログラムを起動する。

黒一色のウインドウが開き、左上でカーソルがじらすように点滅し始める。やがてそれが右に動き、ステータスを表示する。

STL#3、Connecting……OK。

STL#4、Connecting……OK。

まず、サブコントロールに隣接する第二ＳＴＬ室の二台から正常な信号が返る。
続いて、衛星回線経由でオーシャン・タートルに接続している六本木支部の五号機、六号機との接続が確立した。
「……っし！」
比嘉は低く呟いた。これで、桐ヶ谷和人と三人の少女たちが使用する四台のＳＴＬの操作が可能となったはずだ。
惜しむらくは、メインコントロールから第二ＳＴＬ室および衛星アンテナに続く回線のみをジャックしている状態ゆえに、第一ＳＴＬ室の二台には手を出せないことだ。それが可能なら、一号機と二号機からダイブしている襲撃者たちをアンダーワールドから叩き出すことができるのだが。
そこで思考を堰き止め、比嘉は作業を急ぐべく、小さなキーボードに右手を置いた。
――行くぜ！
気合を入れるのと、頭上から甲高い叫び声が降ってきたのはほぼ同時だった。
「……う、動くな!!」
柳井の声。この状況で、いきなり何を言い出したのか。
苛立ちながら頭上を振り仰いだ比嘉が見たのは、ほんの三メートル先で青黒く光る自動拳銃の銃口だった。その奥で、小さな両眼を血走らせた柳井が再び叫んだ。

「PCから手を離せ！　さもないと、撃つぞ！」
「……は？」
ぽかんと放心したのは、わずか半秒足らずだった。
比嘉は瞬時に状況を把握し、推測を巡らせた。
――――こいつだ！
この男、柳井こそが、アメリカ人にアリシゼーション計画の情報を流していたスパイだったのだ。
しかし残念ながら、対応策までは思いつけなかった。乾き切った口から、無意味な質問が発せられた。
「……柳井さん。何でッスか」
生白い額に脂汗の玉をびっしりと浮かべた技術者は、唇をかすかに痙攣させてから、細い声を絞り出した。
「い……言っとくけど、お門違いだからな。ボクを裏切り者扱いするのは」
――扱いも何も、そのものだろ!!
という比嘉の内心の絶叫が聞こえたかのように、柳井は更に言葉を重ねた。
「ボクは、初志を貫徹してるだけだ。ボスの遺志は、ボクが引き継ぐ……そのためにラースに潜り込んだんだからな」

「ぼ……ボスの、遺志？　誰のことを言ってるんスか……」

呆然とそう訊ねると、柳井は額に垂れる髪の毛を左手で払い、うっすら狂気の滲む笑みを浮かべて答えた。

「君も、よぉーく知ってる人さ。……須郷サンだよ」

「な……」

――何いいいい!?

銃を見た時よりも大きな驚きに打たれ、比嘉は両眼を見開いた。

須郷伸之。比嘉や神代凛子、そしてあの茅場晶彦と同時期に、東都工業大学の重村研究室に在籍していた男。異能の天才たる茅場にあからさまな対抗心を燃やし続け、しかしついに超えることあたわず、そのせいなのかどうかは解らないが、ＳＡＯプレイヤー数百人を違法な人体実験に利用するという暴挙に出た。

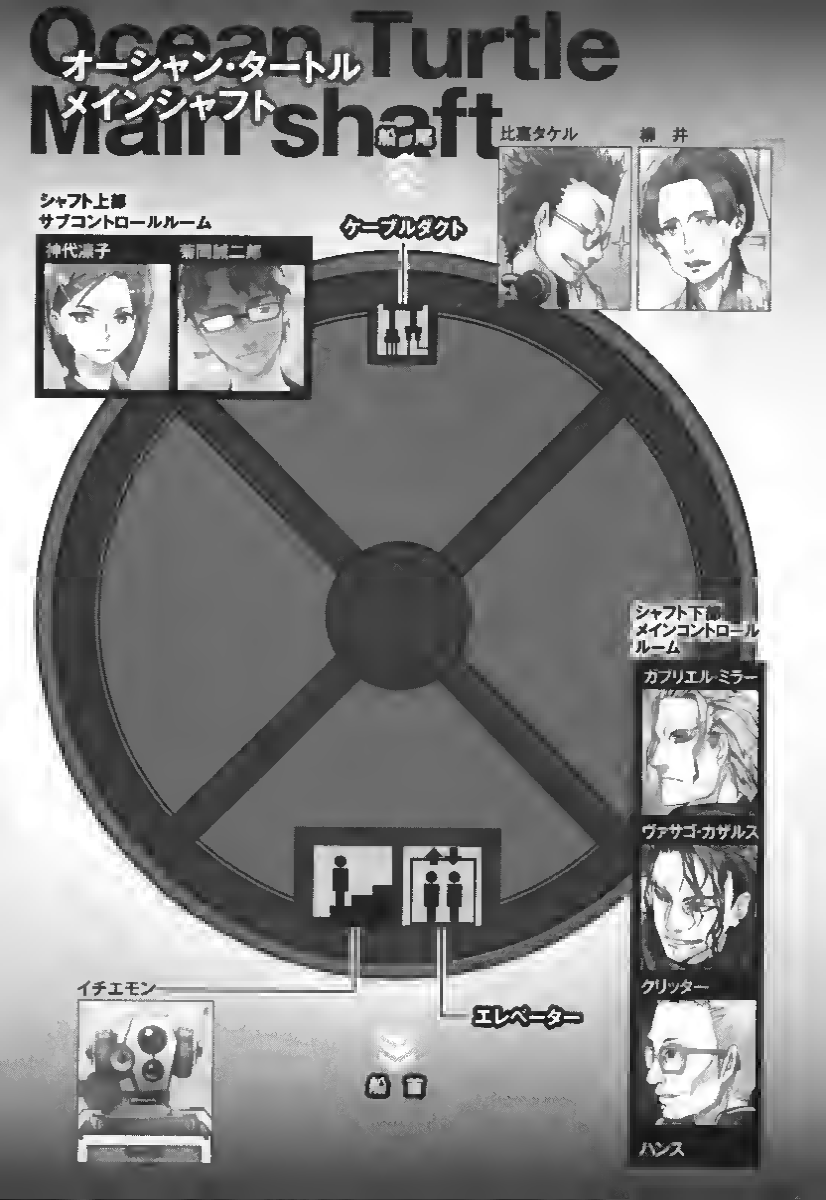
桐ヶ谷和人の活躍によって陰謀を暴かれ、逮捕された須郷は、一審の実刑判決に控訴して現在は東京高裁で係争中のはずである。

「……別に死んでないッスよ、あの人」

思わずそう呟くと、柳井はヒヒッと甲高い笑いを漏らした。

「似たようなもんさ。最低でも十年は食らい込むでしょ、研究者としては死んだも同然だよ。ボクも危ないとこだったんだ、もう一人のスタッフに全部おっかぶせて、どうにか逃げ延びた

Ocean Turtle
オーシャン・タートル
Main shaft
メインシャフト



けどね」

「じゃあ、あんたも……須郷の人体実験に関わってた……？」

「関わったなんてもんじゃないよ、実際にデータを取ってたのはボクなんだ。楽しい研究だったなぁ……バーチャル触手プレイとかさぁ……」

――いったいどうして菊岡二佐は、こんな犯罪者の身元をチェックし損ねたのか！

と比嘉は鼻息荒く考えたが、しかしすぐに無理もないかとため息をついた。

偽装企業ラースは、アメリカにほぼ牛耳られている防衛技術基盤に、純国産の風穴を開けようという意図のもとに設立された。それはつまり、既存の財閥系メーカーや防衛商社の権益をおびやかす存在になり得る、ということでもある。

ゆえに、技術系のスタッフを揃えるのは大変だった。大手メーカーからの参加者は皆無に近かったはずで、レクトという大企業のフルダイブ技術研究部門に勤めていた経歴を持つ柳井の参加が大いに歓迎されてしまったのはやむを得ない。

比嘉の視線の先で、柳井はしばしうっとりと回想に浸っている様子だったが、すぐに拳銃を構え直した。フレーム左側のセーフティもきちんと解除されている。技術系スタッフにまで射撃訓練を施した菊岡の用意周到さが、いまだけは裏目に出た形だ。

幸い、柳井にはまだ吐き出すべき鬱屈が残っているらしく、甲高い声で会話を続けた。

「……まあ、ボスの人生はもうエンドロールだけど、あの人が繋いだラインはまだ生きてる。

なら、ボクがそれをきちんと使ってあげなきゃ、あの人も浮かばれないよね」

「ライン……て、どことっスか」

反射的に訊ねると、柳井は少し迷うそぶりを見せてから、にやりと笑って答えた。

「アメリカ国家安全保障局」

「な、なんだって⁉」

と比嘉は驚いてみせたものの、内心ではやっぱり、と思っていた。

アメリカの国家安全保障局（NSA）が日本で盗聴や通信傍受等の活動をしていることは公然の秘密だが、日本が先行しているフルダイブ技術に彼らが興味を持たないはずがない。須郷の部下だった柳井からアリシゼーション計画の情報を入手したNSAは、海軍の潜水艦までチャーターして《A．L．I．C．E．》を奪いにきたわけだ。

柳井は、悪びれる様子もなく自慢話を続けた。

「……下のアメリカ人連中が首尾よくアリスを回収できれば、ボクにもでっかいボーナスと、向こうでのポストが約束されるってワケさ。これぞまさに、須郷サンが夢見てたアメリカン・サクセス・ストーリーだよね」

――その後、世界はアメリカ軍が配備するであろう超高性能無人兵器に震え上がるわけだけどな。

比嘉はそう反駁したいのを必死に我慢した。いまは、少しでも会話を長引かせて、わずかな

チャンスを掴まねばならない。

――気付いてくれ、凛子さん！

強くそう念じたはずみで左手のラップトップＰＣを落としそうになり、比嘉は慌てて持ち直した。

「うっ、動くな!!」

途端、柳井が裏返った声で喚き、銃口をダクトの壁面に向けるやトリガーを引いた。黄色い光が閃き、膨らんだ空気が両耳をじんと痺れさせた。

ダクトの金属壁に火花が弾け――。

比嘉の右肩を、激しい衝撃が打ち据えた。

「あれっ」

と、柳井が驚いたような声を出した。

＊＊＊

シノンは、すぐ目の前にある二つの青い瞳の中で、漆黒の渦がブラックホールのように回転するのをぼんやりと眺めた。

明け方の夢によく似ていた。

何かをしなくてはならない。何かをしたはずなのに、それは夢なので本当にはしていない。ひたすら繰り返される幻のサイクル。

ひんやりと冷たい指が首筋を撫でる。強い嫌悪感、恐怖、しかしそれらすらもたちまち意識から吸い出され、灰色の空疎さに置き換わる。

――いけない。

これはもう、仮想空間で起きている、非現実の出来事ではない。

その認識が、赤い警告灯のように頭の片隅で瞬く。そちらへ意識を集中させようとするが、粘つく黒い液体が、いつしか腰の辺りまでを呑み込んでいる。どこにも逃げられない。抗うことさえできない。

男の顔がいっそう近づく。薄い唇がすぼめられ、すうっと空気を吸い込む。感情が、思考が、魂までもが、空気と一緒に吸引されていく。

――やめて。

――盗まないで。

という懇願すらも即座に奪われ、残るのは鈍い麻痺感のみ。

「やめ……て……」

呟いたシノンの唇に、男の唇が近づく――。

バチッ!!

という衝撃が、突如シノンの意識をしたたかに叩いた。
見開いた両眼が、自分の上着の襟ぐりから飛び散る、眩い銀色の火花を捉えた。
――熱い!!
電撃にも似た熱感が、男の吸引力を一瞬上回った。わずかに回復した思考力を、銃弾の雷管のように炸裂させ、全身の力を振り絞って、シノンは男の両腕の中から脱出した。
ソルスの飛行能力を発揮し、大きく距離を取る。
「……っ……」
激しく喘ぎながら、シノンは上着の内側でスパークし続ける何かを、右手で引っ張り出した。
それは、細いチェーンにぶら下がる、白っぽい金属のプレートだった。直径一・五センチほどの円盤の端に穴が開けられ、鎖が通っている。
「な……んで、これが……」
――ここに。
シノンは驚愕し、掠れ声を漏らした。
これは、現実世界の朝田詩乃がいつも首に下げているネックレスだ。高価なものではない。鎖はサージカルステンレス、金属はただの銀メッキしたアルミニウムである。
しかし、シノンにとっては大きな意味を持つ品だ。
去年の年末にシノンが巻き込まれた《死銃事件》。

犯人グループの一人だった同級生の男の子が、劇薬サクシニルコリンを封入した高圧注射器でシノンを襲った際、駆けつけた桐ヶ谷和人――キリトはシノンをかばい、左胸に薬を噴射された。

劇薬の侵入を防いだのが、彼が胸から外し忘れていた、心電図モニター用の電極だった。

シノンは、事件後に部屋の床に落ちているのを見つけたその電極からテープ部分を剝離させ、銀色の金属素子をペンダントヘッドに加工した。その自作ネックレスをいつも身につけていることはキリトやアスナにも秘密にしているし、ラース六本木支部では着衣のままダイブしたので、平井というスタッフがネックレスを眼にする機会などなかったはずだ。

だから、このネックレスが、アンダーワールドでオブジェクト化されているなどということは有り得ない。

――しかし。

ダイシーカフェで、キリトは言っていた。ＳＴＬが作り出す仮想世界は、単なるポリゴンのオブジェクトではない、と。

記憶とイマジネーションによって生み出される、もうひとつの現実なのだ――と。

ならばこのネックレスは、シノン自身のイメージが出現させたものだ。

シノンは銀色のペンダントヘッドにそっと唇を触れさせてから、服の下に戻した。

完全に回復した意識を、離れた空中にホバリングする黒い有翼生物に向ける。

生物の背中では、サトライザーが無言で自分の右手を眺めていた。その指先から、かすかな白煙が上がっているのをシノンは見た。

視線を感じたのか、顔を上げたサトライザーの口許には、ほんのかすかだが不快そうな色が浮かんでいた。男の顔をしっかりと見据えながら、シノンは言った。

「お前は、神でも悪魔でもないわ。ただの人間よ」

確かにサトライザーの力は圧倒的だ。恐らく、凄まじい強度のイマジネーションで、シノンの精神……フラクトライトにまで干渉しているのだ。

――でも、イメージ力と集中力なら負けない。

なぜならそれは、狙撃手にとっていちばん大切な力なのだから。

シノンは、ソルス・アカウントのGM装備、長弓《アニヒレート・レイ》を両手で握ると、じっと視線を凝らした。

白く輝く弓の中央部が、青みがかった黒へと変化した。

変色範囲が広がるにつれ、滑らかに湾曲する弓が完全な直線へと変形していく。青黒く光る長い筒は、鋼鉄の銃身。マズルが、グリップが、ストックが出現し、最後に巨大なスコープが湧き出すように実体化した。

シノンの手の中にあるものは、もう流麗な長弓ではなかった。

無骨で、獰猛で、途轍もなく美しい50口径対物狙撃ライフル――《ウルティマラティオ・ヘ

カートⅡ》。

無二の相棒のボルトハンドルを、鋭い音を立てて引くと、シノンはにやりと笑った。

サトライザーの鼻筋に浅い皺が寄り、唇が怒りを宿して歪んだ。

＊＊＊

交戦と呼べるものは、わずか七分間しか続かなかった。

その後状況は、三分間の防戦を経て、一方的な殺戮へと移行した。

「死守して……！　アンダーワールドの人たちだけは、何としても……!!」

アスナは頭の芯で疼き続ける痛みを無視し、最前線でレイピアを振るいながら声のかぎりに叫んだ。

しかし、声の揃った頼もしい応答はもう聞こえない。

周囲では、色とりどりのコンバート装備をまとう日本人プレイヤーたちが一人また一人と、血のように赤い鎧に身を固めた隣国人たちに包囲され、剣や槍で滅多刺しにされていく。怒号、悲鳴、そして断末魔の絶叫が次々に響く。

これに比べれば、アメリカ人の重槍突撃作戦のほうがまだしも対処のしようがあった。

新たに出現した大軍は、二つの国からダイブしているせいか、あるいは浪らせている異様な怒りのせいか、なりふり構わない殲滅のみを目指している。複数人で目標の脚に摑みかかり、引き倒し、圧し掛かって自由を奪う。このような戦い方をされては、数の差を戦術で覆すことなど到底できない。

二千人が円形に並んだ防御陣が、見る間に侵食され、薄くなっていく。

アスナは、尽きることなく押し寄せる兵士たちをレイピアで懸命に斬り払い、貫きながら、昨夜アンダーワールドにダイブして以来初めて心の中で絶望の言葉を呟いた。

誰か、助けて、と。

＊＊＊

絶望的な戦況の中で、比較的健闘を続けている部隊の一つが、アルヴヘイム・オンラインに於いてシルフ族の領主を務める女性プレイヤー、サクヤ率いる緑の剣士隊だった。

シルフ族はもともと、機動力を活かした高速連携攻撃を得意としている。重装プレイヤーの突進攻撃にウェイトを置くサラマンダー族に対抗するために練り上げた戦法が、この混戦でもある程度有効に機能した。軽装の剣士たちが目まぐるしく動きながら互いをカバーすることで、敵に目標を定めさせず、一人ずつ引きずり倒されるのをどうにか防いでいるのだ。

「――よし、我々が突破口を作るぞ！　竜胆隊、鈴蘭隊、戦線を右に押し上げろ!!」

自身も最前面で細身の長刀を縦横に振るいながら、サクヤは叫んだ。

右翼方向で戦闘中のはずのサラマンダー隊と合流し、彼らの突進力を利用して一気に敵陣を破る。支援部隊を再び遺跡の参道に逃がし、狭い入り口だけに戦線を限定できれば、アメリカ人プレイヤーと同じように膨大な敵を削り切れるかもしれない。

「行くぞ！《シンクロ・ソードスキル》用意!!　カウント、5、4、3……」

サクヤが、そこまで指示しかけた時だった。

持ち場の左側で響いた悲痛な声が、くっきりと明瞭に聞こえた。

「――みんな、諦めないで、少しでも時間を稼いで!!」

はっと呼吸を止め、サクヤは左方向に視線を走らせた。

いましも、黄色を基調とした装備の日本人部隊が崩壊し、赤い波に呑み込まれていくところだった。その最前面で、両手に装備したメタルクローを押さえられ、地面に引き倒される小柄な姿が確かに見えた。

「アリシャ!!」

サクヤは叫んだ。瞬間、彼女は冷静沈着な指揮官から、一人の女子大生へと戻っていた。

「やめろ――――っ!!」

叫び、単身左へと走り出す。立ち塞がる敵を右に、左に斬り飛ばし、ひたすらに親友のもと

へと突き進む。

ケットシー族領主アリシャ・ルーは、長剣に胸と腹を貫かれながらも、接近するサクヤに気付くや血を吐くような声を響かせた。

「だめっ、サクヤちゃん戻って!!　部隊を指揮してえっ!!」

そのひと言を最後に、黄色い髪から伸びる三角の耳がサクヤの視界から消えた。

「アリシャ――――ッ!!」

悲鳴にも似た声を迸らせながら、サクヤはケットシー隊を押し潰そうとしている敵の大集団に単身突入した。次々とソードスキルを繰り出し、鮮血と肉片の雨を振り撒いてひたすら突き進む。親友が倒れているはずの場所まで、あと少し……

どかっ。

という衝撃に視線を落とすと、背中から右腹を貫いて伸びる槍の穂先が目に入った。

仮想世界で初めて味わう激痛が神経を駆け巡り、全身から力を奪った。

それでもさらに四歩前進したものの、そこでアバターが意識の制御から外れ、前のめりに倒れた。

直後、憎しみの嵐がサクヤをも呑み込んだ。右手から愛刀が奪われ、左腕が半ばから斬り飛ばされ、体を次々と鋭い金属が貫いた。

＊＊＊

この場にダイブしている二千人の――急激に減少中ではあるが――日本人プレイヤーの中で、最も正確に状況を把握しているのは、ギルド《スリーピング・ナイツ》の三代目リーダーである安施恩／シウネーだった。

父親が在日韓国人、母親が日本人のシウネーは二カ国語を話せる。ゆえに、赤い兵士たちの半数が口々に放つ怒りの言葉を断片的に聞き取り、彼らがどのような情報に煽動されたのかを推測することができた。

日本と韓国のネットユーザー間に断絶や反発が発生し始めたのは、シウネーが生まれる前の、二〇〇〇年代初頭ごろらしい。理由は色々あるだろうし、ネットの発達そのものが断絶を加速させた要因だったのかもしれない。

その流れは、シウネーと仲間たちが愛するオンラインゲームの世界をも否応なく侵食した。二〇二六年現在主流のＶＲＭＭＯでも、国際サーバーでは日本人と韓国人、あるいは中国人プレイヤーのあいだで狩り場の取り合いから深刻なトラブルになることは珍しくない。最近ではＡＬＯのように海外からの接続を弾いているタイトルがほとんどで、隣国との隔絶はいよいよ深まりつつあるようにさえ思える。

韓国と日本双方の文化に触れながら育ったシウネーは、そんな状況に長らく心を痛め続けてきた。ＶＲホスピスでシウネーを新たな世界に誘ってくれたスリーピング・ナイツの仲間たちはシウネーの出自を知ってもそれまでと変わらず親しく接してくれたので、みんなのためにも、いつか自分の手で仮想世界の断絶に橋を渡すことができれば……と思っていた。

それなのに。

いまも遺跡宮殿の屋上から戦いを眺めている何者かは、言葉巧みに韓国と中国のＶＲＭＭＯプレイヤーたちを煽動し、敵愾心を煽って、ＶＲＭＭＯの歴史上最大の憎悪と悲劇を生み出そうとしている。

――私が……私がなんとかしないと。たぶん日本人プレイヤーの中で、韓国語を話せるのは私だけだ。

――ぶつからなきゃ、伝わらない。そうよね、ユウキ。

三ヶ月前にお別れした先代ギルドマスターに心の中で呼びかけてから、シウネーは周囲に立つ四人の仲間たちに大声で指示した。

「みんな、お願い、一回だけでいいからブレイクポイントを作って!!」

先頭で鬼神の如き奮戦を続ける両手剣士のジュンが、即座に叫んだ。

「解った！　テッチ、タルケン、ノリ、シンクロで大技をぶちかますぞ！　カウント、2、1！」

完璧に同期して繰り出された単発の高威力ソードスキルが、大地を揺るがすが如き爆発を引

き起こし、数十人の敵をノックバックさせた。
一瞬の静寂と停滞の中、シウネーはこの場のリーダー格らしき大柄な韓国人プレイヤーへと走り寄り、振り下ろされる長剣を左手で受け止めた。
掌が裂け、血が溢れ出す。
しかし仮想の痛みは、かつてシウネーが味わった白血病の骨髄移植療法やサルベージ療法の苦しみに比べればどうということはなかった。わずかに顔をしかめただけで、シウネーはじっと相手の眼を見詰め、韓国語で叫んだ。
「――聞いて、あなたたちは騙されています!! このサーバーは日本企業のものだし、私たちはクラッカーじゃなくて正規の接続者です!!」
その声は広範囲に響き渡り、沈黙を少しだけ長引かせた。
シウネーに素手で剣を握られた韓国人は、やや気圧されたように仰け反ったものの、すぐに鋭い声で反駁してきた。
「――嘘をつけ! 見たぞ、お前たちはさっき、俺たちと同じ色のプレイヤーを皆殺しにしていただろう!!」
「あれは、あなたたちと同じように偽の情報でダイブさせられたアメリカ人です! 日本企業の開発の妨害をさせられているのは、あなたたちなのよ!! もういちどよく考えて……その怒りは、憎しみは、本当にあなたのものなのか!!」

シウネーの言葉に、韓国人たちが当惑したように黙り込む。
再びの静寂を貫いて、鋭い――しかしどこか迷いを帯びたような問いかけが、人垣の後方から届いた。
「その話は本当なのか⁉」
韓国語でそう叫びながら走り出てきたのは、他の兵士たちと外見はまったく変わらない一人のプレイヤーだった。反射的に身構えるシウネーのすぐ近くまでやってくると、敵意はないと言うかのように右手の剣を下げ、ヘルメットのバイザーを押し上げた。
「俺は《ムーンフェイズ》、そっちは？」
いきなり名前を訊かれてシウネーは驚いたが、ムーンフェイズと名乗る男の両眼は真剣な光を帯びている。
左手で受け止めたままだった剣の切っ先を離し、仮想の血が滴る掌を胸元で握り締めながら、シウネーは口を開いた。
「……私はシウネー」
「そうか、シウネーさん、俺もこの話はなんだか妙だと思っていたんだ」
ムーンフェイズが口早にそう言うと、周囲の韓国人プレイヤーたちから怒りの声が上がる。
しかしムーンフェイズは、右手の剣を思い切り強く鞘に落とし込んでその声を封じ込め、一歩前に出る。

「――あんたの話を、証明する手段はあるか!?」

「……っ……」

シウネーは、思わず息を詰めた。

この《アンダーワールド》は政府の支援を受けた日本企業の研究開発用ＶＲワールドであり、襲撃者はその研究成果たる新世代ＡＩを奪おうとするアメリカ人――ＡＬＯの世界樹ドームで、友人のリズベットが涙ながらに訴えたその言葉を、もとより疑う気持ちはない。しかし証明と言われると、返事に窮する。

仮想世界に物的証拠などあるはずもない。有り得るとすれば誰かの証言しかないが、日本人側が何を言っても無駄だろう。シウネーが言葉を失っているあいだにも、周囲の韓国人たちの敵意が再燃していくのを感じる。どうすれば……どこに……。

「――シウネー、アンダーワールド人だ！」

突然、左後方でノリが叫んだ。

「この世界の住人であるアンダーワールド人に会わせて、彼らが日本語を喋るところを見せれば、ここが日本のサーバーだって解ってもらえるはずだよ！」

「あっ……！」

確かに、それなら可能性はある。シウネーたち自身、円陣の中央にいるアンダーワールド人の兵士たちとはほんのひと言ふた言しか会話を交わしていないが、彼らの、明らかに現実世界

人でもNPCでもない感じには魂を揺さぶられるような衝撃を受けた。たとえ言葉が通じなくても——もしかしたら通じないからこそ、韓国人たちも感じてくれるはずだ。心を開いて彼らに会い、言葉を交わしさえすれば。

日本語で発せられたノリの言葉を、シウネーは韓国語に翻訳してムーンフェイズたちに伝えようとした。

しかしその寸前、彼の後方で、毒々しいほど赤い光がギラリと輝いた。

「あっ……危な……」

シウネーは必死に警告しようとしたが、間に合わなかった。短いが肉厚の刃がムーンフェイズの背中を深々と抉り、そのまま十メートル近くも吹き飛ばしたのだ。

「ぐあっ……」

苦しそうに身もだえるムーンフェイズに代わってシウネーの前に立ったのは、宮殿の屋上にいたはずの黒ポンチョの男だった。

右手に握った、まるで中華包丁のような形のダガーでさっとムーンフェイズを指し、韓国語で叫ぶ。

「裏切り者はこの戦場にはいらない！」

そのまま、包丁で周囲の韓国人たちをぐるりとポイントしていく。

「お前たち、汚い日本人に騙されるなよ!!」

その声は、重く、強く、冷たく、それでいてどこか嘲りを含んでいるように感じられた。

包丁が最後に向けられたのは、愕然と立ち尽くすシウネーだった。

「ここが日本のサーバーで、お前らが正規の接続者だっていうなら、なぜお前らだけがそんな高級装備を持ってるんだ？　GM装備なみにピカピカ光ってるじゃないか！　チートで好き勝手に作り出したに決まってるぜ!!」

そうだ、そうだ！　という叫びが周囲から追随した。

シウネーは、必死に男の言葉を否定した。

「……違います！　装備が異なるのは、私たちのメインキャラクターをこの世界にコンバートしたからよ！」

その途端、黒ポンチョの男が声高にせせら笑った。

「ハッ、テストサーバーにメインキャラを移すなんて、そんな間抜けがいるかよ！　嘘だ、全部嘘だぞ!!」

「本当よ、信じて!!　私たちは、キャラクターを喪失する覚悟で、ここに……」

ひゅんっ、と空気を切り裂く音がした。

シウネーは、飛来したダガーが自分の右肩に深く突き刺さった時、痛みよりも遥かに大きな絶望を感じた。武器を投じた男が猛々しく喚いた言葉は、シウネーには理解できなかった。

中国人プレイヤーの小集団が、一時的な停戦状態を破って右側から突撃してくるのを見て、

すぐ近くにいた韓国人リーダーも罵り声とともにシウネーを蹴り飛ばした。

地面に倒れ込んだシウネーは、背後から仲間たちが駆け寄ってくる足音を聞きながらも、再び立ち上がることができなかった。

＊＊＊

――なぜ。

整合騎士レンリ・シンセシス・トゥエニセブンは、戦場を覆う憎しみの深さをまざまざと感じながら、それだけを胸中で繰り返した。

――なぜ彼らは、同じリアルワールド人なのに、これほどまでに憎み合い、殺し合わなくてはならないんだ。

いや、レンリにそんなことを言う資格はないのかもしれない。アンダーワールドに住まう者たちだって、人界人と暗黒界人に分かれ、何百年も血みどろの戦いを繰り広げてきたのだから。ほんの数日前、東の大門で流された血の量は、この戦場の土を濡らしつつあるそれに匹敵するだろう。レンリ自身、両腰に下がる神器《雙翼刃》で、数え切れないほどのゴブリン族の命を絶った。

でも、だからこそ。

アンダーワールドの外側に広がるというリアルワールドには、争いも憎しみもなく、戦争など決して起きないのだと信じたかった。

しかし、それが幻想であることは最早明らかだった。リアルワールド人であるアスナや彼女の仲間たちはアンダーワールド人と同じ言葉を話すのに、新たに襲ってきた数万の軍勢が口々に放つ叫び声は、レンリにはまるで理解できない。言語ですらここまで乖離しているのなら、休戦や和睦の交渉すら不可能ではないか。

つまり、争いこそが人間の本質だということなのだろうか。

この世界でも、外側のリアルワールドでも、そしてもし存在するのならばさらにその外側の世界でも、人は果てしない殺し合いだけを続けているのか。

――そんなはずが、あってたまるか！

レンリは強く両手を握り締め、滲みかけた涙を堪えた。

整合騎士シェータは、敵であるはずの暗黒界の拳闘士団を守るためにひとり死地に残った。あの人はきっと、剣と拳を通じて暗黒界人と解り合ったのだ。血に塗れた道の向こうにだって、きっと希望はあるんだ。

ならば、いまは戦わねばならない。ただ守られ、立ち尽くしている時ではない。

レンリは、必死の防戦を続ける味方のリアルワールド人部隊の救援に向かうべく、前線に歩き出そうとした。

と、小さな声が背後で響いた。
「騎士様。私も行きます」
振り向くと、そこに立っていたのは補給部隊に所属する赤毛の少女練士、ティーゼだった。小ぶりの剣をしっかりと握り、悲壮な表情で口許を引き締めている。
「……だめだよ、君はあの人を守らないと……」
「その役目は、ロニエに譲ります。……私が大好きだったユージオ先輩は……」
ティーゼは、紅葉色の瞳に光るものを滲ませ、続けた。
「あの人は、大切なものを守るために命を散らしました。私も、その志を継ぎたいんです」
「……そう」
レンリは強く唇を噛んだ。
整合騎士である自分でさえ、あの凄まじい戦場で生き残れる確証はないのだ。正式な衛士ですらないティーゼが、無事でいられるとは思えない。
しかしその時、新たな声が響いた。
「私も行きます、騎士どの」
ティーゼの傍らに進み出たのは、茶色の髪を後ろで束ねた長身の女性衛士長だった。これまで奮戦を続けてきたのだろう、服は汚れ、鎧は傷だらけだが、凛とした顔に宿る闘志は消えていない。

「……私も、キリトとの約束をまだ果たせていません。あの子があんなになってまで守ろうとした人々を……世界を、ここで諦めるわけにはいかないのです」

「ソルティリーナ先輩……」

ティーゼが震える声で名を呼び、衛士長もかすかな微笑みとともに頷き返した。

誇りでも、名誉でもなく、守るべきもののために戦う。

二人のその決意が、自分の中にも染み込み、共鳴するのをレンリは感じた。

右手で腰の神器にそっと触れながら、深く頷く。

「……解った。なら、君たちは僕が守るから……絶対に、僕から離れないで」

「はい！」

「頼みます、騎士どの！」

ティーゼとソルティリーナが力強く応え、左腰から剣を抜いた。

同じように一対の神器を両手に握りながら、レンリは胸の奥で呟いた。

――エルドリエさん。シェータさん。そしてベルクーリ騎士長。

――あなたたちのように、僕もようやく命の使い場所を見つけられたようです。

そして整合騎士レンリは、二人の女性剣士と一緒に、悲鳴と絶望渦巻く戦場へと駆け出した。

4

神代凛子は、サブコントロール・ルームに駆け戻ると、つい先ほどまで比嘉タケルが座っていたメッシュチェアに腰を下ろした。

正面の大モニタに幾つも開かれたウインドウのうち、下のほうの小窓を注視する。表示されているのは、桐ヶ谷和人のフラクトライト状態を表す立体グラフだ。

虹色のグラデーションに彩られた放射光の中央には、《主体の欠損》を示すという闇が黒く滲んでいる。

いま、比嘉タケルは四台のＳＴＬをオペレートし、問題の欠損を、和人と深く関わる三人の少女の記憶を用いて修復しようとしている。そのために、敵に占拠されたロウワーシャフトに単身――いや、たった二人で潜入したのだ。

いまのところ、襲撃者たちは、囮として階段から突入させた《イチエモン》の迎撃に気を取られている。しかし、ライフルで撃ちまくられれば、いかに鋼鉄のロボットといえども長くはもたない。イチエモンを破壊すれば、敵も考えるだろう。いったい、日本人たちは何をしたかったのか、と。

――比嘉君、急いで！

心のなかでそう念じた時、しゅっとドアがスライドし、アロハシャツ姿の男がガコガコと下駄を鳴らして駆け込んできた。

「ど……どうだい、キリト君のほうは⁉」

「いま、比嘉君のオペレーションが始まったところ。囮のほうはうまくいってる？」

訊き返すと、菊岡誠二郎は肩で息をつきながら、ずれたメガネをくいっと持ち上げた。

「イチエモンの後ろから、スモーク・グレネードをありったけ投げ込んだ。煙が通路から排出されるまでもう少し引っ張れるだろうが、その後は再び隔壁をロックしないと危険だ。あまり時間はないぞ」

「比嘉くんは、長くても五分で結果が出るって言ってたけど……」

口をつぐみ、凛子は再びモニタに視線を戻した。

桐ヶ谷和人のフラクトライトには、相変わらず変化はない。ぎゅっと両手を握り締め、アメリカの主婦が言う『鍋を見詰めていると沸騰しない』という諺に従う心境で、視線を大モニタの中央に向ける。

するとそこには、まるで架空のファンタジー世界の地図のような——いや、ある意味ではそれそのものだと言っていい全アンダーワールドの地形図が開かれたままになっていた。

数日前、オーシャンタートルに到着してすぐに見せられた人界全体図の、さらに外側が表示されている。人界を取り囲む円形の山脈から、南にずっと下ったところに、四角を二つ並べた、

遺跡のような人工地形が見て取れる。そこには、結城明日奈の現在位置を示す明るい光点と、人界の軍隊を示す青いドット集合、日本から接続中の援軍プレイヤーを示す白いドット集合が密に固まっている。

そして、彼らを取り囲む膨大な赤い集合体が、襲撃者たちに煽動されてダイブしたアメリカ人プレイヤー――のはずなのだが、しかしやけに規模が大きい。日本人たちの二十、いや三十倍ほどもいるのではないか。

これで本当に大丈夫なのだろうか、明日奈以外の二人はどこに行ってしまったのだろうと画面を見回すと、遺跡から遥か南に下ったところに、水色の光点を一つ発見した。恐らくこれが朝田詩乃か。

となると桐ヶ谷直葉はどこに。更に地図を詳細に眺め、ようやく見出した黄緑色のドットは、主戦場からかなり北に離れた場所で輝いていた。その近くにも赤い敵集団が存在しているが、確か比嘉は、二人とも明日奈の座標にダイブさせると言っていたはずだ。それなのになぜ……と眉をひそめた凛子は――。

ふと、直葉の光点の強い輝きに隠れるようにして、もう一つ白いドットが瞬いているのに気付いた。

「……？」

もう、ラース側からＳＴＬでダイブしている人間はいないはずだ。となると、このドットは

何だろう。

反射的にマウスを滑らせ、カーソルを慎重にドットに合わせてクリックすると、新たなウインドウが開いた。眼を凝らし、微細な英字フォントを読み取る。

「ええと……制限、対抗指数……検出閾値……報告？　何なのこれ……」

意味が解らないわ、と続けようとした、その時だった。

「な……なにイイィ!?」

いままで桐ケ谷和人のグラフを注視していた菊岡がいきなり大声で喚き、凛子は飛び上がりそうになった。

「な、なんなの!?」

しかし菊岡は何も言わず、マウスを奪い取ると、凛子が開いたばかりのウインドウを拡大する。身を乗り出し、早口で唸るように呟く。

「ぐっ……間違いない、新たな限界突破フラクトライトだ……！　しかし、なぜこのタイミングで……！」

がりがりと頭を掻く菊岡の顔を、凛子は目を丸くして見上げた。

「えっ……それってつまり、第二の《A．L．I．C．E．》ってこと？」

「そう、そのとおり……ああ、いや、待った……これは……」

菊岡は、詳細なログが表示されているウインドウを高速でスクロールさせ、再び唸り声を上

げた。

「……厳密には、《アリス》と同じレベルとは言えない。論理回路ではなく情動回路によって人工フラクトライトの制限を突破したようだが……しかし貴重なサンプルなのは間違いない。このままおとなしくしてくれていればいいが……ああ、いかん、すぐ南のアメリカ人集団に向かっている！」

両手で頭を抱える菊岡からマウスを奪い返し、凛子も問題の人工フラクトライトが限界を突破した時の詳細ログを注視した。

「ふうん……確かに、感情フィールドに新しいノードが連鎖反応的に発生してるわね……。――ん？　ねえ、菊岡さん？」

「な……なんだい」

ぬおおお、と体を捩っていた菊岡が、首だけをモニタに向ける。

「この、ここんとこに挿入されてる外部命令は何なの？　やけに違和感があるって言うか……ずいぶん恣意的な……まるで、回路の新生を阻害しようとしてるみたい……」

凛子は目を細め、小さなフォントで表示されるコードを追った。

「右視覚領域に……擬似痛覚を注入？　これじゃ、せっかく人工フラクトライトが制限を突破しかけても、そのプロセスが痛みで消されちゃうわよ。あなたたちは、アンダーワールド人にこんな制限まで設けていたの？」

「い……いや、そんなことはしていない。するわけないじゃないか、目的と真逆の行為だ……というか、明白に妨害してる」

「そう……よね。それに、このコードのクセ、比嘉くんのと違う……。あ、最初のとこにコメントアウトがあるわ。……《コード871》？　871って何？」

「ハチナナイチ？　そんな番号、聞いたこともないよ……いや、待て……待てよ、つい最近、どこか……で……」

突然菊岡は下駄を鳴らして駆け出し、少し離れた椅子の背に掛けられている薄汚れた白衣を摑みあげた。ばんっと音をさせて広げ、襟の内側を凝視している。

「ちょっと、何よ、どうしたの？」

凛子が訊ねると、黒縁メガネの下で両目を見開いた菊岡が、白衣の襟タグを突き出すように示した。

そこには、黒の油性マジックで、【871】とくっきり記されていた。

「その白衣は……さっき、比嘉くんと一緒に下に行った、スタッフの柳井さんの……」

呟いた凛子は、自分の声が尻すぼみに消えていくのを聞いた。

柳井。ヤナイ。

「……871!?」

凛子と菊岡は、同時に立ち上がりながら叫んだ。

＊＊＊

拳闘士の長イスカーンは、近づく赤い軍勢の姿を、霞む左眼で捉えた。
奇妙な言葉を話す兵士たちは、包囲の輪をほんの二十メルにまで縮めると、もう拳闘士たちに戦意がないのを確認したのか、互いに頷き合った。
直後、意味は解らないが威勢のいい雄叫びを放ち、いっせいに地面を蹴る。
イスカーンは、骨が砕けた左手で、隣に座る女騎士の右手を強く握った。すぐに握り返される感覚があり、麻痺した手に心地いい痛みが一瞬だけ甦った。
最後の時を迎えるため、俯いて眼を瞑ろうとした、その瞬間――。
「……あれは……？」
シェータの声に、再び顔を上げる。
戦場の北に広がる峡谷の向こうから、土煙を上げて殺到してくる大軍勢が見えた。
大柄な丸い体。突き出た平たい鼻と、垂れ下がった耳。
オークだ。
「……なんでだ」
イスカーンは呆然と呟いた。オーク軍は、ずっと北に離れた《東の大門》で皇帝ベクタから

待機を命じられたままのはずだ。皇帝が姿を消してしまった以上、その命令が解除されるはずはない。事実、生き残りの暗黒騎士たちは、峡谷のすぐ向こう側で愚直な待機をひたすら続けている。

わけが解らず、オークの大軍に眼を凝らしたイスカーンは、その先頭をひた走る小さな人影に気付いた。

オークではない。緑がかった黄色の髪をなびかせ、若草色の装束から伸びる手足は眩しいほど白い。間違いなく人族、しかも人界人の若い女だ。

しかし、あれではまるで、たった一人のちっぽけな女剣士が、オーク族の全軍を率いているようではないか。

殺到する大軍に気付いたのか、拳闘士団を取り囲む赤い兵士たちの動きも止まった。

直後、オーク軍の先頭を走る娘が、峡谷に架かる石橋へ突入した。

きらっ、と眩い輝き。娘が、背中から銀色の長刀を抜き放ったのだ。

瞬間、何かを感じたのか、イスカーンの左手に握られたままのシェータの右手がびくりと震えた。

人族の娘は、橋の中央に差し掛かったあたりで、長刀を高々と振りかぶった。赤い兵士たちまでは、まだ二百メル以上の距離がある。

だが――。

娘の刀と両腕が、煙るように霞んだ。イスカーンの眼を以てしても、その斬撃は視認できなかった。銀色の閃光がちかりと瞬き、直後、恐るべき現象が発生した。

黒ずんだ地面に、眩い光の線が走った――と思ったら、その延長線上に立っていた赤い兵士たち十数人の体が音もなく分断され、悲鳴を発することさえできずに倒れたのだ。

振り下ろされた長刀が娘の手の中でくるりと反転し、再び戦慄すべき速さで跳ね上がった。またしても光の線が赤い軍勢を貫き、重武装の兵士たちを鎧ごとすぱっと切り裂く。

「……すごい」

シェータが、ほとんど音にならない声で囁いた。

＊＊＊

ソルスの弓から変化した愛銃ヘカートⅡを、シノンは迷いのない動作で構えた。

サトライザーとの距離は二十メートルもない。対物ライフルで狙撃するには近すぎる。この距離で、動く敵を高倍率のスコープの中に捉え続けるのは困難だ。

ゆえにシノンは、サトライザーが動き始める前に勝負をつけるべく、スコープのレンズ越しに黒い影を見た瞬間トリガーを引いた。

閃光。轟音。

凄まじい反動が、空中にホバリングするシノンを襲った。斜めの軸で回転しようとする体を、懸命に制御する。一発撃つたびにこうも体勢を崩していては、とても連射などできないが、いまの一撃が命中していればそれで終わりだ。

どうにか体を安定させ、シノンは視界にサトライザーの姿を収めた。

そして、驚愕に両眼を見開いた。

有翼生物の背中に立つ男は、左腕を持ち上げ、五指をかぎ爪のように曲げている。

掌の中では闇と光が入り混じって激しく渦巻き、その中央で小さく、強く輝いているのは、間違いなくシノンが放った弾丸だった。

シノンの意識と同じように、吸い込もうというのか。

50口径の対物ライフルから放たれた、厚さ二センチの鋼板さえ貫く銃弾を。

シノンの心に、かすかな怯えが生まれた。それと同期するように、サトライザーの左手から放たれる闇がその勢いを増した。

「負けるな……」

シノンは無意識のうちに呟いていた。続けて、もうひと声叫んだ。

「負けるな、ヘカート!!」

ズバッ。

と音を立てて、光が闇を貫いた。

サトライザーの左手に巨大な穴が開き、鮮血と肉片が渦を巻いて飛び散った。

――――行ける!!

シノンは大きく息を吸い込むと、ヘカートⅡのボルトハンドルを引いた。排出された空薬莢が、きらきら輝きながら落下していく。

サトライザーは、傷ついた左手を無言で見下ろしていた。掌に開いた巨大な穴を、黒い闇が粘液のように埋めていくが、そう簡単に癒える傷ではないだろう。

笑みの消えた顔を持ち上げ、シノンを見据える。

右手が動き、腰からクロスボウを外す。

「……ふん」

シノンは軽く鼻を鳴らした。あんなもので、対物ライフルに対抗できるはずがない……

ぐにゃり。

突然、クロスボウが歪んだ。

左右に突き出した弓が折り畳まれ、全体の長さが倍以上に伸びる。木製だったフレームが、黒い金属の輝きを帯びる。

ほんの一秒後、サトライザーの右手には、ヘカートに並ぶほど巨大なライフルが握られていた。シノンはその銃の名前を即座に認識した。

バレットＸＭ５００。

ヘカートⅡと同じ50口径ながら、より新しい世代の対物狙撃ライフルだ。
サトライザーの口許に、再び歪んだ笑みが刻まれた。
「……上等じゃない」
呟き、シノンはヘカートの銃床をぐっと右肩に押し当てた。

＊＊＊

「うわっ……だ、大丈夫？」
まるで本気で心配しているかのような柳井の声に、比嘉は一瞬痛みを忘れて叫んだ。
「お……おい、自分で撃っといてその言い草かよ……！」
「いやー、当てる気はなかったのよ、これホントね。殺人罪まで背負う覚悟なんかないしさあ、せっかく西海岸にいかすコンドミニアムとか買っても、びくびくしながら暮らすんじゃ意味ないっしょ？」
どうやら柳井は本気で言っているのだと理解した途端、脱力感に襲われて腕から力が抜ける。いかん、と気を引き締め直し、おそるおそる右肩の傷を確認する。
ダクトの壁で跳ねた弾は、鎖骨のすぐ下に命中したようだ。痛みというより、冷たい麻痺感が右腕全体に広がり始めている。シャツはすでに脇腹あたりまで赤黒く染まり、とてもかすり

傷という感じではない。

現在の状況、そして今後の展開に対する恐怖が、ようやく胃の下あたりからじわじわとせり上がってきて、比嘉は浅い呼吸を繰り返した。数メートル上の柳井は、なおもしたり顔で喋り続けている。

「ほんとは、比嘉サンの作業をチョロっと妨害して、点検コネクタを破壊してから下のメインコントロール側に脱出するつもりだったんだよねえ。ボクも潜水艦に乗せてもらう手はずになってるからさぁ。ラース側に死人も出なかったし、これでアリスさえきっちり回収できれば、ハッピーな結末だったのにねぇ」

「死人が……出なかっただって……？」

比嘉は再び傷の痛みを忘れ、柳井を糾弾した。

「……いま、このチャンスに桐ヶ谷君を治療できなければ、彼の意識はもう二度と回復しないんスよ！　彼の魂を殺すのは、アンタだよ柳井さん！　それでよく人殺しの覚悟がないなんて言えたもんだな！」

「あー。あー……そーねぇ……」

柳井の顔から、すっと表情が消えた。オレンジ色の非常灯に照らされた、無精ヒゲの浮いた頬が二度、三度と痙攣する。

「うん……死んでいいよ、あのガキは」

「な……」

「だってさぁ、あいつは殺しちゃったんだよ。ボクの大事なアドミーちゃんをさ」

「あど……みー……？」

聞き慣れない名前に途惑う比嘉を見下ろし、柳井は憤慨したように叫んだ。

「公理教会最高司祭、アドミニストレータ猊下だよ！　ボクはねえ、約束してたんだ。あの子のアンダーワールドの完全支配に最大限協力するって。それに、もしサーバーが初期化されることになっても、あの子のライトキューブだけはちゃんと保全してあげる、ってね」

比嘉は愕然と眼を見開いた。

公理教会というのは、アンダーワールド内の人界を統治する組織の名称だ。凄まじく厳格な法律と、強大な武力であまねく住民を完全に支配していた。

比嘉たちが、限界突破フラクトライト《アリス》の出現を察知しつつも確保できなかったのは、時間が加速されたアンダーワールドで、公理教会があっという間にアリスを連行し、そのフラクトライトに記憶改変処置を施してしまったせいだ。

そう、あまりにも素早すぎ、的確すぎる手際だった。

まるで、人工フラクトライトの何たるかを、完全に熟知していたかのように。

そのとおりだったのだ。公理教会は——少なくともそのトップであったらしい《アドミニストレータ》という名の人工フラクトライトは、世界の仕組みを知ってしまっていたのだ。

「……アンタが、アンダーワールドを汚染したのか……」

比嘉が低く呻くと、柳井はちっちっとわざとらしく舌を鳴らした。

「いやいや、最初にコンタクトしてきたのはあの子のほうだよ。ボクが当直してたら、いきなりスピーカーから女の子の声が聞こえてきてさ、あの時はびびったなあ……。彼女は、自力でアンダーワールドの全コマンドリストを発見して、こっちとの回線を開いたんだ。リスト呼び出しコマンドを消し忘れた比嘉サンのミスだよ、元を辿ればね」

んっふふふと笑い、柳井は何かを思い出したのか、とろんとした目つきで続けた。

「ボクも最初は、こりゃあいまのアンダーワールドは完全初期化待ったなしだなぁと思ってさ。どうせみんな消されちゃうならまぁいいかって、こっそりSTLでアドミーちゃんに会いに行ってみたんだよね。そしたらさぁ……ああ、あんな綺麗な子、ボクは見たことなかったよ。須郷サンがALOに閉じ込めてた子も可愛かったけど、アドミーちゃんは性格も、声も、仕草も、何もかもボクの理想どおりで……。――あの子は、約束してくれたんだ。協力したら、見返りにボクを第一のシモベにしてくれるって。いつか現実世界も一緒に支配して、ボクを王様にしてくれるって……」

――違う。

汚染されたのは、この男のほうだ。

比嘉は、戦慄のあまり総毛立つのを感じながら悟った。柳井は、愚かな裏切り者だがただの

バカではない。そんな人間を、ここまで取り込み、支配してしまうアドミニストレータとは、いかなる存在だったのか。

と、回想に浸っていたらしい柳井の顔から、再び表情が抜けた。

「……でも、あの子は死んでしまった。殺されちゃったんだ……須郷サンの実験も邪魔した、あの小僧にさ。カタキ、取ってあげなきゃ、アドミーちゃんが可哀想だよね……」

血走った眼を見開き、柳井は再び拳銃を比嘉に向けた。オートマチックの拳銃は一発撃つと自動的にハンマーが起きるので、トリガーが一発目と比べて遥かに軽くなる。人差し指に少し力を入れただけで、再び銃弾が発射されるはずだ。

「……そうだよ……そうだ、やっぱりボクも一人くらいは殺さないと、あの子の供養にならないよね……」

見開かれた柳井の眼の中央で、収縮した瞳孔が細かく震えた。

……やばい。今度こそ、本気だ。

比嘉は思わず目を瞑った。

＊＊＊

――間に合わない。

リーファは、遥か離れた場所でアスナやクライン、リズベットたちが窮地に陥っていることを感じ、強く唇を噛んだ。

しかし目の前では、三千人近くもいるであろう赤い鎧の兵士たちが行く手を阻んでいる。オーク族の長だったらしいリルピリンに要請し、アスナとキリトを助けるために南を目指したものの、ようやく発見したのは目的の人界守備軍ではなかった。

現実世界からダイブしてきたと思しき軍勢に囲まれる、わずか数百人の男女は、リルピリンいわくオークと同じ暗黒界軍に所属する拳闘士たちらしい。そうと知ったリーファは、一瞬の迷いを振り切って、彼らを助けると決めた。

「敵陣には、あたしが一人で斬り込むからね。リルピリンたちは拳闘士に合流して、そっちに行こうとする敵だけを倒して」

そう指示すると、リルピリンは「おでたちも一緒に闘う！」と激しく抗議した。しかしリーファは強くかぶりを振り、無骨なオークの手をしっかりと握りながら言った。

「だめよ、あなたたちにこれ以上の犠牲者は出したくないの。私なら大丈夫……あんな奴ら、何万人いたって負けないわ」

そう笑いかけ、リーファは単身、赤い軍勢に立ち向かった。

テラリアのヒットポイントが、ほぼ無限の回復力を持つことはすでに確認している。それに、前方の現実世界人も、同じようにかりそめの命を持つ者たちなのだ。キリトたちの救援が間に

合いそうもない以上、ここでオークたちを無駄に死なせることは、リーファにはできなかった。

超ロングレンジからの二連撃で数十人の敵を斬ったリーファは、脚を止めることなく、そのまま敵の真っ直中へと突入した。

いかなる理由によるものか、ＡＬＯと比べて間合いが数倍にも拡張されたソードスキルを、立て続けに放つ。テラリアのＧＭ装備《ヴァーデュラス・アニマ》から色鮮やかな閃光が放たれるたび、放射状に血飛沫が飛び散る。

しかし、ソードスキルとソードスキルのあいだに生まれる硬直時間までは消せず、その隙を狙って無数の刃が襲ってくる。全てを回避はできず、リーファの体にも幾つもの傷が刻まれ、灼けるような激痛が眼を眩ませる。――しかし。

「ええ――――いッ!!」

裂帛の気合とともに、右足で強く地面を踏む。足許からぶわっと緑の輝きが溢れ、全身の傷が一瞬で治癒する。

これだけは消せない痛みの余韻に耐えながら、リーファはひたすら剣を振るった。

たとえ万の傷を受けようと、この場所の敵だけは、現実世界へ追い返してみせる。

ダイブ座標のずれで意図せぬ場所に飛ばされてしまった自分に役目があるとすれば、それはきっと一人でも多くのアンダーワールド人たちを助けることだ。キリトが愛し、守ろうとした人々を。

「She's such a boss !!」

そんな叫び声とともに鋭く突き出されてきた剣を、リーファは左腕で受けた。

「せあぁ!!」

返す刃で、その持ち主をひと息に斬り伏せる。

リーファは、腕に突き刺さったままの剣を口に咥えて抜き取ると、血のりとともに吐き捨てた。

＊＊＊

第二射は、ほぼ同時だった。

二丁の対物ライフルから放たれた弾丸たちは、ほとんど触れ合うような距離ですれ違い、大きく弾道を変化させて虚空へと飛び去った。

シノンは、今度は無様に体勢を崩すことなく、両足でしっかり空気を蹴って反動を抑えた。視線の先では、サトライザーも激しく羽ばたく有翼生物の背中に踏みとどまっている。

このような、上下左右とも完全なオープンスペースで、しかも対物ライフル同士で撃ち合うのはシノンには初めての経験だった。ＧＧＯではプレイヤーの飛行はサポートされていないので当然と言えば当然だが、二脚を立てての伏射が基本であるヘカートの、空中での反動の大き

さは想像以上だ。

この勝負――。

先に反動を抑え、敵より一瞬でも速く次の弾を撃てたほうの勝ちだ。排莢しながら、シノンはそう考えた。

同じことを、サトライザーも狙っているのだろう。右方向へ回り込もうと飛ぶシノンの逆へ、逆へと位置取りしてくる。

何の合図があったわけではないが、まったく同時に、双方とも高速機動を開始した。

空中でバランスを崩さないぎりぎりの鋭角ターンを繰り返しながら、ランダムに飛び続ける。銃口をぴたりと敵に追随させながらも、己もまた敵の射線に捉われ続けていることを強く意識する。

サトライザーの構えるバレットが、ついにシノンの動きを先読みしたか、ひゅっと霞むほどの速度で動いた。

――来る!!

シノンは歯を食い縛り、両眼を見開いた。

バレットの銃口から火炎が迸る。

限界速度で飛行しつつ、体を左に捻る。

胸元が焦げるほどの距離を、致死の銃弾が唸りを上げて通過した。青いアーマーが、ぴしっ

《アンダーワールド大戦》戦況

《最終負荷実験》二日目

と音を立ててひび割れた。

――避けた！

最初で最後の機会。サトライザーが反動を抑えるために静止する、その一瞬を撃つ！

ヘカートを構えようとしたシノンが見たのは。

真正面から飛来する、新たな銃弾だった。

連射――なぜ!?

ああ……しまった。

一発撃つごとにボルトハンドルを引く必要があるヘカートと違って、バレットはセミオートマチック・ライフルなのだ。

その思考が弾けるのと同時に、シノンの左足が、膝の上で爆発するように千切れ飛んだ。

＊＊＊

絶望的な状況に抗い、最後まで戦場に立ち続けたのは、スーパーアカウントに保護されたアスナと、そしてアンダーワールド人である整合騎士レンリ、及び彼の騎竜、さらに騎士と竜に守られながらも果敢に剣を振り続けた少女練士ティーゼと衛士長ソルティリーナだった。

アスナは、極限の疲労と苦痛で霞む視界に、鬼気迫る戦いぶりを見せる騎士レンリの姿を捉

え続けた。

十数分前、小柄な騎士は、前線に姿を現すや十文字のブーメランを自在に飛翔させ、押し寄せる敵兵を片端から薙ぎ倒した。その恐るべき威力は、怒りに燃える隣国人たちの突撃を、数分にせよ押し返したほどだった。また、巨大な飛竜が放つ熱線も大いに敵を怯ませ、彼らがまさしくアンダーワールドという異世界に生まれ育った本物の竜騎士なのだということを十二分に証明した。

しかしやがて、敵も気付いた。騎士レンリは、ブーメランを投擲、操作している間は本人がほぼ無防備になってしまうということに。

何十度目かにブーメランが飛翔し、赤い軍勢の最前列を薙ぎ払いかけたその瞬間、後方から無数の長槍が投擲された。アメリカ人プレイヤーと戦った時、アスナが密かに恐れた戦法が、ついに実行されたのだ。

槍は、赤い空から黒い雨の如く降り注いだ。

最初の攻撃は、レンリの飛竜が広げた翼と胴体で受け、主を守った。

剝がれた鱗と赤い血を飛び散らせながら、竜はそのまま横倒しになった。

すかさず、新たな槍の雨が投げ放たれた。

ざああっと音を立て襲いかかる無数の穂先を一瞬見上げてから、騎士レンリは振り向くと、すぐ後ろにいたティーゼを抱きかかえ、自分の下に隠した。

次の瞬間、背中に二本の槍を受け、レンリはティーゼを覆うように前のめりに倒れた。制御を失った十文字のブーメランが、一瞬の光を放って二つに分裂し、離れた地面に突き刺さった。

その頃にはもう、戦域の他の場所でも、戦闘はほぼ終了していた。

力尽き、倒れた日本人プレイヤーに赤い兵士がいっせいに群がり、我先にと刃を叩きつけていく。血と肉、かすかな悲鳴が振り撒かれ、やがて途絶える。

あるいは、盾や鎧を全て破壊され、体ひとつで地面に拘束されている者も多くいる。彼らの頬を伝う無念の涙は、傷から流れる血と同じくらい痛ましい。

コンバート組二千人の防御陣がほぼ無力化され、いままでその中央に守られていた人界軍がいよいよ露出し始めていた。

非武装の補給部隊と修道士隊を守ろうと、約四百人の人界軍衛士たちが、ぐるりと輪になって剣を構えている。どの顔にも悲壮なまでの覚悟が満ち、じりじりと迫る赤い軍勢に向けて、決死の突撃をかけるその時を静かに待っている。

「……やめて……」

アスナは、自分の唇から零れた声を聞いた。

それは、全身に受けた傷の痛みではなく、絶望と哀しみによって心が折れた音だった。

「お願い……もうやめてよ……」

呟きとともに、右手からレイピアが落ちて地面に転がった。その傷だらけの刀身に、頬から

滴った涙の粒が小さく弾けた。

目の前に立ちはだかった赤い人影が、敵意に満ちた罵り声とともに、両手剣を高々と振り上げた。

――その刹那。

雷鳴にも似た大音声が轟き、アスナに向けて振り下ろされようとしていた刃と、戦場のあちこちで進行中のあらゆる戦闘を停止させた。

スト――――ップ!!　と途轍もないボリュームで叫んだのは、いままでずっと離れた場所で戦闘を見守っていた黒ポンチョの男だった。殺人ギルド、ラフィンコフィン頭首ＰｏＨの亡霊。

隣国人プレイヤーたちは、マーカーか何かで黒ポンチョ男を指揮官と認識させられているらしく、不承不承ながらも武器を降ろした。アスナを斬り伏せようとしていた男も、激しく舌打ちして剣を引き、代わりに無造作な足蹴を見舞ってきた。

背中から地面に倒れ込んだアスナは、萎えた腕で懸命に体を起こした。

視線を巡らせると、黒革の裾を揺らしながらこちらに歩いてくる背の高い男の姿が見えた。低いがよく通る声で周囲の赤いプレイヤーたちに言葉を掛けているが、韓国語なので理解できない。

と、周囲の赤い兵士たちが次々に頷き、周りの仲間たちに何かを伝え始めた。

突然、傍に立っていた男がアスナの髪を掴み、引っ張り上げた。思わず悲鳴を漏らしてしまうが、男は聞く耳を持たず、力任せに引き摺っていく。

周囲でも、似たようなことが行われていた。どうやら、まだ生きている日本人プレイヤーを一箇所に集めるつもりらしい。

黒ポンチョは、いまなお剣を構え続ける人界軍衛士たちのすぐ近くまで平然と歩み寄ると、振り向いて片手を振り、アスナの髪を掴む男に再び何かを指示した。

乱暴に背中を蹴り飛ばされて、アスナは数メートルも吹き飛ぶと地面に転がった。周りに、立て続けに日本人プレイヤーが突き転ばされる。

生存者の数は、すでに二百を切っていた。

ヒットポイントの量が生存率に直結したのか、やはりハイレベルのプレイヤーが多く残っている。少し見回すと、すぐにＡＬＯの領主たちや、スリーピングナイツのメンバーを発見できた。

皆、全武装を破壊され、または奪われて、ぼろぼろになった服しか身につけていない。露出した肌には傷が縦横に走り、折れた刃が突き刺さったままの者も多い。だが、彼らの顔に一様に浮かぶのは、深い無力感と敗北感だった。

もうこれ以上、何も見たくなかった。地面に突っ伏して、最後の瞬間まで瞼を閉じていたかった。

しかしアスナは、滲む涙を通して、この戦場にコンバートしてきてくれたプレイヤーたちの姿を目に焼き付けようとした。

視線を一回りさせたところで、少し離れた場所で両膝を抱え、肩を震わせている女性プレイヤーを見つけた。ピンク色のショートヘアは土埃にまみれ、あずき色のコスチュームも各所で引き裂かれている。

アスナは這いずるようにその背中に近づくと、親友の体に両手を回した。

リズベットは一瞬全身を強張らせてから、アスナの胸に頭を預けてきた。血と涙に汚れた頬がわななき、掠れた声が漏れた。

「みんな……あたし……あたしが……みんなを……」

「違う……違うよ、リズ！」

アスナも、涙まじりの声で小さく叫んだ。

「リズのせいじゃない。わたしが悪いの……ちゃんと考えれば、予想できたはずなのに……」

「アスナ……。あたし……知らなかった。戦うことが、こんなに怖くて……負けることが、こんなに辛いなんて……知らなかったよ……」

返す言葉が見つからず、アスナはもう一度強くリズベットを抱き締めた。両眼から溢れた涙が、次々に頬を伝った。

小さなすすり泣きが聞こえ、そちらを見ると、地面に倒れたまま動かないエギルと、その隣

にうずくまるシリカが見えた。

エギルは、よくもこれでヒットポイントが残っているものだと思えるほど酷く負傷していた。シリカを守るために、よほど激しく戦い続けたのだろう。大きな体には折れた剣や槍が何本も突き刺さり、四肢はほとんど叩き潰されたような有様だ。歯を食い縛っているのは、想像を絶する苦痛に耐えているからに違いない。

その近くには、胡坐をかいて項垂れるクラインの姿もあった。こちらは、左腕が肩の下から切断され、傷口にトレードマークのバンダナが巻いてある。

生存者は全員、ほぼ同様の状態だった。

武器も、鎧も、そして闘志も奪われて地に伏す二百人を、黒ポンチョの男はぐるりと睥睨し――フードの奥に覗く口に、にやりと大きな笑みを浮かべた。

さっと体を翻し、人界軍の衛士たちに向かい合う。

右手が持ち上がり、皆殺しにしろ、という指示が発せられる瞬間を、アスナは恐怖とともに待った。

しかし、人界人たちに向けて発せられたのは、意外な内容の日本語だった。

「武器を捨てて投降しろ。そうすれば、お前らも、後ろの捕虜も殺しはしない」

衛士たちの顔に、一瞬の驚きに続いて、深い憤激が走った。数歩前に出て、黒ポンチョと向かい合ったのは、女性衛士長のソルティリーナだった。レンリたちと一緒にずっと最前線で戦

っていたのだろう、剣は刃毀れし、額から血が垂れている。
それでも美しさを失わないソルティリーナは、毅然とした声で叫んだ。
「……ふざけるな!!　この期に及んで、我らが命を惜しむと……」
「その人の言うことを聞いて――ッ!!」
ソルティリーナの言葉を遮り、アスナは懸命に叫んだ。
リズベットを抱き締めたまま、涙に濡れた顔を上げて、アスナは必死に懇願した。
「お願い……あなたたちは生きて!!　どんな屈辱を味わおうとも、生きのびてください!!　それが……それが、私たちの……たった一つの……」
希望なのだから。
胸が詰まり、そこまでは言葉にできなかった。
しかし、ソルティリーナと衛士たちはぐっと口を引き結び、顔を歪め、しばらく身を震わせていたが、やがてゆっくりと肩を落とした。
がしゃ、がしゃんと音を立てて投げ捨てられる剣を見て、周囲を幾重にも取り囲む隣国人プレイヤーたちの間から、高らかな勝利の叫びが湧き上がった。それらはすぐに、自国名の連呼へと変わっていく。
黒フード男は、さっと片手を上げて数人のプレイヤーを呼び、何かを指示した。男たちは即座に頷き、降伏した人界軍をかき分けるように円陣の奥へと走っていく。

いったい何を……と思ったのも束の間、黒ポンチョがざくざくと音を立てて歩み寄ってきて、アスナの前に立ちはだかった。

フードの奥の暗闇は、この距離でも見通せなかった。逞しい口許や、首の周りに垂れる黒い巻き毛がかろうじて見える。

その口が歪んだ笑みを浮かべ、どこか陽気な響きを帯びた声を発した。

「……よう、久しぶりだな、《閃光》」

――やっぱり、この男は!!

息を呑み、アスナは胸の奥から言葉を絞り出した。

「……お前……ＰｏＨ……！」

「おっと、懐かしい名前だな。憶えててくれて嬉しいぜ」

そのとき、右手を地面に突いてにじり寄ってきたクラインが、燃えるような目で黒いフードを見上げた。

「てめェ……てめェかよ。生きてやがったのか……この、人殺し野郎が!!」

片手だけで摑みかかろうとしたクラインを、男のブーツが無造作に蹴り飛ばした。

アスナはぎりりと奥歯を食い縛り、低い声で訊ねた。

「これは……復讐なの？　ラフィン・コフィンを壊滅させた、私たち攻略組への……？」

「……」

ＰｏＨは、しばし無言でアスナを見下ろしていた。その肩が細かく震えているのにアスナは気付いた。

数秒後、これ以上我慢できないというように激しく噴き出す。ポンチョの下で体を捩り、くくく、ははは、と笑い続ける。

発作のような嘲笑をようやく収め、右手の人差し指を突き出すと、ＰｏＨは愉快そうに続けた。

「あー、ええっと……こういう時、日本じゃなんて言うんだったかな……ずっとアメリカにいたもんだから、スラングとか忘れちまったぜ」

くるくると回された指が、パチン！　と鳴った。

「そうそう、ばーっかじゃねえの？　まったくウケるぜ、あのな……」

かくん、と膝を折り曲げた男は、至近距離からアスナの顔を覗き込んできた。フードの奥に、ぎらぎらと輝く眼だけが見えた。

「……教えてやるよ。ラフィン・コフィンの隠れアジトを、てめぇら攻略組様に密告したのは、このオレ様なんだぜ？」

「な……」

アスナも、クラインも、そして瀕死のエギルまでもが目を見開いた。

「なんで……そんな……」

「そりゃ、サル同士殺し合うのが見たかったってのもあるけど……一番の理由はやっぱりこれだな。オレはな……お前らを《人殺し》にしてやりたかったんだよ。お偉い勇者様ヅラして、最前線でふんぞり返ってる攻略組様をよ。お膳立てには苦労したぜ……。ラフコフの連中にも直前に警告して、逃走は無理だけど迎撃は間に合うっつうタイミングをぴったし作ってさ」

——あのアジト急襲作戦が事前に漏れていた形跡があったのは、そういう訳だったのか、とアスナは愕然としつつも考えた。

そのせいで、戦闘開始直後にはレベルと装備で優る攻略組のほうが押され、数名の死者まで出したのだ。劣勢を覆したのは、ソロプレイヤーながらも実力を認められていたキリトの奮戦であり、彼がラフコフ側の主力一人を斬り倒したことで、状況が逆転し……。

「……あれが……狙いだったの？」

アスナは、ひび割れた声で囁いた。

「キリトくんに……ＰＫ行為を、背負わせるために……？」

「イエス。アブソリュートリィ・イエス」

ＰｏＨは、熱を帯びた声で肯定した。

「オレはあの戦いを、ハイドしながら見物してたんだよ。ブラッキー先生がプチ切れて二人もぶっ殺した時は、危うく爆笑してハイドが破れるとこだったぜ。計画じゃあ、次はあいつとアンタを麻痺毒で無力化して、あん時のことをたっぷりインタビューしてやろうと思ってたんだ

けどよ……まさか七十五フロアでエンディングとはなぁ」

瞬時に沸騰した怒りが、アスナに傷の痛みを忘れさせた。

「き……キリトくんが、どれだけあの時のことを、悩んで、苦しんできたと思うの!?」

「ほう、そりゃよかった」

ＰｏＨの声は、対照的に氷のような冷たさを帯びていた。

「でも、そいつは怪しいもんだな。ほんとに後悔してるならよぉ……普通、ＶＲゲームなんざ見るのも嫌になるんじゃねえの？　殺したヤツに申し訳なくてさぁ。解ってんだぜ、あいつもいるんだろ、ここに。感じるんだよ。なんで馬車に閉じこもってんのかは知らねえが……まあ、直接訊くさ」

言葉を失うアスナにニヤリと笑いかけ、ＰｏＨは勢い良く立ち上がった。

いまだ周囲で湧き上がり続ける大歓声の底に、氷のように冷たい声が流れた。

「イッツ・ショーウ・タァ――――イム」

ＳＡＯで暗躍していた当時の決まり文句を口にして、さっと右手を持ち上げるＰｏＨの向こうに――。

赤い兵士の手で乱暴に押される車椅子と、それに懸命に付き従う、灰色の制服姿の少女が見えた。

ああ……。

やめて。
それだけは。
アスナの胸中に、悲痛な懇願が溢れた。クラインが跳ねるように立ち上がろうとし、すぐに押さえつけられた。
ＰｏＨは、すぐ目の前まで運ばれてきた車椅子を、上体をひょいと傾けて覗き込んだ。
「……ンン？」
訝しそうな唸り声とともに、つま先でこつんと、椅子から下がる細い脚をつつく。
「何だこりゃあ……？　おいブラッキー、起きろよ。聞こえてんのか、黒の剣士サマよ？」
かつての二つ名で呼ばれたキリトは――しかし、まったく反応しなかった。
黒いシャツ越しにも痛々しいほど痩せ細った体を背もたれに預け、顔を深く俯かせている。中身のない右の袖が風に揺れ、二本の剣を抱く左手も、骨ばかりが目立つ。
アスナの隣に突き飛ばされたロニエが、真っ赤に泣き腫らした眼を瞬かせ、小声で言った。
「キリト先輩……戦いのあいだ、何度も、何度も立ち上がろうとして……そのうち、力尽きたみたいに静かになって……でも……涙が……涙だけが、いつまでも……」
「ロニエさん……」
アスナは左手を伸ばし、しゃくりあげるロニエの華奢な体を引き寄せた。
きっと顔を上げ、ＰｏＨに鋭い言葉を投げる。

「解ったでしょう。彼は戦って、戦って、戦い抜いて、傷ついてしまったの。だからもう構わないで！　キリトくんを、そっとしておいて!!」

しかし黒ポンチョの男は、アスナの声など耳に入らない様子で、キリトの顔を至近距離から覗き込んだ。

「おいおいおーい、嘘だろ！　締まらねえぜ、こんなんじゃよ！　おい、起きろって！　ヘイ、スタンダップ！　グッド・モー……ニン!!」

突然、ＰｏＨは右足を銀の車輪に掛け、容赦なく蹴り倒した。

騒々しい金属音とともに横倒しになった車椅子から、痩せた体が地面に投げ出された。

アスナとクラインが、同時に立ち上がろうとして兵士の剣に押し留められた。エギルも低い怒りの声を漏らし、リズベットとシリカ、それにロニエが細い悲鳴を上げる。

しかしＰｏＨは気に留める様子もなく、キリトに歩み寄るとつま先で乱暴に引っくり返した。

「なんだよ……マジでぶっ壊れちまってるのかよ。あの勇者サマが、ただの木偶かぁ？」

いまだしっかりと二本の剣を抱えたままの左腕から、白い鞘を奪い取る。乱暴に引き抜かれた刀身は、その半ばで痛々しい折れ口を晒している。

盛大な舌打ちとともに、ＰｏＨは剣を投げ捨てようとした。と――。

「ぁ……。ぁー……」

キリトが、か細い嗄れ声とともに、左腕を白い剣へと弱々しく伸ばした。

「おっ!?　動いたぜ!!　なんだ、コイツが欲しいのか？」
ＰｏＨは、じらすように白い剣を動かしてから、それを無造作に放った。空中でそちらに動こうとするキリトの左腕をぐいっと掴み、引っ張り上げる。
「ほら、何とか言えよ!!」
ぱし、ぱしん！　と音を立て、ＰｏＨの左手がキリトの頬を張った。
アスナの視界が、憤怒のあまり薄赤く染まった。しかし、再び立ち上がろうとするより早く、クラインの血の滲むような絶叫が響き渡った。
「てめえが!!　てめえが、キリトに触るんじゃねえ――――ッ!!」
片腕で掴みかかろうとするその背中を、背後から太い剣が貫き、容赦なく地面に縫いつけた。がっ、と大量の血を吐き出しながらも、クラインは自分の体を引き裂いて、なおも前に進もうとした。
「てめえ……だけは……!!　許さ……ね……」
どかっ!!
と鈍い音が響き、二本目の剣がクラインの背中を貫いた。
いまだ枯れないことが不思議なほどに、止め処ない涙がアスナの両眼から溢れた。

＊＊＊

片脚がまるごと吹き飛んだ痛みよりも、まともに飛べなくなることへの恐怖をシノンは味わっていた。

これまでシノンは、脚で空気を蹴る感覚で随意飛行を制御してきたのだ。果たして、右脚だけで試みた急速回避は、無様な錐揉み回転へと変わってしまった。

「く……」

歯噛みをしながら、シノンは唯一可能な機動、つまりひたすらまっすぐな後退に移った。空中に、左脚から漏れ出る血が鮮やかな赤のラインを引く。

可能な限りの速度で距離を取りつつ、サトライザーを照準し、三発目の弾丸を発射した。

しかし、余裕の表情で追ってくる敵のライフルも同時に火を吐き、四発目を発射した。

同一直線上を突進する二つの銃弾は、交錯した瞬間、甲高い不協和音と鮮やかな火花を撒き散らして軌道を逸らし、それぞれ遥かな虚空へと飛び去った。

胸の奥に広がり続ける恐れを、ボルトハンドルを引いて空薬莢と一緒に排出し、シノンは四発目を発射した。

またしても、二つの雷鳴が重なって轟く。弾丸たちは接触した瞬間、巨大なエネルギーを空

中に放散し、螺旋を描いて飛び去っていく。

第五射。第六射。

結果はまったく同じだった。サトライザーが、わざとシノンの射撃に合わせてトリガーを引き、弾丸を衝突させ続けているのは明らかだ。

現実世界ではもちろん、GGO内でもこんな芸当はできまい。しかし、この世界ではイマジネーションが全てに優先する。意図しているサトライザーはもちろん、シノンまでもがこの結果を予想してしまっているがゆえに、超音速で飛行する弾丸の相撃ちという有り得ない現象が現実となるのだ。

それでもシノンにはもう、ボルトを引き、照準を合わせ、トリガーを絞るという三動作以外のことは何ひとつできなかった。

七発目の弾丸が、哀切な悲鳴を撒き散らしながら大きく右へと逸れ、消えた。

排莢。照準。

――カチン。

かちん、かちんと、シノンの指の動きに合わせて撃針が空しく鳴った。

ヘカートⅡの装弾数は、ワンマガジン七発。予備の弾倉はない。

対して、バレットXM500の装弾数は十。まだ、あと二発も残っている。

百メートル以上離れた場所で、サトライザーが浮かべた冷たい笑みを、シノンははっきりと

視認した。

構えられた黒い銃が、ぱっと炎を吐いた。

左脚に続いて、シノンの右脚が付け根から吹き飛んだ。

途端、一直線の飛行すらままならなくなり、シノンの体は徐々に落下し始めた。

反動を抑え込んだサトライザーが、最後の一撃を放つべく右眼をスコープに当てた。レンズいっぱいに広がる青い硝子のような瞳が、シノンの心臓をまっすぐに射抜いた。

――ごめんね。

ごめんね、アスナ。ごめんね、ユイちゃん。ごめんね……キリト。

シノンが口の中でそう呟いた直後、ＸＭ５００が十発目の弾丸をそのあぎとから解き放った。赤い炎の螺旋を宙に引き、サトライザーの視線を正確にトレースして飛来した弾が、シノンの青い鎧を粉砕し、上着を蒸発させ、その先端を肌に――。

バチッ!!

と、再びあの火花が迸った。

閉じかけた両眼を見開いたシノンの目の前で、高速回転する細長い弾丸を、ちっぽけな銀色の円盤が食い止めていた。

渦巻く白いスパークの中心で、厚さ二ミリもない金属が、断固たる意志を示して光り輝いているのを見た瞬間、シノンの両眼から涙が溢れた。

――諦めない。

絶対に諦めたりしない。信じるんだ。私を。ヘカートを。そして、このメダルを通して繋がる、一人の男の子を。

ひときわ激しい閃光とともに、銀の円盤とライフル弾が同時に蒸発した。

シノンはヘカートⅡを力強い動作で構え、トリガーに人差し指を掛けた。

たとえイマジネーションによって銃に変形したとは言え、この武器に与えられたシステム上の特性は持続しているはずだ。周囲の空間からリソースを自動吸収し、攻撃力としてチャージするソルスの弓、《アニヒレート・レイ》の力が。

ならば撃てる。マガジンの弾が尽きていようが、絶対にヘカートは応えてくれる。

「いっ……けえええぇ――――!!」

シノンは、トリガーを引いた。

発射されたのは、金属をまとった徹甲弾ではなかった。

無限のエネルギーを凝縮した純白の光線が、マズルブレーキから七色のオーロラを放散させながら、一直線に宙を疾った。

サトライザーの顔から笑みが消えた。右へとスライド回避しかけた瞬間、白い光がバレットの機関部を直撃した。

オレンジ色の火球が膨れ上がり、サトライザーを完全に呑み込み――。

轟音。爆発。

押し寄せる熱い突風を肌に感じながら、シノンは石のように落下し、数秒後、岩だらけの地面に激突した。

もう、飛ぶことはおろか、這いずることもできそうになかった。吹き飛ばされた両脚の痛みは凄まじく、意識を保つことすら困難だ。

それでも、シノンは瞼を持ち上げ、渾身の一撃の結果を見極めようとした。

遥かな空中にわだかまる黒煙が、風に運ばれていく。

その中から現れたのは——ホバリングを続ける、サトライザーの姿だった。

しかし無傷ではない。ライフルの爆発に巻き込まれた右腕は完全に消し飛び、肩口から薄い煙がなびいている。滑らかだった顔の右側も焼け焦げ、唇からひと筋の血が垂れる。

サトライザーの顔に、ついに凶悪な殺意が浮かんだ。

……いいわよ。何度だって相手をしてあげるわ。

シノンは、残された全ての力を振り絞り、ヘカートを持ち上げようとした。

数秒後、サトライザーの視線がふっと外された。有翼生物がぐるりと向きを変え、細い煙の筋を引きながら、一直線に南に向かって飛び去った。

シノンは、もう保持しているのも限界だった対物ライフルを、そっと地面に降ろそうとした。

接地した瞬間、それは本来の白い弓へと姿を戻した。

最後の力で、シノンは右手を持ち上げ、胸元に残されたチェーンの切れ端に触れた。

「……キリト……」

呟くと同時に、涙が頬にすうっと流れた。

＊＊＊

体に突き刺さる何本もの刃を、抜き捨てる余裕すらもうリーファにはなかった。

全身の痛みが融け合い、まるで剣き出しになった神経を直接針で刺激されているかのようだ。

幾つかの傷は、明らかに致命傷と呼べるものだった。腹部を貫く二本の剣は動くたびに内臓を切り刻み、背中から胸に抜ける一本は確実に心臓を直撃している。

しかしリーファは止まらなかった。

「う……おおああッ!!」

大量の鮮血とともに気合を迸らせ、何十度――あるいは何百度目かのソードスキルを発動させる。

長刀《ヴァーデュラス・アニマ》が緑の輝きを帯び、縦横に空を斬り裂く。周囲に凝集した光の円弧が、一瞬の溜めを経て音もなく拡散し、それを追うように無数の敵兵がばらばらと体を崩壊させる。

大技を放った後の硬直時間を狙い、数人の敵が殺到してきた。ぎりぎりで飛び退き、攻撃の大半は避けたものの、長いハルバードの一撃に左腕を叩き斬られた。

衝撃で倒れそうになるのをぐっと踏みとどまり、

「ぜやあああッ!!」

横薙ぎの一閃で三人を斬り捨てる。

リーファは、地面に落ちた左腕を拾い上げ、傷口に押し当てながら強く右足を踏んだ。

緑の閃光とともに、地面に草花が萌え出で、消えていく。ヒットポイントが上限まで回復し、惨い傷は残ったものの、左腕も再度接続される。

この状況では、テラリア・アカウントに付与された無限回復能力は、もう神の恩寵と呼べるものではなかった。

むしろ、呪いと呼ぶのがふさわしい。どれほど傷つき、激痛を味わおうとも、倒れることは許されないのだ。不死ではあるが不可侵ではないがゆえの、想像を絶する責め苦。

リーファを支えているのは、たったひとつの信念だけだった。

――お兄ちゃんなら。

絶対に、こんな傷くらいで倒れたり、しない。

なら、私も倒れない。たかが三千人、一人で斬り伏せてみせる。だって私は……お兄ちゃんの……《黒の剣士》キリトの……

「――――妹なんだからあああッ」

左手につがえられた長刀の切っ先が、真紅の輝きを迸らせた。

がしゅっ!!　という重い金属音とともに突き出された刀から、巨大な光の槍が解き放たれ、まっすぐに百メートル以上も戦場を貫く。ばしゃあっ！　と円状に敵兵の体がねじ曲げられ、飛散する。

「……はっ……はあっ……」

荒く吐いた息は、すぐに大量の鮮血へと変わった。

口許を拭い、ふらりと立ち上がったリーファの左眼を、唸りを上げて飛来した長槍が貫き、後頭部へと抜けた。

数歩後ろによろめき――しかしリーファは倒れなかった。

左手で槍の柄を握り、一気に引き抜く。頭の内側を、痛みとは別の異様な感覚が突き抜ける。

「う……ううおおお!!」

叫びながら激しく足踏みしてヒットポイントを回復させる。いったん欠けた左側の視界が、ぶつっと音を立てて復活する。

見れば、いつしか敵はもう百人ほどしか残っていなかった。

にやりと笑いながら、リーファは血まみれの左手を前に伸ばし、掌を上向けると、揃えた指先を動かした。

やけっぱちな雄叫びを上げて突進してくる集団に向け、ずうっと重い動作で長刀を振りかぶる。

「いぇ……あああああッ!!」

一閃。

鮮血を吹き上げ、分断された敵集団のただ中へ、リーファは恐れることなくその身を投じた。

約三分後、最後の敵が倒れた時、リーファの体に突き立つ金属は十本に増えていた。

四肢から力が抜け、後ろにふらりと倒れたが、背中に貫通した剣や槍がつかえて途中で止まった。

悲鳴じみた声で名前を呼び、駆け寄ってくるリルピリンたちの足音を聞きながら、リーファは瞼を閉じて小さく呟いた。

「私……がんばったよね……、お兄ちゃん……」

＊＊＊

左耳のインカムから、抑えられた叫び声が聞こえたのは、柳井の銃のトリガーが動き始めたのと同時だった。

『比嘉君、避けて!!』

え。

避けてって……弾を？

と間抜けなことを考えた直後に、ずっと高いところから、何かが空気を切り裂いて落下してくる音を比嘉は聴いた。

ガァン!!

と響いた音は、拳銃の発射音ではなかった。遥か頭上のケーブルダクト進入口から投げ込まれた何かが、柳井の脳天を直撃したのだ。

柳井の見開かれた両眼が、ぐりんと上を向いた。ステップを握っていた左手が、ずるりと滑り落ちる。

「うわ……ちょっ……」

比嘉は、肩の痛みも忘れて右手でハシゴを握り、限界まで体をダクトの壁面に押し付けた。

まず落下してきたのは、いったいどこから持ち出したのかと言いたくなるほど巨大なモンキーレンチだった。続いて、まだ硝煙の匂いを漂わせた小型の拳銃が目の前を横切った。

最後に、意識を失った柳井の体が、ずぼっと比嘉とダクトの壁の間に挟まり、停まった。

「ひ……ひぃっ！」

思わず肩を縮め、いっそう背中を壁に押しつけてしまう。

柳井の体が徐々に滑り、汗臭い匂いを比嘉のシャツに擦りつけながら通過し——。

「……あ」

比嘉が呟くと同時に、真下に五十メートル近くも続く縦穴へと落下していった。何度か壁やハシゴにぶつかる音が響いたのに続いて、最後にどすんという衝突音が伝わってきた。

「……うーん……」

死んじゃった……かな？　いや、あの感じだと、骨が二、三……いや五、六本イッたくらいかな……。

という、半ば停止気味の比嘉の思考を、インカムからの悲鳴じみた通信が破った。

『比嘉君……ねえ、比嘉君!!　無事なの!?　答えてよ、ねえ!!』

「……いや、ちょっと、ビックリして……。凛子先輩も、そんな声出すんスねえ……」

『な……何を呑気なこと言ってるの!!　怪我は!?　撃たれてないの!?』

「あー、えーっと……」

比嘉は、改めて右肩の傷を眺めた。

出血量はなかなか恐ろしいことになりつつある。右腕は、動くものの感覚はないし、それにやけに寒い。思考もちょっといつもどおりではない気がする。

しかし、比嘉は大きく息を吸い、腹に力を溜めてから、可能な限り元気そうな声を出した。

「いや、ぜんぜん平気ッス！　かすり傷ッスから。僕はオペレーションを継続します、先輩はキリト君のモニタリングのほう、よろしくッス!!」

『……本当に、大丈夫なのね？　信じるわよ!?　嘘だったら許さないからね!?』
「そりゃもう……信じてください、ッス」
比嘉は上を振り仰ぎ、数十メートル先のハッチから頭を突き出した凛子に向けて慎重に手を振った。この距離でこの暗さなら、向こうからは出血の様子までは確認できないはずだ。
『じゃあ……私はメインコンに戻るけど、グラフに変化があり次第飛んでくるからね！　頼むわね、比嘉君!!』
シルエットが引っ込みかけた瞬間、比嘉は思わず小さく呼びかけていた。
「あっ……り、凛子先輩」
『何、どうしたの!?』
「いや……その、ええと……」
――学生時代、茅場先輩や須郷のヤロウだけじゃなく、僕もあなたに夢中だったって知ってました？
と、比嘉は言おうとしたものの、そんなことを口にしたら生還の確率が大幅に減少する気がしたので、かわりに適当な台詞でお茶を濁した。
「あの、この大騒ぎが全部片付いたら、食事でもどうッスか？」
『……解ったわ、ハンバーガーでも牛丼でも好きなだけ奢ってあげるから、がんばって!!』
そして、神代博士の姿が比嘉の視界から消えた。

――やっすいなぁ。

て言うか、《死ぬやつが言うセリフ度》では大差なかったなあ。

比嘉は苦笑し、左手のラップトップに視線を戻した。指先の痺れた右手をキーボードに乗せ、慎重にコマンドを打ち込み始める。

三番ＳＴＬに……四番を接続。五番、六番……接続。

失血のせいか、ふっとフォントが二重に霞み、比嘉は頭を振ると胸の奥で呟いた。

――よし、キリト君、そろそろ起きる時間だぜ。

＊＊＊

アスナは、涙のベールを通して、ただひたすらに愛する人の姿を見つめ、祈った。

――お願い、キリトくん。私の心も、命も、なんでもあげるから……だから、目を覚まして。

――キリトくん。

＊＊＊

――キリト。

＊＊＊

――お兄ちゃん。

＊＊＊

……さあ……キリト……。

5

キリト。

誰かが、名前を呼んだ気がして――

俺は、浅いまどろみから引き戻された。

瞼を持ち上げると、オレンジ色の光の中に浮遊する、無数の微細な粒子が見えた。

霞んだ視界が、徐々に焦点を結んでいく。

揺れる白い布――カーテン。

銀色の窓枠。古びたガラス。

揺れる梢。傾き始めた太陽の色に染まる空に、ゆっくりと伸びる飛行機雲。

埃っぽい空気を吸い込みながら体を起こすと、深緑色の黒板の前に立つセーラー服の背中が見えた。しゅっと音を立てて滑った黒板消しが、白いチョークで書かれた文字を掻き消した。

「……あの、桐ケ谷君」

再び名前を呼ばれ、視線を動かすと、気後れしたような、苛立ったような顔で俺を見下ろす別の女子生徒と眼が合った。

「机、動かしたいんだけど」

どうやら俺は、ホームルーム中に居眠りして、そのまま掃除の時間に突入してしまったらしい。

「ああ……悪い」

呟き、机にぶら下がるバッグを指に引っかけると、俺は立ち上がった。

頭の芯が重い。

長い――途轍もなく長い映画を見た直後のような疲労感があった。ストーリーは何一つ思い出せないのに、深く荒々しい感情の残滓だけが頭にこびり付いている気がして、強くかぶりを振る。

訝しそうな顔つきになる女子生徒から視線を外し、教室の後ろの出口に向かって歩きながら、俺は小さく呟いた。

「なんだ……夢か……」

（続く）

あとがき

『ソードアート・オンライン17　アリシゼーション・アウェイクニング』をお読みくださりありがとうございます。

（ご注意・ここからネタバレがたっぷりあります！）

前巻『エクスプローディング』から大変長らくお待たせしてしまい申し訳ありませんでした。今巻のサブタイトル『アウェイクニング』は『覚醒』という意味で、ということは15巻からずっと眠りっぱなしの我らがキリトさんがようやくお目覚めなのか!?　と皆様も思われたことでしょうが、スミマセン事情により「起きたのかな……？　まだ寝てるのかな……？」的なシーンで次巻に続く、となってしまいました。本当は私も『第二十一章　覚醒』の終わりまでを収録したかったのですが、そうするとこの巻がとっても厚くなり、次の18巻がとっても薄くなるというアンバランスな構成になってしまい、泣く泣くあそこで切らせて頂きました。代わりに、と言ってはなんですが、次巻は長くお待たせすることなく、《次》の《次》あたりの刊行順でお届けするつもりですので、しばしお待ち頂きたく……！

続いてこの巻の内容についても少し触れておきます。ガブリエル、ヴァサゴ、クリッターの悪巧みによってアメリカと韓国と中国からＶＲＭＭＯプレイヤーが大挙してアンダーワールド

に攻め込み、人界軍及び日本人プレイヤーと激戦を繰り広げていますが、私がおよそ十年前にｗｅｂ版でこの展開を書いた時は、当時のネットゲーム界に存在した外国人プレイヤーへの排斥的な雰囲気について改めて考える契機になれば……というような意図がありました。しかし筆力及ばず、逆に敵愾心を煽るだけのような結果になってしまったことに長らく忸怩としたものを感じていました。

電撃文庫版として加筆修正するにあたって、その展開を丸ごと変更することも考えたのですが、それはそれで逃げのようにも思えまして……結局、大筋はほぼそのままとなっています。プログレッシブでも暗躍を始めた《煽動ＰＫｅｒ》ことヴァサゴ／ＰｏＨが生み出した悪意にキリトがどのような決着をもたらすのか、そこも次巻をお待ち頂ければと思います。

ＳＡＯシリーズがネットの片隅で生まれてから今年で十五年目ということで、ずいぶん長く続けてきたなあという感慨もありますが、これからも劇場版やゲーム、その他多くのプロジェクトによってＳＡＯワールドはどんどん広がっていきますので、皆様におかれましては今後ともお付き合いのほどなにとぞよろしくお願いします。最後に、アンダーワールドに飛び込んだリーファやシノンたちを凛々しく美しく描いてくださったイラストのａｂｅｃさん、編集者として新たな挑戦を始めた担当の三木さん、今巻もありがとうございました！

二〇一六年三月某日　　川原　礫

小説大賞〈大賞〉受賞作最新刊――!!

ル・ワールド20

20

川原 礫
イラスト／HIMA

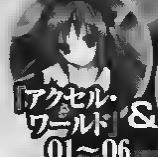
「――行くぞ、レイン!!」
「――来い、ロータス!!」

〈災禍の鎧〉、〈バックドア・プログラム〉、〈ISSキット〉、
そして〈災禍の鎧マークII〉――。
加速世界にあまたの悲劇と混乱をもたらしてきた謎の組織〈加速研究会〉。
その表の顔は、六大レギオンの一角として港区エリアを支配する、
白のレギオン〈オシラトリ・ユニヴァース〉だった。

全ての元凶にして黒幕、白の王〈ホワイト・コスモス〉との決戦を前に、
黒雪姫率いる〈ネガ・ネビュラス〉は赤のレギオン〈プロミネンス〉との合併会議に臨む。
ネガ・ネビュラスからの出席者十一名に対して、プロミネンスは総勢三十三名。
実に三倍もの規模を誇る大レギオンの全貌を初めて目の当たりにし、
圧倒されるハルユキだったが、会議は序盤から思わぬ展開を迎える。

「シルバー・クロウ!!　ネガ・ネビュラス代表として、オレと戦え!!」
初対面のバーストリンカーに、いきなり戦いを挑まれたハルユキの選択は――!?

いっぽう、ニコと黒雪姫も、禁断の〈王〉対〈王〉の戦いへと突き進む。
対峙する二人は、二つのレギオンをまとめあげることができるのか――!?



コミックス発売中!

原作／川原 礫
キャラクターデザイン／HIMA
作画／合鳴ひろゆき（『アクセル・ワールド』）
作画／あかりりゅりゅ羽（『あくちぇる・わーるど。』）

「電撃文庫MAGAZINE」
（偶数月10日発売）にて連載中!!!

★スピンオフコミック『アクセル・ワールド／デュアル・マギサ・カーテン』
（月刊コミック電撃大王』連載／作画／篠倉辰人）、①1～06巻発売中!

《最強のカタルシス》で送る、第15回電撃
accel World 20
アクセ

最終決戦迫る最新刊！
2016年6月10日発売予定!!
イラスト／HIMA
速報!! 川原礫&abecが贈る、最強のVRMMO小説!!
「ソードアート・オンライン」最新第18巻は2016年夏頃発売予定!!

◉川原　礫著作リスト

「アクセル・ワールド1　―黒雪姫の帰還―」（電撃文庫）
「アクセル・ワールド2　―紅の暴風姫―」（同）
「アクセル・ワールド3　―夕闇の略奪者―」（同）
「アクセル・ワールド4　―蒼空への飛翔―」（同）
「アクセル・ワールド5　―星影の浮き橋―」（同）
「アクセル・ワールド6　―浄火の神子―」（同）
「アクセル・ワールド7　―災禍の鎧―」（同）

「アクセル・ワールド8 ―運命の連星―」（同）
「アクセル・ワールド9 ―七千年の祈り―」（同）
「アクセル・ワールド10 ―Elements―」（同）
「アクセル・ワールド11 ―超硬の狼―」（同）
「アクセル・ワールド12 ―赤の紋章―」（同）
「アクセル・ワールド13 ―水際の号火―」（同）
「アクセル・ワールド14 ―激光の大天使―」（同）
「アクセル・ワールド15 ―終わりと始まり―」（同）
「アクセル・ワールド16 ―白雪姫の微睡―」（同）
「アクセル・ワールド17 ―星の揺りかご―」（同）
「アクセル・ワールド18 ―黒の双剣士―」（同）
「アクセル・ワールド19 ―暗黒星雲の引力―」（同）
「ソードアート・オンライン1 アインクラッド」（同）
「ソードアート・オンライン2 アインクラッド」（同）
「ソードアート・オンライン3 フェアリィ・ダンス」（同）
「ソードアート・オンライン4 フェアリィ・ダンス」（同）
「ソードアート・オンライン5 ファントム・バレット」（同）
「ソードアート・オンライン6 ファントム・バレット」（同）

「ソードアート・オンライン7　マザーズ・ロザリオ」（同）
「ソードアート・オンライン8　アーリー・アンド・レイト」（同）
「ソードアート・オンライン9　アリシゼーション・ビギニング」（同）
「ソードアート・オンライン10　アリシゼーション・ランニング」（同）
「ソードアート・オンライン11　アリシゼーション・ターニング」（同）
「ソードアート・オンライン12　アリシゼーション・ライジング」（同）
「ソードアート・オンライン13　アリシゼーション・ディバイディング」（同）
「ソードアート・オンライン14　アリシゼーション・コネクティング」（同）
「ソードアート・オンライン15　アリシゼーション・インベーディング」（同）
「ソードアート・オンライン16　アリシゼーション・エクスプローディング」（同）
「ソードアート・オンライン17　アリシゼーション・アウェイクニング」（同）
「ソードアート・オンライン　プログレッシブ1」（同）
「ソードアート・オンライン　プログレッシブ2」（同）
「ソードアート・オンライン　プログレッシブ3」（同）
「ソードアート・オンライン　プログレッシブ4」（同）
「絶対ナル孤独者（アイソレータ）1　―咀嚼者 The Biter―」（同）
「絶対ナル孤独者（アイソレータ）2　―発火者 The Igniter―」（同）
「絶対ナル孤独者（アイソレータ）3　―凝結者 The Trancer―」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

電撃文庫公式ホームページ 読者アンケートフォーム
http://dengekibunko.jp/
※メニューの「読者アンケート」よりお進みください。

ファンレターあて先
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「川原 礫先生」係
「abec先生」係

初出

本書は著者の公式ウェブサイト『Word Gear』にて掲載されていた小説に加筆・修正したものです。

この物語はフィクションです。実在の人物・団体等とは一切関係ありません。

電撃文庫

ソードアート・オンライン17

アリシゼーション・アウェイクニング

川原 礫（かわはら れき）

発　行　2016年4月9日　初版発行

発行者　塚田正晃
発行所　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

プロデュース　アスキー・メディアワークス
〒102-8584　東京都千代田区富士見1-8-19
03-5216-8399（編集）
03-3238-1854（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）
印刷　株式会社暁印刷
製本　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書の無断複書（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断書製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複書する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、アスキー・メディアワークスお問い合わせ窓口あてにお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

©2016 REKI KAWAHARA
ISBN978-4-04-865883-6　C0193　Printed in Japan

電撃文庫　http://dengekibunko.jp/
株式会社KADOKAWA　http://www.kadokawa.co.jp/

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦